

# 漆黒の剣閃

ファルクラム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

千年続いた帝国は今、斜陽の刻を迎えようとしていた。

幼い皇帝を擁立した大臣の専横により腐敗が蔓延、人々は生き地獄の中を、日々暮らしていた。

そんな中で現れた、ナイトレイドと呼ばれる殺し屋達。

そのナイトレイドの中に、漆黒の剣を振るう、1人の少年がいた。

「アカメが斬る!」と「ソードアート・オンライン」のクロスオーバーです。

# 目次

第1話 「今宵、紅月の下に参上」	1
第2話 「問われる覚悟」	44
第3話 「血の匂いに導かれ」	80
第4話 「首斬りザンク」	102
第5話 「帝国最強」	138
第6話 「狙撃手」	176
第7話 「記憶と共に生きる」	214
第8話 「告げられる予兆」	241
第9話 「絶対正義の名の下に」	267
第10話 「彼女がいない風景」	301
第11話 「宮殿での邂逅」	324

第12話 「偽ナイトレイド現る」	346
第13話 「船上の激突」	378
第14話 「ナイトレイドVS三獣士」	407
第15話 「黒白のジョーカー」	439
第16話 「天敵、集結」	469
第17話 「エスデスの恋」	497
第18話 「イエーガーズの初陣」	522
第19話 「両雄邂逅」	548
第20話 「スタイリッシュ強襲」	574

第21話 「アジト攻防戦」	599
第22話 「狂科学の申し子」	624
第23話 「兄と、妹と」	659
第24話 「少年の心、少女の想い」	
685	
第25話 「夜烏達の帰還」	713
第26話 「元凶」	736
第27話 「戦神のラツパは鳴り渡る」	
762	
第28話 「激戦の予感」	794
第29話 「死戦の街道」	817
第30話 「クロスクラッシュ」	844

# 第1話 「今宵、紅月の下に参上」

人が次第に朽ち行くように

国もいずれは滅びゆく……………

千年栄えた帝都ですらも、今や腐敗し生き地獄

人の形の魍魎魍魎が、我が物顔で跋扈する

天が裁けぬその悪を、闇の中で始末する

2 第1話「今宵、紅月の下に参上」

我ら全員、殺し屋稼業

## 第1話「今宵、紅月の下に参上」

1

キリトは途方に暮れていた。

黒髪に、やや色白の肌。中性的と言える線の細い顔からは、ため息が漏れる。

「つたく、レオーネの奴、どこ行つたんだ？」

待ち合わせの相手が時間になっても、なかなか現れない事で、キリトは完全に待ちぼうけを喰らう羽目になっていた。

相手は同僚で、キリトよりも年上の女性である。

女性の準備は長い、とはよく言うが、

「いや、あいつの場合、絶対にそれは無いな……………」

断じるように、キリトは呟いた。

ため息をこぼす。

場所は帝都の繁華街。

時刻は昼過ぎと言う事もあり、そこらに並ぶ店からは胃袋を刺激するようなにおいが漂ってくる。

「いつそ、あいつの事は放っておいて、どこかで飯にしようかな」

割と本気で、そのように考える。

時間的には既に、待ち合わせの時間から1時間以上が経過している。この場を立ち去ったとしても、誰かに咎められる謂れは無いと思い始めていた。

本気でどこかの店に入ろうかと、真剣に検討しようとした時だった。

「悪い悪い、キリト、遅くなった」

いかにも呑気な声で背後から声を掛けられ、キリトは不満げな視線で振り返った。

そのキリトの視界に、スタイルの良い女性が歩いて来るのが見えた。

口元に浮かべた笑みや、子供のように輝く瞳など、どこか野性味の溢れる美貌をした女性である。

しかし、

何とも、露出の高い服である。太ももや肩、お腹が丸出しになっている。

本来なら、年頃の少年であるキリトにとっては、目のやり場に困る光景であるのは間



違うのだが、一緒にいる時間が長いせいとか、割と見慣れてしまっている感じが大きかった。

「遅いぞ、何やってたんだよ？」

「だから、ごめんってば」

そう言いながら近寄ってくるレオーネに、キリトは遠慮なく不満をぶつけた。

何しろ1時間も待たされたのだ。それくらいの事はしても許されるだろう。

と、

「ほらよ」

「お、おっと」

レオーネが差し出した物を、キリトは反射的に受け取った。

油紙に包まれた一抱えもある荷物の中からは、何やら好ましいにおいが漂ってくる。

待ちぼうけを喰らわされたせいで空っぽの腹は、その匂いに晒されて、否が応でも活動を活発化させた。

中を開けてみると、一抱えもありそうな大きな肉だった。

「お姉さんからのお土産。待たせてしまったお詫びって事で」

「そりゃ、嬉しいけどさ……」

キリトはさっそく肉にくらいつきながら、レオーネに呆れ気味の視線を向ける。

「こんな大きな肉、食い切れるわけないだろ。アカメじゃあるまいし」

「文句言うなー。せっかく買って来てやったんだから。て言うか……」

レオーネはニヤリと笑うと、キリトの二の腕を、悪戯半分でつつく。

「しつかり食べないと、大きくならないぞ」

「余計なお世話だ。これでも充分鍛えている」

レオーネの手をかわしながら、キリトはふと、思いついた事を口にした。

「そう言えばレオーネ。よく、金なんかあったよな。結構高かっただろ、これ？」

「ん、まあ、その辺は臨時収入があつたからね」

自慢げなレオーネの言葉に、キリトは首をかしげる。

臨時収入？ 何の事だろう？

まあ、奢ってもらっている身で、これ以上の追及は無粋だろう。素直に感謝しておく

事にした。

『仕事』までは、もう少し時間があるけど、あまりのんびりと構えてもいられないぞ」

「判つてるよ」

仕事。

その一言が齎された瞬間、キリトとレオーネの間に、僅かな緊張感の上昇が見られた事を、周囲を歩く人間は気付いていない。

やがて、2人の姿は行き交う雑踏の陰へと隠れ、見分ける事が出来なくなっていくた。

## 2

シノンという少女は、水準的には「美少女」と称して良いレベルであろう。

短く切りそろえた青みかかった髪に、釣り目がちな双眸は、見る者にボーイツシュな印象を与える。

本人が小柄なせいもあってどこか、俊敏な猫を連想させる出で立ちだった。

しかし、あまり積極的に前に出たがる性格ではない為、友人一同の間では、物静かな少女として通っていた。

そのシノンが今、友人の行動にため息をついていた。

「アリアも良くやるよね。これで何回目よ？」

「良いじゃない。人の為になる事なんだから」

くせつ毛が可愛らしい雰囲気を出している少女は、そう言つてシノンに笑い返してきた。

シノンに比べると幼い雰囲気強調された少女だが、可愛らしさではシノンに負けない。

シノンとアリアは、学校におけるクラスメイトであり、こうしてよく、一緒に居る事が多かった。

今日も学校が休みだった為、シノンはアリアの家へ誘われて、遊びに来たのだ。

そこで、見慣れない男の子がいた事には驚いた。

「そっか、お金をだまし取られるなんて、災難だったわね」

「まったくです。でも、アリアさんに助けられて、本当に助かりました」

シノンと同年代くらいの少年は、さわやかさを感じる真っ直ぐな瞳で笑顔を浮かべた。

タツミと名乗ったこの少年は、軍に入る事を志し、友人2人と共に地方の村から出て来たそうだが、途中で野盗の襲撃を受けて、友人達とはぐれてしまったそうだ。

どうにか自力で帝都まで辿りついたのは良かったものの、状況は右も左もわからないと言った有様。

取りあえず、兵士斡旋所に足を向けて入隊申請を行おうとしたものの、不況を理由に断られてしまう始末。

途方に暮れていたところを、声を掛けて来た女性がいたのだとか。

朗らかな性格で、どこか垢抜けた感のある女性と、タツミはすぐに打ち解ける事が出来た。

親身になってタツミの話を聞いてくれた女性は、軍にいる知り合いに口を効いてやると約束し、タツミが賞金稼ぎ等で稼いだ金を手に、先に出て行ってしまった。

そして、

女性は二度と戻って来る事は無かった。

騙されたと気付いたのは、それからだいぶ経つてからの事である。

有り金全てを無くしたタツミは途方に暮れ、野宿を覚悟していたところを、通りかかったアリアに助けられたのだと言う。

「世の中には、ひどい人もいた物ね」

アリアは憤懣やるかたない、といった感じに腕を組みながら双眸を吊り上げる。

人を騙し、陥れる。

そんな外道な奴等が、この帝都にのさばっている事が許せないのだ。

「でも、ここに居たら安心よ。パパが軍の方に口を効いてくれるって言ってたし、お友達もすぐに見つかると思うわ」

「ありがとうございます」

アリアの言葉に、タツミは感動したように涙を浮かべて礼を言う。

ここに来るまでに辛い目に合う事が多かったのだろう。だからこそ、温かいもてなしを受ける事が嬉しいのだ。

シノンが何か言おうと口を開きかけた時だった。

扉が開き、アリアの両親がリビングに入ってくるのが見えた。

「あらパパ、それは何？」

アリアは、父が何やら、細い箱を抱えているのを見て、不思議そうに首をかしげた。

対して、父は丁重に箱をテーブルの上に置くと、包みを解いて開いて見せる。

「かねてから欲しかった物が手に入ってるね。さつき届いたところなんだよ」

そう言うと、箱の蓋を開く。

次の瞬間、シノンは己の心臓が高鳴るのを感じた。

それは、一振りの弓だった。

スラリとした反りに、持ち手の部分には簡素ながら装飾が施されている。これ一個が、ある種の芸術品のようにさえ思えた。

「綺麗・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず、うっとりとした表情でシノンは呟いた。

まるで魅入られたように、シノンはその弓に惹き込まれていた。

「シノン？」

そんなシノン、アリアは不思議そうな眼差しで見詰めてくる。どうやら、彼女には、この弓の良さが理解できないようだ。

まあ、それも無理はあるまい。武器の良し悪しを理解できる女子など、そうそう居るはずもない。反応としてはむしろ、アリアの方が妥当であると言えた。

「長弓ですね。それも、かなりの業物だ」

タツミが真剣な眼差しで呟いた。

軍に入ろうと志す程に武術を磨いている彼は、やはり武器の種類や特性にも詳しいようだ。

「流石だね、タツミ君。これはさる古物商と交渉して手に入れた品でね。何でも、始皇帝が生きていた時代の代物であるらしい」

アリアの父は感心したように言った。

始皇帝とは、その名の通り帝国の初代皇帝であり、周辺各国を制圧し、この帝国を一代で築き上げた、帝国人なら誰でも知っている歴史上の人物である。

その始皇帝が生きていた頃からの代物となると、相当な年代物である事が伺える。

しかし、弓は細部が風化に晒される事も無く、美しい姿を保ち続けている。

シノンは、その美しい姿に惹き込まれるように、目を逸らせずにいた。

元来、それほど武器が好きと言う訳ではない。と言うか、日常生活上、殆ど接する機

会は無い。

そもそも、現在の帝国軍において、飛び道具の主流は大砲や銃火器へ移行している。弓など使っている者は殆どいない。

しかし、それでも尚、目の前の弓はシノンをはびどく魅了していた。

「もう、お父さん、そんな恐ろしい物、早くしまつてよ」

「ああ、すまんすまん」

アリアの言葉に、シノンは我に返る。

「どうやら、自分でも気づかない程に見入ってしまったていたらしい。」

アリアの父が弓に蓋をすると、そのまま暖炉の上へと持っていく。

その姿を見ながら、シノンは少しだけ残念に思った。せめてもう少しだけ見て居たかったのだが。

「さあ、そろそろご飯にしましょう。今日はシノンさんも来てくれたから、腕によりをかけて御馳走を作るわよ」

「あ、私、手伝います、おばさん」

そう言うと、シノンはキッチンへ向かおうとするアリアの母を追いかける。

しかし、

シノンは最後にもう一度、



弓の入った箱をチラツと見ると、そのままリビングを出て行った。

## 3

「標的は、帝都郊外に住む貴族の親子、そして、住み込みで屋敷を警護している護衛達、か」

「侵入経路、及び退避ルートは既に確保済みです」

「表向きは善良な性格で人当たりが良い。市民からの受けもよく、皆から慕われている」  
「しかし、実態は地方から来た人間を言葉巧みに拉致し、敷地内の倉庫に監禁して拷問、殺害するサド一家だね」

「夫婦は勿論、拷問に加わっている一人娘も同罪ね」

「護衛の連中も、見て見ぬふりをしているんだから同罪だ」

「……………葬る……………」

突然浮かび上がった異様な気配に蹴飛ばされるように、タツミはベッドから起き上がった。

「何だ、これは……………」

呻き声を上げる間にも、屋敷全体を覆う殺気は膨らんで行く。

明らかに状況は尋常じゃない。

すぐさま、剣を手にしてベッドを出る。

「いったい、何がどうなってるんだ!？」

そのまま廊下へと駆け出る。

その時、

「タツミ君!!」

廊下の向こうから、シノンが走ってくるのが見えた。

「タツミ君、何か、屋敷の様子が変わるんだけど、いったい何があったの!?!」

シノンは不安にかられた表情で、タツミに言い募ってくる。

だが、状況の異常さを余所に、タツミはシノンに関心にも似た感情を抱いていた。

シノンは武術に関して完全に素人である。それは身の運び方や体付きをみればわかる。

しかし、そんなシノンが、この殺気に気付いて起き出して来た事に驚いていた。

「タツミ君?」

「あ、す、すいませんッ」

名前を呼ばれて、タツミは我に返る。

とにかく、今はこんな事をしている場合じゃない。一刻も早く、安全な所へ……

そう思った時だった。

「ヒッ!?!」

突然、シノンが悲鳴を上げる。

その視線につられるようにして、タツミも窓の外を見上げる。

そこで、見た。

煌々と輝く紅い月が齎す、血のような夜空の下、張り巡らされた糸を足場にして立つ、6人の人影を。

「あいつらまさか……… ナイトレイド!？」

「ナイトレイドって……… あの殺し屋の?」

タツミの言葉に、シノンは声を震わせた。

ナイトレイド

それは帝都を恐怖で震撼させる、殺し屋集団の名前。

政府の重役や大富豪ばかりを狙って暗殺を繰り返す、凶悪な犯罪者達の群れである。

帝都では既に多くの者が、ナイトレイドの凶刃の犠牲となっている。

その為、帝都に住む貴族や重役たちは皆、護衛を雇って守りを固めているが、被害が一向に減らず、むしろ増え続けているのが現状だった。

「とにかく、安全な場所へと逃げましょう。俺の後に………」

言いかけて、タツミは足を止めた。

同時に、体中の血が逆流しそうな錯覚に捕らわれた。

廊下に、何かが転がっている。

一見すると、床に転がった調度品のようにしか見えないそれは、しかし、視力の良いタツミには正体が判ってしまった。

それは、アリアの母だった。

身体は胴体から真横に真っ二つにされ、そこを中心に赤い液体が廊下を濡らしているのが判る。

美味しい夕食を振る舞ってくれた優しそうな女性が、既に事切れているのは火を見るよりも明らかだった。

既に、敵は屋敷の中まで入り込んでいる。

「こっちはダメだッ こっちはヘッ!!」

「え、た、タツミ君!」

手を引かれながら、未だに事情を理解しきれていないシノンは走る。

このままでは、身を守る事すらできそうにない。

タツミは食事をしたリビングへと飛び込むと、暖炉の上に置いてあった箱を開け、中から弓と、付随して入っていた矢を取り出してシノンに差し出した。

「これをッ」

「え? え?」

差し出され弓を、とつさに受け取るシノン。

しかし、すぐに我に返ると、慌てて突き返そうとしてくる。

「で、でも私、弓なんて……」

「とにかく、持っただけで威嚇くらいにはなりますからッ」

そう言うと、再びシノンの手を引いて駆け出すタツミ。

その後ろから、弓を手にしたシノンは、遅れないようについて行った。

3

その頃、アリアの父親は、怪力によつて首を絞められ、その体を宙づりにされていた。目の前にいる人間が女性である事は判る。

だが、その頭部には獣のような耳が生え、腰には尻尾まである。

口元には凄味のある笑みが浮かべられ、まるで本当に肉食の獣であるかのようだ。

「ぐ……う……た、たすけて……」

辛うじて、口から声が絞り出される。

「む……娘が……娘がいるんだ……どうか、娘、だけは……」

愛しいアリアを守らないといけない。

それだけは、何としても。

しかし、返ってきた答えは非情な物だった。

「安心しろ。すぐ向こうで会える」

その言葉が、絶望の淵へと叩き落とす。

「娘まで………情けは無いのか？」

「情け？　意味不明だな」

そう告げると女性は、一切の躊躇も見せず、首の骨をへし折った。

漆黒のロングコートを靡かせて中庭へと降り立ったキリトは、手にした黒い剣を掲げるように構えると、目の前に迫った敵を一刀のもとに斬り捨てる。

容赦はしない。

それが任務だからだ。

更に一人を、横なぎに振るった剣で斬り捨てたところで、残った一人が剣を構えて斬り込んでくるのが見えた。

横なぎの一閃が、キリトの視界を銀色に両断する。

「速いな」

静かな呟きと共に、しかしキリトは後退しながら余裕で回避して見せる。

相手は恐らく、警護隊の隊長だろう。流星に他の者とは動きが違う。しかし、

次の瞬間、カウンター気味に放ったキリトの剣が、隊長の体を袈裟懸けに斬り裂いた。倒れ伏す隊長。

私兵部隊の隊長程度では、肩慣らしにもならない。

キリトは剣を数回振って血振るいすると、背中の鞘に納める。

その時、

上空から閃光が走り、キリトの顔ギリギリを掠めて飛び去って行く。

次の瞬間、背後で悲鳴が上がリ、今にもキリトに斬り掛かろうとしていた兵士の一人が、顔面を撃ち抜かれて倒れていた。

「何、気抜いてんのよ。まだ敵は残ってるんだから」

「悪い悪い」

見事な腕前を見せた狙撃手を拝みながら、キリトは苦笑を返した。

その時、背後で豪快な音が鳴り、鎧を着た大柄な男が、手にした槍で兵士を一刀両断にしていた。

「お、ブライトも片づけたか」

キリトの声に反応するように、鎧の男は親指を立てて来た。



既に最重要目標3人の内、2人は始末している。

「残り、1人か……」

眩きと共に、キリトは闇の中を駆けた。

アリアの姿を見た瞬間、シノンは思わずホッと溜息をついた。

友人がまだ無事でいてくれた事に、思わず涙が滲んでくる。

「アリア!!」

声を掛けると、護衛の兵士とアリアは、弾かれたように振り返った。

「シノン、タツミ、無事だったのね、良かった!!」

アリアも駆け寄ってきて、シノンの手を取る。

手に感じる温もりが、互いが無事である事を如実に物語っていた。

しかし、グズグズしてもいられない。既に賊は、至近まで迫っているのだ。

「君、我々はこの中に隠れて、警備隊が駆けつけるのを待つ。それまで君は、敵を足止めしてくれ!!」

「えーッ 無理っすよ!!」

兵士の申し出に対し、タツミが首を横に振った時だった。

ザツという草を踏む音と共に、人の気配が舞い降りる。振り返った一同の目に映ったのは、1人の少女だった。

長い黒髪に赤い双眸を持つ、整った顔立ちの少女だ。

しかし、纏った気配は「死神」とでも称すべき剣呑な物であり、手にした刀が、その雰囲気に拍車を掛けている。

「葬る……」

少女は短い呟きと共に跳躍。剣を構えるタツミの頭上を飛び越えると、その背後にいた兵士に斬り掛かった。

一閃。

それだけで、兵士は袈裟懸けに斬られて地面に転がった。

その間、少女は全く表情を動かす事無く、まるでごみを処理するかのように淡々と、兵士を斬り捨てていた。

震え上がるシノンとアリア。

そこへ、

「これで、ジ・エンドだ」

更にもう1人、警備隊を片付けたキリトも場に姿を現した。

敵は2人。対してこちらは最早、戦えるのはタツミ1人だけとなった。

「アカメ、標的以外の人もいるみたいだけど?」

「知らん」

キリトの問いかけに、アカメと呼ばれた少女は素っ気なく答えた。

その反応に、キリトは苦笑を漏らす。相変わらず、無駄な事を省く性格である。

「それじゃ、さっさと終わらせるとするか」

「うん」

キリトの言葉に、アカメが頷いた時だった。

「やらせるかよ!!」

タツミは剣を下段に構え、アカメへと斬り掛かってきた。

どうやら、先に兵士を斬った時の動きから、アカメの方が脅威であると判断したらし

い。

斬り掛かるタツミの剣を、アカメは刀で冷静に弾きながら、反撃の一手を刻もうと構

え直す。

だが、タツミも負けていない。

すぐさま崩れた体勢を立て直し、視線は鋭くアカメを睨む。

「お前等、どうせ金目当てかなんかなんだろツ　なら、あの娘たちは見逃してやれよ!!」

逆袈裟に振るわれたタツミの斬撃。

対して、アカメは余裕の動きで後退して回避する。

「罪も無い女の子を殺すなよな!!」

そこへ、タツミは更に追撃を掛けた。

2人が斬り合う様子を、置いてけぼりを喰らった形のキリトは遠目で眺めている。

「ありや、振られちゃったか」

交戦を開始するアカメとタツミを横に、キリトは頭をガリガリと掻きながら振り返った。

「それじゃあ、俺はその間に、仕事でもしますか」

「ツツ!」

キリトのその言葉に、少女2人は思わず震え上がった。

もはや、自分達を守る物は誰もいない。凶悪な殺人者を相手にして、無力な少女は、ただ震えて、最後の時を待っている事しかできない。

シノンにはギユツと、自身と抱き合っているアリアを見詰める。

可哀そうに、恐怖に震えきっている。

しかも、

シノンは「ある可能性」を思い浮かべ、更に絶望感を増す。

この場にアリアの両親は現れない。と言う事は、既に2人の命が失われている可能性

が高いと思わざるを得なかった。

シノンにも、とても優しくしてくれたアリアの両親。

その2人の命が既に失われていると思うと、暗澹たる気持ちは否が応でも増して行く。

しかし、

シノンは眦を上げる。

その状況を作り出したのは他でもない、目の前にいる殺し屋達なのだ。

多くの人を殺し、さらに多くの人々を不幸にし、帝都中を恐怖に陥れた外道な殺し屋達。

そんな奴等に、自分達が殺される事への理不尽さに、全身の血が沸騰しそうな思いに駆られる。

こんな事許されない。

許して良い筈がない。

「……………逃げて、アリア」

「シノン？」

震えるアリアの肩を叩き、シノンは前へと出る。

同時にシノンは手にした弓の把手に手を掛けると、慣れない手つきで矢を番え、鏃を

キリトへと向けた

驚いたのはキリトである。まさか、どう見ても素人にしか見えない少女が、自分に向かつてくるとは思っても見なかったのだ。

しかも、相手は自分と同年代である。

「よせ、あんたは標的じゃない。あんたを斬る心算は無い」

「問答、無用よ!!」

張れるだけ張った虚勢で、シノンは大地を踏みしめる。そうしないと、恐怖のせいでも今にも倒れてしまいそうだった。

大丈夫。

大丈夫と言い聞かせる。

こんな事は大したことではない。

そう………

アノトキニクラベレバ・・・

次の瞬間、

変化は起こった。

番えていた筈の矢が消失し、代わって、引き絞った弦に一本の光の矢が出現する。

あり得ない光景。

その様は、まるで神話の御世にある、必中必殺の狩人であるかのようだ。

そのあまりの出来事にキリトも、そして他ならぬシノン自身も驚きに目を見開いた。

一体、何が起きているのか、理解が追いつかない。

だが、これだけは理解できた。

武器が、戦えと言っている事を。

次の瞬間、

「ツ!!」

短く吐き出した息と共に、シノンが矢を放つ。

真つ直ぐに飛翔する光の矢。

その鎌は、狙い変わらずキリトの眉間を指す。

「クッ!？」

絶句するキリト。

だが、とつさに背中中の剣を抜き放つと、飛んできた矢を切り払う事に成功した。

同時に、キリトは背中に冷や汗が流れるのを感じる。

今の攻撃。狙いの正確さが、却ってキリトの命を救った感がある。これが僅かでも狙いが逸れていたら、逆に危なかった。

そう思わせるには充分なほど、速度と威力が乗った攻撃だった。

対して、シノンは自分でも驚いていた。

まさか、自分がこのような事をするとは、思っても見なかったのだ。

いったいなぜ、こんな事ができるのか？ それは判らない。

しかし、今その事は重要じゃなかった。

体勢を立て直したキリトへ、更なる追撃を掛けるシノン。

再び放たれる光の矢が、キリトを狙って襲い掛かる。

その鋭い攻撃速度に、キリトは唖った。



「その弓……まさか帝具か!？」

シノンが放つ光の矢を剣で弾きながら、キリトの鋭い視線は流麗な弓へと向けられる。

構わず、更に光矢を繰り出そうとするシノン。

だが、

照準の為に、シノンが僅かに動きを鈍らせた隙を、キリトは見逃さなかった。

「今だッ」

短い眩きと共に、下段から、振り上げるように繰り出される漆黒の剣。

シノンがとっさに矢を放つが、慌てて撃つた為、照準が甘い。

矢はキリトの顔の脇を掠め、遙か後方へと飛び去って行った。

その瞬間、キリトは勝負を決するべく動く。

慌てて再攻撃を仕掛けようとするシノンに先んじて、キリトは剣の切っ先を少女の喉元へと突きつけた。

「動くな……もう、じつとしていてくれ。君を斬りたくないんだ」

静かに告げるキリト。

本当に斬る気は無い。そもそも、この戦闘だってキリトにとつては不本意極まりない展開だったのだ。

アカメなら問答無用で斬る所だろうが、キリトとしては、シノンがそのまま大人しくしていてくれるなら、これ以上の危害を加える気は無かった。

しかし、

シノンは真つ直ぐにキリトを見据えて逸らさない。その手には、未だに弓をしつかりと握ったままである。

キリトが一瞬でも隙を見せれば、その瞬間には反撃に転じる構えなのだ。

対して、キリトは対応する術に迷い、僅かに突きつけた剣閃を震わせる。

どうする？

まさか、本当に、一般人を殺すわけにもいかないし。さりとして、放っておけば、また弓で反撃してくるだろう。

既に先の交戦で、シノンの動きをキリトは把握している。仮に攻撃を受けたとしても対応は充分に可能なのだが、やはり大人しくしていてもらった方が都合がいいのも確かである。

その時だった。

「は〜い、そこまで〜」

妙に気が抜ける声と共に、手を鳴らしながらやって来たのは、当主を始末して来たレオーネだった。

その背後にはアカメと、なぜか彼女と交戦していたタツミを従えている。と言うか、キリトは少し驚いていた。

まさか、アカメと交戦して、タツミがまだ生き残っているとは思っても見なかったのだ。

アカメはナイトレイドでも屈指の実力者であり、彼女の持つ刀型帝具「一斬必殺 村雨」と合わせて、切り札的な存在である。

そのアカメと戦って尚、生き残っているとは。

「どうしたんだよ?」

「いやね、この少年には借りがあってさ。ちょっと返してやろうと思ってね」  
借り?

何の事だろう? と思っていると、レオーネは立ち尽くしているアリアを横目に見ながら、倉庫へと歩み寄った。

「少年、君はさつき、罪も無い女の子を殺すなって言ってたよな。けど、これを見てもまだ、そんな事が言えるかな?」

言いながらレオーネは扉の前に立つと、錠前のかかった扉を勢いよく蹴り上げて打ち破る。

轟音と共に、開かれる闇の世界。

「見ろ、これが帝都の闇だ」

促されるままに、中を覗き込むタツミ。

そこに、

地獄があつた。

闇の中から聞こえてくる無数の呻き声。

どろっとした空気の中からは、怨嗟の如き光景がにじみ出てくる。

天井から吊るされた無数の人間。奥の牢にもたくさん人間が、まるでゴミのように押し込まれている。

そこら中に置いてある無数の拷問器具には、まだ人間が「設置」されている状態で放置されていた。

その中に、五体満足でいられている者は殆どいない。

手足を切り取られた者、目玉を抉られた者、腹を裂かれ内臓を引きずり出された者、首を切られた者。

床は、彼等の血によつて赤い池と化している。

まさしくそこは、地獄だった。

呻き声は、まだ死にきれていない者達の口から漏れ出ているのだ。

「な、何だよ……これ？」

「地方から出てきた身元不明の者達を、己の趣味である拷問にかけて死ぬまで遊ぶ。それが、この家の人間の本性だ」

レオーネが堅い声で告げる。

殺し屋としていくつもの修羅場を見て来た彼女にとつても、この光景には気分が悪くなるらしい。

「アリア、これって……」

「ツ!？」

タツミ同様に戦慄を禁じ得ないシノンは、傍らの友人に語りかける。

しかし、当のアリアは、少女の声には答えず、ただ地面を向いて俯いてる。

その時、

暗がりを覗き込んでいたタツミは、

見付けた。

「それ」を、

見つけて、しまった。

「  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
サヨ?  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
」

天井から吊るさされている人物の一人。

長い黒髪をした、タツミと同年代ぐらいの少女に、嫌と言う程見覚えがあった。  
サヨだ。

ともに同じ村で生まれ、共に生きてきた親友を見間違う筈がない。

「サヨッ サヨオ!!」

呼びかけるタツミの声に、しかしサヨは反応しない。

見れば、右足は既に、付け根から無く、全身から流れ出た血によつて、体中が赤黒く染まっている。

村で一番の美人で、勇敢だった少女は、変わり果てた姿で吊るされていた。

呼び声に反応が無い事から見ても、既に事切れているのは明らかである。

その時、

「おっと、逃げようつてのは虫が良すぎないか、嬢ちゃん?」

混乱に乗じて逃げようとしていたアリアの襟首を、レオーネが捕まえて引き留める。

対して、タツミはそちらを見る事無く、呟くように口を開いた。

「この家の人間がやったのか?」

「そうだ。護衛達も黙っていたので同罪だ」

厳格に告げるレオーネ。

だが、

「う、嘘よ!!」

アリアは必死に声を上げた。

「私はこんな場所があるなんて知らなかったわッ　タツミもシノンも、私と、こんな犯罪者たちのどつちを信じるの!?!」

「アリア・・・・・・・・・・・・・・・・」

「信じてタツミッ　お願いよ、シノン!!」

シノンは、どう声を掛ければいいのか判らなかつた。

アリアの事は信じたい。

だが、現実を目にしてしまった闇を前にして、自身の価値観がガラガラと音を立てて崩れて行くようだった。

そう、

まるで「あの時」のように。

その時だった。

「・・・・・・・・タツミ?・・・・・・・・その声、タツミだろ?　俺だ・・・・・・・・」

不意に、暗がりの中から声を掛けられて、タツミは振り返る。



目を凝らす闇の先。

そこにある格子の中から、手を伸ばす少年の姿が目に入った。

その姿に、更なる衝撃がタツミを襲う。

「イエヤスツ!!」

それは、タツミ、サヨと共に村を出て帝都での出世を夢見た、もう一人の親友だった。しかし、その姿は尋常ではない。

かつては明朗快活な性格で、仲間内のムードメーカーだったイエヤスの姿は完全にやつれきり、そして体中に不可解な黒い斑点が浮かんでいる。

まるで疫病に掛かって死ぬ直前のようなありさまだ。

「その女だ!!」

全身の力を振り絞るようにして、イエヤスはアリアを指差して叫んだ。

「俺とサヨは、その女に声を掛けられて……飯を食ったら意識が遠くなって、気が付いたらここにいたんだ……その女が、サヨをイジメ殺しやがった!!」

叫びながら、イエヤスは涙を流す。

悔しかったろう。

サヨもイエヤスも、タツミと並んで村で屈指の武術の使い手である。サヨは弓を使わせば百発百中。イエヤスは格闘戦ならタツミにも引けを取らない実力者である。

それが、こんな形で最期を迎える事になるとは。

と、

「……………何が悪いって言うのよ」

ボソツと、アリアは呟くと、レオーネの手を振り払う。

振り返った顔には、既に先程までの可憐で愛くるしい表情は無く。少女の幼い顔に醜悪な欲望を張り付けた不気味な存在があるだけだった。

「お前達は何の取り柄も無い、地方の田舎者でしょ!! 家畜と同じ!! それをどう扱おうがあたしの勝手じゃない!! だいたいその女ツ 家畜のくせに髪サラサラで生意気過ぎ!! 私がこんなクセっ毛で悩んでいるのに!! だから念入りに責めてあげたのよ!! むしろこんなに目を掛けてもらって感謝すべきだわ!!」

完全に狂気をむき出しにした外道が、そこにいた。

アリアは更に、シノンへと向き直る。

「シノン、アンタもよ!!」

「アリア……………」

親友だと思っていた少女の、思っても見なかったどす黒い内面を聞いたシノンは、もはや立っている事も出来ないとはかりに膝を突く。

「いい機会だから教えてあげるけどね、今日こいつらが来なかったら、あんたもタツミと

一緒に、ここに放り込んでやるつもりだったのよッ そのムカつく顔がぐしゃぐしゃになるまで、さんざん犯し抜いてやるつもりだったのにッ あーあ、残念!!」

その言葉を聞いて、レオーネはため息を吐く。

もうこれ以上、一秒たりとも喋らせる気にはなれなかった。

「善人の皮を被ったサド家族か。邪魔して悪かったな、キリト」

「ああ」

促され、キリトが剣を構えようとした時だった。

「待て」

それまで黙ってうつむいていたタツミが、顔を上げて言った。

「動きを止めて、振り返るキリト。」

「何だよ？ まさか、まだこいつを庇う気か？」

「……いや」

キリトの言葉を否定するタツミ。

次の瞬間、

「俺が斬る」

背中の剣を抜刀。

同時に振り向きざまに振るわれた白刃が、アリアの体を袈裟懸けに斬り裂いた。

一刀両断されたアリアは、何が起こったのかさえ判らないまま、上半身と下半身が分断され、地面に転がる。

なおも口からはヒューヒューと息が漏れ聞こえていたが、やがてそれすらも聞こえなくなっていく。

憎い相手とは言え、躊躇わず斬り捨てたタツミ。

その姿に、キリトとレオーネは、同時に興味が湧いてきた。

「へへ、流星はタツミ。スカツとしたぜ」

牢の中で一部始終を見ていたイエヤスも、楽しそうに笑う。

だが次の瞬間、口元から赤黒い液体が迸った。

「イエヤス!!」

慌てて牢に駆け寄るタツミ。

キリトが剣で格子を斬り裂くと、タツミは急いでイエヤスを牢から引きずり出す。

しかし、イエヤスは既に起き上がる力すら無いらしく、タツミの腕の中でぐったりとしていた。

「ルボラ病の末期だ。この婦人は人間を薬漬けにして、その様子を日記に書いて楽しむ趣向があった、そいつは、もう助からない」

アカメの声が、淡々と絶望の真実を告げる。

死の淵にあるイエヤス。

だが、親友の腕に抱かれ、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「タツミ、サヨはさ……あのクソ女に最後まで屈しなかった。格好良かったぜ……だからこの……イエヤス様も……最後は……かつこ、よく……」

それが、最後だった。

伸ばした手は、地面に落ちる。

帝都に夢を見て、地方の田舎からはるばるやって来た少年は、今、理不尽な運命に耐

え抜き、親友に看取られながら天に召されたのだ。

「どうなつてんだよ……帝都は……」

残されたタツミは、悲しみにくれながらただ呆然とするしかない。

そんなタツミの

襟首を、レオーネがグイツと掴んだ。

「な、何すんだッ!?!」

「その辺の諸々の事は、着いて来れば教えてやるよ。あ、2人の遺体は、あとで私がアジトまで運んでやるから安心しな。そこで墓でも作つてやるんだね」

そう言うのと、タツミの体を軽々と抱え上げるレオーネ。

その後から、アカメも続いて離脱する。

「さ、君も」

差し出したキリトの手。

その手を、

シノンはゆっくりと握ろうとして、

すぐに引つ込めた。

自分がどうすべきか？

これから先、どうなつてしまうのか？

その思いが、シノンの足を止めてしまう。  
逡巡するシノン。

そのシノンの手を、キリトは強引に掴んだ。

「あッ!?!」

「さあ、行こうぜ」

そう言うと、キリトはシノンの手を引く形で跳躍する。  
疾走する浮遊感。

その心地よい感触が、シノンを優しく包み込んで行った。

第1話「今宵、紅月の下に参上」

終わり

## 第2話 「問われる覚悟」

1

ベッドから起き出すと、山の冷たい空気が顔を撫でていくのが判る。

「朝、か」

キリトはベッドの上で身を起こすと、大きく体を伸ばした。

ここは帝都郊外にそびえるフェイクマウンテン。その中腹にある施設である。

ナイトレイドは、この人跡未踏の大山を根城にして暗殺活動をしていた。

暗殺活動のシステムは、こうである。

まず依頼者が、帝都に潜むメンバーや、仲介人にコンタクトを取り依頼内容を伝え、同時に依頼料を払う。

そして、依頼内容の真偽を確認した後、待機している仲間を呼び集め、仕事に移る事



になる。

メンバーの中には既に帝国に顔が知られている者も何人かいる為、情報収集と依頼人との接触は、必然的に顔が知られていないメンバーが担当していた。

先日の貴族暗殺任務の際も、情報収集はキリトとレオーネが担当したのだ。

「……………そう言えば」

キリトはふと、あの任務の際に出会った少女の事を思い出した。

シノンと名乗る少女は、成り行き上連れて来てしまったが、結局あれ以来、顔を合わせても殆ど会話らしい会話をする事は無かった。

だが、こうして自分達の顔を見られ、アジトまで連れて来てしまった以上、黙って帰すわけにもいかないのだが。

顔を洗い、廊下に出る。

と、

「あれは……………」

廊下の外。アジトの前の道を、シノンが歩いて行くのが見えて。

手に何やら抱えて、歩いて行くのが見える。

「あの先つて確か、崖だったんじゃない……………」

言つてから、キリトはハツとした。

ある可能性が、急速に頭の中で形作られていく。

友達だと思っていた人物の真の姿を知り、更にその死を目撃した事で悲壮感を抱えた少女。

その心に負った精神的ダメージが大きい事は、キリトにも判る。きつとシノンの中では、世界が崩壊するほどのショックが見舞われたのではないだろうか？

もし、その心の重みに耐えられなかったのだとしたら……

「まさかッ!?!」

キリトは、殆ど脱兎の如き勢いで駆け出した。

崖の上にひっそりと立つ2つの墓が、故人の痕跡を示す唯一の証になっている。

その墓の前に座り、タツミは2人との思い出に浸っていた。

サヨとイエヤス。

ともに同じ村で育ち、ともに帝都で出世しようと誓い合った幼馴染たち。

しかし今や、誓った夢が果たされる事は永久に無く、タツミはたった1人になってしまった。

見せ付けられた帝都の闇。

その闇に食われ、犠牲になった親友たち。

全てが狂つてる。

そう思わずにはいられなかった。

「タツミ君」

名前を呼ばれて振り返ると、そこには花束を手にしたシノンの姿があつた。

シノンはタツミの横に腰を下ろすと、花束をサヨとイエヤスの墓の前に置く。

「ごめん。私が、もつと早くアリア達の事に気付いていたら、こんな事には……」

「シノンさんのせいじゃないよ」

落ち込むシノンに対し、タツミは僅かに笑みを浮かべながら言葉を返す。

実際、シノンにとってアリアは間違いなく親友だったのだ。身近にいればいる程、相手の本性と言う物は却って見え辛い物である。

まして、アリア一家は狡猾に自分達の正体を隠し、表向きは善良な市民を装っていた。シノンが、一家の正体に気付けなかったのも無理ない話である。

「……サヨとイエヤスはさ、俺と同じ村で育った仲間だったんです。イエヤスはお調子者で、でも仲間思いで……サヨはみんなのまとめ役で、いつも率先して行動してくれました」

言っている内に、タツミの目に涙が浮かぶ。

「2人とも、俺を残して……………」

「タツミ君」

そんなタツミを慰めるように、シノンは肩を叩く。

その時だった。

「シノン!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

「はい?」

突然の騒音に、思わず顔を上げるシノンとタツミ。

そこには、砂埃を上げて駆けてくるキリトの姿があつた。

「シノン!!」

「え、な、何?」

いきなりキリトに両腕を掴まれ、困惑するシノン。

「シノン、自殺なんかするんじゃない!!」

「……………」

キョトンとするシノン。

言っている意味が分からない。いや、マジで。

だが、キリトはあくまで本気だ。

「君の悲しみは判るッ　けどな、自殺なんて最低の人間がする事だぞッ　残された人たちの気持ちも考えろ!!」

「な、何の話?　て言うか、近い、顔近いから」

勢い込んで、キリトの顔はシノンの至近にまで近付いていた。

ネコ科の動物を思わせる少女の顔がすぐ間近にある事に気付き、キリトは慌てた調子でシノンの腕を放して後じさった。

「あ、わ、悪いッ」

「て言うか、何なのよいきなり?　何だか、あんたのせいで、いろいろと台無しなんだけど?」

言われて、周囲を振りかえる。

「あれ、タツミ?」

「ども」

状況についていけないタツミが、呆然として2人の様子を眺めている。

見れば、綺麗に整理された墓には、花が添えられているのが見える。そこに、死んだタツミの友人2人が眠っている事は、キリトも知っている。

恐る恐る、と言った感じに、キリトはシノンに振り返った。

「えっと………自殺する訳じゃ？」

「だから、何の話よ!？」

シノンには可憐な瞳をキリリと吊り上げて、キリトを睨みつける。

この勘違い野郎が何を考え突撃して来たのか知らないが、先程までの沈んだ空気が払しょくされてしまったのは確かだった。幸か不幸かは知らないが。

その時、

「おーい、キリトー!!」

呼ばれて振り返ると、レオーネが手を振りながらこちらに向かって来るのが見えた。

「ボスが帰って来たぞ。みんな会議室に集まってくれって。てか、3人して、ここで何やってるんだ？」

「わ、判った!!」

ややドモリながら答えると、キリトは傍らの2人に振り返って行った。

「タツミ、シノン、君達も来てくれないか。たぶん、2人の今後の処遇についても話が出ると思うから」

「あ、ああ」

「………判ったわ」

キリトの言葉に、2人は頷きを返す。

ただ、

シノンの方は終始、キリトを睨みつけたままだったが。

## 2

会議室に入ると、既にナイトレイドを構成する全メンバーが集まっていた。

「話はアカメから聞いた」

中央の椅子に座った女性は、静かな口調で言った。

白い髪を短く切り揃え、鋭い眼光からは、長年にわたって戦い続けて来た者のみが発する、ある種の凄味全身から滲んでいた。

氷のような怜悯な印象を見る者に与える女性である。

右目には眼帯が嵌められ、右腕は無骨な義手によって補っている。本人の印象と相まって、その姿はかなり異様だった。

ナイトレイドリーダー、ナジエンダ。

元帝国軍将軍と言う肩書を持つこの女性は、その圧倒的なカリスマ性と実力によつ

て、曲者揃いのメンバーを纏め上げていた。

「タツミ、それにシノン、2人とも、ナイトレイドに来る気は無いか？」

尋ねるナジエンダの言葉に、2人が息を呑むのが判った。

レオーネがタツミを連れて来たのは、彼にある種の才能を感じ、スカウトしようとしたからである。

タツミは、アリアを一瞬の躊躇も無く斬り捨てた。いかに親友を殺した相手とはいえ、一宿一飯の恩義を持つ少女を躊躇いなく斬って捨てたのだ。

標的を殺す際に躊躇を持たない、と言うのは殺し屋にとって必須条件の一つである。

ナイトレイドは少数精鋭主義の機動部隊だが、同時にそれは慢性的な人手不足である事も意味している。

実力のある新メンバーは、即採用と行きたいところである。

「でも、俺は殺し屋なんて．．．．．」

逡巡を見せるタツミ。

と、

「そもそも、アジトの位置を知った以上、仲間にならないと殺されちゃいますよ」

物騒な事を言ったのは、椅子に座って本を読んでいる、メガネを掛けた髪の長い女性である。



彼女の名はシェーレ。おっとりしている外見とは裏腹に、いくつもの殺人依頼をこなしてきた凄腕の暗殺者である。先の任務でもメンバーに先んじて屋敷内に侵入し、アリの母親を惨殺している。

因みに、彼女が読んでいる本のタイトルには「天然ボケを治す100の方法」などと言う怪しげなタイトルが書かれていたりする。

そもそも、天然ボケを治す方法などと言う物が本当にあるのだろうか？ あるならば非ともお目に掛かってみたい物である。

「いや、流石にそれは無いさ。けど、帰すわけにもいかないからな」

「その場合、俺達の味方の工房で、作業員として働いてもらう事になるだろうがな」

ナジエンダの説明を引き継ぐように、メンバーの中で最も大柄な男が口を開いた。

筋骨隆々とした逞しい体躯に、なぜか頭髮をリーゼントに纏めている。

男の名はブラート。こちらもナジエンダ同様に元帝国軍人である。

戦闘時にはインクルシオと言う鎧を着て戦うブラートの實力は、キリト、アカメ等のメンバーをしのぎ、名実ともに隊内最強である。

また、ナイトレイド一熱い性格をしており、皆にとつては頼れる兄貴分のような存在だった。

ナジエンダは次いで、シノンを見た。

「シノン、君もだ」

「私は、殺し屋なんて……」

言葉が詰まらせるシノン。

躊躇うのも無理は無い。殺し屋にならないかと言われて、すんなり頷く人間など、少数派だろう。

そこでナジエンダは、自身が座っている椅子に立てかけておいた弓を、シノンに向かって差し出した。

「あ、それッ」

弓を見て、声を上げるシノン。

それは、あの時、シノンが手に取った弓だった。

「帝具、神眼必中『シエキナー』。君が使った帝具だ。文献にも乗っていたから、すぐに特定できた。シノン、この弓を引いた時、何かおかしな事は起こらなかったか？」

「は、はい、急に光の矢が出現しました……」

シノンはあの夜、キリトと対峙した時の事を鮮明に覚えていた。

突然出現した光の矢。

まるで、シノンの想いに答えるように、弓が力を貸してくれたようにも思えた。

「恐らく、それがこの弓の能力なのだろう」

ナジェンダは納得したように頷いた。

帝具

それは、ただ1つで戦局を決定づける事も可能な超兵器である。

今から約1000年前、始皇帝は己の内に湧き上がった懸念に悩まずにはいられなかった。

周辺諸国を制圧して大帝國を築き上げた彼も、押し寄せてくる寿命には耐えられな  
い。いずれは天命が尽きる時も来るだろう。

その時、帝國は守りを失い弱体化してしまう。

始皇帝が愛した国が、民が、再び戦火に飲み込まれてしまうのだ。

考えに考え抜いた末、始皇帝は一つの結論に達した。

自分が死んでも國を守って行けるように、最強無比な兵器を作り出せばいいのだ、と。  
始皇帝の命令は、ただちに実行に移された。

國の内外から究極の職人たちが集められ、そして伝説級の素材を惜しげも無く投下し  
て作り出されたのが、合計で48の帝具である。

しかし、500年ほど前に帝國內部で大規模な反乱が起こり、その際に帝具の大半も  
各地に拡散、あるいは紛失してしまったと言う。

「その帝具の一つが、この弓なんですか？」

「そうだ」

シノンの質問に頷きを返すと、ナジエンダは改めて言った。

「シノン、我々は、この弓を使いこなした君にも協力してほしいと思っている。勿論、無理強いをする心算は無い。もし断った場合は、さつきタツミに言った取り、工房で働いてもらう事になる」

「私は……」

言い淀むシノン。

あの弓を取った時、確かに自分は戦える気がした。しかし、「戦える」と「戦う」では、天地の開きがある。

自分に人殺しができるかと問われれば、やはり答えは「NO」だった。

「やっぱり、人殺しなんて……」

「そうか」

シノンがそう答える事は予想していたのだろう。ナジエンダはあっさりとした調子で頷きを返した。

元より、帝具が使えるとは言え、シノンは普通の少女である。殺し屋稼業に向いていないのは明白だった。

「タツミ、お前は どうする？」

ナジエンダは、改めてタツミに向き直って尋ねた。

シノンと違い、タツミは元々軍人になる為に村を出て来たのだ。脈はあると踏んでい  
るのだが。

「さつき言った通り、断つても死にはせん。それを踏まえた上で、どうだ？」

「俺は……」

ナジエンダの誘いに対し、タツミは重い物を持ち上げるようにゆっくりと口を開い  
た。

「帝都に出て出世して、貧困に苦しむ村を救うつもりだったんだ。ところが、帝都まで腐  
りきってるじゃないか……」

地方の村に居れば、帝都の様子など伝わってこないのだろう。

だからこそ、華やかな帝都に憧れ、立身出世を目指す人間も珍しくない。

だが、そうやって帝都に出てきた人間も、やがては現実を知る事になる。自分達が夢  
見ていた物は、全てまやかしに過ぎなかったと言う事を。

帝都の華やかさは全て、地方を始め、多くの人々を踏み躪った上で成り立っているの  
だ。

「中央が腐っているから、地方が貧乏で辛いんだよ」

壁に寄り掛かっていたブラートが、笑みを浮かべながら言った。

「その腐った根源を取っ払いたくねえか？ 男として。俺達の仕事は帝都の悪人を始末する事だからな。腐った連中の元で働くよりも、ずっと気分が良いぜ」

「でも……」

ブラートの言葉を聞いても、尚も逡巡を見せるタツミ。

と、

「ああ、もうじれったい!!」

声を上げたのは、豊かな髪をツインテールに結った少女である。

まだ幼さの残る顔立ちと、フリフリとした衣装が、可愛らしい雰囲気を出しているが、反面、今にも噛みつきそうな雰囲気少女の気の強さを物語っている。

少女の名はマイン。可愛らしい外見をしているが、こう見えてナイトレイド随一の狙撃手である。自称「射撃の天才」だが、その言葉は決して誇張ではない。

「男ならビシッと決めなさいビシッと!! やるならやるッ やらないならやらない!!」  
「いや、ビシッとって……」

激昂するマインに、たじろくタツミ。まるで、そのままタツミに噛みつきそうな勢いである。

そんな2人の様子を見ながら、キリトは苦笑する。

「いや、落ち着けよ、マイン。タツミを食っても美味くは無いと思うぞ」

「食う分けないでしょッ あんた、あたしを何だと思ってるのよキリト!!」  
抑捺するようにキリト。

それに対しマインは、豊かなツインテールを振り立てながら矛先を変える。

喧々譁々と言ひ合いを始めるキリトとマインは放つておいて、ナジエンダは改めてタツミに向き直つた。

「お前の言い分は判つた。しかしならば、余計にナイトレイドはピツタリだぞ」  
「何でそうなるんだ?」

キョトンとするタツミ。

殺し屋をやる事と、村を救う事が、どうしてもタツミの中で符合しないのだ。

それに対し、ナジエンダは身を乗り出すようにしてナイトレイドの仕組みについて説明した。

現在、帝国は内戦状態にある。

南部一帯には反帝国を掲げる「革命軍」が拠点を構え、その勢力を拡大しつつある。結成当初は規模が小さかった革命軍だが、日に日に募る民の不満を吸収するようになり規模を拡大し、今は一大勢力と化して帝国を脅かすまでになっている。

「だが、勢力が拡大すれば必然的に、情報の収集や暗殺など、日の当たらない仕事をする必要が出てくる。それが我々、ナイトレイドだ」

つまり、ナイトレイドは単なる犯罪者集団ではない。帝国を真に憂い、外から作り変えようとする革命軍の先鋒部隊と言う訳である。

「今は帝都のダニを対峙しているが、革命軍が決起した際には、混乱に乗じて腐敗の根源を断つ」

「腐敗の、根源？」

「大臣だ」

口を開いたのは、それまで黙っていたアカメだった。

現大臣オネストは自身の持つ絶大な政治力を駆使し、先の後継者争いに勝利、幼い皇帝を擁立した策謀家である。

しかし大臣は、皇帝の持つ権力を背景に国政を好き勝手壟断していると言う。

まさに、現在の帝国を腐らせている、元凶そのものだった。

「革命軍の攻撃に合わせて、私達は宮殿に突入、大臣を葬る。それが最終的な目標だ」  
勿論、それだけで国が良くなるわけじゃない。

大臣を打倒し、帝国の枠組みを破壊した後、次にやってくる再生の時を乗り越えなければ、真の意味で革命が成功したとは言えないだろう。

しかし、そこを考えるのはナイトレイドでは無く、革命軍上層部の役割である。

「アカメが言った通り、最終的な目標は大臣の暗殺にある」



ナジエンダは、アカメの言葉を引き継いで言う。

「革命軍決起の時については、まだ言えないが、勝つための策は用意してある。その時が来れば、確実にこの国は変わる」

確信を込めて言うナジエンダ。

それに対し、タツミはゴクリと喉を鳴らした。

「その新しい国は、ちゃんと民にも優しいんだらうな？」

「無論だ」

確信を込めて頷くナジエンダ。

革命軍は志の高い者達の集まりである。彼等は必ずや、革命後の国を立て直してくれることだろう。

「なるほど、スゲエ………」

タツミはため息を吐くように言った。

「じゃあ、今の殺しも、悪い奴等を狙ってゴミ掃除してる、つまり、正義の殺し屋って奴だな!!」

顔を紅潮させて、タツミは言った。

悪い奴等を倒し、新しい国を創る為に戦う。確かに、それだけ見れば、ナイトレイドは正義の味方に見える事だろう。

だが、

次の瞬間、

一同から一斉に笑い声が起こった。

マインに至っては、露骨に指差して大笑いしている。なかなか、失礼である

「タツミ」

レオーネが、静かに声を掛ける。

「どんなお題目を付けようが、やってることは殺しなんだよ」

その表情は暗く冷めており、普段の明朗さが完全に塗り替えられているようだった。声はゾツとするほどに冷え切っているのが判る。

「そこに正義なんて無いんですよ」

「ここにいる全員、いつ報いを受けてもおかしくは無いんだぜ」

シエーレとブラートもまた、レオーネに追従するように告げる。

場の空気は、完全に張りつめ、触れただけで肌が斬り裂かれそうな雰囲気がある。

誰もが、先程までの和気あいあいとした雰囲気脱ぎ去り、完全に殺し屋の目と化しているのが判る。

勿論、キリトでもある。

正義か悪か、と言う問題は、キリトの念頭には無い。

勿論、戦う理由ならキリトにもある。だが、その理由を免罪符にして、自分を肯定化しようとは思っていないかった。

殺しは殺し、罪は罪。

いつか、その報いを受ける日が来るかもしれない、と言う想いは常に胸の中にあつた。「戦う理由は人それぞれだが、皆覚悟はできている。それでも意見は変わらないか？」

タツミに最後の確認の為、問いかけるナジエンダ。

自分達は正義の味方ではない。革命が成功しても民から賞賛を受ける事も無い。

それでも尚、命を投げ打って悪を討つと言う覚悟がある者だけが、ナイトレイドに加わる資格があるのだった。

「……報酬は、貰えるんだろうな？」

「ああ、しっかりと働いていれば、故郷の一つは救えるだろう」

タツミは考え込む。

元々、帝国に仕官するのは村を救うためである。

だが帝国の内情が腐りきっているなら、そこに仕官する意味はハッキリ言つて無い。

むしろ、ナイトレイドの在り方に深い共感を覚えるのだった。

「だったら、やる。俺をナイトレイドに入れてくれ!!」

タツミは決断する。

自ら修羅の道に飛び込むと。

「そう言う大きな目的の為なら、サヨもイエヤスも、きっとそうしてる!!」

「村には大手を振って帰れなくなるかもよ」

マインが鋭い視線で尋ねる。

「いいさ、それで村が幸せになるのなら」

だが、タツミの決意は揺らぐ事無く答えた。

目的があり、そして村を救えると言うのなら、タツミに否やは無かった。

「決まりだな、修羅の道へようこそ、タツミ」

義手の右手を差し出すナジエンダ。

ここにまた、1人のナイトレイドが誕生した。

その時、

メンバーの1人、ラバックが何かに弾かれたように動いた。

「侵入者だ、ナジエンダさん!!」

その特性故に施設の警備を担当しているラバックは、どうやらアジトに侵入して  
存在を感じたらしい。

しかし、まさかフェイクマウンテンの中にあるアジトを嗅ぎつけて来るとは。

「人数と場所は？」

「俺の結界の反応からすると、恐らく10人!! 全員、アジトに付近まで侵入しています!!」

ラバツクの結界は完璧であり、今まで接近を図った敵は、アジトから離れた地点で捕捉、撃退する事に成功してきた。

しかし今回、アジト近辺にまで接近を許したとなると、それだけで尋常ではない。

帝国軍に所属する部隊の大半は腐敗政治の齎す甘い汁に浸かりきっている。その為、一部を除いて碌な戦力にはなりえない。

それを考えると、侵入者が帝国軍である可能性が低いだろう。

恐らく、密かに異民族の傭兵を雇った可能性が高い。

異民族と言えば帝国と敵対していると言うイメージが強いが、中には傭兵として帝国に雇われる者も少なくは無い。中には、密偵活動に優れた者達もいるだろう。そうした手合いに嗅ぎつけられた可能性が高い。

帝国からすれば、自分達の懐を痛くする事無く、賊を狩れるとなれば安い物だろう。

「仕方ない」

葉巻を取り出して、火を付けるナジエンダ。

同時に、その隻眼が鋭く吊り上る。

「全員、生かして帰すな。行けッ!!」

その言葉を受け、ナイトレイド達が動き出した。

その素早い動きに、シノンとタツミは置いて行かれた形である。

「何をしている」

「いてっ」

いきなりナジエンダに頭を殴られるタツミ。

そのタツミに、ナジエンダは凄味ある笑いを向ける。

「初陣だ、始末して来い」

「は、はいッ」

慌てて駆け出すタツミ。

その新たに誕生した漆黒の翼を、シノンは悲しげな瞳で見送っていた。

### 3

褐色の肌には、上半身を肌蹴た民族衣装を着た一団が、川沿いを駆け抜けていく。

その動きには一切の無駄が無く、駆ける音すらほとんどしない。

南方民族の暗殺者集団である彼等は、帝国政府から雇われる形で反政府的な賊を狩り続けている。

そんな彼等の今回の標的は、帝都を騒がす最強の暗殺者集団ナイトレイド。

これまでの情報を統合して、ナイトレイドのアジトがフェイクマウンテンのどこかにある可能性が高い、というところまでは突き止めている。

そこまで判れば、後は簡単な話だった。

川沿いから侵入を図ろうとするのは、手段としては常套的であると言えるだろう。

どんな人間であろうと、水が無ければ生きていけない。その為、このような僻地であればある程、施設は水の傍に造られるのが定石だ。

その考えを肯定するように、彼等の前に人影が姿を現した。

細い体に、手には一振りの刀を携えている少女。

その顔には、暗殺者たちも見覚えがあった。何しろ帝都には、彼女の手配書が嫌と言う程に張り出されている。

「いたぞッ 手配書にあったアカメだ」

「やはり、アジトはこの近くのようだな」

暗殺者たちはアカメの姿を見て、にやりと笑う。

「それにしても可愛い女だな」

「殺った後も楽しめそうだ。なるべく、体は傷付けるなよ」

言いながら、下品な笑みを口元に浮かべる。

次の瞬間

ザンツ

一瞬の踏み込み。

誰もが抜刀した瞬間はおろか、アカメの体の動きすら、確認できなかった。

「……………お前達、敵地で余裕持ち過ぎだ」

静かに響く、アカメの声。

気付いた時には、全員が喉を斬り裂かれていた。

その間、一瞬未満。

誰も、反応する事すらできなかった。

3人中、2人が致命傷を負って崩れ落ちる中、残った1人が尚も反撃しようとアカメに振り返る。

「せめて、相打ちにッ」

言った瞬間、

何の前触れも無く、男の心臓は鼓動を止めた。

刀を鞘に納めるアカメ。



それを待つていたように、最後の一人も崩れ落ちた。

見上げると、キリトの頭上を閃光が駆け抜け、次いで遠方で大きな音が鳴り響いた。その様子から、標的の一人が命を落としたのを悟る。

「今のは、マインのパンプキンか。これで一人仕留めたな。」

冷静に言いながら、キリトはロングコートの中背負った漆黒の剣を抜き放つ。

帝具には、それぞれ固有の特殊能力がある。

アカメの持つ刀型帝具「一斬必殺 村雨」は、刃が僅かでも標的を斬れば、傷口から絶対致死の呪毒が流れ込み死に至らしめる。

レオーネのベルト型帝具「百獣王化ライオネル」は発動すると、獅子のような尻尾や耳が出現。五感が上昇すると同時に身体能力も飛躍的に強化される。

マインの銃型帝具「浪漫砲台パンプキン」は、精神エネルギーを弾丸の代わりにして撃ち放つ銃。ピンチになればなる程、その威力は増大する。

シエーレの大型鋏型の帝具「万物両断エクスタス」は、この世のあらゆる物を斬り裂く。これには奥の手があり、刃の部分を強烈に発光させて、相手の目を晦ませる事ができる。

ブラートの鎧帝具は「悪鬼纏身インクルシオ」。鎧型の帝具であり、鉄壁の防御力を誇り、纏った人間の能力を引き上げてくれる特性を持つ。ただし、使用者が完全に鎧に適合しないと自滅してしまう。

ラバックの糸型帝具は「千変万化クローステール」糸の帝具であり、その名の通り、糸を縫い、絡め、巻き付ける等、様々な使い道がある。このクローステールをアジト周辺に展開する事で、ラバックは敵対者の侵入を察知しているのだ。

そして、

剣の切っ先を真っ直ぐに向けるキリト。

これが、キリトの帝具。片手直剣型帝具「黒翼魔剣エリユシデータ」である。

そのキリトの目の前に、褐色の肌に民族衣装を着込んだ男が2人、飛び込んできた。

「悪いが、ここは行き止まりだ」

まったく気負った様子も無く、口元に笑みを浮かべて告げるキリト。

男達は一瞬、顔を見合わせたが、すぐに相手が1人だと判り、それぞれ腰にある剣を抜いて襲い掛かってくる。

「その剣にその姿、やっぱり異民族。それも、南方の蛮族あたりの出身つてところでもいいのかな？」

問いかけるキリトの声にこたえる事無く、男達は動いた。

素早い動きで迫ってくる敵。

その手に持った刃が、怪しい輝きを放つ。

その動きを冷静に見据え、

キリトはエリユシデータを右手に持ち、体を半身にして構えると、一気に地面を蹴つて駆けた。

その圧倒的な加速力により、間合いは一気にゼロとなる。

男達は、キリトの動きに追従しようとする。

しかし、

「遅いぜ」

静かな声と共に、水平に振り抜かれる漆黒の刃。

次の瞬間、2人の男達は同時に斬り捨てられ、地面に倒れ伏した。

「アンタ達、運が無かったな」

エリユシデータを一振りして、背中の鞘へと納めると、キリトはそれ以上、倒れている死体に目をくれる事無く去って行った。

戦況は、完全にナイトレイド優位に傾いていた。

身体能力に優れた異民族の暗殺者達だったが、ナイトレイド達は皆、一騎当千のつわもの達である。侵入を気取られた時点で、既に彼等に勝ち目は無かった。

既に刺客の大半は撃破され、人跡未踏の山中に屍を晒すに至っている。

彼等の死体はやがて獣に食われ、大地に消えていく事だろう。

そんな中、シノンは1人、宛がわれた自室に籠って膝を抱えていた。

これで良かったのだ。自分は何も間違っていない。

確かに、ナジエンダの言葉には心動かされる物があった。ナイトレイドが巷で言われているような外道の集団ではなく、一定の目的を持って行動している事も理解した。

しかし、それでも、殺し屋など勢いであるような物じゃないと思う。

だが、タツミはどうだろう？

彼は親友の死と言う悲しい出来事を乗り越え、その上でこの国の現状を変える為に、あえて修羅の道へと突き進んだ。

翻って自分は、その現実から背を向けて逃げようとしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの時と、同じ」

ポツリと呟く脳裡

そこに思い浮かべられる、自身の過去。

視界一面に広がるのは、

一面の赤、

赤

赤

そして、

そこに佇む人影が、  
ゆっくりと振り返り、

「ツ!？」

込み上げる感情が、無理やりシノンを実現へと引き戻した。

また、繰り返すのか？

また、自分はただ、怯えて震えている事しかできないのか？

たとえ修羅の道と判つていても、自ら突き進むと決めたタツミの方が、よほど立派である。

彼が男で、自分が女だから？

いや、違う。

そんな単純な理由じゃない。

これはきつと、覚悟の差だ。

タツミには、たとえ己の命を差し出してでも、成し遂げたい事がある。

それに対し、自分にはそんな物は無い。だからこうして、ウジウジと生き悩んでいる。

「……………あいつにも、それがあつたのかな？」

ふと、シノンの脳裏に、キリトの事が浮かんだ。

あの夜、アリアの家で対峙した少年。

一見すると線が細く、飄々としてとらえどころがないキリト。

しかし、そんな彼も、ナイトレイドとして暗殺者に名を連ねている。

ならば彼にも、譲れない何かがあると言う事だ。

チラツと、机の上に置いてある弓を見る。

シエキナーは、一応、護身の為に持つておくようナジエンダに言われた為、部屋に持つて来た。

帝具には相性があり、合致する人間でなければ使いこなす事はできないと言う。

ならば、シノンがシエキナーを使いこなせると言う事は、彼女自身もまた、戦う事を運命付けられていると考える事もできる。

「私も、戦う事ができるのかな？」

キリトのように……

なぜか自然と、そのように考えてしまう。

その時だった。

カタツ

廊下の方で微かな音が聞こえた気がして、シノンは顔を上げた。

「誰？ ナジエンダさん？」

何の気も無しにシエキナーを手に取ると、廊下に出てみる。

次の瞬間、

突然、湧き上がった気配が、背後から迫って来るのに気付いた。

「ッ!？」

掴み掛ってくる腕。

とっさにシノン、床へと転がる事で、伸びてきた腕をかわす。

しかし、

その視界の中で、褐色の肌に民族衣装を着た男が、手にした刃をチラつかせながら、ゆっくりとシノンに近付いてきた。

「ヒュー、こいつはツイてるぜ。まさか、ナイトレイドにこんな良い女がいるとはな」

「違ッ 私は……」

とっさに否定しようとするシノンだが、男は聞いていない風で近付いて来る。

どうやら、ナイトレイド側の交戦域を避ける形で侵入を果たしたらしかった。他の戦闘員が出払っている状態だった為、辛うじて侵入する事に成功したのだ。

手にした刃が光りに反射して、怪しげな輝きを放ち、シノンの恐怖心を煽る。

「安心しな。今はまだ殺しやしねえよ。ただし、全部終わった後に、たつぷりと楽しませてもらうがな」

男は下卑た笑みを浮かべながら、なぶるようにゆっくりとシノンに近付いて来る。



剥き出しの悪意がにじみ出る。

同じだ。

あの時、

追い詰められて本性を顕にしたアリア。

そのアリアがシノンに向けた、純粋な悪意。

あの時と、全く同じだった。

こんな奴等が帝都にはたくさんいて、そのせいでタツミのように苦しんでいる人たちがいる。

そして、ナイトレイドはそんな者達を狩る為に戦い続けている。たとえば、自分達が汚名を蒙ろうとも、革命の先に新しい国がある事を信じて。

戦う理由があるとすれば、それで充分な気がした。

手は、自然とシエキナーの把取を握る。

「おっ」

男が驚いて動きを止める中、シノンは弦を引き絞る。

その姿を見て、男は口元に笑みを浮かべた。

「おいおい、弓つてのは、矢が無いと何にも出来ないんだぜ？」

シノンを小馬鹿にするような口調で言いながら、更に距離を詰めようとする男。

武器の使い方も知らない小娘。

今の男の目には、シノンはそのように映っている事だろう。

それが自分にとつての死刑宣告であるとも知らずに。

次の瞬間、

シノンの手元に、光の矢が出現した。

警戒に当たっていたラバックから、敵の1人がアジト内に侵入した事を告げられ、キリトは取る物も取りあえず、引き返してきた。

気になるのは、シノンの安全である。

ナジエンダは元将軍である。過去の負傷のせいで全盛期に比べれば衰えたとは言え、未だに高い戦闘力は健在である為、心配はいらないだろう。

だがシノンは帝具が使えるとは言え、彼女自身はただの学生に過ぎない。敵に襲われたらひとたまりもないのは言うまでも無いだろう。

焦燥に背中を押されるようにして廊下を駆け、シノンの部屋の前までやって来た。

「シノン!!」

叫んだ瞬間、

キリトは見た。

少女が放った光矢が、真っ直ぐに飛翔し、敵の体を貫くさまを。その速さたるや、キリトですら目で追うのが精いっぱいだった。

光の矢は、狙い違わず暗殺者の心臓を刺し貫く。

信じられない、と言ったように目を見開きながら倒れ伏す敵。

その姿を確認してから、

シノンも、糸が切れたように、その場に崩れ落ちる。

とっさに駆け寄って、少女の華奢な体を抱き留めるキリト。

その腕の中で、シノンはぐったりとしたまま、その可憐な双眸を閉じ続けていた。

## 第2話 「問われる覚悟」

終わり

### 第3話 「血の匂いに導かれ」

1

月夜の晩に、鮮血と悲鳴の多重奏が奏でられる。

出現する地獄絵図。

斬られた側は、断末魔の悲鳴すら残す事を許されず、地面へと倒れ伏した。

倒れ伏した複数の死体。

対して、立っている男は全くの無傷と言つて良い。怪我どころか、息一つ乱していない。

双方とも剣を交えた戦いは、しかしほとんど一方的な展開によつて幕が下ろされてしまった。

「フッフ、愉快愉快」

刃が首を斬り落とす感触を反芻するように、斬った男は滴る血に舌を這わせる。足元の死体は、その全てが首を切られ絶命している。

鮮血は、とめどなく流れだし、地面を無限に染め上げようとしていた。転がっている者達は皆、着ている服から帝都警備隊である事が判る。

だが、帝都の治安を守る警備隊ですら、この男には掠り傷一つ負わせる事ができなかったのだ。

「愉快愉快……さて……」

口元に不気味な笑みを浮かべながら、男は腕に仕込んだ刃をしまい、再び歩き出す。その額には、目のような形をした装飾が、怪しく輝いていた。

「次の標的は、どれが良いかねえ？」

怪しく告げる視線の先。

そこには、壁に貼られた数枚の人相書きがあった。

何でこんな事になったのか。

キリトは頭を抱えたい気分だった。

「それじゃ、行ってくるね。言っとくけど、絶対に変な事しないでよね」

釘をさすように言ったのはシノンである。

彼女は今、紺のブレザーに短めのスカートと言う可憐な制服姿をして、目の前にある学校に入って行こうとしている。

ネコ科の動物を連想させる顔と相まって、非情に可愛らしい学生姿だ。

ここはシノンが通っている学校である。

今日から彼女は、学業に復帰する事になる訳だが、そこになぜか、ノコノコと着いてきた野郎が一匹。

刺し貫くようなシノンの視線を前にして、キリトは慌てたように手を振って否定する。

「べ、別に俺は何もしないって」

「……………どうだか」

全く信用できないと言った感じにシノンはそう言っただけでキリトを一瞥すると、そのまま校門の中へと入って行く。

少女の細い背中が、やがて行き交う生徒たちの波に隠れ見えなくなっていく。

それを見送ると、キリトは頭をガリガリとかきむしる。

周囲には、学生服姿の男女が、やはり校門に向かって歩いて行く。

そんな中で、いつも通り漆黒のロングコートを羽織り、背中にはエリユシデータを背

負っているキリトの姿は、明らかに「浮いて」いた。

勿論、帝都には様々な人間が行き交っている。中には旅人も多く、危険種や野盗から身を守るために武装している人間も珍しくは無いのだが、流石に学校の正面で武装しているのは目立ちすぎる感があった。

「本当に、何でこんな事になってんだ？」

誰に尋ねるでも無く、キリトは先ほど脳裏に浮かんだ疑問を口に出して繰り返した。

キリトに与えられた新たな任務。

それは、学園に通うシノンの護衛である。

そして、

シノンが右手に持ったまま、彼女と共に学校に入って行ったケースの中には、彼女の帝具であるシエキナーが収められていた。

話は数日前、異民族の刺客達にナイトレイドのアジトが襲撃された日にさかのぼる。殆どとっさ的な行動ながら、刺客の一人を倒したシノンは、緊張感から来るシヨックのせいか、暫くは気を失った状態だった。

幸いな事に、シエーレに介抱されて暫くすると目を覚ましたが、戦いを終え、戻って

きた一同の前でシノンと言った。

「私、ナイトレイドに入ります」

真つ直ぐにナジエンダを見据えて放たれた少女の言葉。

その言葉に、誰もが驚いた。

まさか、この短時間の内に、少女の心境に変化が生じるとは思っても見なかったのだ。

「おい、シノン、なに考えてんだ」

真つ先に引き留めるような事を言ったのはキリトである。

他のメンバーはと言えば、事の成り行きを見守るように口を出そうとしない。幸か不幸か、このメンバーの中では、最もシノンと交流回数が多いのはキリトである。言いたい事は彼に言わせようと言う腹積もりらしい。

新メンバーであるタツミも、2人のやり取りを見守っていた。

「意味判って言ってるのかよ？ 俺達は殺し屋なんだぞ。その仲間になるって事は、お前も人殺しをするって事だぞ？」

無論、キリトはシノンが刺客の1人を殺すところを見ている。

彼女がシエキナーから放った光の矢は、確実に刺客の心臓を貫き絶命させている。

シエキナーを十全に使いこなせるなら、シノンは充分に戦える力を持っている。恐らく、並みの兵士では帝具を持つシノンの足元にも及ばないだろう。



だが、それと殺し屋になると言うのは話が別である。  
しかし、

「勿論、判つてるわよ」

言い募るキリトに対し、シノンには迷う事無く答える。

その瞳には、つい先程まで見られた逡巡のような物は一切見られない。どこまでも真つ直ぐな瞳でキリトを見据えていた。

「……………理由を、聞こうか？」

尋ねたのはナジエンダである。

ナジエンダ自身、ナイトレイドを率いる者として高い戦力を持つ存在はすぐにも欲しい。

しかしだからと言って、覚悟が無い人間を引き込む事はできない。

ナジエンダとしては、シノンの気持ちが変わった理由を知りたいと思つたのだ。

それに対し、シノンはチラツとタツミを見てから口を開いた。

「タツミ君を見て思つたんです。彼と私との差は何だろうって。タツミ君はちゃんと自分の意志を持つて皆さんの仲間になるって決めました。けど、私はただ逃げただけ。友達からも、そして自分自身からも……………」

「シノンさん……………」

声を掛けてきたタツミに頷きを返しながら、シノンに更に言う。

「帝都をこのままにしていたら、またタツミ君のような人たちを増やしてしまう事になる。だから、私は、その悲劇を少しでも食い止めたいたいと思いました」

アリアと、そして今回の刺客達と対峙して、シノンが導き出した、それが答えだった。座して待つ者に答えは訪れない。

真の答えを導き出せるのは、自ら行動を起こした者達だけだった。

「成程な」

ナジエンダはフツと笑う。

民を想い、民の為に立つ。それもまた、立派な動機になり得るだろう。何よりそう思う事こそが、自分達が目指す革命に最も必要な思いである。

「良いだろう、シノン。我々は君を歓迎する。ようこそ、ナイトレイドへ」

誰もが新たな仲間を歓迎する。

少数精鋭のナイトレイドにとって、即戦力、それも帝具使いともなれば、柵から牡丹餅とでもいうべき幸運展開である。

「ではシノン、それに……」

言ってからナジエンダは、視線を巡らしてキリトを見た。

「キリト。早速だが、お前達2人に任務を与える」

にやりと笑うナジエンダ。

対して、

「……………はい？」

いきなり飛び出した、たいへん麗しい申し出に対し、キリトとシノンは揃って顔を見合わせるのだった。

## 2

教室に入ると、シノンは気心の知れた友人数人とあいさつを交わす。

ほんの数日振りだと言うのに、何もかもがひどく懐かしい気がした。

『それもそうか……………』

心の中で、そつと呟く。

アリア一家の死とナイトレイドとの接触。刺客の襲撃。そして、自分自身がナイトレイドへの加入。

そのどれもが、ほんの数日前の自分には想像すらできなかつた世界の出来事である。

後悔はしていない。積み重ねてきた状況は成り行きだったかもしれないが、今ここに  
ある自分は、自分自身で選択した事に他ならない。

だから、後悔はしていない。

していないが、この先どうなるのか、と言う命題に対して不安無しとはいかないのも  
確かだった。

「それに………」

ふと、窓の外から後門の方を見下ろすと、黒いロングコートを着た人影が歩いて行く  
のが見える。

「ナジエンダさん、何であんな事を………」

そう言った時だった。

「シノのん!!」

声を掛けられて振り返ると、隣のクラスの女子生徒が、慌てた調子で駆け込んでくる  
のが見えた。

「アスナ、どうしたのよ?」

「どうしたじゃないよー シノのんこそ、ここ数日どうしてたのよ?」

少女は流れるような長い髪を揺らしながらシノンの前まで来ると、ため息交じりに息  
を付いた。

少女の名はアスナ。

クラスこそ違えど、シノンにとっては良き友人の1人である。

アスナは確かめるようにシノンの手を取り握り締める。

「アリアさんの家族が殺されたって聞いたし、そこにきて、あの娘と仲良かったシノのんまで学校に来なくなつて、心配したんだからね」

「ごめんごめん。ちよつと、色々あつてさ」

幾ら仲のいい友達とは言え、まさか本当の事を言う訳にもいかないので、シノンはそう言つてごまかし苦笑する。

性格的に物静かなせいかなシノンは友達が多いとは言えない。ここまで自分の事を案じてくれる存在となると、アスナを含めても、ほんの一握りだった。

幸いな事に、アスナもそれ以上の事は突っ込んで聞こうとはしなかった。

それにしても、やはりと言うべきか、アリアの一家がナイトレイドによつて惨殺された事は広くニュースになっているらしかった。

シノンは内心で嘆息する。

大方、ナイトレイドの事は散々に書かれている事だろう。何しろ、護衛も含めて一家全滅である。その凄惨さは、事情を知らない者が見れば戦慄する事請け負いである。

『せつとせつと……』

シノンの脳裏に、ナイトレイドの面々の顔が思い浮かべられる。

あの連中が、いちいちそんな事を気にするとは露とも思えないのだが。

「アリアさん達を殺したのって、やっぱあれかなー、例のナイトレイド」

「ど、どうかな？ よく判んない」

まさか真相を話すわけにもいかないのです、シノンは取りあえずそう言ってお茶を濁しておく。

そんなシノンの様子に気付いた風も無く、アスナは話を続ける。

「けどさ、死んだ娘の事を悪く言いたくは無いけど、私、あの娘の事、あんまり良く思っ  
て無かったんだよね」

「え、どうして？」

シノンはキョトンとして尋ねる。

アスナは比較的快活な性格をしており、他人の事を悪く言う事は少ない。だからこ  
そ、アスナは皆から慕われ、頼られる事が多いのだが。

そんなアスナが、死んだアリアに対して悪感情を持っているとは思っても見なかつ  
た。

「何て言うかね、何か裏で考えているって言うか、上っ面だけ装っているって言うか、と  
にかく見えていて、あまり良い感じがしなかったのは確かだね」

「そ、そう」

返事をしながらシノンは、内心で驚いていた。まさか、アリアの本性をおぼろげながらも見ぬいている人間いたとは。

案外、自分よりもアスナの方が、殺し屋とかそっち方面に向いているかもしれないなかつた。

「まあ、とにかくシノのんも気を付けてよ。ナイトレイドの他にも、ほら、何だっけ……そうそう『首切りザンク』なんてのも出回ってるからね」

「……………」

アスナの言葉を聞いて、シノンは一瞬黙り込む。

思いもかけず、その単語が飛び出してきたのだ。

「ねえ、アスナ」

「ん、何？」

振り返るアスナに、シノンは言った。

「その話、もう少し詳しく聞かせてくれる？」

「ここ数か月、被害は増加しているヨ。王都守備隊が把握しているだけでも二桁、もつと

も、これは氷山の一角サ。オレっち独自の調査によれば、実際の被害は三桁に届くだろうナ」

「そんなにか……」

報告を受けたキリトは、深刻な表情で頷きを返した。

シノンと別れた後、キリトは馴染の情報屋と会っていた。

フードを頭からすっぽりとかぶり、独特のイントネーションを持った喋り方をする女性の名はアルゴ。

外見から来る予想年齢からすると想像はつかないが、これでも「帝都一」と言われる情報屋である。その情報の確度と、どんな重要情報でも確実に掴んでくる仕事ぶり、そして、なぜか左右両頬に書かれている3本のペイントから「鼠」の愛称で呼ばれている。「首切りザンク、か。いったいどんな奴なんだ？ 元は監獄に勤めてたって話は聞いているけど？」

首切りザンク。

それが、キリトとシノンがナジエンダから受けた命令である。

今の帝都において、市民の恐怖の対象となっている存在が二つ。

一つはナイトレイド。そして、もう一つが《首切りザンク》である。

ただ、ナイトレイドが富裕層や閣僚（正確には、その中でも外道と判断された者）の



みを狙っているのに対し、首切りザンクは、ほとんど無差別に人を狙って殺しまわっているらしい。

その《首切りザンク》の情報を得る事が目的だった。アルゴとの接触も、その一環だった。

元々は帝国最大の監獄で、首切り役人をしていたと言う情報はナイトレイドの方でも掴んでいた。

「調べた限りじゃ、当時の勤務態度は誰よりも真面目だったらしいヨ。無遅刻無欠勤、殆ど失敗らしい失敗もしなかったとか。上司や同僚からも頼られていたらしいネ」

「レオーネにも見習ってほしいくらいだな」

「ただ、最近は『仕事』の方が多すぎたらしくてネ。毎日のように罪人の首を切っている内に、色々と壊れちまったって話ダ。他人の首を切るのが、好きで好きでたまらなくなってしまうたって訳ダ」

「これも、今の悪政の影響か」

吐き捨てるようにキリトは言う。

現大臣オネストは自分が気に食わない者、逆らった者を誰彼かまわず罪人に仕立て上げ、牢獄送りにしている。その影響で、「処刑される人間がいらない」という日が無いくらいである。

大臣の齎す悪政の影響がこんな所にも出て居る訳だ。いわば、ザンクに斬られた人々は、大臣の間接的な犠牲者と言える。

「で、所長を殺し、保管されていた帝具を持って脱走。それ以来、めでたく《首切りザンク》が誕生した訳だ」

「帝具？」

聞き捨てならない単語が出たところで、キリトは身を乗り出した。

「どんな帝具なんだ？ 能力は？」

勢い込んで尋ねるキリト。

対して、

アルゴは意味深な笑みを浮かべつつ、右手を差し出す。要するに、欲しい情報があるなら払う物を払え、という意味だ。

「やれやれ、しつかりしてるよ」

「ナーちゃんは払いが良いから好きヨ。良いお得意様サ」

キリトが差し出した硬貨入りの懐を受け取ると、アルゴは声を響めるようにして話し始めた。

因みに猫の名前のようにも思える「ナーちゃん」と言うのは、ナジエンダの事である。言われている本人も、意外と気に入っているらしかった。

「帝具の名は、『五視万能スペクテッド』。能力は、『見る』事ヨ」  
「見る?」

「そう。5つの見る能力を備えているのサ。相手に幻を見せる『幻視』、遠くの物を見通す『遠視』、相手の心を読む『洞視』、未来を読む『未来視』とアル。まあ、よくある超能力芸の強化版みたいな物サ」

アルゴの説明を聞いて、キリトは考え込む。

ザンク自身の能力は不明だが、帝具の威力はかなり厄介だ。心を読まれると言う事は、戦っている際、こちらの考えも読まれる事を意味している。

直接的な戦闘を得意とするキリトでは、よほど注意して戦わないと苦戦は免れないだろう。

「.....あれ?」

キリトはある事に思い至り、指を折って数えてから顔を上げた。

「ちよつと待て、『五視万能』なんだろ。さっきの説明じゃ4つしかなかったぞ?」

「そこなんだヨ。オレつちも今、探りを入れてる所なんだけどネ。もう1つは、まだ判ってないんだ」

アルゴの説明に、キリトは口元に手を当てて考え込む。

帝具の力が厄介な上に、残り1つの能力が不明。

もし戦う事になった場合は、そこを見極める事が重要となるだろう。もともと、それで不利を埋められるかどうかは不明だが。

「とにかく、並みの人間じゃ歯が立たない事は既に実証済みだ。帝都警備隊が何回も挑んでいるけど、全部返り討ちにあっているからネ」

「対抗できるとすれば、同じ帝具を持っている、俺達ナイトレイドって訳か」

元より、外道を狩るのがナイトレイドの役目。ならば、躊躇う理由は無かった。

## 2

帝国北方には、長らく帝国と敵対関係にある異民族の国がある。

近年、この北方異民族との緊張状態はこれまでに無いくらいに高まっており、特に北方異民族は、自国の要塞都市を拠点にして、帝国への侵攻を強める構えを見せている。

その北方異民族軍を率いるのは、異民族の王子であり「北の勇者」の異名で呼ばれるヌマ・セイカである。

文武双方に優れ、槍を持てば百戦百勝。また絶大な戦略家としても知られており、こ

れまで幾度となく帝国の地方軍を撃破、北方異民族の版図を歴史上最大規模まで、拡大する事に成功していた。

そんな中、

降りしきる吹雪の中を潜るように、1人の旅人が帝国領へ足を向けようとしていた。白い外套に頭頂から足先までをすっぽり覆い、その姿を見る事はできない。

ただ、視界全てを覆い尽くすような白い嵐の中を、只管に南を目指して歩いている。その時、

「待てッ」

不遜な声と共に、手に武器を持った男達が数名、旅人の行く手を遮る形で現れた。

全身を防寒着で覆い、顔にはレンズと呼吸器付きのマスクを装備している。吹雪の中でも問題無く戦うための装備である。

彼等は北方異民族軍の兵士達だった。最前線であるこの場所で網を張り、通りかかる人間を見張っていたのだらう。

「貴様、何者だ？ どこへ行く？」

問いかけると同時に、武器を構える兵士達。

現在、帝国軍が精鋭部隊を派遣したと言う情報が彼等の元へと入っている為、緊張の度合いが増しているのだ。

対して、

旅人はフードに隠された顔を僅かに上げて答える。

「南………帝国へ」

声の感じから男、それもかなり若い事が予想されるが、それ以上の事は判らない。

だが、旅人の答えが、兵士達の緊張の度合いを引き上げた。

「帝国だとッ 怪しい奴、顔を見せろ!!」

言いながら、フードを剥ぎ取ろうと、先頭の兵士が手を伸ばす。

だが、

そこで旅人が動いた。

鋭く腕を振り上げ、伸ばされた兵士の手を払う。

「貴様ッ」

「抵抗するか!!」

旅人の態度を敵対行動と取ったのだろう。兵士達は一斉に武器を向けてくる。

北方異民族は過酷な環境で生き残るために、高い戦闘技術を身に付けている。そんな彼等が一斉に掛かれれば、得体のしれない旅人一人、捕えるくらい訳ない話である。

だが次の瞬間、

吹雪を斬り裂くような、銀の閃光が奔った。

次の瞬間、先頭の兵士が首を切られ、鮮血を舞わせながら雪原へと倒れ伏す。仲間の死に動揺が走る中、旅人は更に動く。

外套の下から姿を現した刃。

僅かな反りがある優美な刀剣は、アカメの村雨の原型にもなった東方島国に伝わる伝統的な武器、刀である。

鋭い一閃によって1人を袈裟懸けに斬り、更にもう1人の心臓に刃を突き立てる。

この間、僅か数秒。

雪原の上に、兵士達の屍が積み重ねられていく。

旅人は刃を返すと、更に2人の兵士を斬って捨てた。

「だ、駄目だッ 退け!!」

相手が自分達の手には負えないと判断したのだろう。残った兵士達は次々と踵を返して撤退していく。

残ったのは、息絶えた兵士の屍と、息一つ乱した様子が無い旅人だけだった。

刃の血を振るい、鞘へと納める旅人。

その時だった。

パチ パチ パチ パチ パチ パチ

吹雪の中から、何かが弾けるような音が聞こえてきた。

とつきに振り返る旅人。

そこで見たのは、1人の女性だった。

長い髪、スラリとした手足が齎す長身は、まるで一流モデルのような外見である。眼つきは鋭く、怜悯な美貌の持ち主である。

異様な事に、その女性はこの吹雪の中、一切の防寒具を付けずに歩いている。

だが、

「見事だ」

称賛の声が贈られる中、

旅人は警戒したように、フードの奥から女を睨みつける。

それは、女の全身から発せられる気配が、あまりにも剣呑な物であったからに他ならない。

まるで獣、

否、そんなレベルの話ではない。

まるで危険種と呼ばれる凶悪生物の中でも、最悪の部類に当たる、特級と言われる存在と出くわした時のような、とんでもない殺気を感じる。

彼女の背後には3人の男達が控えているが、その男達ですら、目の前の女には敵わない。



恐らく、今しがた相手をした兵士では、たとえ1万で掛かったとしても、この女1人には敵わないのではないだろうか？

そんな旅人の警戒を見透かしたように、女はフツと口元に笑みを浮かべた。

「そう怯えるな。何も取って食おうと言う訳じゃない」

そう言うのと、手を差し出す。

「どうだ、私の陣へ来ないか？ 言っておくが、私はそいつらとは敵、帝国軍の者だ。お前が帝国へ行きたいと言うのなら、色々と便宜を図ってやることもできるぞ」

「.....」

それは、申し出としてはありがたい物がある。

何より、

目の前の人物相手に戦って、自分が無事でいられると言う保証も無い。ここは、素直に従っておいた方が頭の良い選択と言える。

迷った末に、旅人は頷きを返すのだった。

第3話「血の匂いに導かれ」

終わり

## 第4話「首斬りザンク」

1

学校から出たシノンには、思わず脱力しそうになった。

今すぐ地面に手を突いてうずくまりたいほどの衝動に駆られているが、実際にそれをやってしまったら目立つ事この上ないので、取りあえずやめておく事にする。

「……………あんだ、何やってんのよう？」

「お、来たかシノン。お疲れ」

などと、のほほんとした口調で言ったのは、シノンと同年代くらいの少年、キリトである。

口には、どこで買って来たのか知らないが、怪しげな肉の串焼きが啜えられていた。

周囲の学生たちは皆、明らかに浮いているキリトの様子を不審な眼差しで見詰めながら通り過ぎていく。

正直、シノンも声を掛けるには勇気が必要だったのだが、まさか無視するわけにもいかなかったのが悲しい所である。

「シノンも食う?」

「いらない」

差し出してきた串焼きを、素っ気なく断るシノン。

いい加減、この男のペースに巻き込まれる心算は無かった。

「それで……」

少しでも建設的な事にシフトすべく、シノンは話題を変える。

「情報は集まったの? 何でも、プロの人と接触したんでしょ?」

情報収集は、互いにナジエンダから言い渡された任務である。その為、シノンも学校内で可能な限りの情報を収集してきた。

しかし、シノンその言葉を聞いた瞬間、

「シッ」

素早く顔を近づけたキリトは、声を響めながら言った。

「その件に関しては、歩きながらにしよう。あまり人目に付きたくない」

その声に、思わずシノンは息を呑んだ。

最前までのお茶らけた態度が影をひそめ、代わってまるで剃刀の刃のように鋭さを増した雰囲気、少年からにじみ出ている。

つまり、こちらが暗殺者としてのキリト本来の姿と言う訳だ。

キリトに促されるまま、シノンは並んで歩きだす。

下校する学生の流れに逆らわないように、2人は歩調を調整して歩きながら、互いに今日1日で得る事が出来た情報について話し合う。

「……………なるほど、その《首切りザンク》も、帝具使いなんだ」

「ああ。アルゴ……………俺が今日会っていた情報屋の話だと、相手の心を読む帝具らしい。確か、ナジエンダが前に見せてくれた文献にも、そんなのがあったな。あれは、えっと……………」

言いながらキリトは、前に読んだ文献の内容を思い出そうとする。

しかし、元々、自身の関心が薄い事に関して、それほど熱心ではないと言う自覚がある。

いくら考えても詳細については思い出せなかった。

「……………とにかく、アルゴが言うにはだな」

「ごまかしたわね」

「能力は大きく分けて5つの『見る』事に特化しているらしい」

ジト目で放たれたシノンのツツコミを華麗にスルーしつつ、キリトは更に説明する。その説明を聞き終えてから、シノンは難しい顔のまま顎に手を当てた。

「未来視、洞視、幻視、遠視か……遠視は取りあえず直接戦闘には関係無いにしても、他の4つは案外、厄介ね。特に未来視」

「こつちの考えが読まれるわけだからな。確かに厄介と言えば厄介かもだけど」  
深刻な顔をして考え込むシノンに対し、キリトは飄々とした感じに答える。

その応対に不信感を感じたシノンは、顔を上げて振り返った。

「随分と余裕ね」

「ん、まあ、何とかなるだろ。ようは、対策だよ対策」

そう言つて微笑を浮かべるキリトに対し、嘆息するシノン。

「簡単に言うわね」

キリトがどんな「対策」を講じるのかは知らないが、まだまだ駆け出しの殺し屋シノンとしては、強敵を前にして不安を抱かずにはいられなかった。

「それはそうと、シノンの方は何か無いのか？ 学校で話、聞いてきたんだろ？」

「あ、うん、聞いてきたけど」

尋ねるキリトに対し、シノンも自分が集めて来た情報を話し始めた。

「幸い、私の知り合いで犠牲になったって子はいなかった。けど……」  
「けど?」

言い淀むシノンに対し、キリトは先を促す。

「学校内でも何人か、ここ数日、登校して来ていない人もいるらしいわ」  
「どこかの弓使いさんも含めてな」

混ぜつ返すキリトを、シノンは鋭い視線を向けて黙らせる。

「ちよつと調べてみたんだけど、いなくなってるのはみんな、学校から少し離れたところに住んでる子が多かったわ」

「成程……」

シノンの説明を聞いて、キリトは考え込む。

ナイトレイドもそうだが、殺し屋稼業は夜の活動が基本である。

もし下校が遅れた生徒が、不幸にもザンクと出くわしたのだとしたら。

「……ひどいな」

「キリト?」

眩きを漏らしたキリトに対し、シノンは怪訝な面持ちで声を掛ける。が、キリトはそれには答えず思考を続ける。

相手は、腐ったとは言え帝都警備隊すら手を焼く殺人鬼である。ただの学生では、出

会ったらひとたまりも無かつただろう。

「それで、作戦はどうするの？」

「取りあえず今は……」

言いながら、キリトの視線は、通り沿いにある一軒の店舗へと向けられた。

店の前が大きく開かれる形で開店している店内には、多くの本が整然と並べられているのが見える。

「貸本屋？　ここに何が？」

キリトに続いて部屋に入ると、色々な本のタイトルが並んでいるのが見えた。

読書好きなシノンとしては、興味がそそられるところではあるが、

「おお、来たか、キリト。あ、シノンちゃんも一緒か」

奥から顔を出した店員に視線を向けて、驚いた。

「ラバックさん？」

ナイトレイドの一人、ラバックが店の前掛けを装着した状態で立っていた。

どうしてここにラバックがいるのか？

意外な知り合いの意外な登場に困惑するシノンに対し、キリトはニヤリと笑う。

「ここは帝都にあるナイトレイドの拠点の一つだよ。表向きはラバの貸本屋って事にしてあるけど」

「こういう表の稼業を作っておけば色々と便利なんだよ。情報とか集まりやすいしさ」

ナイトレイドのような少数精鋭の部隊は情報に命である。その為、複数の情報収集ルートが確保されている。ここも、その一つだった。

こうしたアンテナ的な拠点を、ナイトレイドはいくつか帝都に持っている。キリトが昼間に接触していた情報屋のアルゴも、そうした手合いである。

「因みに、ここの看板商品は、密かに仕入れているレア物のエロ本だ」

「ちよ、キリト、テメエ!! なにバラしてんだよ!!」

「……………最低」

野郎2人のデリカシー皆無なトークに、シノンは一瞬で軽蔑の眼差しを向ける。

女子の前で、何を言っているのか。少しは場の空気を考えてほしい物である。

「メンバーの半分は顔が知られているからね。情報収集は俺達がやらなくちゃいけないのさ」

「そう言えば、顔が知られているメンバーって誰なの?」

ラバックの言葉を聞き、シノンはふと疑問に思った事を口にした。

殺し屋をしているのだから、指名手配を受ける事自体は不思議な事ではないが、キリトやラバックがこうして、白昼堂々と帝都を歩いている訳だから、彼等が手配されていないのは間違いない。



そんなシノンの肩をキリトが指先でトントンと叩くと、壁際に張られた数枚の紙を指し示す。

そこに張られた4枚の紙には、人相書きと共にそれぞれの名前が書かれていた。

「これ……ナジエンダさんに、シエーレさん？ それにアカメね……」  
誰？」

最後の1枚を見て、シノンは首をかしげた。

鋭さを感じる眼光ながら、整った顔立ち。下ろし髪がよく似合う成人男性だ。

だが、今のメンバーに心当たりは無い。もう殉職したのだろうか？

と、思っていると、

「ああ、そいつはブラートだ。帝国軍時代の顔だつてさ」

「ハッ!？」

キリトの説明に、思わずシノンは度肝を抜かれる思いだった。

ブラートと言えば、あの凄まじく目を引くリーゼントをした、筋骨隆々の大男である。

確かに、目元が似ていると言われればその通りかもしれないが、あまりにもイメージが合わなかった。

この手配書と現在の姿を、連想しろと言う方が無理である。

「ナイトレイドに入ってイメチェンしたんだと」

「いったい、何がどうなれば、『これ』が『あれ』になるのよ……」

壁に手を突いて、がつくりとうなだれるシノン。

まあ、気持ちは痛いほどわかるが。

く一方その頃、アジトではく

「ブエックション!!」

タツミに稽古をつけていたブライトが、盛大なくしゃみをぶちかましていた。

「あ、兄貴、風邪か？」

「フツ まさか」

心配するタツミに、ブライトは不敵に笑って見せる。

「俺の中で燃える熱い魂が、風邪如きに負けるはずがないだろう」

「兄貴ツ……」

熱い男気を見せるブライトに、タツミは目を輝かせて見つめる。

そんなタツミの顎を指でツツと持ち上げ、ブラートは顔を近づける。

「この熱い魂、お前にも教えてやるぞタツミ。手取り足取り、な」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

絶句するタツミ。

対してブラートは、頬を僅かに染めて、いたいけな少年の顔を見詰め続ける。

ナイトレイド最強の男ブラート。

通称《100人斬り》のブラート。

彼には深刻な「ホモ疑惑」の容疑がかけられていた。

もともと真相については、本人が否定も肯定もしない為、深い闇の中に閉ざされているのだが。

「ナジエンダさんとブラートは帝国軍時代に顔が知られているからね。シエーレさんは、ナイトレイドに入る前は、帝都でフリーの殺し屋をやっていたから、その時の情報が帝国軍の方に流れてしまったんだよ」

「ふうん」

ラバックの説明を聞きながら、シノン手配書の中では最年少の少女に目を向けて尋

ねた。

「じゃあ、アカメは？ 任務中に、誰かに顔を見られたとか？」

「いや」

シノンの質問に対し、キリトは首を振った。

「あいつも、元は帝国の関係者だよ。それも、精鋭の暗殺部隊出身さ」

その言葉に、シノンは息を呑んだ。

何となく、会った時から普通ではない気はしていた。

一線を描く、とでも言うべきだろうか？ どこか他のメンバーとは違う雰囲気があるとは思っていたのだが、まさか帝国の暗殺部隊出身だったとは。

シノンと同年代の少女は、しかしどうやら、思っている以上に深い闇の中からやって来たらしい。

「まあ、とにかく中入れよ。仕入れた情報の交換と行こうぜ」

促すラバックに続いて、キリトとシノンも中へと入って行く。

だが、

ふと、キリトは足を止めて、背後の通りを見やる。

間もなく、日が暮れて闇の帳が訪れる。

魑魅魍魎が、牙を剥いて動き出す時間帯だ。

今日もまた、殺人鬼が帝都に現れるとしたら、

「……何としても、早く止めないとな」

眩きは、街の空気に溶けて消えていく。

「ちよつとキリト、何やってんのよ。早く来なさいってば」

「ああ、判つてる。今行くよ」

シノンに呼ばれ、キリトは店の奥へと足を向ける。

後には、逢魔が刻が齎す、不気味な雰囲気だけが、静寂と共に残されていた。

「クツクツクツ  
愉快愉快」

2

夜の闇が、帝都を満たしていく。  
やはりと言うべきか、「首斬りザンク」の恐怖が帝都の中で蔓延し、出歩く人影は殆ど無い。

並んで歩くキリトとシノンの足音だけが、静寂の中に響き渡っていた。  
「まったく……」

シノンは呆れた調子で、横に視線を流しながら呟く。

「わたしの部屋、もうすぐそこだし、護衛なんて良いって言ってるでしょ」

「いや、でもほら、不埒な野郎が現れるかもしれないだろ」

「現在進行形で私の横にね」

キリトの言葉をバツサリと一蹴しつつ、シノンは歩を進める。

数日振りの我が家への帰宅となるのだが、まさかそこまでついて来る気ではないだろう。

いや、無いと信じたいところである。

「ねえ、キリト」

ふと、何かを思い出したように、シノンは静かに口を開いた。

「どうかしたか？」

足を止めて振り返るキリト。

僅かな街頭の明かりが照らし出す横顔は、見れば見る程に線が細く、とても、戦闘に向いているようには見えない。

「あんたは、どうして殺し屋なんてやっているの？」

それは、シノンがずっと気になっていた事だった。

キリトが強いのは、皆から聞いて知っているし、実際、あのアリアの家において対峙した時、シノンの攻撃を全て防いだ事からも察する事ができる。

だが、普段のキリトは、どう見ても普通の少年にしか見えない。

勿論、パツと見て殺し屋には見えないと言う意味では、マインやラバックなど、他のメンバーも似たような物なのだが、シノンの中では、それがどうしても気になっていた。

「……………聞いてどうするんだ？」

ややあつて、キリトは低い声で尋ねた。

「別に……………ただ何となく、気になったから」

「……………」

押し黙るキリト。

沈黙が齎す気まずい雰囲気、シノンも、それ以上口を開く事ができず、キリトを見詰めている。

ややあつて、

「俺は……………」

キリトが口を開いた。

その瞬間だった。



「えッ!?!」

声を上げるシノン。

気付いた瞬間には、少女の体はキリトの腕の中に抱きかかえられていた。

「ちよッ キリト、いきなり……………」

抗議しようとするシノン。

その声を見無視して、

キリトは背中からエリユシデータを抜き放った。

次の瞬間、

ギヤリンッ

闇の中で金属がこすれ合う音と共に、盛大な火花が飛び散った。

「クッ!?!」

キリトはとっさにシノンを抱えて後退。

相手から距離を置きつつ、剣を構える。

対して、

闇の中からゆらりと影を揺らしながら、

そいつは姿を現した。

「クククッ 今のをかわすか。愉快愉快」

大柄な体付きに両腕に仕込んだ剣。そして額には、奇妙な目玉のような装飾が取り付けられている。

キリトは油断なく剣を構えながら、シノンを背に庇うようにして立つ。

「お前が、《首切りザンク》か」

「そう言うそつちも、タダの民間人じゃなさそうだな．．．．．ああ、そうかにやりと笑いながら、ザンクは告げる。

「お前達が、噂のナイトレイドか。顔に見覚えが無いって事は、手配書に書かれていない奴等だな」

「ッ!？」

ザンクの言葉に、思わずキリトは息を呑む。

確かに、自分はまだ顔バレしていない。だからこそ、こうして帝都を堂々と出歩く事もできる。まして、新入りのシノンは尚更だ。

だが、ザンクは一目で自分達の正体を言い当てた。

それはつまり、

「なるほど。それが、その帝具の能力って訳か」

「ピンポーン。正解のご褒美に干し首やろうか？」

ザンクの軽口には付き合わず、キリトは背後のシノンを見やる。

「シノン、君は俺の後ろへ。隙を見て、その弓で掩護してくれ」  
「でもキリト、あいつ……」

シノンはケースからシエキナーを出しながら、緊張の眼差しでザンクを見据える。  
シノンが言いたい事を察し、キリトも領きを返した。

「ああ、判つてる。かなりの強敵だよ」

ただ帝具に頼っているだけではない。先程の一撃は、的確にシノンの首を狙つてきた。キリトの反応が、あと一秒遅かったら、今ごろは確実にシノンの命は無かつた事だろう。

どうやら、劍の腕も相当な手練であるらしかった。

「作戦会議は終わったかな？ うまく連携しないと、俺にすぐ斬られちまうぞ」

ザンクの言葉に、キリトは内心で舌打ちを漏らす。

僅かな考えでも読まれてしまうとは。

「……頼んだぞ」

弓を構えるシノンを背後に見やりながら、キリトは漆黒の劍を片手に前へと出た。

対して、ザンクもまた両手に仕込んだ劍を掲げるようにして構える。

「さあ、行くぞッ」

叫ぶと同時に、ザンクは地を蹴った。

迫る凶刃。

それに対し、キリトも仕掛ける。

やや下段気味に構えていたエリユシデータを、鋭く斬り上げ。ザンクを迎え撃つ。

闇色の刃が、夜の夜の街を斬り裂いて奔る。

そのままザンクを捉えるか？

そう思った次の瞬間、

ザンクはとっさに体をのけぞらせ、キリトの剣を回避した。

「ッ!？」

「クククツ 愉快愉快」

息を呑むキリトに対し、ザンクは口元に余裕の笑みを刻む。

反撃に繰り出される刃を、キリトは後退しつつ回避。更に追撃を掛けようとするザンクに対し、切っ先を突きつける事で牽制する。

だが、

「そう来るのは、見えていたよ」

淀みの無い動きを見せてキリトの行動を見切ると、ザンクは回り込むようにしてキリトの懐へと飛び込んでくる。

「チッ!!」

苛立たしげに舌打ちするキリト。

同時にエリユシデータを横なぎに振るってザンクを迎え撃つ。

「甘い甘い」

しかしザンクは、キリトの斬撃を左の剣で防御。同時に右手の剣を繰り出して斬り掛かってくる。

正規の剣術を習っていた事があるのか、動きは速く意外に正確に急所を突いて来る。

迫る、殺人鬼の刃。

だが、キリトも負けていない。

素早くエリユシデータを返すと、ザンクの攻撃を受け止める。

「そらそら、まだまだ終わらないぞ」

更なる連続攻撃を仕掛けてくるザンク。

それに対して、キリトも更に速度を上げて対応する。

しかし、

「『まづい、押されてる』か？」

「クッ!？」

考えている事を読まれ、キリトはいら立ちを募らせる。

その間にも繰り出される刃を回避、あるいは防御しつつ反撃の一手を模索する。

「『どうやって、こいつの動きを封じよう』か？ それは難しいんじゃないのかね？」

「そうかい、なら……」

キリトは繰り出されたザンクの剣を弾くと同時に、膝をたわめて跳躍に備える。

「試してみるさッ」

跳躍と同時に、視線は僅かに背後を見やる。

「やれッ シノン!!」

合図と同時に、

キリトの背後から出現したシノンが、シエキナーの弦を引き絞る。

同時に、シノンの手元には光の矢が出現した。

これがキリトの作戦だった。

自身の背でシノンが隠れる位置までザンクを誘導。同時に自身が飛び退く事で一瞬の隙を作り出し、そこへシノンが攻撃する。同時に自身が飛び退く事で一瞬

どのみち事前情報で、ザンクが心を読むことは判っている。ならば、キリトが前衛として囿になり、後衛のシノンが仕留めるのが最適パターンであると判断したのだ。

一瞬前までキリトに集中していたザンクは、このパターン変化に対応するのは難しい

筈。

シノンが解き放つ。

飛翔する光矢。

その閃光の如き一撃は、真つ直ぐにザンクを目指す。

対して、

キリトの動きに気を取られ、ザンクは一瞬、この攻撃への対応が遅れた。

「ぐおッ!!」

それでも、無理やり体をねじる事で、辛うじて光矢を回避。

シノンの攻撃は、僅かにザンクの頬を掠める形で飛び去って行った。

「外した!？」

驚愕するシノン。

狙い自体は悪くなかったのだが、ザンクはシノンが矢を放つよりも一瞬早く、スペクテッドの能力でシノンの照準を先読みし、狙った場所を特定して回避して見せたのだ。

シノンの攻撃は、僅かにザンクの頬を抉るだけに留まった。

しかし、

「よくも…….…….やってくれたなア!!」

叫ぶザンク。

予期せぬ攻撃を受けた事で、それまでの余裕が剥がれたのか、形相を歪めてシノンへ斬り掛かって行く。

「ッ!？」

対して、シノンはとっさに第2射を放とうとするが、その時には既に、ザンクは至近にまで迫っていた。

「死ねエ!!」

振りかざされる刃。

だが、その刃がシノンを捉える前に、

舞い降りた漆黒の影が、立ちほだかった。

交錯する刃の光。

次の瞬間、

シノンの視界に鮮血が舞った。

同時に、呻き声が漏れる。

だが、斬られたのはシノンではない。

「キリト!？」

自身の前でよろけるキリトを、シノンはとっさに支える。

その左腕からは、僅かに血が滲んでいるのが見えた。

「キリト、それ」

「大丈夫、掠り傷だ」



キリトはそう言つて強がるが、先制の一撃を貰つてしまった事に変わりは無かった。

「ごめん。私が失敗したから……」

「いや、謝るのは俺の方だ。見通しが甘過ぎた。あいつの実力は、俺が思つていた以上だったよ」

右手に持った剣を構えながら、キリトはザンクを睨みつける。

一方、

「愉快愉快」

キリトに一撃を加えた事で、冷静さを取り戻したららしいザンクは、再び口元に笑みを浮かべている。

「さて、このまま刻んでやつてもいいのだが……」

ザンクの視線が、キリトを睨む。

「ここらで諦める事を勧めろぞ」

「……何？」

ザンクの物言いに對し、キリトは訝るように眉をしかめながら問い返した。

對して、ザンクは口元に残忍な笑みを刻むと、大仰に手を広げながら言う。

「今までの戦いでお互いの実力差が判つただろう」

「……」

「お前じゃ、俺には絶対に勝てない」

確かに。

これまでの戦いは終始、キリトがザンクに押される形で推移している。

スピード、パワーはほぼ互角。剣術に関しては我流のキリトに対し、型に嵌ったザンクが、互いの長所を潰し合うような形で繰り返し出している為、相対的に大差は無い。

そうなることややはり、勝敗を決定づけるのは帝具の差だろう。

スペクテッドの能力によって、キリトの動きを先読みしたザンクが一枚上手を言っている形である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだな」

「キリト?」

ややあつて、呟くように言ったキリトに対し、シノンは不安そうに声を掛ける。

まるで自身の負けを認めるような発言をするキリトに、不安を覚えたのだ。

笑みを強めるザンク。

だが、

顔を上げたキリトの口元にもまた、不敵な笑みが刻まれていた。

「やっぱり、帝具使い相手に、手札を隠したまま勝とうってのが、虫のよすぎる話だったか」

「……………何?」

今度は、ザンクが訝る番だった。キリトの、まるで自分がまだ本気を出していないかのような発言に引つ掛かったのだ。

対して、キリトは右手で構えたエリユシデータを数度、空を切るように振り翳すと、肩に担ぐようにして構えを取る。

「と言う訳で、こっからは本気モードで行かせてもらおうぜ」

「……………戯言、と言う訳でもなさそうだな」

洞視によってキリトの心理を読み取ったザンクは、警戒するように構えを取る。

対して、キリトは肩に担いだエリユシデータを振り翳し、

一気に駆けた。

「何ッ!?!」

その動きに、ザンクは思わず息を呑んだ。

速い。

それまでとはけた違いの速さだ。

鋭い踏み込みから繰り出された振り下ろしが、真っ向からザンクへ迫る。

「ウオオオオ!?!」

とっさに、右手の剣を振り上げて、キリトの斬撃を弾くザンク。

だが、

キリトは弾かれた剣を攻撃ポジションに保持、再びの踏み込みによって、ザンクに追撃の剣を繰り出す。

「ぬおッ!？」

後退して、キリトの剣を回避しようとするザンク。

しかし、とつさの事で回避が追いつかず、胸を僅かに斬り裂かれる。

「お、のれッ!!」

自身が傷付けられた事によって、頭に血が上ったザンクは、両手の剣を掲げて連続攻撃を仕掛ける。

四方八方からキリトへと殺到するザンクの剣。

しかし、

今度はキリトの方が早い。

繰り出される全ての斬撃に対し、漆黒の剣は的確な防御によって迎撃する事に成功する。

「なぜだッ なぜ……こんな、急にッ!？」

キリトの攻撃を必死に回避しながら、ザンクは戸惑いに声を上げた。

先程までは、確かに自分の方が勝っていた。だと言うのに、今は完全に逆転され、追

い込まれようとしている。

一体何が、どうなっているのか？

対して、キリトは冷静に剣を繰り出しながら、ザンクを追い詰めていく。

相手が帝具使いなら、こちらも帝具を使わなければ勝機は無い。

帝具「黒翼魔剣エリユシデータ」

キリトの持つ帝具は、ただの剣ではない。

その昔、始皇帝が友と認め、絶大な信頼を寄せた1人の剣豪がいた。

彼は始皇帝が帝具を造るに当たり、一つの提案を申し出た。

東方に、人の持つ技術を記憶する術を持った鍛冶屋が存在している。その者を招聘し、自らの剣技の全てを帝具と言う形にして残したい、と。

自らを好み、友として認めてくれた始皇帝に対し、剣豪が行った最大限の恩返しであった。

そうして出来上がったのが、エリユシデータである。

この剣の能力は、剣豪が使用した剣術の全てを、使用者が模倣できる点にある。

勿論、完全に使いこなすには、相応の熟練が必要になるのだが。

跳躍と同時に、袈裟懸けに繰り出した剣がザンクに襲い掛かる。

その攻撃を辛うじて自身の剣で防ぎながらも、ザンクの焦りはピークに達しようとしていた。

見えてはいる。

スペクテッドの未来視は完璧に機能し、キリトの動きを完全に先読みできている。

しかし、

見えて居て尚、反応が追いつかない。

つまり、キリトの戦闘能力は、完全にザンクのそれを上回っていると言う事だ。

「クソオツ!!」

繰り出されたキリトの剣を、辛うじて防御しながら後退するザンク。

このままじゃ済まさない。

このままじゃやられない。

「やられて、たまるかア!!」

次の瞬間、

今にもザンクに斬り掛かろうとしていたキリトは、その直前で動きをピタリと止めて

しまった。

「キリト!!」

シノンが呼びかけるも、反応は無い。

まるで信じられない、と言った面持ちでザンクを見詰め続けるキリト。

「そんな………嘘………だろ………」

その瞳には、ありえない者が映っていた。

短い髪を肩のあたりで切りそろえ、寂しげに笑う少女。

突出して美しいと言う訳ではないが、道端に儂く咲く花のような印象がある。

「サチ………」

呆然とたたずみ、剣を降ろすキリト。

その様子を見て、ザンクはニヤリと笑う。

「愉快愉快」

ようやく余裕を取り戻し、ザンクはゆっくりとキリトへ近付いて行く。

それに対し、シノンは慌ててシエキナーを構える。

しかし、シノンの攻撃がザンクに通用しないのは先ほどの戦いで証明されている。シノンにできるのは、せいぜい足止め程度だろう。

「あんだ、キリトに何したのよ!!」

明らかに普通ではないキリトの様子を見ながら、シノンは叫ぶ。

対して、ザンクは余裕ぶった調子で言った。

「スペクテッドの能力の一つ、幻視。こいつは今、自分の中にいる最愛の者を幻で見ているのさ。1度に1人にしか使えないのが難点だが、その効果は絶大。決して逃れる事はできない」

キリトは完全に戦意を喪失した体で、立ち尽くしている。

目はうつろで、何が起こっているのかすら判っていない様子だ。

「キリトツ キリトツ!!」

「無駄だ無駄だ。この効果は外からは絶対に解けないッ 愛する者の幻影を見ながら死

ねエ!!」

剣を振り翳すザンク。

その怪しい輝きがキリトの頭上へと迫り、

次の瞬間、

ガキンツ

キリトが振り上げた剣が、ザンクの攻撃を受け止めていた。

「何イっ!?!」

必殺と思っていた攻撃を受け止められ、驚愕しつつ後退するザンク。



対して、ゆっくりと顔を上げるキリト。

その瞳は鋭く細められ、ザンクを睨みつける。

「なぜだ………」

呻き声を漏らすザンク。

「なぜだッ お前には、愛する者が見えていた筈だッ それなのになぜ!？」

対して、キリトは低い口調で返す。

「……あいつは、もう死んだ。それは、俺が一番よくわかっている。なら、他の物は全部、偽物って訳だ」

キリトはそう言うのと、エリユシデータの切っ先をザンクに向けつつ、弓を引き絞るよ  
うに引くと、逆に左手を大きく前へと突き出す。

「人の心の中に、土足で踏み込んでんじゃねエよ」

ぞつとするほど低い声で放たれたキリトの言葉。

その様に、傍らのシノンは、思わず身震いしたほどだった。

次の瞬間、キリトは地を蹴った。

「は、速いッ!？」

呻くザンク。

先程までとは次元の違う速さだ。

一瞬で間合いを詰めてきたキリトに対し、ザンクはとつさに両手の剣を交差させて防  
御しようとする。

対して、

「ヴォーパルストライク……」

低く呟くキリト。

次の瞬間、真つ直ぐに突きだされる漆黒の刃。

その一撃は、ザンクの剣2本を一瞬で打ち砕き、そのまま殺人鬼の胸部へと叩き込ま  
れた。

「ば、馬鹿な……」

信じられない、と言った面持ちで呟くザンク。

傷口から大量の鮮血が舞い、激痛は一瞬にして殺人鬼の意識を奪い去る。

やがて、ドウツと言う大きな音を立て、ザンクの体は地面へ倒れ伏した。

一方その頃、

戦いの様子を、遥かに離れた場所で見詰める、視線がある事に、キリトたちは気付い  
ていなかった。

「あらら、ザンクのダンナ、やられちゃったよ。だから、あれほど一緒にやろうって言ったのにな」

「仕方が、ない……. . . . .こちらの、要請を、無視したのは、奴だ」

軽い調子で肩をすくめる小男に対し、頭からすっぽりとマントを被った男は、掠れたような途切れ途切れの声で応じる。

彼方で行われたキリト達とザンクの戦いを見ていた2人は、ともに揃って肩を竦める。

彼等の組織は再三にわたってザンクと接触し共闘を持ちかけていた。

しかし、当のザンクはそれを拒否し、あくまで単独での凶行に拘り続けた。

その帰結が、今日の戦いの結果だった。

ザンクは倒され、《首切りザンク》の凶行も、今日を境に終わってしまった。

「行くぞ……. . . . .もう、ここに、用は無い」

「だなー戻ってボスに報告しようぜ。あーあ、それにしても、良い線行っていると思っただけだな、ザンクのダンナ。もっと楽しませてほしかったぜ」

言いながら踵を返す2人。

やがて、

その姿は忽然と消え去り、後にはただ、不気味な風だけが闇に溶けるように流れてい

た。

倒れたザンクの額から、目玉型の装飾を取ると、キリトはふつと息を付いた。

「帝具スペクテッド、ゲット」

小さく眩き、コートのパケットに押し込める。

と、

「ねえ、キリト」

シエキナーを収めたケースを手を持ち、近付いてきたシノンが尋ねた。

「あんた、あの時何が見えていたの？」

ザンクが幻視を使った時、キリトには確かに最愛の人の姿が見えた居た筈だ。

だが、キリトはザンクの術中には嵌らなかつた。

いつたい、何が見えていたのか？

「……………仲間だよ。昔の」

ややあつて、キリトはポツリと言った。

「けど、もういない。それだけだ」

それだけ言うと、キリトはシノンに背を向けて歩き出す。

まるで、それ以上の回答を拒むような背中を、シノンはいつまでも見つめ続けるのだった。

#### 第4話 「首斬りザンク」

終わり

## 第5話「帝国最強」

1

帝都警備隊長オーガは、その高い剣の実力と賊に対する容赦ない態度から《鬼のオーガ》と呼ばれて恐れられる一方、その強さに魅かれて傘下に加わった部下達からは慕われる存在だった。

しかし、裏では油商人のガマルと結託して賄賂を受け取る傍ら、彼が犯した悪事をもみ消す為に、他の無実の人間を罪人に仕立て上げて処刑場に送る、という非道な行為を繰り返していた。

まさに、帝都の持つ闇を凝縮したような存在である。

その豪胆さとは裏腹に、オーガの性格は慎重と称して良い物であった。

普段の警備任務時には多くの部下を引き連れて歩き、任務が無い時は詰所から出る事は殆ど無い。

唯一、非番の日に宮殿付近のメインストリートにある飲み屋で酒を飲む事だけが、彼の唯一の楽しみであった。

その日もたつぷりと酒を飲み、帰ろうとした時だった。

「あの、オーガ様」

「あん？」

声を掛けられて振り返ると、見慣れない少年が愛想笑いを浮かべながら立っていた。顔はフードで隠しているために判別しづらいが、明らかに十代中盤程の少年である。

「誰だ、お前？」

「あの……ぜひ、お耳に入れたい事があるのですが」

フードの下にある少年の目が、僅かに光った気がした。

これに似たような状況に見覚えがあるオーガは鼻を鳴らすと、少年を見やる。

「何だ、言ってみろ？」

「はい……でも、ここじゃちよつと……」

そう言う少年は、チラツと路地裏の方を見やる。要するに、人気のない所で話したいと言う事だった。

オーガにとっては面倒くさい話だったが、立場上、受けない訳にはいかない。

仕方なくついて行くと、人気の無い場所で少年は立ち止った。

「おら、ここなら良いだろ。話せ」

「はい……」

振り返る少年。

そのまま、ガバツと地面に手を突いて頭を下げた。

「お願いしますッ 俺を帝都警備隊に入れてください!! 金を稼いで田舎に送らなく

ちやいけないんです!!」

少年の言葉に、オーガはため息を吐く。

「……ハア やっぱりな。んな事だろうと思つたぜ」

この手の話は珍しくない。この不景気の中で、軍や警備隊は手っ取り早い働き口として人気が高い。何しろ現在は国外からは敵国の侵略があり、国内では反乱軍革命軍やナイトレイドと言つた内憂を抱えている。人手はいくらあつても足りないくらいだ。

だが、志願者は日々増え続けている上、中にはこうして、オーガの行動パターンを調べて直訴に来る者もいる始末。正直、オーガにとってはうんざりするような現状だった。

「正規の手順を踏んで来い、ボケ」



興が冷めた、とばかりにオーガは踵を返す。これ以上話すのは時間の無駄である。街に戻って飲み直そうと思った。

「ですが……………」

少年は俯いたまま、尚も諦めきれない様子で声を上げる。

その体から、何かが立ち上ったような気がした。

「この不景気では倍率が高すぎます」

「……………仕方ねえだろ」

言いながら、オーガは腰の剣に手を伸ばす。

「お前が力不足ってこった」

次の瞬間、

振り向き様に剣を抜き放ち、少年へと斬り掛かる。

だが、

その時には既に、剣を構えた少年はオーガの至近に迫っていた。

「なッ 速い!?!」

少年の動きに、目を見張るオーガ。

オーガは、自らが権力を振るう立場にあり、あらゆる道理を暴力と権力で捻じ曲げてきた。その為いつしか、誰も自分には逆らう事ができない、自分こそが帝都の絶対的な

王であると錯誤するようになっていた。

だが、その傲慢さが、彼の足を掬う形となった。

切り裂かれ、血飛沫と共に地面に倒れ伏すオーガ。

「やったぜッ」

倒れたオーガを確認してから、タツミはフードを取って振り返った。

今回の標的は、この帝都警備隊長オーガと油商人ガマルの暗殺。

依頼主は、オーガとガマルによって無実の罪を着せられて処刑された男の婚約者である。

ガマルの方は比較的簡単である。殆ど警戒と言う物をしていない為、接近も暗殺も容易だった。

しかし、先述した通り、オーガは用心深い性格であり、宮殿近辺から単独で出歩く事は殆ど無い。その為、アカメ達のように顔の知られているメンバーでは任務達成は難しい。

そこで、初陣もかねて、顔の知られていないタツミに白羽の矢が立ったわけである。顔が知られていないと言う意味ではシノンも該当するのだが、彼女の場合はまだ、シエキナーへの習熟も含めて調整中である為、今回の出陣は見送られた。

「よし、後は報告するだけ……」

そこまで言った時だった。

突如、背後から湧き上がる殺気。

タツミはとつさに振り返りながら剣を振るうも、衝撃によつて大きく弾かれて吹き飛ばされる。

「なッ!?!」

目を見張る先。

そこには、傷を負いながらも、執念で立ち上がるオーガの姿があつた。

「俺が……このオーガ様が、テメエみたいなガキに殺られるかよ……」  
絞り出すような声に、思わず背筋が寒くなるタツミ。

「弱者が何を呻こうが関係ねえ……強者が、この街じゃ絶対だ」

言いながら、タツミに斬り掛かるオーガ。

「俺が人を裁くんだよ!! 俺が裁かれて堪るかア!!」

「勝手な事言つてんじゃねえ!!」

タツミは跳躍しながらオーガの攻撃を回避。同時に降下の勢いを上乘せして斬り掛かる。

対して、オーガはタツミの攻撃を剣で受けて弾き、カウンター気味に振り下ろす。

重い一撃。

思わず、タツミは膝をたわませる。

そこでふと、オーガは思い出したように、嫌味な笑みを見せた。

「そうか……お前さては、噂のナイトレイド一味だな」

ナイトレイドの名は帝都中に知れ渡っている。ましてか、警備隊の隊長ならば、その存在に行き付かない筈が無かった。

「いったい誰の依頼だ？ 心当たりは山ほどあるが……最近だと、この間殺った奴の婚約者か？」

「ッ!？」

凶星を突かれ、思わず浮かんだ焦りを顔に出してしまふタツミ。

そのタツミの顔を見て、オーガは笑みを強める。

「当たりかア……やっぱ、あの女も殺っておけば良かったな……いや、待てよ、今からでも遅くは無いか」

言いながら、オーガはタツミに剣を押し付けるように、更に腕に力を込める。

「まず、あの女を探しだし、奴の親兄弟を重罪人に仕立て上げて、女の目の前で皆殺しにしてやる」

まさに悪魔、

否、外道の発想だった。

人間がどれだけ醜悪になれるか、と言う典型的な見本が目の前にあった。

「まずは、その前にテメエが死ねェ!!」

更に力を加えるオーガ。そのまま押し切るつもりなのだ。

だが、

タツミはオーガの言葉を聞き、

心は怒りに燃えながらも、頭の中は奇妙なほどに冷え切っていた。

要するに、こいつらはみんな同じだ。手に入れた権力を振り翳し、ただ理不尽に行使する事しか頭に無い。

タツミにとつて、こんなクズを生かしておく理由は、世界の果てまで探しても見つかりそうになかった。

次の瞬間、

オーガは急に、自分の腕が軽くなった事に気付く。

そして、驚愕した。

腕が、無い。

オーガの両腕は二本とも、肘の上、上腕の中央辺りから斬られて宙を舞っていた。

そして、斬ったタツミは上方に跳躍しつつ、鋭い目でオーガを睨みつける。

その視線に、

鬼と呼ばれたオーガは、ゾクツと寒気を感じる。

それ程までに、タツミが発する殺気は凄惨で研ぎ澄まされていた。繰り出される刃。

抵抗する術を奪われたオーガは、そのままタツミの剣によって斬られて地面へと転がった。

倒れ伏したオーガ。

今度こそ、完全に息絶えていた。

それを確認してから、剣を収めるタツミ。

その時、

「お見事」

発せられた声に振り返ると、闇の中からじみ出るように、漆黒のロングコートを羽織り、背中に剣を負った少年が歩み出てきた。

「キリト、どうしてここに？」

突然の仲間の出現に、驚くタツミ。

それに対し、キリトは肩をすくめて見せる。

「仕事の見届けと、万が一の時の保険だよ」

キリトの言葉に、タツミは僅かに眉を顰める。

万が一、と言う事はつまり、タツミがしくじって返り討ちにあった場合、控えていたキリトがオーガを討つ手はずだったと言う事だ。

作戦は初めから二段構えだったと言う事だ。

「やっぱり俺って、まだ信頼されてないのか？」

落ち込むタツミ。

保険が付けられていたと言う事は、つまり皆がタツミが失敗する可能性があったと思っていたと言う事に他ならない。

しかし、そんなタツミの肩を、キリトはポンと叩く。

「そう言うなって、初めはみんなそんなもんだよ。俺達の仕事は失敗が許されないからな。因みに、俺の時はブラートが保険に付いたよ」

「え、そうだったの？」

自分だけが特別だったわけじゃないと知り、ホツとするタツミ。

そこでふと、ある事に思い至り、キリトに尋ねる。

「あのさ、兄貴が保険に付いて……その、大丈夫だったのか？」

「……言うな。頼むから言わないでくれ」

嫌な記憶を掘り起こされ、キリトは頭を抱える。

ブラートの冗談とも本気ともつかないホモ言動に振り回されていると言う意味では、

タツミとキリトは、ある種の「同志」であると言えない事も無かった。

## 2

帝国北部に勢力圏を構える北方異民族の存在は、現状の帝国にとつて、最も警戒すべき要因である。

《北の勇者》ヌマ・セイカ王子に率いられた軍勢は、猛吹雪を踏み砕く勢いで帝国との国境線を侵犯、既にいくつもの辺境領が陥落し、帝国の国土は異民族によつて蹂躪されていた。

勿論、この憂慮すべき事態に、帝国政府も手をこまねいている訳ではない。

既に討伐軍を組織し、この国難に対処しようと試みている。

しかし北方異民族軍の戦闘力は凄まじく、また極寒の地における戦闘は彼等の得意とする所であり、送り込んだ討伐軍は悉く撃退され、雪原の上に無様な屍をさらすに至つた。

帝国は苦虫を噛み潰し、北方異民族は凱歌を高らかに上げる。



そんな中、ついに帝国軍は重い腰を上げた。

中途半端な戦力では、何度送つても返り討ちに会うだけである。

そこで、ついに最強戦力の投入が決定されたのだ。

帝国軍内における最強戦力は2つ。

一つはブドー大將軍率いる近衛軍。

自身も帝具を持ち、武人として高い実力を誇る一方、戦略家としても絶大なブドーが率いる近衛軍は、正に最強の名にふさわしく、周辺各国の軍も含めて、この部隊に対抗できる軍は存在しないとさえ言われている。

しかし、同時に近衛軍は、有事の際には帝都と皇帝を守る最後の盾となる。その為、おいそれと動かして良い戦力ではない。

そこで、今回はもう一方の最強部隊が討伐隊の中心となった。

その女の姿を見た者は、敵であるなら震え上がり、味方であるなら奮い立つ事だろう。美しい女である。

長い髪にスラリとした手足。一切の無駄を排しながらも、女性の象徴たる胸は、大きく張り出しているのが服の上からでもわかる。

怜悯ながら整った顔立ちは、まるで戦女神を連想させる。

だが、そんな要素は、女を構成する上で、ほんの些事に過ぎない事はすぐに判る。

全身から発散される気配が尋常ではない。まるで、ただ目の前に立つだけでも、首を絞められているかのような錯覚に捕らわれてしまう。

鋭い眼光は、ただそれだけで全てを焼き尽くすかのようだ。

人の姿こそ取っているが、女が危険種よりも危険な存在である事は間違いなかった。

帝国軍将軍エスデス。

彼女こそがブドー大將軍と並んで、帝国の双璧と謳われる最強の存在である。

エスデス隊は、数こそ近衛軍に劣るものの、その戦闘実力においては全くの互角とさえ言われる精鋭中の精鋭部隊である。

また、先述した通り、帝都近郊の守りを主任務とする近衛軍に対し、エスデス隊の方は自由に動かせる機動戦力として重宝され、紛争が発生した各戦線に投入されるのが常だった。

そのような酷使をされれば、通常の軍隊であれば疲労と士気の低下が目立ち始める所であろう。

だが、エスデス隊に限っては、その常識は当てはまらない。

まず、指揮官であるエスデス自身が何よりも戦を好み、常に戦い続ける事を喜びとし

ている上、彼女に鍛え上げられた精強な軍隊は、指揮官を慕い、疲れ知らずの戦いぶりを見せていた。

「ふむ、成程。なかなか動きではあるな」

双眼鏡も使わずに敵軍の様子を観察していたエスデスは、納得したように頷く。

雪原の先には、部隊の展開を終えて待ち構える北方異民族軍の姿があり、さらにそのこうほうには、北方異民族が誇る巨大な要塞都市が控えている。

数においては帝国軍7万に対し、異民族軍12万と異民族軍が勝っている。

帝国軍は、最大限動員すれば、40万近い兵力を送り込む事ができるのだが、今は南方の反乱軍や、多方面の異民族への防備強化、更には国内の野党などに対する備えも必要である為、これが精いっぱい数字だった。

異民族軍の作戦は、帝国軍が雪で足を取られている隙に自分達の得意分野である雪原上の機動戦に持ち込み、帝国軍の陣形を突き崩す、と言う物だ。

万が一、帝国軍が力攻めをして来たら、即座に要塞内部へと全軍を收容し、籠城する構えなのだろう。

もつとも、異民族軍はこれまで連戦連勝である為、後者の可能性は限りなく低いと考えている節があるが。

「たしかに、あの要塞に逃げ込まれたら、厄介ですな。単純な力攻めでは損害が増すばか

りでしょう」

言ったのは、エスデスの背後に控えている3人の男の内の一入だった。

三獣士と呼ばれるこの3人は、エスデスの側近中の側近であり、3人とも帝具使いとして優れた武人でもある。

今、発言した壮年の男はリヴァ。

元は南方戦線で活躍した將軍だったが、現大臣オネストに賄賂を贈らなかつた事で無実の罪を着せられ、処刑されそうになった所をエスデスに救われた過去がある。

以来、三獣士の筆頭としてエスデスに忠誠を誓い、事実上、エスデス軍副將の立場にある。

「でも、それは普通にやつた場合だよね」

「俺等に掛かれば、あの程度の連中、ゴミクズみたいなもんさ」

三獣士の残る2人、子供のような外見の男と、熊のように大柄な男も意気込んで言い放つ。

子供のような外見の人物はニヤウ。まだあどけない外見の人物ではあるが、残虐さと言う意味では他の2人よりも抜きん出ている。

大柄の男はダイダラ。こちらは単純な脳筋男であり、戦う際も力任せの攻撃が多いが、それだけに単純明快な強さを誇っている。

「・・・・・・・・・・できれば、あいつ等にも、今回の戦いに参戦してもらいたかったところだがな」

「あいつらと言いますと・・・・・・・・ああ、成程」

主の言わんとしている事を察し、リヴァは頷きを返す。

エスデスの脳裏には今、ある一軍の姿が思い浮かべられていた。

帝国最強と言えばエスデス軍とブドー大將軍直屬の近衛軍だが、その近衛軍の中にも、特に精銳と呼ばれる一団がある。

リーダーにはブドーが絶大な信頼を寄せる將軍が就任し、近衛軍の中でも特に精銳が集められている。

既にいくつかの戦いにも参戦している彼等は、期待に違わぬ力を發揮し、味方を勝利に導いていた。

強者を好むエスデスとしては、ひじょうに興味のそそられる存在である事は間違いない。

今回の戦いには、彼等にも参陣してもらいたいところだった。

無論、これはエスデスの弱気から出た発言ではない。そもそも彼女に「弱気」などと言ふ要素は皆無以下である。

エスデスは単純に、噂の精銳部隊の実力を見てみたいと思っていたのだ。

「残念ながら、今回の戦いに、彼等の参陣は無かったのだが。」

「仕方がないさ……」

言つてから、エスデスは僅かに視線を巡らせる。

「その代り、お前には働いてもらうぞ」

三獣士たちの背後で、膝を抱えるようにして座っている人物に声を掛ける。

先日、異民族兵達に襲われているところをエスデスが拾った旅人だが、今は帝国へ入国する事を条件に、客員将軍としてエスデスに協力している。

エスデスとしては、異民族兵数名を1人で難なく蹴散らして見せた腕前に興味があつて、手元に置いてみたのだつた。

エスデスの言葉に対し、相手が頷きを返した時だつた。

「伝令!!」

馬に乗った兵士が、本陣へ駆け込んで来た。

「敵軍に動き有りッ 我が方へ向けて進軍を開始しました!!」

その報告に、エスデスは口の端を吊り上げて笑みを浮かべる。

「いよいよ、決戦の始まりである。」

「さて、では行くぞ」

立ち上がり、エスデスは三獣士を従えて歩き出す。

これより先は、彼女にとって最も至高の快樂を得る事の出来る舞台。

エスデスと言う女は、戦場においてこそ最も輝きを放つ大輪の花であると言えた。

勿論、美しい花には棘があるように、彼女が咲き誇る場所には、常に血風が絶えず吹き荒れていた。

一方、進軍を開始した北方異民族軍の先頭に立つ、《北の勇者》ことヌマ・セイカは、展開する帝国軍の様子を冷静な眼差しで眺めていた。

「なるほど。流石は音に聞こえた、帝国軍最強部隊。動きに無駄が無いな」

放つ言葉に氣負った様子は無い。いたって冷静に、ヌマ・セイカは帝国軍の様子を観察している。

今度の敵は、今までのような二線級の部隊ではない。紛れも無く帝国の主力軍だ。

だが、恐れる事は無い。向こうが精鋭なら、こちらも精鋭。しかもこちらは、極寒の地における実戦経験が豊富にあり、数においても勝っている。

負ける要素は全く無かった。

「エスデス如き、何するもので、ですな殿下」

「我らの武勇を持つてすれば、帝国を滅ぼす日も近いでしょう」

傍らに控えた2人の男が、勇ましい言葉をヌマ・セイカに掛ける。

手に槍を持った細身の男は、コオルド。

大剣を持った巨漢の男はアバランチ。

いずれも、ヌマ・セイカが絶大な信頼を置く将であり、これまでの戦いにおいて共に戦ってきた仲間達である。

自分達は勝つ。

勝つて同胞たちの新たな世界を切り開くのだ。

自分達ならそれができると、ヌマ・セイカを始め、異民族軍の誰もが堅く信じていた。

「よし、全軍、突撃開始!!」

ヌマ・セイカの号令を受け、突撃を開始する異民族軍。

真つ白な雪原の上を、怒濤の如く駆け抜けていく。

目指すは帝国軍本陣。

狙うは敵将エスデスの首一つ。

帝国軍を一気に粉碎すべく、異民族軍突撃していく。

程無く、剣戟がぶつかりあう、けたたましい音が聞こえてきた。

両軍の激突が始まったのだ。

「戦況はどうなっている?」



「ハツ 現在、一進一退の攻防が続いており、双方ともこういう着状態が続いております」  
兵士からの報告を受けて、コオールドは顎に手を当てて考え込んだ。

「意外に粘りますな。流石は帝国軍最強部隊と言ったところでしょうか。今までの連中なら、たいていは一当てすれば綻びが見え始めていたのですが」

相手は雪原に不慣れな帝国軍。雪の上にある限り、自分達の方が圧倒的に有利だと思っただが。

「ですが、程なく戦況は我が方に傾く事でしょう。殿下、今しばらくのご猶予を」

「うむ。皆には苦勞を掛けるが、ここが踏ん張りどころだ。頼むぞ」

アバランチに領きを返しながら、ヌマ・セイカは曇りの無い瞳で最前線を眺め渡す。

確かに敵は強い。

だが、自分達は北の異民族全ての希望と未来を背負って戦っている。

決して負けるはずが無かった。

その時だった、

「で、で、伝令!!」

慌てた調子で駆け込んで来た兵士の姿に、思わず誰もが目を疑った。

その兵士は全身に傷を負い、流れ出た血によって雪原を濡らしている。

まさに、息も絶え絶えと言った有様で、ようやくたどり着いた感じだ。

「ど、どうしたのだッ その姿は一体?!」

仰天して尋ねるコオルドに対し、兵士は崩れ落ちそうな体を必死に支えながら顔を上げる。

「右翼部隊、壊滅ッ 敵軍は凄まじい攻撃力を持っています!!」

動揺が走る。

馬鹿な!?

今まで多くの帝国軍を撃破してきた自分達が破られるとは。

否、それ以前に、あまりにも早すぎる。戦闘開始からわずか数刻で部隊が壊滅状態に陥るとは。

常識では考えられない。

更に、悲報は続く。

「申し上げます!! 左翼部隊、損害大に付き、全軍潰走状態に陥りつつありますッ 至急、増援を乞うとの事!!」

「馬鹿なッ いったい何が起きているのだ!?!」

常勝無敗を誇り、数々の敵を蹴散らしてきた精強な軍隊が、あつという間に壊滅させられていく。

まさに、悪夢のような光景だった。

帝国軍右翼を受け持つダイダラは、全軍の先頭に立つて、巨大な斧を振り翳していた。「行くぞッ 俺に続け!!」

豪快に言い放つと同時に、突撃。

立ち尽くす事しかできないでいる異民族兵達を、次々と斧で薙ぎ払っていく。

その豪快な突撃は、まるでダイダラ自身が1発の砲弾であるかのようだ。

「そら、まだまだア!!」

ダイダラは更に、斧を中心に2つに分離すると、片方を勢いよく投げつける。

旋回しながら飛翔する斧。

その凶悪な刃は、次々と異民族兵を斬り裂き、なぎ倒していく。

帝具《二挺大斧ベルヴァーグ》

通常は巨大な両刃斧としての形状をしており、接近戦時に強力な攻撃力を発揮する一方、分離して投げつけければ、勢いを失わない限り標的を追尾しつづける特性を持つ。

ダイダラに続いて突撃を開始する帝国軍。

その勢いに、異民族軍は完全に圧倒されていた。

一方、左翼の指揮を取るニヤウは、口元に当てた縦笛を吹き鳴らしながら、ゆつくりと戦場を歩いている。

一見すると優雅な光景。

しかし、その音色を聞いた異民族兵士達は、次々と武器を地面に落とし、膝を屈していく。

《軍楽夢想スクリーム》

縦笛型の帝具は、その音色を奏でる事によつて、相手の気力を奪い、士気を挫く能力がある。

音色を聞いた異民族の兵士達は、次々と地面に倒れていく。

やがて、ニヤウが演奏を止めた時、見渡す限り、起きている異民族兵士は一人も存在しなかった。

「これで良しつと、さあ、さっさと片付けちゃつて。まだ後がつかえてるからね」

ニヤウの合図を受けて、帝国軍兵士達は一斉に突撃。倒れている異民族兵達を、次々と血祭りに上げていく。

戦意を失い、動く事すらできない兵士を狩り尽くす事など、赤子の手を捻るよりも簡単な事だった。

「今だ。左右両翼は崩れたッ 全軍、突撃せよ!!」

中央で戦況を見守っていたリヴァアが、鋭く手を振り下ろす。

それを受けて、待機していた帝国軍中央本隊が突撃を開始する。

元將軍であり、南方戦線で活躍したリヴァアの指揮能力は、エスデスにも匹敵するものがある。それ故、中央軍の指揮を委ねられているのだ。

そのリヴァアの右手の中指には、奇妙な形の指輪が光っている。

《水龍憑依ブラックマリリン》

使用者が触れた事がある水ならば、如何様にも操る事ができる。

リヴァア自身、帝具使いとして高い能力を有しているが、今は大部隊同士の会戦の真っ最中である。

前線の方はダイダラ、ニヤウの同僚2人に任せ、リヴァア自身は一戦士として戦うよりも指揮官としての立場を優先していた。

整然と陣形を整えて突撃していく帝国軍に対し、異民族軍の方は明らかに動揺と焦りが見え始めている。

既に戦況が自分達にとって不利になりつつある事が伝わっているのだ。

やがて、左右両翼を壊滅させたダイダラ隊、ニヤウ隊も左右から襲い掛かるに至り、ついに異民族軍の戦線は崩壊し始めた。

「馬鹿な……こんなはずでは……」

呆然と呟くヌマ・セイカ。

彼の同胞が、

精強無敵を誇った軍隊が、

今まさに、目の前で壊滅して行こうとしている。

リヴァ、ダイダラ、ニヤウと言う三獣士を筆頭とし、更にエスデス自らが徹底的に鍛え上げたエスデス隊の戦闘力は凄まじく、たかだかいくつかの地方軍を破った程度で意気を上げていた北方異民族軍は、瞬く間に打ち砕かれていった。

「で、殿下ッ このままでは!!」

「どうか、御指示を!!」

コオルドとアバランチが、焦った様子でヌマ・セイカを見やってくる。

彼等もまさかの事態に、焦りを禁じ得ないのだ。

ヌマ・セイカは決断する。

このままでは、全滅するのも時間の問題だ。そうなる前に、何とか体勢を立て直さないと。

「全軍、一時撤退ッ!! 要塞内部にこもり、籠城戦に備えろ!!」

要塞内に入れば、帝国軍と言えども簡単には手出しできなくなる。その間に部隊を再編するのだ。

長い距離を進軍してきた帝国軍は兵站にも無理がある。長期間の対陣には耐えられない筈。

時間さえかければ、北方異民族軍の勝利は動かなかった。

「行くぞコオルド!! アバランチ!! 味方が逃げる時間を稼ぐ!!」

「ハッ」

「了解であります!!」

そう言うとなママ・セイカは、愛用の槍を構え、側近2人と共に戦場へと飛び出して行った。

ヌマ・セイカの指示は直ちに全軍に通達され、北方異民族軍は、反撃を行いつつ後退を開始する。

流石の帝国軍も、雪の中で自在に動ける北方異民族軍を追うのは容易な事ではない。更にヌマ・セイカ直率の部隊が殿軍に立ち、帝国軍の追撃を断ちきりに掛かっている。

流石は《北の勇者》と言うべきか、並みの兵士程度では相手にならず、帝国軍の足も鈍り始めていた。

既に北方異民族軍の兵士達は、全体の6割強が要塞内部へと収容されつつある。

要塞内部に入ってしまったえば、如何に帝国軍と言えども感嘆には手出しできない筈。

「みんな、もう少しだッ もう少しだけ頑張ってくれ!!」

ヌマ・セイカの鼓舞を受けて、なえ掛けしていた士気が、辛うじて保たれる。

そうだ、いかに戦況が不利な状況であっても、自分達には王子がいる。

《北の勇者》ヌマ・セイカがいる限り、自分達が負ける事は決してない筈だ。

その頃、

帝国軍の後方で戦況を見守っていたエスデスは、口元に酷薄な笑みを浮かべていた。

「そろそろ頃合、と言ったところか」

状況はエスデスの思い描いた通りに進んでいる。

彼女には見えていた、全て。

初戦の戦鬪で、自軍が異民族軍を撃破する事も。

危機に陥った敵が、要塞内部へ逃げ込む事も。



そして、ここからが総仕上げだった。

「ここまで予定通りだと、拍子抜け過ぎて詰まらんな」

ため息交じりに呟くと、目を閉じて腕を交差させる。

意識を集中させ、己の中に「ある物」を、存分に解放させる。

高まる闘気。

張りつめる存在感。

極寒の吹雪を圧して、なお勢力を弱める事の無い圧倒的な凍気。

次の瞬間、

エスデスは目を見開く。

「全てが凍れ」

眩きと共に、解き放たれる。

次の瞬間、

現出した光景は圧倒的という言葉ですら、生ぬるいと思える程に全てを超越していた。

彼方に見える北方異民族の要塞。

多くの兵士が逃げ込んだ要塞が、

一瞬にして巨大な氷に覆われてしまったのだ。

その中にいた兵士ごと。

その光景に、誰もが息を呑む。

一瞬、

僅か一瞬にして、何万と言う兵士達が氷漬けの処刑に施されたのだ。

これこそがエスデスの能力。

帝具《魔神顕現デモンズエクス》をその身に宿した、氷の女の能力である。

北方に生息したと言う超級危険種の生血をそのまま帝具にしたデモンズエクスは、飲んだ者に氷を操る能力を与える一方、適合しなければ精神が食いつぶされて発狂すると言っている。

本来であればグラス一杯飲むだけでいいところを、エスデスはその生血を甕一杯飲み干し、帝具を完全に自分の支配下に置いている。その為、彼女の能力は想像を絶していると言って良かった。

たった今、都市一つを氷漬けにして何万と言う人間を虐殺したエスデスだったが、それでも尚、余裕を残している。

そして、

「さて、行くぞで」

たった今何万人と言う人間の命を屠り尽くした女は、しかし、それが何でもない事の

ように言うと、旅人の少年を伴って歩き出した。

「馬鹿な……」

ヌマ・セイカには、目の前の光景が信じられなかった。

彼の仲間達が、

何万と言う兵士達が、

僅か一瞬にして分厚い氷に飲み込まれ、恐らくは何が起きたのかすら理解できないまま死んでしまったのだ。

理解が追いつかない。

こんな事が、果たして本当に可能だと言うのか？

戦いは、終結に向かいつつある。

要塞を氷漬けにされたと言う事は、何万もの兵士を一瞬で失うと同時に、残った兵士達も退路を失う事を意味していた。

要塞に逃げ込む事ができず、追いつかれた異民族兵士達は、意気上がる帝国軍に蹂躪され、次々と討ち取られていく。

精強を誇った北方異民族軍は、今まさに壊滅しつつあった。

「殿下、このままでは殿下の御身も危なのうございますッ　ここは一度戦場を落ち延び、捲土重来を図るべきです!!」

コオルドがそう告げた時だった。

雪を踏む音がすぐそばから聞こえて振り返る。

そこには、凶悪な眼つきをした美女が、口元に笑みを浮かべて立っていた。

「お前が《北の勇者》か。何とも名前負けした物だな」

エスデスはヌマ・セイカを小馬鹿にした口調で言い捨てる。

実際、彼の軍隊は僅か数時間の戦闘でエスデス軍に粉碎され、見る影も無くなってしまっていた。

戦場を好むエスデスからすれば、拍子抜けも良い所である。

「おのれ……………」

悔しさに、手にした槍を強く握りしめるヌマ・セイカ。

そのヌマ・セイカに対し、エスデスは勝ち誇ったように告げる。

「どうだ、ここらで一発逆転のチャンスに賭けて見ないか？」

「……………何？」

訝るヌマ・セイカに対し、エスデスは無防備にも両手を広げて見せる。

「槍が自慢なんだろ。どうだ、私の首を狙ってみろ。見事に討ち取る事ができればお前

の勝ち。この状況を覆せるぞ?」

つまり、大将同士の一騎打ちと言う事だ。

その言葉に、

「おのれ、女ギツネ!!」

「そこに直れッ 貴様を殺して、死体を危険種のエサとしてくれる!!」

それぞれの武器を振り翳し、コオルドとアバランチが斬り掛かる。

槍と大剣が、立ち尽くすエスデスへと襲い掛かる。

次の瞬間、

旅装束の外套を跳ね上げ、少年が躍り出る。

その下から現れた、癖のある跳ね気味の髪と、少しあどけなさの残る表情が、幼い印象を見る者へ与える。

しかし、

その鋭い眼差しからは一切の感情が排され、まるで氷のような印象さえ受ける。

「エスデスが相手すると言ったのは、お前達の大將だけだ。雑魚は黙れ」

低い呟き。

次の瞬間、凄まじい速度で抜き放たれた刀が、一瞬にしてコオルドとアバランチを斬り捨てた。

着地する少年。

それに対して、エスデスは笑みを向ける。

「相変わらず見事な腕だな、トキハ」

「.....」

声を掛けるエスデスに対し、無言のまま領きを返すトキハと呼ばれた少年。

その様に、

「おのれエエエエエエエエエエ!!」

側近を一瞬にして殺されたヌマ・セイカは、槍を掲げてエスデスへと斬り掛かる。

鋭い突き込みは、全てを粉碎するような勢いで繰り出される。

《北の勇者》《常勝無敗》の呼び名は伊達ではない。

槍を持ったヌマ・セイカに敵う者など、誰もいないのだ。

次の瞬間、

一瞬にして粉碎された。

ヌマ・セイカの槍が。

そして、彼もまた、エスデスの剣に斬られて鮮血を舞わせる。

「ん？ 今、何かしたか？ よく判らなかつた。すまんがもう一回頼む」

対して、当のエスデスと言えば、ヌマ・セイカの攻撃など眼中に無かつたかのよう

に、笑みを浮かべながら振り返る。

一瞬と言う言葉すら遠い。

刹那と言う言葉すら生ぬるい。

勝負になるどころか、エスデスにとってはマバタキする間すら必要無かった。

「ば、馬鹿な………」

雪原に膝を突くヌマ・セイカ。

常勝無敗の自分の槍が、この《北の勇者》が、

子ども扱いすらされないとは………

《帝国最強》

その言葉が持つ意味は、ヌマ・セイカには想像すらできない程だった。

その時、

座り込むヌマ・セイカの耳に、折り重なるような悲鳴が聞こえてきた。

顔を上げるヌマ・セイカ。

そこには、帝国軍の兵士達に蹂躪される、異民族軍の兵士達の姿があった。

槍で貫かれ、銃で撃たれ、あるいは剣で斬られ、ヌマ・セイカが恃みにしてきた仲間

達が、次々と殺されていく。

正に、悪夢のような光景だった。

「や、やめろ……」

震える声で紡ぐ言葉は、しかし降りしきる吹雪にかき消されて消えていく。

その間にも、無力と化した味方が、一方的に殺されていく。

「やめろオオオ!! やめてくれエエエエエ!!」

叫ぶヌマ・セイカ。

だが、もはや彼には何もできない。

軍勢を失い、彼自身も敗れ去った今、ヌマ・セイカにできる事は、こうして座り込み、

泣き叫ぶだけだった。

その首元に、エスデスは剣を押し付ける。

「降伏しろ。跪いて犬になれ」

呆然とするヌマ・セイカに、エスデスは酷薄に告げる。

「そうすれば、私の気分次第で残る連中は、あるいは助かるかもしれんぞ」

見上げるヌマ・セイカ。

そこには、人の形をした絶望が、そびえ立っていた。



白地に赤い十字架が染め抜かれた旗が揺らめくその建物には、他には無い活気によって満ち溢れていた。

ブドー大將軍指揮下にある近衛軍の中にあつて、特に精銳中の精銳達によつて構成された部隊は、規模こそ小さい物の、少数精銳の機動部隊として多くの戦いに参陣し活躍していた。

リーダーはブドーが右腕とも頼む人物であり、その高い実力と冷静沈着な頭脳は、誰もが認め、信頼を寄せる所であつた。

「団長」

その執務室に、1人の少女が報告書を携えて入って来た。

「たった今、北方戦線に同行していた密偵から報告が上がりました。エスデス將軍が北の異民族軍を撃破。《北の勇者》ヌマ・セイカを捕えたとの事です」

「……………そうか」

報告に対して団長と呼ばれた男は、書類から顔を上げて領きを返す。

「この事、ブドー閣下には？」

「既に連絡の兵を走らせています。程無く、お耳に入る事かと」

少女の報告は的確であり、更に仕事も早い。ひじょうに頼れる存在であった。

団長と呼ばれた男性は、報告を聞いて考え込む。

味方の勝利は、確かに喜ばしい事である。これで、帝国は最大の脅威を一つ、取り除いた事になるのだ。

しかし、

「これから、帝都近郊が騒がしくなるな」

「はい」

領きを返す少女に対し、団長は顔を上げる。

「これからも宜しく頼むぞ」

「アスナ君」  
厳かな声で告げた。

## 第6話「狙撃手」

1

帝都宮殿内。

至高の存在である皇帝の住まう場所であり、帝国における政治、軍事、情報の中心となっているこの場所は、世界中のあらゆる美を凝縮したような、荘厳美によって埋め尽くされている。

その中を覗き見た者は、あまりの美しさに、思わず目眩がする程だった。

帝国で並ぶ存在の無い程の美しさを誇る宮殿。

しかし、その内部は、腐臭がするほど醜い空気によって満たされていた。

そしてこの日もまた、腐れた魂に飲み込まれた犠牲者が、闇へと落ちて行くこうとしていた。

「内政官シヨウイ。予の政策に口を出し、政務を遅らせた咎により、貴様を牛裂き刑に処す」

幼く、あどけなさの残る声は、しかし、その言葉の意味すら分からぬまま、極限の残酷さを貫く。

幼いからこそ、却って不気味な感すらあつた。

極刑を告げられた男は、その言葉を前にして絶望感を募らせる。

男の名は、国内における政務を司る内政官の地位にある男で、名はシヨウイ。

実直な性格で、また正義感も強く、多くの部下達から慕われる存在である。

革命軍と反乱軍と言う大きな内憂を抱えながらも、帝国の国政機能が異常なく動いているのは、このシヨウイの手腕によるところが大きい。

だが、そんなシヨウイに、極刑の沙汰が下されていた。

そして、シヨウイに極刑を言い渡したのは、彼が至高の存在として仰ぎ、最高の忠誠を示し続けてきた皇帝に他ならない。

玉座に座し、まるでゴミでも見つめるような目でシヨウイを見る皇帝は、今だ10歳程度の少年に過ぎない。

しかし、彼こそが、この国における最大の権力者であり、言葉一つで国民を死に追いやる事も可能な存在である事は間違いないかった。

シヨウイは先日、皇帝に対し自身の信念でもって直言を行った。

現在の、大臣偏重の政治体制を改め、より広く人材の登用を行うと同時に、民に対する負担を減らすために大幅な減税を行い、国としての在り方を改めるべきだ、と。

この主張は傍から見ても当然の事である。

今の帝国の政治は末期的な状況にある。

一部の者達の特権を有して暴利をむさぼり肥え太る一方、地方の民は重税に次ぐ重税で瘦せ衰え、餓死者まで出る始末。

何より許されないのは、帝国上層部に、その事を憂慮する人間がほとんどいないと言う事実だった。

国政を壟断する大臣は勿論の事、彼の息のかかった官僚たちも皆、飢える民の事など見向きすらしようとしぬい。

中には「地方の民など何の役にも立たないクズばかり。せめて我々の為に奉仕して死ぬるのだから誇りに思うべき」と言う事を公然と言っている者までいる。

大臣派ではない政治家たちも皆、大臣の威光を恐れて口を閉ざしている。

そんな中、ただ一人声を上げたのがシヨウイだった。

彼は心の底から民を想い、また皇帝に対する溢れ出る忠誠心故に行動を起こしたのだ。

このまま民の心が帝国から離れ続ければ、いずれ取り返しのつかない事になる。帝国は屋台骨から崩れ落ち、ひいては皇帝の身すら危うくしかねない。

そうなる前に、誰かが勇気を持って行動を起こさなくてはならないのだ。

出仕する前、シヨウイは彼の妻に言った。

皇帝陛下はまだ幼いが、こちらが真摯な気持ちで申し上げれば必ず判つてくださる。

今は、誰かが勇気を持って行動を起こさなくてはならないのだ、と。

だが、彼の勇気ある行動は、最低最悪の形で報われる事となつた。

牛裂き刑とは、その名の通り、罪人の四肢をそれぞれ紐で縛り、その紐の両端を牛にくくり付け、四方へ一斉に引かせるのだ。

牛は歩みが遅いため、初めはゆっくりと進んで行く。

しかし、やがて限界に達した紐はピンと張りつめ、徐々に罪人の体を引っ張り始める。勿論、人間一人の力が牛四頭に敵う筈も無く、如何に抵抗しようとも牛の歩みは止まらない。

やがて激痛と共に、体は引き裂かれていき絶命に至ると言う訳だ。

牛の歩みの遅さと相まって、身体が引き裂かれる激痛と恐怖が罪人を長く苦しめる事から、最も残酷な処刑方法の一つでもある。

臣下の最大限の忠誠に対する、それが皇帝の下した回答であつた。

「これで良いのであろう、大臣？」

問いかける皇帝に対して、

「それ」は玉座の陰から、ヌツと姿を現した。

通常の人間の4倍はありそうな巨体を揺らし、手には食い掛けの肉を持ちながら現れた男こそ、帝国の国政を牛耳る男、現大臣オネストに他ならない。

「ヌッフ、お見事です。まこと陛下は、名君であらせられますな」

持ち上げるように言いながら、肉を貪り食う大臣。

とても、人一人、それも国政を憂い、勇気を振り絞った人間に無慈悲な処刑を言い渡した場とは思えない。

まさに、人の忠誠を土足で踏み躪る光景だった。

シヨウイは唇をかみしめると、尚も諦めきれずに言い募る。

「陛下!! 陛下は大臣に騙されておられます!! どうか………どうか民の声に、耳をお傾けください!!」

自分はどうなっても良い。

この場で処刑されても構わない。

だが、それでも、

この命を賭してでも、この国を、皇帝陛下を正さねばならない!!



シヨウイの切実な思いを、

しかし皇帝は一寸たりとも心動かされる事無く、無感動のまま大臣に目をやる。

「おい大臣、奴はあんな事を言っているぞ」

「気が触れたのでございましょう」

対して、大臣はにこやかに告げる。

まるでシヨウイの忠誠など、その辺に転がるゴミクズ程度にしか考えていない様子だ。

「うん！ 昔からお前の言う事に間違いは無いものな!!」

それに対し、皇帝も無邪気に頷きを返す。

オネストは皇帝が就任する際、ありとあらゆる手練手管を尽くし、彼を担ぎ上げていく。その為、皇帝の彼に対する信認は絶大な物がある。

また、それが判っているオネストもまた、皇帝に対して耳障りの良い言葉を吐き続けている。

その為、今や皇帝は、オネストと彼に同調する臣下の言葉以外は、殆ど耳に入らなくなってしまうのだ。

まさに絶望的で、そして末期的な有様だった。

「シヨウイ殿、悲しいお別れです」

オネストが冷やかな声で告げると、控えていた近衛兵2人が、儀仗でシヨウイを打ち据え取り押さえる。

くぐもった悲鳴を上げるシヨウイ。

それでも、最後の力を振り絞って顔を上げる。

「陛下アアア!! このままでは帝国1000年の歴史が!!」

だが、

その言葉を遮るように、オネストはシヨウイと皇帝との間を塞ぐようにして座り込むと、倒れているシヨウイの顔を覗き込んできた。

「シヨウイ殿。残された、あなたの美しい細君は私にお任せください。面倒を見て差し上げますよ。隅々まで、ね。ヌフフフフフ」

その言葉を聞き、

シヨウイの心は絶望の奈落へと落ちていく。

やがて、近衛兵がシヨウイを連行していく。

これが、この国の現状である。

苦しむ民を顧みる事無く、只々、自分達の快樂のみを追い求め、そして、それが当然の事として誰も咎めようとしぬ現実。

何より、幼い皇帝が、現実の正邪も判らず、大臣を盲信している。

誰かが変えなくてはならない。

だが、

未だにその兆しは、見えて来る事は無かった。

2

木剣を構えたタツミが地を蹴って斬り掛かる。

その先で待ち構えるブラートは槍を構え、斬り込んでくるタツミを迎え撃つ。

「だアアアアアアア!!」

剣を振り翳すタツミ。

その刃がブラートへと迫り、一気に斬り掛かる。

逆る剣戟。

対して、ブラートは迫るタツミの剣を槍の柄で弾き、逆に刃を繰り出す。

空中にあるタツミに、回避のしようはない。

だが、

タツミは一瞬身を捻りブラートの槍を回避すると、そのまま着地する。

「まだ、まだア!!」

着地と同時にタツミは地を蹴って再び疾走。身体を低くして斬り掛かる。

繰り返される連撃。

対して、

「フッ」

ブラートは口元に笑みを浮かべると、自身も槍を振るってタツミの攻撃に応じる。

互いの刃が、凄まじい勢いで交錯する。

「今日は負けねえぞ、兄貴!!」

「おうッ その意気だぜ、タツミ!!」

更に攻撃速度を上げる両者。

一瞬の間を見て、ブラートが仕掛ける。

する上げるような一閃が、タツミの木剣をすり上げる。

だが、

タツミは勢いに逆らわず空中に飛び上がると、そのまま後方宙返りを行いつつブラートの攻撃を回避、着地と同時に顔を上げる。

その瞳が、鋭く輝く。

「今だ!!」

ブラートが隙を見せた一瞬で距離を詰めるタツミ。

飛び込むと同時に、横薙ぎに繰り出される木剣。

ブラートは未だに槍を振り切った状態で硬直している。

タツミの攻撃が決まるか？

そう思った次の瞬間、

ドゴオ

「うがっ!」

とっさに槍を放したブラートの拳がタツミの顔面に決まり、大きく吹き飛ばされた。

そのまま地面をゴロゴロと転がり倒れ込む。

「俺に槍を放させたのはなかなかだが、まだまだ甘いな。もっと相手の事を観察しろ。

敵は型通りの攻撃を仕掛けてくる訳じゃないんだぜ」

「クソツ やっぱ強えな、兄貴は」

起き上がるタツミ。

幼いころから体を鍛え、剣術を学んできたタツミだったが、やはりまだ《ナイトレイド最強》には敵わないらしいかった。

だが、一方でブラートは、タツミの持つ可能性に、久々に自分の中にある武人の血が

騒ぐようだった。

確かに、タツミはまだまだ粗削りな部分が多い。

しかし、現状でもブラートの攻撃に追隨できるだけの力を秘めている。

これからも修行を続け、より洗練された動きができるようになるれば、いったいどれほどの強さを得られるか、ブラートですら想像できなかった。

将来がこれ程楽しみな逸材を、ブラートは見た事が無かった。

それはさておき、

「さてタツミ。怪我したところを治療してやるぞ。大丈夫、俺が手厚く看護してやるぜ」  
「……………い、いや、遠慮しておくよ」

呆然としながら、ブラートの麗しい申し出を謝辞するタツミ。

ホモ疑惑言動も相変わらず全開だった。

揺るがぬ視線は、全ての雑音を排除して研ぎ澄まされる。

シノンはシエキナーを引き絞り、彼方にある的に集中している。

的はかなり小さく、シノンがいる位置からでは胡麻粒以下にしか見えない。

だが、これでもまだ足りないくらいだ。

射撃武器の命は、何と言っても射程である。

そもそも、武器の進化とは、概ね「射程距離」に比例している。

素手で強い人間がいたなら剣を持ち、剣の達人がいれば槍を持ち、槍に長けた人間がいたら弓を使い、弓で強い人間がいたら銃を持ち、銃の名手がいれば大砲を撃つ、と言った具合に。

これは、力の弱い人間が強い人間を倒す際に辿った必然であり、どんな強い人間であつても、その攻撃が当たらない距離から攻めれば、弱い人間であつても勝機があると言ふ訳である。

ただ、逆説的に考えれば、達人であればある程、逆に武器は短い方が有利となる。武器を持つと言ふ事は、それだけスピードも落ちるし、重量がある武器なら振るつた際の遠心力も半端な物ではない。達人であれば、その間に懐に飛び込む事もできる。

シノンにはタツミのように、武芸に通じている訳ではなく、身体能力も並みの人間と変わらない。

必然的に、バトルスタイルは遠距離戦一極に絞られる。

「目で見て狙うんじゃない、飛んでいく弾道をイメージしなさい。目をつぶつてでも的に当てられるくらいじゃないと、実戦じゃ役に立たないわよ」

シノンの背後に立つたマインが、そう言つて指導する。

同じ射撃武器を使う人間として、マインはシノンの訓練に付き合っているのだ。

「シエキナーの使い手は百発百中だったと言うからね。それくらいになれば上等よ」  
「うん」

マインの言葉に頷いた瞬間、

シノンは光矢を解き放つ。

唸りを上げて飛翔する矢は、一瞬にして目標へ到達。

次の瞬間、矢は的を捉えて粉碎した。

「よしッ」

力を抜き、弓を降ろすシノン。

特訓の成果は着実に現れ始め、シノンの腕は着実上がり始めていた。

その様子を見てマインも、満足したように腕組みをして頷く。

「ん、上出来よ。今の感覚、覚えておきなさい」

実際、今の狙撃はマインの目から見ても、十分に合格点をあげる事ができるだろう。

これからの戦いにおいて、シノンは十分に狙撃手としてやって行けるだろう。

対して、会心の結果を示す事が出来たシノンも、そう言つてマインへ笑い掛ける。

「師匠の腕が良いからよ」

「ま、当然ね」



そう言うと、少女2人はクスクスと笑い声をあげる。

実際、同じ射撃系武装を使う者として、マインがシノンにできる指導は多い。マインの実際的な指導の元、シノンは急速に成長を続けていた。

この先、革命軍が行動開始する日まで、ナイトレイドを取り巻く環境は常に孤立無援である事が予想される。

それを考えれば、シノンとマイン、射撃系の武装を持つ存在が示す役割は大きい筈だった。

と、そこへ黒髪を風になびかせながら、アカメがやってくるのが見えた。

「マイン、シノン、戻ってくれ。アルゴが来ている。次の仕事の依頼だそうだ」

「うん、判った」

「いよいよね」

かなてより、アルゴに頼んで内偵調査を続けていた案件が固まったらしい。

今回は聊か難しい任務になる筈なので、ナイトレイド独自の情報収集の他に、アルゴにも協力を頼んで入念に準備を進めていたのだ。

「あれ？」

そこでふと、シノンは何かに気付いたように足を止めた。

「そう言えば、キリトは？」

見回してみても、訓練場内に片手直剣使いの少年の姿は無い。確か、一緒に訓練をすると言っていた筈なのだが。

訝るシノンに、マインは呆れ気味に肩を竦めた。

「キリトなら、ここにはいないわよ」

「キリトはいつも、1人で山の方で訓練をしているんだ」

2人の説明を聞いて、シノンは頷きつつ山の方に目をやる。

こんな立派な訓練場があるのに、なぜ1人で訓練などしているのか？

ふと思いつ立ち、口を開く。

「あいつの事だから、もしかしてサボっているとかなんじゃないの？」

「いや、そんな事は無いぞ」

疑うようなシノンの言葉に対し、しかしアカメは首を振って否定した。

付き合いという意味では、シノンよりもアカメの方がキリトとの付き合いは長い。それを考えれば、キリトの性格をより深く把握できていて当たり前であった。

更にマインも、腕を組みながら頷いた。

「あいつは格好付けだからね。何でもかんでも人の目の付かない所でやろうとするのよ」

「……ふーん」

眩くように言いながら、シノンはもう一度、山の方に目をやった。

その頃、キリトは木立の間に立ちながら、右手に持ったエリユシデータを構えていた。先日のザンクとの戦い。

実力的には伯仲していたと言うのに、帝具の差で危うく押し切られそうになった。エリユシデータの能力を使わなかったら危ない所であった。

勿論、帝具使い相手に帝具無しで勝てる人間など、そうはいないだろう。帝具には帝具、これは常識である。

だが、戦いになっても、可能な限り手の内は隠したい、と言うのがキリトの考えである。勿論、いざとなれば仕様を躊躇う気は毛頭無いが、それでも敵に与える情報量はできるだけ少ない方が良い。

それを考えれば、先の戦いは失敗だった。

一歩、前へと出る。

次の瞬間、大上段に振りかぶった剣を勢いよく振り下ろす。

更に、振り切った剣を、今度は擦り上げるように繰り返すと、続けて3撃目の振り下ろしを繰り返す。

そして、トドメとも言わべき一撃を振り抜いた。

剣の軌跡が正方形を描く<sup>スクエア</sup>中、キリトは残心を示すように動きを止めた。

バーチカルスクエアと呼ばれる、高速四連撃。

本来はエリクシデータの能力アシストによって可能になる技だが、今はアシスト無しで繰り出した。

当然、威力と速度はアシスト有りの状態に比べて劣る訳だが、技を繰り出す際の癖は体に染みついて居る為、型をなぞる事は可能だった。

実戦でも十分に通用するレベルだが、それでもやはり、ザンクのような強敵に対抗するには、まだまだ力不足は否めなかった。

「……もつと、強くないとな」

これから現れる敵が帝具を繰り出してくる可能性は充分に考えられる。それに対抗するためには、こちらも帝具の能力ばかりに頼り切るのでは足りない。何より、キリト自身が充分な強さを得る必要があった。

枝を踏む音が背後から聞こえてきたのは、その時だった。

殺気は感じない。恐らく、ナイトレイドの誰かだろう。

そう思つて振り返ると、水色の髪をした少女が、ネコ科の動物を思わせる瞳をこちらに向けて来ていた。

「あ、ここにいたんだ」

「シノン、どうしたんだ？」

キリトはエリユシデータを背中の鞆に収めながら振り返る。

自分がこの場所に居る事はアカメ達に伝えてある為、彼女達に場所を聞けば、キリトの居場所の見当くらいは付けられるだろう。

しかしまさか、シノンがここまで来るとは思つて無かつたのだ。

「どうかしたのか？」

「アカメが、アルゴさんが来てるから、すぐ戻れつて」

その言葉を聞いてキリトは、ああ、と頷きを返す。

アルゴが今日、収集した情報を携えてアジトに来る事は事前に聞いて知っていた。何でも、今回の相手は少し難度が高いミッションになるらしい。

そのアルゴが来たと言う事は、いよいよ仕事に掛かる訳である。

「判つた、すぐ行くよ」

そう言うときリトは、手早く後片付けをすると、アジトへと足を向ける。

と、そこでシノンが声を掛けて来た。

「ところであんた、何でわざわざこんな場所で、しかも一人で訓練なんかしてんのよ」

「べ、別にいいだろ。趣味だよ、趣味」

自分で言っておいて何だが、なかなか苦しい言い訳だとは思う。

案の定、シノンにはジト目になってキリトを睨んで来た。

「暗い奴」

「グツ………」

ボソツと言われたシノンの言葉に、キリトはぐうの音も出なかった。

実際、本来の理由を考えれば、暗いと言われても仕方がない面も確かにある。

「ほ、ほら、アルゴが来てるんだろ。早く行こうぜ」

「あ、ちよつと待ってよ」

そう言っただけだと歩きだすキリト。

シノンは、慌てて追いかけようと歩き出す。

と、その時、シノンの足が枝に引っ掛かり、少女の体は大きくよろけた。

「キヤツ!?!」

倒れそうになるシノン。

だが、無様な顔面ダイブを決める直前、その体は黒いコートに包まれた腕に支えられた。

「おいおい、気を付けるよ。この辺、足元が悪いんだから。まあ、だから俺は訓練場所に選んだんだけど」

「あ、う、うん……」

見れば確かに、地面から突き出した木の根や岩がそこかしこに散見し、見るからに足場が悪い。注意して歩かないとすぐに足を引っかけてしまいそうだった。

キリトとしては、こういう足場の悪い場所で敢えて訓練する事で、実戦における状況判断力を養っているのだ。

と、

「ちよつと、いつまで抱いてんのよ」

不機嫌そうに声を上げるシノン。

見れば、キリトは未だに倒れそうになったシノンを支えたまま、彼女の体に手を掛けられている。

少し慌てたように体を放す始シノン。

そのまま、スタスタとアジトの方へと歩いて行ってしまふ。

1人、取り残される形となつてしまったキリトは、訝るように首をかしげる。

「……俺、何も悪くないよな？」

呟くひとり言に、帰る言葉は当然無い。

そこで、先を歩くシノンを、慌てて追いかける。

が、慌てていたせいで足元の木の根に足を引っかけてしまい、盛大に地面にダイブす

る羽目になるのだった。

アジトの会議室に戻ると、ナジエンダに向かい合う形で、フードを被った小柄な女性  
が既に来ており、ラバックが淹れたお茶を飲んでくつろいでいた。

「ようキー坊にシノつち、お邪魔してるぜ て、キー坊、その顔どうした？」

そう言うのと、手を上げて挨拶してくるアルゴ。しかし、キリトの顔がすりむけている  
事に気付くと、怪訝そうに首をかしげる。

「いや、ちよつと修行でな。いやー激しい修行だったぜ」

そう言うてごまかすキリト。実際には、さきほど盛大にこけた時の傷である。

一人、真相を知っているシノンは、そっぽを向いて笑いを堪えている。

そのシノンを、横目でにらみ付けるキリト。無性に、少女の頭をはたいてやりたい気  
分だった。

と、そこで、このままでは話が進まないと感じたのか、割って入るようにナジエンダ  
が口を開いた。

「わざわざ遠い所まですまないな、アルゴ」

「何の何の、上得意様の為ナラ、この程度の事は苦にならないヨ、ナーちゃん」



そう言つて、アルゴはカラカラと笑つて手を振る。

帝都一の殺し屋集団を率いるボスですら、アルゴに掛かれば友達扱いである。

もつとも、ナジエンダ自身はフレンドリーなアルゴの態度について、特に気にする様子も無く、隻眼に笑みを浮かべているので問題は無いのだが。

「それで、アルゴ」

自分の席に着いたキリトは、先を促すようにアルゴを見ながら口を開いた。

「標的の情報は、どうなんだよ？」

「勿論、完璧だよ」

そう言つと、アルゴは持つて来た荷物の中から、自身の集めた情報について記した書類を取り出す。

今回の標的は、イヲカルという貴族になる。

現大臣オネストの遠縁にあたり、その権威をかさに着て不当な暴力をむさぼる一方、女性を拉致しては、己の趣味である拷問に掛けてなぶり殺している。

「遠縁と言つても、大臣との交流は殆どと言つて良いくらいに無い小物ヨ。けど、遠縁でも縁は縁力ナ、屋敷はちよつとした宮殿並みの警護が敷かれ、直接の護衛には皇拳寺で修行した連中が付いているヨ」

アルゴの言葉を聞いて、ナイトレイド達は一斉に息を呑んだ。

皇拳寺、それは帝国最大の拳法寺である。

人知を超えた肉体、および精神修養によつて武芸百般を磨く事を旨とし、そこで修行した者達は凄まじい格闘戦技を身に着けると言う。

特に戦闘力に秀でた者達は「羅刹」とまで呼ばれ、生身で帝具使いに対抗できるらしい。

「厳重な警戒の上に皇拳寺出身者の護衛ですか。厄介ですね」

「こりゃ、潜入して直接つてのは難しいな」

険しい顔のシエーレの言葉に、レオーネも同調したように頷く。

こちらは闇にまぎれて動く身。無理な力攻めができる状況ではない。

あくまで闇にまぎれて動き、標的を仕留めたなら速やかに退く。他者の目に触れないように動くのが基本だった。

「やるとしたら、狙撃しかない。屋敷の外から、標的が出て来た所を狙い撃ち、確実に仕留めるのだ」

ナジエンダの言葉に、皆が異存なく頷きを返す。今回の作戦は、それがベストの選択であった。

「決まりだな、じゃあ、今回はマインちゃんがメインつて事か」

ラバックの言葉を受け、一同の視線がマインに向く。

確かに、狙撃ならパンプキンの独壇場である。ここは経験のあるマインが適任だろう。

だが、

「ちよつと待った」

そう言つて皆を遮つたのは、当のマイン本人だった。

皆の意見がピンクの少女に集中する中、マインは真剣な眼差しで言った。

「今回の任務、あたしはシノンに任せて見たいと思うんだけど、みんなはどう思う？」

そのマインの言葉に、誰もが驚きを隠せなかった。

確かに、シノンの腕の上達ぶりは皆が知っているが、それでも、今回の任務はリスクが大きすぎる気がした。

下手をすれば任務が失敗し、相手の反撃を受ける可能性すらある。その状況下で実践経験の無いシノンの投入には異議がある事は否めなかった。

「ちよ、ちよつとマイン、私は……」

当のシノン本人もまた、戸惑いがちにマインを引き留めようとする。

ナイトレイドの仕事は失敗が許されない物。それを、自分のような経験の薄い者がやるべきではない。

だが、そんなシノンに、マインは笑い掛ける。

「大丈夫。あんたはもう、充分に腕を上げているわ。自分を信じなさい」

「マイン・・・・・・・・・・・・・・・・」

言いかけた言葉を、シノンはあえて飲み込む。

少女の中で、意志が固まり始めていた。

ここ数日、付きつきりで指導してくれたマインここまで言われた以上、腹をくくらない事には申し訳なかった。

「判りました。私にやらせてください」

ナジエンダを真つ直ぐに見据えて、シノンは言う。

その瞳には、もはや迷いは無かった。

「よし、標的担当はシノン。他の皆は、追ってくる護衛達の追撃に備えろ」

言ってから、ナジエンダはキリトに目を向ける。

「キリト、お前はまたシノンの護衛だ。万が一、相手が追撃を掛けてきた場合、お前が対処しろ」

その言葉を受けて、キリトとシノンは互いに顔を向き合わせる。

「よろしく」

「・・・・・・・・よろしく」

片や笑みを浮かべて、片や渋面を作って互いに言葉を交わすキリトとシノン。

そんな二人を横目に、ナジエンダはニヤリと笑みを浮かべる。

「行くぞお前達。民を苦しめる外道に、鉄槌を下してやれ」

## 3

暗がりの中で、そこだけは昼間のような明るさを保っている。

いったいどれだけの金をつぎ込めば、あれだけの家を建てる事ができるのか？ 今の

帝国では、たとえ帝都であってもあれだけの家を持つ事は容易な話ではない。

ただ貴族と言うだけで莫大な金を貯め込み、利益を独占しているからこそその芸当だろう。

イヲカルと言う人物が、どういう類の人間であるかが伺い知れる光景だった。

「やっぱり駄目だ。狙撃できそうなポイントはここだけだったよ」

大木の枝の上で待機していたシノンの元へ、周囲の見回りを終えたキリトが戻ってきた。

今回、他のメンバーは、シノンの狙撃後に行われるであろう敵の追撃を断つ任務に就

いているが、キリトはシノンの直接的な護衛に入っている為、彼女の狙撃のサポートも同時に行っていた。

狙撃手は距離を置いている分には存分に強さを発揮できるが、ひとたび懐に潜り込まれると弱い。そこを補うのがキリトの存在と言う訳だ。

「充分よ、ここからなら、部屋から出て来た所を狙い撃てるし」  
確かに。

この場所はアルゴの情報にあつた、イヲカルの私室を正面に捉えている。正に、狙撃する為にあつらえた場所のようだ。

「けど、まだだいたい距離があるな」

「問題無い。この程度なら、ね」

そう静かに言い放つと、

シノンは目をスツと細める。

同時に、周囲の音を全て遮断。意識を屋敷内の一点に絞る。

そのシノンの集中ぶりに、キリトは思わず息を呑んだ。

メインも狙撃をする時はそうだが、仕事に入る際の狙撃手の集中力には凄まじい物がある。まるで、それ自体が一個の石像であるかのように微動だにせず、視線はただ標的の動きだけを求めて光を放つ。

キリトも長く戦い続けているが、これ程の集中力を発揮できる自信は無い。

まして、それが殺し屋を始めたばかりの少女である事を考えれば、戦慄にすら値した。やがて、

「出てきたわよ」

シノンの言葉に弾かれるように、双眼鏡を屋敷へと向けるキリト。

そこには、多数の女どもを侍らせた標的、イヲカルの姿があった。

縮れた髪に、小太りの体、苦勞を全く知らずに育ったようなゆるみきった顔は、人相書きにあつた顔に間違いない。

「随分と良い御身分だな。あんなに女の子侍らせて」

「あんた、あんなのが良い訳？」

「冗談。ただ言ってみただけ」

茶化すキリトに嘆息しつつ、シノンは再び集中する。

標的は女たちに囲まれた状態であり、直接狙うのはかなり困難だ。だが、

「問題無い……………」

眩くと同時に、

シエキナーの能力を起動させる。

次の瞬間、

狙撃に必要な様々なデータが、シノンの網膜内に映し出された。

標的までの距離、移動速度、方向、風向、風速などのデータが数値化され、情報となつてシノンに与えられる。

更に、

シノンの瞳には、イヲカルの姿が拡大して映し出される。

これがシエキナーの能力。「スコープ・アイ」。狙撃に必要なデータを使用者に与えると同時に、標的を拡大照準する事が可能となる。

シノンの目には、イヲカルの緩み切った顔が拡大して映し出される。

その顔を見詰めながら、

シノンは光矢を解き放った。

一瞬にして駆け抜ける閃光。

狙われた本人は、何が起きたのかすら理解できない事だろう。

次の瞬間、

その一撃は、

周囲の女性たちを避け、見事にイヲカルの額を撃ち抜いた。

のけぞりながら吹き飛ばされるイヲカル。



そのまま、背後にゴロゴロと転がっていき、やがて壁にぶつかって動かなくなった。標的抹殺完了。ミツシヨンコンプリート。

正に、非の打ちどころがない見事な狙撃だった。

「お見事」

状況を確認したキリトが、手放しの賞賛を送る

事実上、シノンの初陣となった仕事だが、その狙撃には危なげなところが全く無かった。

「よし、それじゃあ、合流地点に行こうぜ」

「ん、了解」

主が殺された以上、護衛達も動き始める事だろう。

敵も狙撃手のだいたい位置は把握しているだろうから、この場所はすぐに特定されてしまう。

急いでこの場を離れ、合流地点へと行く必要がある。

シノンもシェキナーを素早くケースにしまうと、立ち上がってキリトに続き歩き出した。

その頃、

闇にまぎれるようにして、疾走する6体の影があつた。

皇拳寺の拳法胴着に身を包んだ彼等は、イヲカルの護衛を務めていた者達である。

普段はイヲカルのおこぼれに預かり、連れ去つて来た女性をいたぶる事にまい進している彼等は、この日起きた事によつて、一転して窮地に追い込まれていた。

まさか、屋敷内でイヲカルが殺されるとは思つても見なかつた。護衛達にとつては、あつてはならない大失態である。

「急げッ 必ず捕まえるんだ!! 賊を取り逃がせば、我々が大臣に殺されるぞ!!」

遠縁とは言え、イヲカルはオネスト大臣の縁者である。それが殺されたと言う事は、オネスト大臣の名誉が傷つけられた事を意味する。

何としても賊を捕まえ、せめて名誉の回復を図らなければ、失態を押し付けられて自分達が処刑場に送られる事は火を見るよりも明らかだつた。

駆け抜ける護衛達。

だが、

その前を遮るように、人影が現れた。

「はいはい、苦勞さん。悪いけど、ここで行き止まりだよ」

不敵な笑みと共に、指の骨を鳴らすレオーネ。

同時に、待ち構えていたナイトレイド達は、一斉に襲い掛かった。

イヲカル暗殺と言う重要任務を終えたキリトとシノン、足元の悪い裏道を通り、合流場所である丘の上の一本桜までやって来た。

この場所は標的の屋敷からもある程度距離が開いており、更に判りやすいポイントである事から、合流場所に指定されたのだった。

「みんなは、まだみたいだな」

「そうね、もう少し待ちましょう」

そう言うとシノンはシェキナーを入れたケースを木の幹に置くと、そのまま幹に寄り掛かって座り込んでしまった。

「お、おいシノン、大丈夫か？」

「大丈夫……ちよつと疲れただけ」

そう言うと、シノンは大きく息を吐く。

帝具の能力を使うと、程度の差こそあれ、相当な体力と精神力を消耗する。慣れないシノンの消耗が半端な物ではない事は予想できたことである。

まして、シノンは今回が事実上の初陣である。ストレスと相まって、精神疲労が半端

な物でない事は充分に予想できた。

そんなシノンに、キリトは笑い掛ける。

「君はゆっくり休んでろ。あとは、俺がやっておくから」

「え、キリト？」

顔を上げて訝るシノン。

まるで、まだ終わっていないかのようなキリトの言葉に、違和感を覚えたのだ。

それに対して、キリトはシノンへは振り返らずに、背中のエリユシデータへと手をやる。

そこへ、藪をかき分けるようにして、道着を着た男が近付いて来るのが見えた。

見覚えがある。確か、皇拳寺に所属する者が着る道着だ。

「やはりこっちにいたか。我ながら訝えてるぜ。流石は、10年前は師範代つてところか」

自画自賛するように言いながら、拳を構えてキリトと対峙する。つまり、イヲカルの護衛の一人と言う事だ。

仲間達とは別に、独自の判断からキリト達を追撃して来たのだ。

対してキリトも、いつでもエリユシデータを抜けるように構える。

「皇拳寺で師範代までやってた奴が、今じゃ外道の護衛役か。随分と落ちぶれたもんだ

な」

「悪さして破門されちまつてね。まあ、あんなクソつまらん場所、あれ以上いるのはこっちから願ひ下げだつたがね」

相手の返事を聞きながら、キリトは斬り込むタイミングを計る。  
強い。

対峙して分かった。

腐つても、皇拳寺で師範代を務めていたと言うのは伊達ではないのだろう。対峙した男は、かなりの実力者である事が体の動きから伺えた。

「生きたまま捕えて大臣に突き出してやる。覚悟しろ」

「そいつは勘弁願いたいな」

元師範代の言葉に、キリトは軽口で応じる。

そんなキリトの背中を、シノン是不安そうに見つめる。

「キリト……」

大丈夫だろうか？ 自分も掩護に入った方が良いのではないだろうか？

そんな事を考え、シエキナーに手を伸ばそうとするシノン。

だが、大してキリトは、安心させるようにシノンに笑い掛ける。

「大丈夫だ。君は俺が守る。必ず」

「え……」

その笑顔に、僅かに顔を紅潮させるシノン。

次の瞬間、

両者は同時に地を蹴って駆けた。

疾走しつつ、エリユシデータを抜刀するキリト。

突撃の勢いそのままに、相手に袈裟懸けに斬り掛かる。

だが、

「遅いッ!!」

元師範代はキリトの剣の軌道を見切り、僅かに身体を傾けて回避。同時に拳を繰り出して攻撃を仕掛けてくる。

思った通り、速い。

修業を積んだ拳法家らしく、無駄を極力排した素早い動きでキリトに対抗してくる。

素早く繰り出される拳撃。

その動きを見極めたキリトは、一瞬、身体を低くして回避行動を取ると、今度は地面すれすれから剣を擦り上げるようにして繰り出す。

上昇するように斬り上げられる、漆黒の刃。

だが、

「おっとツ!」

その一撃を、のけぞる事で回避する元師範代。

その口元には、笑みを浮かべる。

元師範代は、勝利を確信していた。

キリトの動きは、それなりに熟練しているものの、自分に追隨できるような物ではない。

この男をボコボコに殴り倒して、後ろの女と一緒に大臣に引き渡せば、大手柄は間違いなかった。

『いや、待てよ』

シノンの姿を見ながら、元師範代は嫌らしい笑みを浮かべる。

どうせ女は、大臣に逆らった咎で処刑されるだろう。ならば、引き渡す前にそれなりに楽しませてもらうのも面白かった。

見れば水準以上の美少女である。いたぶってやれば、どんな顔で泣き叫ぶのか楽しみである。

「さあ、死ねや!!」

拳を振り上げる、元師範代。

対して、

「おい」

キリトは低い声で、囁くように言う。

「なに、うちのお姫様に色目使ってたんだ」

次の瞬間、

満を持して、エリユシデータの能力を発動する。

キリトはこのタイミングを待っていたのだ。能力を使って、一気に勝負を決する事ができるタイミングを。

鋭さを増す剣閃が、一気に振り下ろされる。

「ぬおッ!？」

その動きに対応しきれず、身体を斬り裂かれる元師範代。

その体が袈裟懸けに斬り下ろされる。

舞い散る鮮血。

しかし、

「まだ、だアツ!!」

まだだ。

まだ、こんな所で終わってたまるか!!

最後の足掻きとばかりに、残る力を振り絞って拳を振り上げる。



だが、キリトの攻撃も、まだ終わっていないかった。

エリユシデータの刃を返すと、全力で斬り上げを行う。

鋭い2連撃が、V字に元師範代の体を斬り裂いた。

「バーチカルアーク……」

低い眩きと共に、キリトは剣を数度振り回し、背中の鞆へと納める。

それと時を同じくして、元師範代の体も地面に倒れ伏した。

「すごい……」

強敵を一瞬で倒したキリトの剣に、シノンが思わず感嘆の声を漏らす。

対して、キリトは口元に微笑を浮かべる。

「言ったら。君は必ず守るって」

そう告げるキリトに、シノンは何となく、ぎこちない笑みを返す。

やがて、他の護衛も始末したらしい仲間達の声が聞こえてくる。

どうやら、向こうの戦いも無事に終わったらしかった。

## 第6話「狙撃手」

終わり

第7話 「記憶と共に生きる」

1

キリトツ

「ケイタ・・・・・・・・」

キリト

「テツオ・・・・・・・・」

キリト!!

「ダツカー・・・・・・・・」

キリトオ

「ササマル……………」

ねえ、キリト……………」

「サチ!!」

目が覚める。

伸ばした手は、何も捕まえる事無く、ただ空しく虚空をかき分けていた。

「……………」

目を開けたキリトはしばし、虚空に上げたままの手を眺める。

やがて、

ゆっくりりと手を降ろすと、汗に濡れた前髪を、鬱陶しげにかき上げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何つー夢だよ。まったく」

まさか、今ごろになってこんな夢を見る事になるとは思っても見なかった。

原因も、何となく判っている。

この間の任務で「首切りザンク」と戦った際、帝具スペクテッドの能力で幻視を見せられたせいだろう。

あの時、ザンクはスペクテッドの幻視で、キリトに最愛の人物の姿を見せて来た。

「・・・・・・・・まさか、それがサチとはな」

サチはかつての仲間。

ナイトレイドに入る前に、共に戦っていた仲間の1人であり、キリトが一時期、剣の稽古も付けていた少女で、言わば弟子にあたる。

スペクテッドの能力が、自分の中で眠っていた記憶を呼び起こしてしまったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・クソッ」

もう、サチ達がいなくなっているから何年も経っていると言うのに、過去の出来事は未だにキリトの心をむしばみ続けている。

自分は一体、いつになれば、この呪縛から逃れる事ができるのだろうか？

自らを苛み続ける記憶を前にして、キリトはそう思わずにはいられないでいる。

ふと、ベッドの傍らに立てかけるようにしておいてある、エリユシデータが目に入った。

手に取つてみると、ズシリとした重さが伝わってくる。慣れない人間が不用意に持てば、一発で筋を違えてしまいそうな重さだ。

我ながら、よく振り回せる物だと思う。もつとも、手に入れた当初は、キリト自身ですら能力のアシスト無しでは振り回す事はできなかったのだが。

「サチ……みんな……俺はまだ、戦い続けるよ……みんなが俺に持たせてくれた、この帝具で……」

呟くと同時に、

キリトも気付かないまま、その瞳からは一筋の滴が零れ落ちた。

顔を打つ飛沫は冷たく、それだけでも殴られているような感覚に捕らわれる。

思った程の速さでは無いとは言え、流水に逆らつて歩く事は、それだけでも難儀である。

まして、重い鎧を着込んでいるとなれば尚更だった。一瞬でも気を抜くと、その場で

転んで流されてしまいそうである。

それでも、必死になって足を踏ん張り続ける。  
と、

「はい、良いですよー 2人とも上がってくださいー」

少し間の抜けたような声が響いてきた。

ホツとすると同時に、残った力を足に込めて立ち上がると、岸に向かった。

「プハッ」

「よいつしよ!!」

掛け声と共に、タツミとシノンは川から上がって来た。

2人とも、帝国軍正式採用の鎧を着込んでいる。

防御力と動きやすさを両立させた鎧は、決して重装備とは言えない。

しかし、それでも、これを着て水の中を泳ぐのは容易な事ではない。体力的に自身のあるタツミはまだ立っていられるが、シノンの方は地面に座り込んで起き上がる事ができないでいた。

そんな2人を、岩に座っていたシエーレが笑顔で出迎える。

「鎧泳ぎ、お疲れ様でした」

「結構、きついわね、これ……」

息も絶え絶えと言った調子で、シノンには眩きを漏らした。

何しろ鎧だけにでも相当な重さだと言うのに、そこに水の流れも加わるのだから、体に掛かる負担は半端な物ではなかった。

「暗殺者養成カリキュラムに記された鍛練法です。私はアジトでの役割とかはありませんので、お二人を集中して鍛えられます」

「そう言えば、シエーレって何か仕事しているところ見た事無いけど……」

シエーレの場合、いつも席について怪しげな本を読んでいる事が多い。

他の者は、何かしら交替で作業をしている場合が多いのだが。

その事が、シノンには少し疑問に思えたのだ。

「実は……」

尋ねられたシエーレは、悲しそうに俯きながら、訥々と語り始めた。

自身の身に降りかかった、凄惨な悲劇を。

「料理は、焦がしてアカメをクールに怒らせました」

「掃除は、逆に散らかってしまいブラートさんを困らせてしまいました」

「買い出しは、塩と砂糖を間違えてレオーネに笑われました」

「後片付けは、アジトを爆破してしまいそうになり、キリトを黒焦げにしていまして」

「洗濯は、うっかりマイン本人も洗ってしまいました」

聞いたタツミとシノンは、空いた口がふさがらなかつた。

なかなか圧倒的な武勇伝である。ここまでできる人間は、そうはいないだろう。

「何と言うか、ドンマイ……」

聞いた自分が脱力した感じで、タツミが声を掛ける。

シノンもまた、どう声を掛けて良いのか判らず呆然と立ち尽くしていた。

これが天然の恐ろしさと言うべきか、わざとやっているのではない所がまた、想像を絶している。

だが、

普段はこれ程までに頼りないシェーレだが、ひとたび暗殺者としての顔を見せれば、他の者が震え上がる程の冷徹さを見せ付ける。

一切の表情を変えず、鋏型の帝具エクスタスを用い、情け容赦すら見せずに標的の命を刈り取る姿は、正に生粋の殺し屋のそれである。



そもそも、シエーレはナイトレイドに入る前からフリーの殺し屋をしていたのだ。そう言う意味では、殺し屋としてのキャリアはかなり長い事を意味している。

とても、そうは見えないのは事実だが。

とても、そうは見えないのは事実だが。

大事だと思ったので二回言いました。

シノンはずと、頭に浮かんだことを聞いてみた。

「そう言えばシエーレ」

「はい？」

呼ばれて、ふと顔を上げるシエーレ。

と、その拍子に、彼女の顔からメガネが零れ落ちた。

「あ、め、メガネ、メガネ……」

一瞬、空気が華やいだ気がした。

普段の野暮つたい眼鏡顔からは想像もできない程の可憐な素顔が顔になり、タツミは勿論、同性のシノンですら、一瞬ドキリとしてしまった程である。

それ程までに、素顔のシエーレは美しく、スタイルの良い肢体と相まって、大人らしい魅力にあふれていた。

眼鏡をかけ直したシエーレは、顔を上げてシノンに向き直った。

「それでシノン、何が聞きたいのですか？」

「あ、うん……………」

少し躊躇った後、シノンは口を開いた。

「キリトって、どうしてナイトレイドに入ったのかなって思ってたさ」

それは、ずっとシノンが疑問に思っていた事である。

他のメンバーについては、だいたい理由がわかっている。

ナジエンダ、ブラートは帝国に絶望して、アカメはナジエンダの説得により、レオーネとシエーレはスカウトされたから、と理由は人それぞれだ。

マインの場合、これは本人から聞いた事だが、彼女は異民族とのハーフで、その事を理由に昔から迫害を受けて来たそうだった。

シノン自身、帝国の真実を知って立ち上がったと言う意味では、アカメに近い物があった。

それぞれが、それぞれに戦う理由を持っている。

しかし、そんな中でキリトだけが、いまいち戦う理由がはっきりしなかった。

「それは……………すみません、判りません」

悲しそうな顔で、首を横に振るシエーレ。

対して、シノンは納得したように頷きを返した。

「成程。そう言う事は、口が堅そうだもんね、あいつ」  
「いえ……………」

シノンの言葉に、シエーレは悲しそうな顔で否定した。  
「聞いたような気もしましたが、忘れてしまいました」

「……………」

揃って絶句するタツミとシノン。

どうやらシエーレの天然ボケ振りは、シノン達の予想の斜め上を通り過ぎていくらしい。かっつた。

数日後

ナジェンダの招集でアジトの会議室に集められたナイトレイド一同。

その目の前には、一つの帝具が置かれていた。

目玉型の装飾品のような形をしたその帝具は、キリトがザンクから奪った《五視万能スペクテッド》である。

革命軍本部に送る前に、誰かに適合しないか試そうと言うのだ。

「タツミ、お前が試してみろ」

「え、俺が？ 良いの？」

まさか声を掛けられるとは思っていなかったタツミは、驚いて顔を上げる。

帝具は1人に付き1つ、と言うのが基本である。

半端じゃない負荷がかかる為、使用者は肉体的、精神的にかなりの消耗がある。その為、2つ以上の帝具を装備する事はできないのだ。

このメンバーの中で自分専用の帝具を持っていないのは、タツミとナジエンダだけ。ナジエンダは、自分には合わないと思つた為、タツミに試すよう促したのだ。

意気込んだタツミは、早速スペクテッドを手を取つてみる。

正直、見た目はあまり気に言っているとは言い難い。

タツミ的には、ブライトのインクルシオのようなのが良いと思つていたのだが、このスペクテッドもまた、キリトを苦しめる程の力を持っている。この際、贅沢を言う気は無かった。

「それは文献にも載っていないかつた帝具だからな。意外と謎が多いんだが……」

ナジエンダの説明を聞きながら、スペクテッドを額に装着するタツミ。

そこへ、アカメが身を乗り出してきた。

「心を覗ける能力があるそうじゃないか。私を視てみる」

「判つた」

促され、タツミはアカメに集中する。

アカメが何を想い、そして何を考えているのか。

やがて、

「夜は………」

おもむろに、タツミが口を開いた。

「肉が食いたいと思っっている!!」

「完璧だな」

「いや、まだ能力発動していないだろ」

「言うか、それくらい俺にも判るし」

帝具漫才を始めたタツミとアカメに、レオーネとキリトがツツコミを入れる。

と、そこで顔をしかめたメインが口を挟んだ。

「心を覗かれるなんていやよ。五視あるなら、もっと別の能力を試しなさいよ」

「へいへい………」

やれやれと言った調子に、返事をするタツミ。

同年代なせいかメインは何かとタツミに突っかかる事が多い。その為、タツミもまた、やや辟易している感があった。

仕方なく、タツミは目を閉じ、再び意識を集中する。

確認されているスペクテッドの能力は「遠視」「洞視」「未来視」「幻視」の4つ。

未確認の5つ目を手探りで探すように、タツミは慎重に意識を集中する。

やがて、ゆっくりと目を開いた。

次の瞬間、

「なッ!?!」

絶句した。

なぜなら、

今まさに、

タツミの目の前にはパラダイスが広がっているからだ。

目の前にいるのは、アカメ、マイン、シノン、シェーレの女子4人。

その全員が、タツミの目には可憐な下着姿に映っているのだ。

「な、な、なア!?!」

顔を赤くしながら、驚くタツミ。

これこそが、スペクテッドの残る1つの能力「透視」である。相手の装備を透かして見る事が出来、本来なら隠し武器の有無を確認するのが用途であるが、それを応用（悪用?）すると、このような嬉しい特典が付いてくる訳だ。

一方の、当然ながら意味が分からない女性陣は、訝りながらタツミに視線を集中させ

る。

「どうしたの、タツミ君？」

「あ、ああ、いや……………」

シノンの問いかけに対し、意味の無い言葉をしどろもどろに返す。

ちなみに、シノンは青と白の可愛らしいストライプが入ったパンツとブラ、アカメは無駄を省く彼女の性格をあらわしたような簡素な白の上下、マインはオシヤレ好きな彼女の性格を象徴するように、ピンクのパンツに、上が白のキャミソール。シエーレは大人っぽい紫の上下と、それぞれの個性が如実に表れている。

「どうしたんだ、タツミの奴？」

「さあ？」

キリトとラバックは、揃って首をかしげる。

今まさに、彼等を差し置いて新人君が天国を味わっているなどは、手練の殺し屋である彼等にも想像が及ばなかった。

だが、次の瞬間、

「あ、あれ？」

ガクンと膝が崩れたかと思うと、タツミはそのまま床に座り込んでしまった。

訳が分からないまま、どうにか起き上がろうとするタツミ。

しかし、腰に力が入らない。

「な、何だ、これ？」

眩きを漏らす内にも、徐々に意識が遠のきそうになるタツミ。

その様子に、一同は慌てて駆け寄る。

「まずい、拒絶反応だ!!」

「急いで外そう」

ラバックが倒れそうになるタツミを支え、その間にアカメはタツミの額からスペクテッドを取り外した。

ややあつて、落ち着きを取り戻したタツミは、深呼吸をしながら顔を上げた。

「いったい、何だったんだ、今の？」

「相性だ。お前にスペクテッドは合わなかったんだ」

ナジエンダは嘆息交じりに言った。

スペクテッドがタツミと相性合致して戦力化できれば大きな戦力になると思ったのだが、残念ながらそうそう思惑通りにはいかないらしかった。

「帝具は第一印象で決まるって言うからね。どうせダサイ外見、とか思ったんじゃないの？」

「う……………」



呆れ気味なマインの指摘に、どうやら凶星だったらしいタツミは黙り込んだ。

もつともそんなマイン自身、先程までタツミに自分の下着姿をガン見されていたとはつゆとも思つてはいないのだが。

まさに「知らぬが仏」である。どっちにとつても。

ともかく、タツミが使えない以上、スペクテッドは革命軍本部に送つて解析を依頼するしかない。恐らく、向こうで適合者を探して役立ててくれることだろう。

「俺達は殺し屋だけど、同時に帝具を集める事も任務の内だ。タツミも知つての通り、帝具は一つあるだけでも、状況次第で戦況を覆す事ができるからな。多いに越したことが無いのさ」

「なるほど。たくさん集めれば、それだけ革命軍が有利になるって事か」

キリトの説明に頷きを返すと、ナジエンダが辞典のような分厚い本をタツミに差し出してきた。

「一部の帝具については、これに書き記されている。読んでおけば何かの参考になるだろう」

「なるほど………て言うか、これで一部なのか」

差し出された文献を見ながら、驚きの声を上げるタツミ。

中にはアカメの村雨や、マインのパンプキン、レオーネのライオネルなども書かれて

いる。

そこでふと、シノンは気になった事を尋ねてみた。

「そう言えば、一番強い帝具って何なんですか？」

それは、話を聞いた人間なら誰でも気になる所だろう。

これだけの超兵器群である。その中で最強の物を手に入れた人間が、すなわち帝国最強となれることは間違いない。

「用途や相性にもよるが、私は『氷を操る帝具』だと思っている」

そう言うと、ナジエンダは自身の眼帯に包まれた右目を握り締める。

この話題を口にするたびに、古傷が疼くのだ。

そんなナジエンダを見ながら、キリトも眉をしかめる。

氷を操る帝具。すなわち、《魔神顕現デモンズエクス》の使い手であるエスデス將軍の存在は、正に別格である。

キリト自身は対峙した事は無いが、数々の伝説が齎す強さは想像を絶しており、もし戦う事になった場合、キリトですら、勝てるかどうか自信が無かった。

「幸い、使い手は今、北の異民族討伐の為に出撃している。いくら奴でも、戻って来るのに1年はかかるだろう」

そう言って、苦い物を噛みしめるナジエンダ。

まさかこの時、エスデス率いる北方征伐軍が、わずか半日にも満たない戦闘で北の異民族軍を壊滅に追いやり、《北の勇者》ヌマ・セイカを捕虜にしている事など、誰も知る由も無かった。

「フツフツフツフツフツフツ 強敵上等じゃねえか。俺は俄然、やる気が湧いてきた。帝具もどんどん集めようぜ」

「どうしたタツミ？」

「変な物でも食べた？」

混ぜっ返すキリトとマインを無視して、タツミは上機嫌に拳を握って見せる。

「まだ未知の帝具があるんだろ？　そこで俺はピンと来たね。これだけの性能揃いだ。もしかすると……もしかすると、だけど……」

万感の期待を胸に秘めて、タツミは言った。

「死んだ人間を生き返らせる帝具もあるかもしれないッ　そうだろ!」  
意気込んで言い募るタツミ。

だが、

それに対する古参メンバーの反応は、殊更に冷ややかな物だった。

「そうすれば、いずれはサヨやイエヤスだって……」

「ねえよ」

そんなタツミの熱気を打ち砕くように、ブラートが低い声で遮った。

「帝具であろうと、死んだ人間は生き返らねえ。命は、一度きりだ」

「いや、でも兄貴、判んねえだろ、そんなの!! 探してみないと!!」

「タツミ」

今度は、キリトがタツミの言葉を遮った。

「始皇帝が、何で帝具なんて物を作ったと思う?」

「たぶん、不老不死が無理だって事が判ったからだろう」

キリトの言葉を引き継いで、アカメが結論を述べる。

そう、不老不死や蘇りの能力を持つ帝具があるなら、始皇帝は真つ先に自分が使用していた筈である。

しかし、それが無いからこそ、多くの帝具を産み出して国の防衛力を強化したのだ。

「諦めろ。でないと、その心の隙、敵に利用される。お前が、死んでしまうぞ」

冷たく、しかし、どこか諭すような口調で告げるアカメ。

少年の淡い希望は、脆くも崩れ去った。

遙か北の地において、一つの「終わり」が訪れようとしていた。

その姿を見た者は、たとえ知り合いであったとしても、俄かには信じる事ができないであろう。

椅子に座ったエスデス。

その手には、一本の鎖が握られている。

そして、鎖は彼女の前にひざまずいた人間の首に繋がれていた。

全裸で顔を紅潮させ、荒い息を吐き出しながら一心不乱にエスデスの靴を舐め続ける男。

それがかつて《北の勇者》の異名で呼ばれた異民族達の英雄、ヌマ・セイカ王子であると、誰が想像できるであろうか？

まるで男娼の如き姿からは、かつての颯爽とした出で立ちは想像すらできない。既に、彼の全ては壊れていた。

軍団が壊滅し、彼自身も敗れて捕虜になった後、エスデスは徹底した屈辱をヌマ・セイカに与えた。

他にも捕虜になった兵士や民の前まで引きずって行くと、屈辱的な命令を次々と下し

た。

従わなかった場合は、ヌマ・セイカが見ている前で、捕虜を一人ずつ順番に氷漬けにして殺して見せた。

それに飽きると、今度は一斉処刑の様子を見せ付けてやった。

勿論、ヌマ・セイカはその間、抵抗する事も、エスデスを止める事もできなかった。ただ、慟哭と共に血の涙を流しただけである。

そうして、半分くらいの捕虜を「処理」した頃、ようやくヌマ・セイカは折れた。

エスデスに対し絶対服従を誓い、彼女の命令に対し従順な態度を取るようになった。どんな屈辱的な命令にも従い、情けない姿を自身の民に晒し続けた。

そして、

それを待っていたように、

エスデスは残った捕虜全員を処刑した。

大きな穴を掘り、そこに全ての捕虜を突き落とすと、そのまま生き埋めにしてしまったのだ。

その瞬間、

ヌマ・セイカは壊れた。

壊れるしかなかった。

戦いに敗れ、多くの仲間を失い、自身を守るべき民達を処刑され、最後はプライドまで捨てて残った希望を守ろうとしたと言うのに、

その全てが容赦なく踏み躪られたのだから。

それが、今の姿だった。

「.....これが《北の勇者》とはな」

蔑んだ目でヌマ・セイカを見据えるエスデス。

だが、当のヌマ・セイカは、そんなエスデスの侮辱の視線ですら快感に感じるのか、顔を紅潮させて「ご主人様」の次の命令を待っている。

「つまらん、死ね、犬」

言い放つと同時に繰り出した蹴りが、ヌマ・セイカの頭を一撃で蹴り砕く。

脳漿が飛び散り、鮮血が地面にぶちまけられる。

それが《北の勇者》と呼ばれ、帝国に脅威を与え続けたヌマ・セイカの、それが最後だった。

「.....エスデス、悪趣味過ぎ」

その一部始終を見ていたトキハが、嘆息交じりに言い捨てる。

かつて「ヌマ・セイカだった物」から流れ出る血を、冷ややかに見つめるトキハ。

そう言う時は自身、客将としてエスデス軍に加わり、ヌマ・セイカの側近2人を含む、

多くの兵士を手に掛けています。

つまり、この状況を作り出したと言う意味では時は自身も一枚噛んでおり、彼がエスデスを非難する資格は無いのだが。

それに対し、エスデスは冷笑を持って応じる。

「お前は、私を軽蔑するか トキハ？」

「……別に」

尋ねるエスデスに対し、トキハは素っ気ない口調で応じる。

「もつとむごいシーンを見た事はあるし。それよりはマシかな」

「それはそれは、今度せひ、聞かせてもらいたいものだな」

そう言つて肩を竦めるエスデスに対し、トキハは再び無言になる。

実際、トキハはこの結果は必然だと思つている。

戦いは無情だ。

特に敗者は、全てを奪われて当然である。

ヌマ・セイカは弱いから全てを奪われた。

エスデスは強いから、全てが肯定される。

ただ、それだけの話である。

今回の戦いも、もしエスデスが敗れていたら、立場も逆になっていた事だろう。



威厳も尊厳も剥ぎ取られ、最後はごみのようにうち捨てられる。それが戦場の常である。エスデスは、それを忠実に実行したに過ぎなかった。

「どこかに、私を満足させてくれる敵はいないものか……」

「無理だと思う」

ボソツとツツコミを入れるトキハを無視して、不敵な笑みを浮かべるエスデス。

その姿は、まさに帝国最強として揺るがない自身と威容を誇っていた。

「でも、タツミ君の気持ちもわかるよ」

アジトでの会談を終え部屋へと帰る道すがら、シノンはその言葉が漏らした。

「誰だって、大切な人を無くしたりしたら『もしかすると』って思ってしまうものじゃない」

語りかけるシノン。

だが、彼女の前を歩くキリトは、それには答えずに足を動かし続けている。

その態度に、シノンはムツと顔をしかめる。

「ちよつと、聞いているの?」

「ん? ああ、ごめん、何か言った?」

そこで、ようやくと言った感じに振り返るキリト。何やら、考え事をしていたと言う感じである。

「どうしたの？ ぼうつとして。今日のアンタ、ちよつと変よ。いつもの事だけど」

「失礼な」

シノンの物言いに口を尖らせつつ、キリトは再び前を向く。

「ただ、昔の事を思い出していたんだよ」

「昔？」

「ああ、ずっと昔の事を、さ」

そう言うと、キリトは再びシノンに背を向けて歩き出す。

もしかすると、その昔の事と言うのは、キリトがナイトレイドになる原因なのかもしれない。

「そう言えば、さっきの口ぶりからスト、シノンも誰か大切な人が死んだのか？」

どうやら、聞いていないようである。しっかりと話しは効いていたらしい。

キリトの問いかけに、一瞬キョトンとするシノン。

ややあつて、少し顔を伏せながら口を開いた。

「私ね……実は、小さい頃の記憶が無いの」

「それは……」

突然の告白に、キリトも何と言って良いか判らず言葉を詰まらせる。

シノンの記憶喪失の理由が何なのかは判らないが、それが同情に値する事だけは確かである。

「私、両親が小さい頃に死んじゃったから、そのせいで両親の記憶が無いんだ。だから……」

振り返って、シノンはキリトに微笑を見せる。

「もし、人を生き返らせる帝具があるなら、それでお父さんとお母さんを生き返らせて、会ってみたいって思っただけよ」

そのシノンの言葉に、キリトはスツと目を細めて見つめる。

この娘は、自分が思っているよりも強い少女だ。

だが、その強さはどこか、脆い土台によって支えられているような気がする。

僅かでも崩れれば、シノンと言う人間は際限なく崩れてしまう。

「シノン……」

支えてやりたいと、思った。

サチのようにはならない為に、

共に戦う仲間として、

これからも、ずっと……

第7話「記憶と共に生きる」

終わり

## 第8話 「告げられる予兆」

1

その一家の運命は、唐突に終わりを告げようとしていた。

母親は、まだ幼い息子を必死に抱き締めて、恐怖に耐えている。

「あー、ボス、やつは駄目みたいだわ。シケてるとは思っていたけど、まさかここまで使えないとはな」

「もつとよく、探せ。何か、ある筈だろ」

「だから、ねーって。そんなに言うんだったら、そつちと代われよな」

男達は軽口をたたき合いながら、今も家の中を物色している。

深夜、突如として押し入ってきた三人組の男達。

抵抗しようとした夫は、紅い目をした男の剣によつて即座に殺され、今は物言わぬ軀

となつて床に転がつている。

隙をついて逃げようと思つても、夫を殺した刃が、今も容赦なく突きつけられている為、それも叶わない。

家の中を物色している小柄な男は、ズタ袋のような物を頭にすっぽりと被つていて、その顔を窺い知る事はできない。

だが、ある意味で真に恐ろしいのは、その2人ではない。

もう1人、フードを被つた男が、部屋の隅に佇んでいるのが見える。

先程から一言もしゃべらず、残り2人のやり取りを聞いている男。

一見すると、ただその場に突つ立っているだけのようにもみえるが、それだけに、不気味さは他の2人よりも上のように思える。

彼等が強盗である事は間違いない。

だが、なぜ我が家に？

言つては何だが、うちには大した蓄えなど無い。この不況のせいで貯蓄は殆ど無く、日々の暮らしを支えるのが精いっぱい状況である。

なのになぜ？

考えても、答が出る事は無かつた。

やがて、

「よし、お前等、もういい」

先程まで一言もしやべらなかつたフードの男が、そこで口を開いた。

低い音が、よく通る耳障りの良い声をしている。まるで、心の奥底まで見透かされるような、そんな錯覚に陥る。

「元々、そんなに期待してたわけじゃねえからな。だが、宝探しゲームとしちや、そこそこだっただろ」

「見つかる宝が無いんじや、楽しみも半減だけどねー」

言いながら、小柄なズタ袋男が戻ってきた。

その手にはギラリと光るナイフが握られており、更なる恐怖感をあおってくる。

不満を述べる小男に対し、フードの男は、僅かに見える口元に笑みを浮かべる。

「そう言うな。だからこそ、メインディッシュは残しといてやったんだろうが」

「さっすがボス。判ってるぜ」

喝采を上げる小男。

それを見ながら、紅い目をした男もまた、口元に笑みを浮かべる。

「では、俺は、母親の方を、もらう」

「じゃあ、俺はガキな。あ、どうせだから、ガキの方を先にやっちゃおうぜ。その方が、ママは喜ぶだろうしな。何しろ、自分のガキが腸ぶちまける所見られるんだぜ。一生に

一度しか見られないんだからよ」

男達の狂気に満ちた会話の意味を理解し、母親はより一層、息子を抱く腕に力を込める。

「やめて、この子だけは．．．．この子だけは、どうかッ」

母親として、子供だけは守ろうと、必死に懇願する。

しかし、

その切なる願いが聞き届けられる事は、ついに無かった。

足元に転がり、赤い液体を流し続ける「物」を爪先で蹴り飛ばすと、ズタ袋の小男は満足そうに笑みを浮かべた。

「あー やっぱ最高だぜ、この瞬間はよ」

血に濡れたナイフを弄びながら、まるでゲームをクリアした瞬間のような歓喜を上げる。

今まさに、人を殺した瞬間とはとても思えない、澁刺とした声である。

否、彼等にとって、殺しとはゲームに他ならないのだろう。

今回に事にしてもそうだ。別に金品の強奪を目的にして押し入った訳ではない。



目的はあくまで、住人の殺害。他は全部、おまけに過ぎない。

自分達は狩人であり、他は皆、自分達に駆られる獲物に過ぎない。だからこそ、他者の命であろうと、簡単に奪う事ができる。

「で、次は、どうする、ボス？」

「そうだな、ここらへんも遊びつくしちまったしな。さて、どうしたもんか」  
剣を収めた赤目の男が、くぐもった声でフード男に尋ねる。

対して、ボスと呼ばれたフード男も、顎に手をやって考え始めた。

と、そこに、ズタ袋の男が手を挙げた。

「はいはい、俺、提案ッ だったらさ、あれ、帝都にでも行ってみようぜ」

「おっと、いきなりな大胆な発言来たな」

威勢の良い事を言うズタ袋の男に、フード男は笑みを浮かべながら応じる。

「ボスも知ってるっしょ？ ほら、例のナイトレイド。あの偽善者共がデカイ顔してのさばってるはムカつくっしょ」

帝都を騒がす殺し屋集団ナイトレイドの活動は、このような辺境の地まで聞こえてきている。

帝都の富裕層を狙った殺し屋集団。世直しを行う正義の味方。

だがハッキリ言って、真の殺人者を自認する彼等にとって、ナイトレイドのような存

在は、単なる自己満足の偽善者集団にしか映らなかつた。

「そう言えば、ザンクをやったのも、そいつらなんだろ？ お前等、顔は見なかつたのかよ？」

「いやー、それが顔まではちよつと。流石に距離がありすぎたし。それに奴さん、妙に黒い服着てて、見づらかつたんだよ」

そう言つて、ズタ袋男は肩を竦める。

対して、フード男は顎に手を置いて考え込む。

確かに、ここら辺での狩りには限界があると思ひ始めている。

このまま活動を続ければ、いずれは当局に嗅ぎつけられ、討伐隊を組まれる可能性もある。

別に地方守備隊の兵など恐れるには値しないが、自分達の組織は決して規模が大きいとは言えない。それを考えれば、これ以上一つ箇所活動を続けるのは危険だった。

「帝都か、行つてみるのも悪くないかもな」

「よつしや、決まりだぜ」

ガッツポーズを取るズタ袋の男。

さきほどから無言のままにいる赤目の男も、特に異存は無いように沈黙している。

2人の反応を見ながら、フードの男は口元に笑みを浮かべる。

「ナイトレイド……こいつは楽しい事になりそうだ」  
そこには、新たな狩りゲームの始まりを告げる、不気味な響きが伴っていた。

## 2

宮殿の謁見の間は、緊張に包まれていた。

負報が届く事は珍しくない昨今だが、今回の報告は群を抜いていると言えるだろう。

「申し上げます」

跪いた兵士は、首を垂れながら、携えて来た情報を伝える。

「ナカキド將軍、ヘミ將軍、ユージーン將軍が離反ツ 反乱軍に合流した模様です!!」

その報告に、居並ぶ文官たちは動揺を隠せない。

何しろ、今名前が挙がった3人の將軍は、皆、帝国軍の中でも特に中軸と目される者達であった。

「戦上手のナカキド將軍に、帝国屈指の猛将と謳われるユージーン將軍が……」

「反乱軍は、恐るべき勢力に育っているぞ」

「早く手を打たねば帝国が……」

自分達の存在を根底から覆しかねない存在が迫り、焦りを隠せないでいる。

誰もが皆、いつか反乱軍が、帝との城門を破って押し寄せて来るのではないかと不安に思っているのだ。

その時、

「うろたえるでない!!」

玉座の上から立ち上がった皇帝が、颯爽と腕を振るい、ざわつく文官たちを黙らせる。

その言葉に、誰もが言葉を停めて振り仰ぐ。

至高の存在を前にして、皆が固唾を飲んだ。

「反乱軍は所詮、南端にある勢力。いつでも対応できるッ 反乱分子は集めるだけ集めて掃除した方が良い!!」

言ってから皇帝は、傍らのオネスト大臣を振り返る。

「で、良いのであろう、大臣?」

「ヌフフ、さすが陛下、落ち着いたものでございます」

皇帝の言葉に肉を食いながら応じる大臣。

実際のところ、帝都の守りにはブドー大將軍の近衛軍がある。いかに反乱軍が強大化しようとも、ブドーを破れる筈が無かった。

「遠くの反乱軍より、今は近くの賊です。ナイトレイドとか言うコソ泥集団のおかげで、首切り魔は殺されて帝具は奪われる。帝都警備隊長は殺害される。ついには、私の縁者のイヲカルまで殺される始末。やられたい放題で、体重が増えてしまいます」  
苛立ちまぎれに肉を飲み込む大臣。

特に最近、ナイトレイドの活動は活発化しつつある。一連の犯行も全て、ナイトレイドの仕業である事は間違いなかった。

「穏健である私も、流石に腹に据えかねます。故に、北を制圧したエスデス將軍を、帝都に呼び戻します」

大臣のその言葉に、先程とは違うざわめきが走った。

エスデスの北方征伐軍から、勝利の報告が届けられたのはつい数日前の事である。であるのに、もうエスデスを呼び戻すと言うのか。

「て、帝都にはブドー將軍がおりましょう!!」

「大將軍が賊狩りなど、彼のプライドが許さないでしょう」

文官の発言を、オネストは首を振って否定する。

ブドーは根っからの近衛軍人であり、皇帝を守る事こそを至上としている。

それを考えれば、賊狩りなどに出る事は決してありえないだろう。

加えて、ブドーはオネストにとって、いささか煙たい存在でもある。

軍人でありながら自身に匹敵する権力を持ち、何より皇帝からの信頼も厚い。加えて、帝国軍の中核である為、むやみに排除する事も出来ない。

正にオネストにとって、ブドーは目の上の瘤と言って良い。

そんなブドーに頭を下げるのは、どうしても避けたいところであった。

だがエスデスなら、利害と言う点でオネストと共謀できる。

オネストが戦場を与え、エスデスが敵を狩り尽くす。

その関係が保たれている以上、エスデスはオネストの最大の協力者であると言って良かった。

「エスデス將軍が戻ってくるまでの間、無能な警備隊に発破を掛けなさい。1人でも多くの賊を狩り出し始末するのです」

まるで妄執に取りつかれたようなオネストの言葉が、宮殿の内部を圧して響き渡った。

扉を開けてカフェに入ると、とても落ち着いた雰囲気を感じ出していた。

ほどよく漂ってくるコーヒーの香りに、ゆったりと流れるクラシックレコード。

時代が10年くらい、タイムスリップしたような錯覚に陥る。

だが、

その雰囲気は、バーカウンターに立っている男を見ると、一瞬で吹き飛ばされる事だろう。

よく焼けた褐色の肌に、禿頭の頭。ギョロリとした双眸は、破壊力抜群間違いなしだった。

それは、入り口に入ったまま絶句しているシノンの反応を見れば、一目瞭然だろう。だが、

「ようエギル。相変わらずぼったくってるか？」

「うるせえぞ、キリト。客じゃないなら帰れよ」

シノンをおこの場に連れてきたキリトは、実にフレンドリーに店主に話しかけた。

唾然とするシノン。

見れば店主とキリトは、親子ほど、とまではいかないにしろ相応に年齢が離れている世に見える。それをこうもあっさりと溶け込んでしまふとは。

否、それ以前に、あんな鬼のような外見の男とフレンドリーに話すキリトは、そうとう奇異に見えるのだが。

「……………よく考えたら、今更よね」

嘆息するシノン。

考えてみればキリトは、ナジエンダやブラートと言った明らかに年上の相手でもフレンドリーな態度で接している。それを考えれば、ある意味で普通の光景であるとも言える。

もつとも、それはシノンの感覚が鈍り始めている可能性も無きにしも非ずなのだが。

「何してるんだよシノン。早く来いよ」

「あ、う、うん」

呼びかけられて我に返ると、キリトの隣のバー・カウンターへと座った。

「紹介するよシノン。こいつはエギル。俺達の協力者の1人だよ。副業で、ここの店主もやってる」

「逆だ逆。店の方がメインで、お前等のお守りが『ついで』に決まってるだろうが」

キリトの紹介に不満を述べつつ、エギルはシノンに向き直った。

「エギルと言います、どうぞよろしく」

「あ、シノンです。こちらこそ……」

思いもかけず丁寧な挨拶に恐縮しつつ、シノンは自身も挨拶を返す。

どうやらエギルは見た目の凶悪さと反して、落ち着いた性格であるらしかった。

それにしても、驚くべきはナイトレイドの人脈の広さである。アルゴだけでなく、このような協力者までいるとは。



さまざまな層の人間から多角的な情報を集める為には、帝都にいる多くの人間と繋がりを持つ事は好ましかった。

「仕事か？」

こちらの事情を心得ているらしいエギルは、グラスを拭きながらそのように尋ねてくる。

「ああ、まあな」

それに対し、キリトは出された茶に口を付けながら、短く頷きを返す。

今回の仕事は、下町の娘たちを言葉巧みに連れて来ては、阿片を飲ませて薬漬けにし娼館で働かせているヤクザ達。そして、それを裏で支援しているチブルと言う役人。

更に、このチブルと言う役人は、別のヤクザともつながりを持ち、同じ手口で利益の拡大を図ろうとしているらしい。

それらすべての抹殺が、今回の仕事だった。

だが、それをエギルに語る気は無いし、エギル自身、その事を尋ねてはこない。互いに踏み込まないし、必要以上に踏み込ませない。

それが、自分達にとつての暗黙のルールだった。

その時、店の扉が開き、レオーネが入ってくるのが見えた。

「いやー、まいったまいった。まさか借金取りにばったり出会っちゃうとはねー あ、エ

ギル、あたしにお酒ねー」

そう言うのとレオーネは、シノンの隣に腰掛けて早速注文をする。

「あんなレオーネ、借金なら俺の店にもあるだろうが。そっちもとつと返せよ」

「良いじゃんか、アタシとエギルの仲だろ?」

「どんな仲だよ」

呆れ気味に言いながらも、エギルは律儀に、レオーネの前に黒エールのジョッキを置く。

それを受け取ると、レオーネは一気に半分近く飲み干す。

「プハー 生き返ったア」

大きく息を吐くレオーネに対し、シノンはジンジャーエールを取りながら呆れ気味に見つめる。

「ちよつとレオーネ、仕事前なのに、そんなに飲んで大丈夫なの?」

「大丈夫大丈夫」

言うや否や、レオーネはシノンの首に腕を回して抱き寄せる。

「キャツ!?!」

「真面目だなくシノンは。アタシらの仕事は素面じゃやつてらんないぞー」

「いや、その発言はまじめに働いている人に失礼だろ」

レオーネの酔つ払い的発言にツツコミを入れるキリト。  
そこでふと、思い出したように話題を変えた。

「そう言えばレオーネ、タツミはどうしたんだよ？　一緒だった筈だろ」

今回の任務において、ナイトレイドは3チーム6人を、ペアで作戦投入している。その内、レオーネはタツミと組む事になっている筈なのだが。

そのタツミの姿がどこにもなかった。

「あー、借金取りに追われているうちにはぐれちゃったみたいだな」

「おいおい」

呆れ気味に、キリトはツツコミを入れる。

タツミもとんだ災難である。

スラム出身のレオーネは、その気風の良さと面倒見の良い性格で住民から慕われている一方、方々に借金があつたり、飲み代をツケにしたりしているので、そこそこ恨まれていたりもする。

「でも……」

レオーネに抱きつかれながら、シノンはふと思った事を口にした。

「タツミ君、ここまで辿りつけるのかな？」

「大丈夫だろ。この店、ボロいけど目立つ所にあるから」

「ボロいは余計だ」

レオーネの言葉に、店主が不機嫌そうに返す。

しかし、

「でも、タツミ君って田舎から出て来たばかりよね。それじゃあ、あんまり帝都の道とか詳しくないんじゃないかな？」

.....

カフェ内部に訪れる、一瞬の沈黙。

「しまったア そうだったアアアアア!!」

事態の重大さに気づき、レオーネが頭を抱える。

この広い帝都で、タツミを迷子にしてしまった。

これはゆゆしき事態である。夜には仕事もある。既にシエーレ・マイン組は行動を開始している。こちらでも仕事が始まるまでにタツミと合流しないといけないと言うのに。

「ど、どうすんだよ、レオーネ？」

「いや、どうするって.....ど、どうしよつか？」

途方に暮れる、キリトとレオーネ。

その時だった。

勢いよく扉が開き、軽装の鎧を着込んだ女性がカフェの中へ入って来た。

「失礼します。帝都警備隊所属、セリユー・ユビキタスです!!」

長いポニーテールを靡かせながら、勢いよく名乗る女性。

しかし、その名乗りを聞いた瞬間、全員が思わず動きを強張らせる。

帝都警備隊と言えば、ナイトレイドにとつては警戒すべき相手である。以前、タツミが初任務で隊長のオーガを倒した事でかなり弱体化しているが、それでも下手に相手をするべきではない。

気付かれないようにそつと、傍らに立てかけたエリユシデータに手を伸ばそうとするキリト。

だが、セリユーと名乗った女性は、交戦的な態度を示す事無く、笑顔を見せている。

「実は、この方が道に迷ったとの事でした、ご案内したところです」

そう言うのとセリユーは、背後に立つ人物を指し示す。

するとそこには、

「タツミ!?!」

少し照れくさそうに頭を掻きながら、タツミが立っていた。

「タツミイ!!」

弾かれたようにレオーネはタツミに突撃すると、抱き締めて、その豊かな胸に顔をう

ずめさせる。

「心配したんだぞ、こころ〜」

「うふッ いや、姐さ……」

殆ど呼吸が止まる勢いで抱き締められるタツミ。

そんな2人の様子を、セリユーは微笑ましそうに傍らで眺めている。

「合流できて本当に良かったです。では、私はこれです」

「あ、ほ、本当にありがとうございます」

慌ててレオーネの胸から顔を放したタツミが、セリユーに礼を言う。

だが、

キリトは見逃さなかった。

爽やかな笑顔を浮かべるセリユー。

その足元にいる、犬(?)のような生物を。

垂れ下がった両耳や、クリツとした目鼻など、全体的な印象は犬に見えない事も無い

のだが……

「市民の安全を守る事が、我々、帝都警備隊の使命ですから。悪を見付けたら、どうぞご

一報ください。我々、正義の味方が必ずやつつけてご覧に入れます」

セリユーはそう言ってビシツと敬礼すると、手にしたリードを引っ張る。

「行くよコロちゃん。警備に戻りますよ!!」

「キユウウウウウウ」

コロと呼ばれた生物は鳴き声で主に答え、そのまま引きずられていく。

その様子を確認してから、シノンはゴクリと息をのむ。

「キリト、さっきの人が連れてたのって……」

「ああ、シノンも気付いたか」

キリトもフツと息を吐きながら、シノンの頷きを返す。

先程のコロと呼ばれていた生物。一見するとペットのような謎生物のようにも思える。

だが、その正体は文献にも載っている、帝具《魔獣変化ヘカトンケイル》だ。

帝具の中でも特異な部類に入る生物型と呼ばれる物で、意志を持つて主と共に戦い、体内のどこかにあるコアを破壊しない限り、たとえ致命傷級の傷であっても短時間で回復してしまうのが特徴である。

文献には残念ながら、それ以上くわしい事は書いていなかったのだが、まさか帝国軍側に使用者が現れる事になるとは。

「とにかく、あの人は警戒した方が良いだろう。帝都警備隊だと、これからぶつかる可能性もあるからな」

「判った」

キリトの言葉に、シノンは頷きを返す。

ヘカトンケイルがどんな能力があるか判らない以上、確かに警戒しておく必要がある。

もつとも、主であるセリユーは、どこか少女めいた明朗快活さが感じられる。たとえ敵対する事になっても、殺し合いにまではならないように思える。

とは言え、敵方にヘカトンケイルの使い手がいたのは重大な事実である。

これは、今後の作戦行動においても、重要視すべき内容だった。

3

夜の帳が下りる頃、

世間の暗闇とは対照的に、色町には煌々とした灯りが灯り始める。

夜の仕事を生業とする者達にとっては、これからが稼ぎ時となる。

男達は光の中を歩きながら一夜の恋人を物色し、女たちは、そんな男達の気を引こう



と、煌びやかな衣装に着飾る。

そんな華やかな色町の中にあつて、

どす黒い空気を漂わせる一角があつた。

その屋敷を牛耳るヤクザは、役人のチブルとつながりがあり、賄賂を贈る見返りとして、麻薬の販売ルートを見逃してもらっているのだ。

役人は賄賂を貰つて私腹を肥やし、ヤクザはその役人に見逃してもらつて儲けを得る。

正に、外道の繋がり。その割を喰らうのは、何の罪も無い一般市民と言う訳だ。

「いやーチブル様のおかげで、こっちは左団扇つて訳よ」

上座に座つたボスは、その太い腹を揺らしながら大いに笑う。

それに追従しながら、自分たちも笑みを浮かべている。

彼等の前にあるテーブルには、これでもかと言うほど豪勢な料理と、大量の酒が並べられている。

スラム街に住む住人達には、決して味わう事ができないごちそうだ。

「ボス、この調子でガンガン稼ぎませうぜ」

「おうよ。チブル様の権力と、俺等の財力さえあれば、この街を支配する事だつて夢じゃないぜ」

そうやって、巨大な腹を揺らすボス。

しかし次の瞬間、

天井から舞い降りてきた漆黒の影が、テーブルの上の料理を踏み荒らす形で着地した。

蹴散らされる料理が宙に舞い、弾かれた皿が耳障りな音を立てて碎け散る。

動揺が走る中、

降り立ったキリトは、不敵な笑みと共に静かに言い放った。

「悪いが、夢なら寝てから見てくれないか？ もっとも、アンタ等がこれから見る夢は悪夢だけだな」

言い放った瞬間、

電光の如く背中に回した手が、エリユシデータを抜刀する。

一閃する漆黒の刃。

その剣閃が、子分たちを斬り捨ててる。

舞い散る鮮血に、残った男達は怯んだ様に後じさる。

その隙を、キリトは逃さない。

素早く距離を詰めると同時に、剣を水平に振り抜く。

それだけで、複数の人間が斬られて、床に軀を転がした。

「野郎ツ!!」

いち早く体勢を立て直そうとした子分の一人が、キリトに向けて銃を向けようとする。

だが、

それよりも早く、開いていた窓から飛来した光の矢が、その子分の頭部を射抜いて絶命させた。

その様に、会心の笑みを浮かべるキリト。

「ナイスだ、シノン!!」

キリトが突入すると同時に、シノンも行動を起こしていた。

手にしたシエキナーの弦を引き絞ると、自身の目に宿したスコープアイによって、次々と標的を捉えていく。

放たれる光矢。

一瞬で飛来した矢は、狙い変わらず、標的を射抜いて行く。

「よし、次」

照準、射出までの流れが、これまでよりもスムーズに行われる。

射出された光矢は、今にも味方の援護に入ろうとしている組員の額を正確に撃ち抜く。

ここ数日、マインの付きっ切りの特訓の成果もあり、シノンの実力は確実な上昇を見せている。

既に殺し屋として十分な実力を見せていた。

エリユシデータの能力を発動するキリト。

繰り出される左からの水平斬り。

更に、振り切った右から翻る水平斬り。

背中に更に大振りな一撃を繰り出すと、反動を利用して突進しながらの水平斬りが炸裂する。

剣の軌跡が正確な正方形<sup>スクエア</sup>。

キリトを取り囲んでいた組員たちが、一斉に吹き飛ぶ。

高速水平四連撃ホリゾンタルスクエア。

キリトが繰り出した剣によって、組員たちは全滅してしまった。

「ひ、ひイイイイイ」

椅子から転げ落ちたボスが、キリトから逃げようと尻餅をつきながら後じさる。対してキリトは、ゆっくりと歩いてボスを追い詰める。

「た、頼む、助けてくれッ」

壁際に追い詰められ、ボスは懇願する。

「金ならいくらでも出す。だから……………」

だが、

「断る」

非情に告げられるキリトの言葉。

次の瞬間、繰り出された剣がボスの巨大な腹に、エリユシデータの切っ先が突き刺さった。

「がッ……………ハッ……………」

短く息を吐き出すボス。

そのまま、ガツクリと首を垂れて絶命した。

剣を数回振り回し、背中 of 鞆に納めるキリト。

同時に、小さな足音が、背後から近付いてきた。

「終わったわね」

「ああ」

狙撃任務でキリトを支援したシノンは、任務が完了したと判断して、狙撃ポイントから戻って来たのだ。

「よし、他の奴等と合流しようぜ」

そう言っただけでシノンの肩を叩くと、屋敷を後にしようとするキリト。

彼方で、

笛の音が鳴り響いたのは、その時だった。

第8話「告げられる予兆」

終わり

## 第9話 「絶対正義の名の下に」

1

その頃、呼子の笛の音を聞いたキリトは、可能な限りの全速力で夜の帝都を走っていた。

嫌な予感がする。

何か、座して待てば大切な物を失う、そんな予感。

かつて、覚えのある感情に突き動かされ、キリトは更に足を速める。

時間的に考えて、他のチームも仕事を終えて合流地点に向かっている筈。

そのタイミングで鳴り響いて、不吉な笛の音。

二つの要素を連動して考えられない程、キリトは愚かではない。

誰かが敵に発見されて、交戦中である事が考えられる。

勿論、皆、手練の殺し屋達である。新人のタツミにしても、アカメやブライトに日々鍛えられているおかげで、既に充分な実力を備えつつある。簡単にやられるとは思えないのだが。

念のため、シノンを先に離脱させて正解だった。

帝都での生活もある彼女を、警備隊に顔バレさせるわけにはいかない。今後の事も考えれば、ここはキリトが1人で切り抜けるべき局面だった。

「無事でいてくれ、みんな」

焦りと共に呟くキリト。

大丈夫なはず。

いくら自分にそう言い聞かせても、湧き上がる不安を拭い去る事が、どうしてもできなかった。

やがて、視界の中に木々に囲まれたエリアが入り込んでくる。合流ポイントの公園は、あの向こう側だ。

だがキリトは既に、公園の方角から伝わってくる強烈な殺気に気付いていた。

更に、耳には金属がぶつかり合う音も響いてきている。

眉を顰めるキリト。



悪い予感が当たってしまった。誰かが発見されて、交戦中なのだ。さらに速度を速めようとしたキリト。

その時だった。

「ツ!？」

突如、視界の隅で光が煌めいたのを、キリトは見逃さなかった。

とつさに身を翻す。

一瞬後、

キリトが立っていた地面に、数本のナイフが突き刺さる。

とつさに、後方宙返りをしながら更に回避を試みるキリト。

それを追うように、ナイフは更に降り注ぐ。

的確に、

そして明確な殺意を持って降り注ぐナイフ。

やがて、10メートル近く後退したところでナイフの攻勢は止まる。

同時に、キリトは靴底の鋏で石畳に火花を散らしながら、自身の体に制動を掛ける。

だが、

キリトは油断する事無く、背中のエリユシデータに手を伸ばす。

今の攻撃は、間違いなくキリトを殺そうとする動きがあった。

いったい何者なのか？

己の内で答えを模索するキリト。

やがて、

闇の中から滲み出るように、1人の男が歩み出てきた。

すつぽりと覆われたフードにより、顔は良く見えない。

しかし、

その全身から発せられる殺気は、キリトをして最大限の警戒をさせるに余りある代物だった。

「よう、ナイトレイド。そんなに慌てていないで、俺と遊んで行かないか？」

その人物は、まるで数年来の友人のような気さくさくさでキリトに話しかけてきた。

対して、キリトは油断なく剣に手を掛けながら、いつでも抜けるように身構える。

「誰だ？ 帝都警備隊の奴か？」

この場合、最も警戒すべきは警備隊である。呼子の音を聞きつけて、警備隊が駆けつけ、キリトに先制攻撃を仕掛けたとすれば納得がいく。

しかし、質問するキリトに対し、

「クッククッククッククック」

フード男は、くぐもった笑い声で応じた。

「なかなかジョークが上手いな、ナイトレイド。ただ、クイズのアンサーとしては落第だ」

挑発するような男の言葉に、キリトは焦りと共に眉をしかめた。

こうしている間にも、木々の向こうで鳴り響く剣撃音は激しくなる。

この向こうでは、仲間の誰かが戦っている。

だが、目の前で惜しげも無く殺気を振り撒く男を無視して、そちらへ向かう事はできなかった。

間違はなく、背中を向けた瞬間に襲い掛かってくるのは目に見えている。

「答えは、お前の御同業だよ」

言いながら、両手に大振りなナイフを構えるフード男。

右手には肉切り包丁のような巨大なナイフを持ち、左手にはそれよりもやや小型ながら、先端の鋭いナイフを握っている。

明らかに交戦の意志。もはや、疑いようは無い。

キリトは身構えながら、エリユシデータを抜き放つ。

ほぼ同時に、フード男は地を蹴って斬り掛かってきた。

「さあ、ロクデナシ同士、面白おかしく殺し合おうぜ!!」

「邪魔だッ どけ!!」

言い放ったキリトは、エリユシデータの能力を解放。一気に突破しにかかる。アシストを得たキリトの剣閃は、あつとうてきな速度でもって、袈裟懸けにフード男に斬り掛かる。

その一撃が、フード男の左手のナイフを容赦なく弾き飛ばす。

舌打ちが、聞こえた気がした。

後退するフード男。

一気に勝負を決する。

その思いから、更に前へ出て剣を振り翳すキリト。

横なぎの一閃が、フード男を斬り裂く。

そう思った次の瞬間、

ガキンツ

金属的な異音と共に、エリユシデータの刃は、男の大型ナイフに受け止められた。

「なッ!?!」

男はフードの下でニヤリと笑みを浮かべる。

対して目を剥くキリト。

まさか、能力を使った自分の剣を、こうもあつさり受け止めるられるとは。

「そのナイフ、まさか帝具かッ!?!」

「玩具の専売権が、自分達だけにあると思うなよ、ナイトレイド!!」

今度はこつちの番だ、とばかりにフード男が仕掛ける。

手にした肉切り包丁のようなナイフは、複雑な軌道を描きながらキリトへと迫る。

「ツ!!」

そのあまりの速さに、思わず絶句するキリト。

しかし、それでも体はどうか動き、ナイフの刃を剣で弾く。

だが、

「そらッ まだまだ行くぞッ どこまで耐えられる!？」

更なる攻撃を繰り出すフード男。

その攻撃速度、そして威力は、能力アシストを使ったキリトに引けを取らない。

「クソッ!!」

一瞬、攻撃を弾きながら、距離を取ろうとするキリト。

だが、フード男は構わず距離を詰めてくる。

焦るキリト。

こんな事をしている場合では無い。

一刻も早く、公園に行って戦っている仲間を掩護しないといけないと言うのに。

しかし、

焦る思いが、雑な攻めを誘発する。

甘く繰り出されたキリトの剣閃を見て、男はフードの下で笑みを刻んだ。

次の瞬間、その場にしゃがみ込む事によってキリトの剣を回避するフード男。

「なッ!？」

一瞬、標的を見失ったキリトは、思わず声を上げる。

次の瞬間、視界が反転し、背中から地面に叩き付けられた。

一瞬見せたキリトの隙を突き、男は無防備なキリトの足を蹴り払ったのだ。

「グッ!？」

思わず、息を詰まらせる。

その視界の中で、

フード男は、大型ナイフを振り上げた。

「おいおい、もう終わりか？ つまんねえ奴」

吐き捨てると同時に、

振り下ろされた肉切り包丁が、キリトへと襲いかかった。

その頃、

マインとシェーレは、想定外の事態に陥っていた。

勿論、このような稼業にいる為、想定外の事態が起こる事は充分に考え得る事である。2人にしても、そうした事態にいつでも対応できるように、訓練は充分に積んである。

だが、今回の事は完全に予想の範疇を越えていた。

敵は2人。

1人は警備隊の女性で、手にしたトンファーと銃を組み合わせたト  
ン  
フ  
ァ  
ー  
ガ  
ン旋棍銃化で、激しい銃撃を繰り出してくる。

そして、もう片方は人間ではない。

クマのように巨大な体躯を持つ、犬のような外見の生物は、それ自体が一つの帝具である。

帝具使いの警備隊員と言う、ある意味で最悪の敵の前に、手練の殺し屋2人は、思いもかけない苦戦を強いられていた。

「そらそらッ どうした!! 闇に紛れるしか能の無い卑怯者の悪は、正義に手も足も出せないのか!」

セリユー・ユビキタスは、口元に下卑た笑みを浮かべながら銃撃を続ける。

そこには昼間、明朗快活な態度でタツミに道案内した、清廉な印象の警備隊員の姿は無い。

己の存在価値を無上とし、自分の意に沿わぬ者達の言葉は一切気に掛ける事無く断絶する外道の姿があった。

「お前達のような極悪人が、パパとママを殺したっ お前達は隊長も殺した!!」

更に銃撃を強めるセリユー。

それに対し、シエーレはマインを背に庇いながら、エクスタスの刃でセリユーの銃撃を防ぐ。

「だから、お前達、悪の権化は、この私が絶対正義の名の下に裁いてやる!!」

言い放つと同時に、傍らのヘカトンケイルに目をやる。

「コロ、捕食!!」

銃撃だけでは埒が明かないと悟ったのだろう。帝具による接近戦に切り替えて来た。

命令を受けたヘカトンケイルは、その巨大な口を開いてシエーレへ襲い掛かる。

その口の中に、びっしりと生えた牙は、凶悪その物と言って良い。

だが、

それに対して、シエーレは一切表情を変える事無く、エクスタスを構えた。



すれ違う一瞬、

巨大鍔の刃が、ヘカトンケイルの口元をぎつくりと斬り裂いた。

「……………すみません」

冷徹な瞳で、相手に致命傷を与えたシエーレ。

だが、

「シエーレ、後ろ!!」

マインの警告に振り返ると、

既にヘカトンケイルの傷は半ばまで塞がり、再びシエーレに襲い掛かろうとしていた。

生物型帝具に共通する特徴は、その想像を超えた回復力にある。核を砕かない限り、たとえ致命傷級の傷であったとしても即座に回復してしまうのだ。

立ち尽くすシエーレに襲い掛かるヘカトンケイル。

だが、背後からマインが放った銃撃が、ヘカトンケイルの半身を吹き飛ばし動きを止める。

バランスを崩すヘカトンケイル。

シエーレはその間に、後退して体勢を立て直した。

「文献にもあったでしょ。あいつは核を砕かない限り倒せないわ。心臓が無いんじや、

アカメの村雨も効果無いでしょうし」

「厄介ですね」

アカメの帝具《一斬必殺 村雨》は、ほんの僅かでも標的を斬れば、呪毒によって相手の心臓を止める事ができる。

だが逆を言えば、相手に心臓が無ければ意味が無い。ただの切れ味の良い刀に成り下がる。

「こうなったらシエーレ、アレで行くわよ」

「判りました」

マインの提案に、阿吽の呼吸を整えたシエーレは即座に頷きを返す。

対帝具使い用戦闘にシフトする2人。

対して、

2人が何かを仕掛けようとしているのを察したのだろう。セリユーも先手を打つべく動く。

「コロ、腕!!」

命令を飛ばすと、ハカトンケイルの腕が筋肉質に変化し、それまでの倍以上の長さへと延びる。

同時に、ハカトンケイルは巨大な腕を振り翳して殴り掛かってきた。

凄まじい速度で繰り出される拳の嵐。

対抗するようにエクスタスを繰り出して防御するシエーレ。

しかし、

「クッ 重い!?!」

想像以上に強力な攻撃を前に、レアメタル製のエクスタスはよく耐えているが、シエーレ自身の細腕が衝撃で悲鳴を上げ始める。

マインを背に庇いながら戦っている為、シエーレは身動きが取れなくなる。

それを見透かしたセリユーは、一気に状況を決しようとして動く。

ポケットから呼子を取り出して、一気に吹き鳴らしたのだ。

ピイイイイイイイイイイイイイイイ!!

夜の闇を斬り裂いて鳴り渡る警笛の音。

程無く、他の警備隊員達も音を聞きつけて駆け付けて来る事だろう。そうなれば、マイン達に勝ち目はない。

だが、

圧倒的に不利な状況下にあつて、

マインは不敵に笑って見せた。

「嵐のような攻撃、仲間も呼ばれた……」

静かな口調と共に、手にしたパンプキンを持ち上げる。

「これは正に、ピンチ!!」

照準は、尚もシエーレに対して激しい攻撃を繰り返しているヘカトンケイルに定められる。

「だからこそ、行ッけエエエエエ!!」

引き絞られるトリガー。

銃口からは、強烈な閃光が迸る。

その様に、セリユーは思わず目を剥いた。

「威力が、上がった!?!」

その凄まじいエネルギー量は、巨大危険種であつても一撃で消滅できそうなほどである。

パンプキンは精神エネルギーを弾丸として撃ち出す銃である。その為、使用者が怒りやピンチを感じた時ほど、強大な威力を発揮する事になる。

パンプキンの一撃がヘカトンケイルを直撃。その上半身に強烈なダメージを与える。

しかし、

「クッ」

舌打ちするマイン。

パンプキンの直撃をまともに受けたヘカトンケイルだったが、既に回復を始めていたのだ。

流石に、軽傷時に比べれば回復速度は劣るが、既に半壊した体は半ば以上が再生している。

その様子を見て、せせら笑うセリユー。

「馬鹿めッ 帝具の耐久力を舐めるな!!」

やはり、生物型は侮れない。

しかし、その事は元よりマイン達も承知している。

目的はヘカトンケイルの足を止め、一瞬の隙を作り出す事。

その間に、シェーレがエクスタスを振り翳して、セリユーとの距離を詰める。

「帝具は道具。どんなに強力でも、使い手を仕留めればすぐに止まります!!」

「クッ 初めから私狙いか!？」

迫るエクスタスの刃に対し、トンプアガン旋棍銃化を構えて防御姿勢を取るセリユー。

だが次の瞬間、エクスタスの刃が突然、強烈な光を発した。

「金属の発光!?! こんな技が!?!」

絶句するセリユー。

いくつかの帝具は、通常能力の他に「奥の手」と呼ばれる必殺技がある。

エクスタスの奥の手は、刃の部分を強烈に発光させて、相手の目を晦ませる事にある。一見すると地味だが、相手の視界を奪う事は戦闘時、特にエクスタスの特性を最大限に活かせる接近戦では絶大なアドバンテージを得られるのだ。

満を持してセリユーに斬り掛かるシエーレ。

一転して窮地に立たされたセリユーは、トンファガンを振り翳して對抗するが、徐々に押され始めていた。

振り下ろされる刃。

その軌跡を真つ直ぐに見据え、

キリトは空いた左手を握り、カウンター気味に繰り出した。

交錯する一瞬、

「グウツ!」

次の瞬間、

呻き声を上げたのは、フード男の方だった。

エリユシデータの剣術の元となった剣豪は、体術に置いても無双の強さを誇ったと言う。それ故、エリユシデータの使用者は、体術の能力も使用可能となるのだ。

「奥の手」とはまた違う意味で、キリトの隠し技の一つである。

そのまま、拳撃を喰らった胸を押さえ、後退するフード男。

「COOLだな。そんな手まで持っているのかよ」

「引き出しが多いのは自慢なんでね」

軽口を返しながら、キリトは体勢を立て直す。

相手が帝具使いだと判った以上、もう油断はできない。どんな能力を繰り出してくるのか予想できないなら、迂闊な攻めは命取りに繋がるだろう。

そつと、耳を澄ます。

公園内から、剣撃の音はまだ聞こえていた。

だが、既に呼子が鳴ってから時間が経過している。警備隊の援軍が来るまで、そういう間は無いものと判断するしかない。

一気に勝負をかける。

そう考えたキリトが、エリユシデータを上段に構えた時だった。

「……………こんなもんか」

フード男は呟くように言うと、大型ナイフを指先で起用にくるくると回し、フードの下にある鞆へと納めた。

「何をッ」

「言っただろ。今日は終わりだ。聞こえないのか？」

言われて、キリトも気付く。

先程までは公園内の剣撃音で気づかなかったが、多くの足音が近付いて来るのが判る。

それも、その音は徐々に大きくなっている。

間違いない。帝都警備隊だ。呼子の音を聞いて駆けつけて来たのだ。

「クソッ」

舌打ちするキリト。

この男に時間を掛け過ぎた。このままでは仮に助けに入っても、仲間を掩護して、脱出する時間を稼げない。

最悪、脱出もままならず警備隊に包围されてしまうかもしれない。

そんなキリトの葛藤をあざ笑うかのように、フード男は踵を返して跳躍する。

「bye ナイトレイド。お互い、命があったらまた会おうぜ!!」

捨て台詞と共に、フード男は一瞬にして闇へと消えていく。

その様子を、キリトは舌打ちしながら見送るしかなかった。

だが、これ以上、あの男に構っている暇は無い。

キリトはエリユシデータを鞆に納めると、急いで駆け出した。



## 3

シエーレとマインは、セリユーを追い詰めようとしていた。

エクスタスを持つシエーレは、接近戦においては高い戦闘力を誇る。

戦闘力と言う意味ではセリユーも決して劣ってはいないが、それでもシエーレには一歩譲る物があった。

頼みのヘカトンケイルは、マインに完全に足止めされている。

ピンチ状態を脱した為か、パンプキンの威力は先ほどに比べて低下しているが、それでも足止めくらいは充分に可能。

加えてマインは、ヘカトンケイルの核の位置を割り込める段階まで追い詰めている。後、一手か二手で詰み。

その想いを乗せて、シエーレはエクスタスの刃を挟み込むように振るう。

交錯する鋏。

その一撃は、

しかし、とっさに後退したセリューの両腕を斬り裂くにとどまる。

激痛による絶叫と共に、肘から先の両腕を失うセリュー。

しかし、その様子にシエーレは思わず呻く。

「両腕を犠牲にして逃れた!？」

敵とは言え、見事な判断力である。

だが、両腕を失った以上、次は無い。

今度こそ、と刃を突き込むシエーレ。

次の瞬間、

「正義は、必ず勝アつ!!」

下卑た笑みとと共に、言い放つセリュー。

その斬られて両腕の傷跡から、筋肉を押しよける形で、銃口が姿を現した。

「人体改造!？」

驚愕するシエーレ。

確かに、戦争や事故で体の一部を失った人間が、機械的な義手や義足で補い、生活に支障が無いレベルにまで回復する例はよくある。

しかし、セリューのこれは、もはやそんなレベルの物ではない。

生身の、それも健康な体を改造し、その中に武器を埋め込むなど、正気の沙汰ではな

い。

やる方はやる方で悪魔の技術だが、それを受け入れる側も普通ではありえない。

狂気の上に狂気が重なって尚、質量において物足りないと言わざるを得ないだろう。

銃声と共に、銃弾が放たれる。

次の瞬間、

驚いたのはセリユーの方だった。

ほぼゼロの距離から放たれたにもかかわらず、

シエーレは銃弾をエクスタスの刃で防いで見せたのだ。

すかさず刃を返すと、シエーレは更なる追撃を防ぐべく、シエーレの腕に埋め込まれ

た銃口を斬り捨てる。

「クソッ」

全ての攻撃をシエーレに封殺され、焦りを見せるセリユー。

こうなったら最早、なりふりを構っている場合では無い。

「コロ、狂化!!!」

エクスタスに奥の手があったように、ヘカトンケイルにも奥の手はある。

ただ、例えば数か月、ヘカトンケイルがオーバーヒートしてしまう為、できれば使

たくなかったただけなのだ。

セリユーの命令を受け、ヘカトンケイルは更なる変化を見せる。

より凶暴に、そしてより筋肉質に変化する肉体。

次の瞬間、

その巨大な口より、咆哮が放たれる。

大気中を一気に侵食する獣の雄たけび。

「ウアアアアアア!?!」

「グッ!?!」

その強烈な音波攻撃を前に、マインとシエーレは、思わず耳を押さえて立ち止まる。

その一瞬、

その、僅かな一瞬の隙を、突かれた。

そして、この僅か一瞬の時間を、マインはこの先、長く後悔する事となる。

伸ばされた巨大な腕が、マインの華奢な体を握り込む。

「しまッ……」

マインが事態に気付いた時には、既に手遅れだった。

掴みあげられ、身体を圧迫される。

「握りつぶせエエエエエ!!」

形勢逆転。





1 発の銃弾が、シエーレの体を貫いた。

「……………え？」

思わず、穴の開いた自分の体を見下ろすシエーレ。

振り返る視線の先、

そこには、

下卑た笑みを浮かべるセリユートの姿がある。

その口からは、まるで蛇の舌のように、黒々とした銃口が突き出ている。

腕だけではない。セリユートは、口の中にまで銃口を仕込んでいたのだ。

「正義 執 行!!」

次の瞬間、

襲い掛かったヘカトンケイルが、

大口を開けて飛び掛かり、

シエーレの体を食いちぎった。



腰から上を、一気に消失するシエーレ。

マインが見ている目の前で、シエーレは身体から鮮血を吹きだす。

「シエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

絶叫するマイン。

対して、セリユーは怖気の立つような薄ら笑いを浮かべて、シエーレが食われていく様子を眺めている。

そこには、威厳も尊厳も無い。

ただ、外道が織りなす、おぞましい光景があるだけだった。

その様に、怒りを募らせるマイン。

パンプキンを持ち上げる。

折られた両腕が激痛を放つが、そんな事は関係無かった。

シエーレの敵を討つ。

それさえできれば、自分がどうなろうと知った事ではない。

その時、

「いたぞッ あそこだ!!」

「交戦してるぞ!!」

「もっと応援を呼べッ 全員で取り囲むんだ!!」

バラバラと、大勢の足音が聞こえてくる。

どうやら遅ればせながら、帝都警備隊の増援が到着したらしい。

その様を、マインは涙でぬれた目で見据える。

万事休す。

これで、自分も助からない。

ならばせめて、シエーレの仇だけでも……

そう思つて振り返ろうとした。

その時、

突如、ヘカトンケイルの口元から、強烈な光が発せられた。

その光が、セリユーの、そして駆け付けた警備隊員達の目を晦ませる。

そして、

マインは見た。

ヘカトンケイルの口元。

そこで、

身体の半分を食いちぎられ、今なお、巨大な口で咀嚼されながらも、エクスタスの奥の手を使用しているシエーレの姿を。

「マイン、今の内に……」

シエーレは既に、自分が助からない事が判っている。

判っていて、相棒を逃がす為に、命を燃やし尽くしているのだ。

その時、

「グアッ!?!」

「な、何だ!?!」

包囲網を形成しようとしていた警備隊の後方で、異変が生じる。

光に紛れて人垣が突き崩され、陣形に乱れが生じる。

多くの隊員が倒れる中、漆黒の影が飛び込んできた。

「マイン、こっつちだ!!」

「キリト!?!」

フード男によって足止めされていたキリトが、ようやく追い付いてきたのだ。

しかし、事態は完全に遅く、既にシエーレの命は尽きようとしていた。

一瞬、

キリトの視線が、シエーレに向く。

助けたい。

その渴望が、心の奥底から湧き上がる。

判っている。ここで戦う事には、全く意味は無い。

ここに集まっている警備隊員はほんの一握り。時間が経てば、更に集まって来るだろう。

そうなると、たとえキリトと言えども切り抜ける事は不可能となる。

今ここで戦えば、キリトは死ぬ。そして、マインも死ぬ。

帝具は更に2つ奪われ、残ったナイトレイドは以後、苦戦を強いられる事になるだろう。

逃げるなら今この瞬間、シエーレが命がけで作ってくれた一瞬のチャンスに乗じるしかない。

その時、更なる変化が起こった。

「ぐあッ!？」

「な、何だ!？」

突如、飛来した光矢が警備隊員達を射抜き、その場に撃ち倒す。

致命傷を受けた隊員はいないが、皆、腕や肩、足を射抜かれてその場にうずくまっている。

「シノン、あいつ……」

的確な掩護射撃をしてくれた少女に対し、呆れと感謝の混じった言葉を呟く。

先に離脱しろと言ったのに。

恐らくシノンも、警備の動きが気になって引き返してきたのだろう。

シエーレの奥の手と、シノンの援護射撃のおかげで警備隊は混乱の極致にある。

マインを連れて脱出するなら、今だった。

「キリト……」

優しく、

いつも通り優しく、シエーレが微笑む。

その笑顔に、

キリトは背中を押されるように踵を返した。

無言のシエーレの言葉の中に、キリトは万言を費やしても足りない想いをくみ取った。

『マインを……タツミを……シノン……ナイトレイドのみ  
なを、お願いします』

シエーレの笑顔は、そう語っている。

マインを抱えるようにして走るキリト。

その姿を見詰め、

「ありがとうございます。キリト……」

そう言って、目を閉じる。

脳裏に浮かぶ、最後の光景。

それは、ナイトレイドの皆と共に生きた、数年間の思い出。

楽しかった。

本当に、楽しかった。

ナイトレイド・・・・・・・・

私の居場所・・・・・・・・・・

皆さん・・・・・・・・・・

どうか、無事で・・・・・・・・・・

光が晴れた時、駆け付けた警備隊員が見た物は、シエーレの残った体を咀嚼するヘカトンケイルと、その巨体に寄り添うようにして座り込む、両腕を失ったセリユーの姿だった。

「あは・・・・・・・・あはは・・・・・・・・あはははははは・・・・・・・・やっただあ・・・・・・・・」

そのセリユアの顔には、あどけない笑顔が浮かべられる。

「悪らしく、仲間を見捨てて戦えば私と良い勝負だったのに……中途半端な奴」  
純真無垢な口調で、戦ったシエーレを貶めるセリユア。

その満面な笑顔を振りまきながら、高らかに告げる。

「パパ！ 私、凶賊を一人、倒したよ。正義の光が世界を照らしたよ!!」

無邪気に笑い続けるセリユア。

とても、たった今、人間一人を食い殺したおぞましい場面の直後だとは思えない。

その狂った光景を前に、他の警備隊員達も、声を掛ける事ができず、ただ呆然と立ち  
尽くしている。

笑い続けるセリユア。

その足元に転がったエクスタスの存在だけが、シエーレの存在を証明する、唯一の証  
であるかのように、月光の元に輝き続けていた。

第9話「絶対正義の名の下に」

終わり



## 第10話 「彼女がいない風景」

1

湯気の立つ湯の中にあつて、2人の少女は、初々しい裸身を晒している。

普段はツインテールに纏めているピンク色の髪を、ロングに下ろしたマインは、包帯も痛々しい両腕を湯につけない様に注意しながら、湯船に身を沈めている。

一方、水色の髪をショートヘアにしたシノンは、ネコ科の動物を連想させるような眼差しで、マインを気遣うように見ていた。

先日のセリユール・ユビキタスとの戦闘で両腕を骨折したマインは、日常生活にも支障をきたすようになってしまっている。

その為、回復するまでの間、常に誰かが傍にいて行動を共にするようにしているのだ。

「悪いわねシノン。こんな事に付き合わせちゃって」

湯から上がったマインは、少し肩を落としながらシノンに笑い掛ける。

起伏こそ少ないが、よく鍛えたカモシカのような手足がさらけ出される。下ろした髪と相まって、普段とは違うイメージの魅力が溢れている。

シノンもまた、華奢な四肢と言う点ではマインと似通ったスタイルをしており、少女的な青い初々しさを備えているのが判る。特に、背中からお尻に掛けてのラインは、スレンダーな体と相まって、俊足の獣を連想させる引き締まった美が存在していた。

少女達の瑞々しい裸身によってもたらされる入浴姿は、それだけで1枚の絵のような美しさがあつた。

「気にしないで」

手にしたスポンジに石鹸を付けながら、シノンは微笑を浮かべる。

マインの食事の手伝いは、調理担当のアカメがする事が多いため、入浴の介助は主にシノンの仕事となっているのが暗黙の領海だった。

「師匠の手伝いをするのは、弟子の役目ですよ」

冗談めかしたシノンの言葉に、マインは力無く笑いを浮かべる。

じゃれ合うような、少女達の会話。

だが、

そこに確かに存在している空虚感を拭い去る事は、決してできそうになかった。

タツミは、珍しい物を見るように、訓練場の中央を眺めていた。

広場の真ん中に立つ少年は、手にした漆黒の剣を、一心不乱に振り続けている。

まるで、そうする事によって、死んだ人間の鎮魂に繋がると信じているかのよう。

普段は山の中で一人で修行する事が多いキリトが、どういう訳かここ数日、訓練場で訓練する事が多かった。

まるで、山の中に入る時間も惜しい、と言わんばかりに。

しかも、

今のキリトは、常にエリユシデータの能力を解放状態にしている。

帝具の能力を使えば、その使用者は精神的、肉体的に半端ではない負荷がかかる事になる。当然、使い時が肝心となる訳だが。

しかし今、キリトは数時間にわたって、ぶっ通しでエリユシデータを解放している。

既にキリト、いつ倒れてもおかしくは無い状態だった。その事は、彼の青白く染まり始めた顔を見れば明らかだった。

凄まじい速度で振るわれる剣の圧力が、離れて立っているタツミの場所までも伝わっ

てくるほどだった。

理由は、判っている。

タツミは、先日、アジトに戻ってからのやり取りについて想いを馳せた。

シエーレ殉職、エクスタス鹵獲。

辛うじて帰還したキリトとマインからその報告を受け、ナイトレイドの一同は暗澹たる気持ちに包まれていた。

シエーレは、もういない。

あの優しい声はもう聞こえない。

あのポケポケした笑顔は、もう見る事ができない。

喪失感是否応無く、一同に襲い掛かった。

「……………やった奴は、どこにいるんだよう！」

低い声で絞り出された言葉は、一瞬、誰の物か判らなかつた。

一同の視線が辿る先に立つ少年から、凄惨な殺気を放っている。

タツミは、まるで悪鬼のような形相を顔に張り付け、今にも飛び出していきそうな口調で尋ねる。

そんなタツミの背後から、ナジエンダは殊更に低い声で制した。

「待てタツミ。どうする気だ？」

「決まってるだろうがッ シエーレの仇討ちだよ!!」

凶暴は齒を噛みしめて、タツミは言い捨てる。

やった奴を、決して許さない。

必ず見つけ出して、代償を支払わせる。

そのどす黒い感情が、少年の全身が迸っているのが判る。

だが、

「やめろ。無策に突っ込めば死体が増えるだけだ」

ナジエンダは冷静な口調でタツミを窘める。

キリトとメインが、無理せず退いたのは好判断だったとナジエンダは思っている。

状況から察して、あのまま戦っていたらキリトとメインも危なかった。最悪、エリユシデータとパンプキンも敵に奪われていた事だろう。

シエーレが死んだことは残念だが、被害は最小限にとどめられたと考えるべきだった。

もつとも、それは言い訳に過ぎない。

シエーレがいなくなったことから来る空虚感は、どうやっても拭える物ではなかつ

た。

「仲間がやられたんだぞ、オイ!!」

対照的に、タツミは更に舌鋒鋭く言い募る。

無理も無い。タツミにとつて、ナイトレイドに入つて初となる、仲間の喪失だ。サヨやイエヤスの事を差し引いても、耐え難い事である事は間違ひなかつた。

「俺はこのまま黙つてるなんて……」

最後まで、言いきる事ができなかった。

台詞の途中で割つて入つたブラートが、タツミを思いつきり殴り飛ばしたのだ。

大きく吹き飛ばされ、地面に転がるタツミ。

そんなタツミに、殴つたブラートは厳しい眼差しを向けた。

「見苦しいぞタツミ!! 取り乱すんじゃない!!」

声を張り上げるブラート。

そこにいるのは、普段の冗談めかしたホモ言動を取つたり、訓練時の面倒見が良い「兄貴」としてのブラートではない。

闇に生きる住人として、そして人生の先輩として、未熟な少年を叱咤する男の姿がそこにあつた。

「いつ、誰が死んでもおかしくないと云つたらうが!! お前もそれを覚悟して入つて来

たんじやないのか!？」

タツミを叱咤するブラートの怒声を聞きながら、シノンも天を仰ぐ。

こぼれ出る涙はとめどなく頬を濡らし、否応なく視界を滲ませていた。

シノンにとって、シエーレと接する機会はそれほど多かったとは言えない。

しかしそれでも、そんな僅かな時間でも、シエーレが齎してくれた物の何と大きかつ

た事か。

優しかったシエーレは、もういない。

そう考えるだけで、涙が途切れることなく零れ落ちる。

「シエーレの死は、決して無駄ではない」

ナジエンダは、一同を叱咤するように口を開いた。

「帝国も、これで悟ったはずだ。『帝具に対抗するには帝具しかない』と。これからは帝

具使い同士の戦いになるだろう。逆を言えば、集めるチャンスと言う訳だ」

ナジエンダの言うとおりだ。

これまでの戦いで完全に任務を達成してきたナイトレイドが、帝具使い同士の戦いで

敗れたのだ。敵はこれからの戦いに、帝具使いを大量投入してくることは十分にあり得

る話だ。

厳しい戦いになる事が予想される。

しかし、それらを全て撃破してやれば帝国の力は弱体化し、相対的に革命軍の戦力は増大する事になる。

ナジエンダは振り返ると、立ち尽くしているキリトに視線を向ける。

「キリト。お前が遭遇したつていう、帝具を持ったフード男の事も、人相風体や特徴について、革命軍本部に問い合わせておく。向こうで、何らかの情報を掴んでくれるはずだ」  
「ああ……」

キリトは硬い表情のまま、頷きを返す。

あのフード男。

あいつさえ邪魔しなければ、シエーレを助けられたかもしれない。

『いや……違っ!!』

キリトは頭の中に浮かんだ自分の考えを、即座に強く否定する。

あの男が強かった事が原因ではない。

自分ももっと早く、あの男を倒して駆け付けていたら、こんな事にはならなかった。

つまり、キリトが弱かったから、シエーレを助けに入る事ができなかったのだ。

その事が、キリトの心に強く刻み込まれる。

脳裏に浮かぶのは、フード男の浮かべるふてぶてしい笑み。

その姿が思い浮かぶだけで、キリトは全身の血液が沸騰しそうなほどの怒りに駆られ



る。

次に会った時は、必ず倒す。

その決意が、キリトの中で静かに燃えていた。

鋭い連撃が空を切る。

剣圧が空気を圧倒し、周囲に大気を攪拌する。

漆黒の剣閃は、鋭く空を奔り、切り裂く。

技を撃ちきり、剣を止めるキリト。

同時に、

「グッ………」

とんでもない疲労感が襲い掛かり、思わず息を詰まらせた。

既に何時間にもわたり帝具の能力の行使状態を維持し、体を酷使し続けたのだ。精神的、肉体的な疲労は、ピークを通り過ぎている。

命がすり減る程の鍛錬を続けて、疲労を感じない筈が無かった。

全身を襲う、強烈なまでの虚脱感。

「ッ!!」

しかしそれでも尚、疲弊した体にムチ打って技を放とうと、エリュシデータを振り翳すキリト。

次の瞬間、

ビシッ

「グッ!?!」

突然、手首に放たれた衝撃に、キリトは思わず動きを止めてエリュシデータを取り落とすとした。

とつさに振り返るキリト。

そこには、リーゼント頭の大柄な男が、厳しい顔つきで立っていた。

ブラートである。どうやら、いつに無く激しい訓練をしているキリトを気遣って、近付いてきたようだ。

その傍らには、同じく心配そうな顔をしているタツミの姿もある。

「何すんだよ、ブラート!?!」

「それくらいにしとけ」

言ってから、ブラートは先ほどキリトの手首を打った訓練用の棒で、地面に落ちたエリュシデータを差す。

「ちよつとの衝撃を喰らっただけで、剣も握れなくなるくらい疲れてんだ。これ以上は

やっても効率が悪くなるだけだぞ」

「……………」

ブラートの指摘に、キリトは無言のままそっぽを向く。

訓練はただ闇雲にやれば良い、と言う訳ではない。疲労を押しやってしても効率は下がる一方である。

それは、キリト自身が誰よりも判っている。普段のキリトなら、このような真似は決してしないだろう。

だが、脳裏の浮かぶシエーレの最後の光景が、キリトの心を無理やり前に進ませようとする。

シエーレを救えなかった。

その事実を前に、キリトもまた、ジツとしている事ができなかった。

そんなキリトに対し、ブラートは口調を改めて諭す。

「シエーレの事は、お前のせいじゃねえ。そんな事は誰も、それこそシエーレ自身だって思っっちゃいねえよ」

「でもッ」

言い募るキリト。

それに対して、ブラートは足元のエリユシデータを拾って差し出す。

「とにかく、少し休め。いざって時に役に立たないようじゃ、それこそ、様にならんだろ」  
「……………ああ」

不承不承と言った感じ頷くと、キリトは受け取ったエリユシデータを鞆へと戻す。  
次の瞬間、

「……………あれ？」

突然、キリトの視界の中で、世界が斜めに傾いだ。

傾いているのは世界では無く、自分自身だ。

そう思い至った時には、キリトの体は地面に横倒しになっていた。

タツミが、必死になって呼びかける声が聞こえてくる。

だが、それに答える気力は、キリトには残されていなかった。

2

村が、炎に包まれようとしていた。

人々の悲鳴が交錯し、振り下ろされる刃は、無慈悲に命を奪っていく。

奪える物は根こそぎ奪う。そんな印象が思い浮かぶ光景である。

野党に襲われて村が全滅するのは、今の時代の帝国において、さほど珍しい話であるとは言えない。

この不況により職を失った者達が野党と化し、他の村を襲って住民達を虐殺する。そして生き残った住人が、その日の食い扶持を求めて野党と化す例も珍しくは無い。

まさに負の連鎖である。

村に強力な自警団があれば、それでもまだ、襲撃を防ぐ事はできる。

しかし、そのような存在がない場合、徹底的な蹂躪と略奪を許す事になる。

1人の少女が、炎の中から転がり出るようにして駆け出してくる。

その背後から、凶悪な顔付をした野党が、手にした剣を振り翳して少女を追いかけた。  
きた。

「そーら、逃げろ逃げろー!!」

少女をいたぶるように、下卑た笑みを浮かべる野党。

少女が逃げられないのは、野党にも判っている。判っていて、嬲り者になっているのだ。

やがて、少女は、地面に足を取られて転倒する。

「どうしたのかなー? もう逃げないのかなー?」

「鬼ゴッコは終わりかい? おじさんたち、それじゃあつまらないんだけどなー」

口々に勝手な事を言いながら、少女に迫って来る野党達。

その刃がギラギラと、不気味な輝きを放ち、恐怖に歪んだ少女の泣き顔を照らし出す。  
「それじゃあ、そろそろバイバイ」

振りかざされる刃。

次の瞬間、

銃声と共に放たれた弾丸が、男の頭部を捉えて吹き飛ばした。

鮮血を撒き散らして倒れる夜盗。

誰もが驚き、驚愕に目を見開く中、

炎の彼方に、整然と風を受けてはためく、無数の旗が翻った。

「ゲエツ あいつらは!」

野党の1人が、驚愕の声を上げる。

白地に赤い十字架を染め抜いた一団。

それは、近辺の野党たちにとって、恐怖の対象でもある。

「こちらは、帝国近衛軍特別機動部隊『血盟騎士団』!!」

部隊の戦闘に立つ少女は、茶色の髪を風になびかせ、凜とした口調で言い放つ。

「これより、戦闘に介入ッ 野党たちを殲滅し、残った村人たちを救出します!!」

少女は言い放つと同時に、腰に突っ立鞘から剣を抜き放つ。

細い刀身に鋭い切っ先。

レイピアと呼ばれる剣を掲げ、少女は突撃する。

それと同時に、鎧を着込んだ兵士達も次々と突撃を開始した。

血盟騎士団。

それは、相次ぐ野党の跳梁を憂慮した大將軍ブドーが、自身の率いる近衛軍の中から、選りすぐりの精鋭を選抜して結成した部隊である。

突撃を開始した騎士たちは、たちまち白い怒濤となつて斬り込んで行く。

怯む野党達。

それまで我が物顔で村を蹂躪していた彼等は、一転して自分達が狩られる側へと転落していた。

帝国最強の近衛軍の中にあつて、特に最強部隊と言つても良い血盟騎士団の存在は、無法を働く野党達にとっては悪魔にも等しい事だろう。

否、この場合は悪魔を狩る為に現れた天使の軍勢、とでも言うべきか？

騎士達は、野党達を一人も逃がすまいと、次々と剣を振るつて打ち倒していく。

そんな中、

どうにか村を抜け、逃走に成功しようとしていた一団がある。

彼等は、迫りくる恐怖から逃れられた安堵から、一瞬、笑みを浮かべる。

だが次の瞬間、

その笑みは凍り付いた。

彼等の目の前に、指揮官の少女がレイピアを携えて佇んでいる。

その鋭い双眸は、まるで光線のように不屈きな野党達を睨み据えていた。

「逃がすと思っているの？」

可憐な唇から、低い声で死刑宣告が放たれる。

だが、

その姿を見て、野党達は小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

相手は近衛兵とは言え、たかが小娘一人。自分達が一齐に掛ければ、仕留める事など

造作も無い筈。

そんな事を考えた時だった。

少女の手が、霞む勢いで放たれる。

殆どノーモーションで放たれる剣の一閃。

その一撃が、野党の一人の心臓を容赦なく貫く。

「なッ!？」

傍らで見ていた者は、何が起きたのかすら判らなかつた。

ただ、気付いた時には、少女の剣が仲間の体を貫いていた状態である。



少女は、間髪入れずに動く。

銀光と共に剣を返すと、残った敵も切り払う。

一瞬、放たれた閃光が周囲を斬り裂いた。

ややあつて、少女はレイピアの血を払い、鞘へと戻す。

それを待つていたように、斬られた男達は、音を立ててその場に崩れ落ちた。

誰も、斬られた瞬間は愚か、少女が剣を振るつた姿すら見ていない。

正に《閃光》と称すべき姿である。

「副団長!!」

そこへ、部隊を指揮していた兵士が、駆け寄ってくるのが見えた。

「村内の様子は?」

「ハッ 夜盗の殲滅は完了しました。しかし、家屋の被害や人的被害は意外に多

く……」

無念そうに、騎士は言葉を詰まらせた。

やはり、犠牲は避けられなかった。

報告受けた副団長の少女も、唇を強く噛み締める。

自分達がもつと早く行動を起こしていたら、と思うが、それも結果論に過ぎない。

「状況を団長に報告。生存者の救出と、受け入れ先の準備をした後、私達も帝都に戻りま

す」

「ハッ」

少女の指示に、騎士は首を垂れて駆けていく。

その背中を見送りながら、少女は深々と溜息をつく。

今回の戦い、結果的に夜盗を殲滅し、生存者も救う事が出来た。

だが、決して少ない犠牲ではなかったのは事実である。

いかに最強の戦力を揃え、最高の部隊を率いたとしても、ままなら無い物と言うのは

往々にして存在する。

騎士の少女、アスナはそうのように考え、深くため息を吐いた。

どれ程の間、眠っていた事だろうか？

覚醒する意識の中、キリトはぼんやりと考えを巡らせる。

えっと、自分はもうしたんだっけ？

確か、訓練場で剣を振るっていた時に、ブライトとタツミがやってきて……

そこでブライトに諭される形で剣を収めたところまでは覚えてる。

しかし、その先がどうしても頭の中に浮かんでこなかった。

「どうやら、そこで気を失ったらしい。」

「前から思っていたけど、あんたってホントは馬鹿よね」

呆れの混じった言葉に引かれる様に首を回すと、椅子に座ったシノンが、頬杖を付くようにしてキリトを睨んできていた。

ネコ科の動物を連想させる吊り上った瞳は、今はジト目になってキリトを睨みつけていた。

「ぶっ倒れるまで訓練する奴はいないわよ。普通は」

「なら、俺が普通じゃないって事だろ」

「………何でそこで嬉しそうなのよ、あんた」

最前までノびてたくせに、いきなり軽口を叩けるキリトに、シノンは呆れ声でツッコミを入れる。

まったく、緊張感の無い事この上なかった。

「他の人間とは違う道を行くのが俺のモットーなんだよ。ところで、何でシノンが俺の部屋に？」

「あんたがバカやってぶっ倒れたから、見ててやってくれってブライトさんに頼まれたのよ」

言ってから、シノンは盛大に溜息をついた。

「まったく、マインのお世話ならともかく、何で私があんたの面倒まで見なきゃいけないのよ」

「えらい、すんません」

一応、迷惑を掛けていると言う自覚はあるらしいキリト。バツが悪そうに、苦笑いを浮かべてシノンを見やる。

そんなキリトをジト目で見ながら、シノンはやれやれと肩を竦めた。

まあ、冗談を言う程度には元気があるようだし、心配する必要は無いだろう。放つておいても、明日にはケロツとした顔で起きて居そうである。

だが、

シノンにとっては、ちよつと意外な気がした。キリトが、倒れるまで訓練に没頭するなど。

普段は飄々と斜に構えており、どこか「実態」と言う物を掴ませない言動をする事が多いキリト。

そんなキリトが、必死になる姿と言うのが、シノンにはどうしても想像できなかったのだ。

と、

「……………もう、たくさんだと思ったんだけどな」

「え？」

突然、口を開いたキリトに、シノンは驚いて顔を向ける。

ベッドに横になったまま天井を見ているキリトは、静かな眼差しのまま語る。

「仲間を失うのは、もうたくさんだと思っていた」

「キリト、あんた……」

キリトの言葉に、シノンは掛ける言葉を失って彼を見やる。

まるで、過去に仲間を失った事があるかのような口ぶりだ。

勿論、ナイトレイドは過酷な仕事である。その過程で仲間を失う事は珍しくは無いのかもしれない。

しかし、キリトの言う「仲間」とは、今の仲間達の事を言っているのではない気がした。

「けど、シエーレを失って、俺は……」

その先を、キリトは続けることができない。

まるで、何かを堪えるように口を紡ぎ、腕を上げて自分の目元を覆う。

泣いている。

キリトが。

その姿に、シノンは軽いショックを感じる。

人前では決して見せる事の無いキリトの姿が、彼の心に負った傷もまた、決して浅くは無い事を物語っていた。

そつと、手を伸ばし、キリトの頭を撫でるシノン。

普段なら、たぶん照れくさくて嫌がるであろう行為。

だが、今のキリトは、シノンの手を払いのけるでもなく、ただされるがままに受け入れていた。

第10話「彼女がいない風景」

終わり

その頃、

帝都を望む事ができる北の丘の上に、絶望が降り立とうとしていた。

一頭の飛龍に跨った女性は、ようやく見えてきた懐かしき帝都を見下ろす位置で立ち止まる。

「ただいま、帝都」

不敵な笑みと共に呟くエスデス。

それは、新たな戦いの幕開けを告げる、開戦のベルに他ならなかった。

## 第11話「宮殿での邂逅」

1

「エスデス將軍、北の制圧、見事であった。褒美として、黄金一万を用意してあるぞ」  
「ありがとうございます。北に残してきた兵達に送ります。喜びましょう」

謁見の間にて、エスデスは膝を突き、至高の存在に対して首を垂れる。

戦場においてはいかに傍若無人、傲岸不遜を地で行くエスデスであっても、皇帝を前にしては礼節を忘れず、最上の敬意でもって対している。

このことから考えて、エスデスがただ戦場で荒れ狂うだけの凶暴女ではない事が伺えた。

金品についても同様だ。



エスデスは普段から戦勝における報酬は全て、そっくりそのまま自分の配下にいる兵達に下賜している。まるで、自分には無価値な物であると公言するかのよう。

そこら辺が、エスデスと言う女傑のキャラクター性を如実に表していると言える。

エスデス自身の苛烈な性格のせいで、訓練時には死者を出す事も少なくないエスデス隊が、常に高い士気と戦闘力を維持できているのは、指揮官のそうした細かい気配りによるところが大きい。

エスデスは外道ではあっても非情ではなかった。

とは言え今回、エスデスに急ぎ帝都に戻ってもらったのは、彼女に報酬を与える事だけが目的ではない。

「戻って来たばかりですまないが、仕事がある。帝都周辺には今、ナイトレイドをはじめとした凶悪の輩がはびこっている。これらを、將軍の武力で一掃してほしいのだ」

皇帝のその言葉に、エスデスは首を垂れながらスツと目を細める。

状況は、エスデスの予想通りの展開になっているようだ。

北方異民族の殲滅と処刑を実行してから、わずか数日の間に届いた、帝都への帰還命令。

今だ北方に不穏な空気が残る中、軍の要であるエスデスを帰還させなくてはいけないのだから、事態はよほどひっ迫している事が想像できた。

エスデス自身、北から戻ってくる道すがら情報収集を行い、ある程度の現状は既に把握している。

その中でも、特にナイトレイドの物を重点的に集めていた。

ナイトレイド。

現在、帝都における最も警戒すべき存在であり、数ある賊の中でも最強の存在である事は間違いない。

エスデスの見立てが正しければ、恐らく構成員全員が帝具使い。

これまで軍や帝都警備隊が悉く後れを取って来たのは、それが原因である。帝具使い相手に生身で対抗できるのは、皇拳寺出身者等、よほど戦闘力に優れている者に限られる。

勿論、エスデス自身も、帝具無しで帝具使いと戦っても勝てる自信はある。

つい先日、帝都警備隊が構成員の1人を討ち取ったとの事だが、まだまだ彼等の勢いを削ぐには至らなかった。

《一斬必殺 村雨》を持つアカメや、《悪鬼纏身インクルシオ》を持つ《百人斬り》のブライトなど、侮れない敵はまだ多い。

それを考えれば、エスデスだけで事に当たるには手間がかかる。無論、負けるとは毛程も思っていないが、殲滅に時間が掛かれば、それだけ被害も大きくなる。それはでき

れば避けたいところであった。

「お受けする代わりに、一つお願いがあります」

「うむ………兵士か？　なるべく多く用意するぞ」

皇帝も、心得ていると言った風に頷きを返す。

可能な限り多くの兵を投入し、一気に叩き潰すのが得策と考えたのだ。

だが、それに対しエスデスは首を振る。

「いえ、敵には多くの帝具使いがいると聞きます。そのような相手に大兵力を投入しても、いたずらに被害を増やすばかりです」

言ってから、エスデスは僅かに顔を上げ、皇帝に目を向けた。

「7人の帝具使いを用意してください。兵はそれで充分。帝具使いのみの治安維持部隊を結成します」

その言葉に、皇帝とオネストが、驚いて目を見張った。

「將軍には三獣士と呼ばれる帝具使いの部下がいたな。それに、最近では優秀な客将も抱えているとか。そこに、更に7人か………」

帝具使いと言うのは、熟練の兵士よりも更に調達が難しい。何しろ、帝具は適応者でなければ使用する事が出来ないのだから。

それを7人となると、難しいどころの騒ぎではない。珍獣を探すに等しい労力が必要

だった。

「陛下」

悩む少年皇帝に対し、オネストは諭すように言った。

「エスデス將軍になら、安心して兵を預けられます」

エスデスの実績は疑う余地は無い。これまで参加したすべての戦いに勝利し、敵と言う敵を悉く殲滅してきた氷の女だ。

今までエスデスと対峙した敵は、悉く彼女に屈し、あるいは無様な屍をさらしてきた。そのエスデスが精鋭部隊を率いれば、必ずや期待の戦果を挙げられることだろう。

「うむ、お前が言うなら安心だ。用意できそうか？」

「勿論でございます。早速、手配いたしましょう」

オネストは笑顔で確約する。

もつとも、帝具使いの数は限られている上に、現在、重要な部署にいる者を引つ張つて来る事はできない。必然的に、対象者ははぐれ者や地位の低い者に限られる。

それを探し出すだけでも、骨の折れる作業になる事は間違いなかった。

2人の答えを聞いて、皇帝は安堵したように息を吐いた。

「これで帝都も安泰だな。余もホツとしたぞ」

「まこと、エスデス將軍は忠臣ですな」

皇帝の言葉に追従するオネスト。

オネストが敵を用意し、エスデスがそれを殲滅する。

これは、2人が出会って以来、保ち続けている不変の関係である。

エスデスは政治や権力、金品には一切の興味が無く、ただ戦場で強い敵とぶつかり、それを殲滅する事だけを至上の喜びとしている。

それを考えれば、エスデスはオネストにとつて最大の協力者であると同時に、自身の権力を不動な物とする為の最高の手駒でもある。

勿論「手駒」であると思つて侮れば、即座にエスデスはオネストに牙を剥く事は疑い  
ない。

つまりオネストは、エスデスが満足するような敵を、常に探し続けなくてはならない  
のだ。

そう言う意味で、ナイトレイドの存在は最高の「獲物」である事は間違ひなかった。

「苦勞を掛ける將軍には、黄金だけでなく別の褒美も与えたいな。何か望む物はあるか  
？ 爵位とか、領地とか、何でもいいぞ」

これは皇帝の、少年らしい純粋な気持ちから出た言葉である。

自身に忠節を尽くす人間に対し、何かしら報いてやりたいと思つたのだ。

だが、

「そうですね………あえて言えば」

「言えば？」

次の瞬間、エスデスの口から出た言葉は、皇帝とオネストを仰天させるのに十分な破壊力を秘めていた。

「………恋、をしないと、思っております」

2

皇帝への謁見を終えたエスデスは、その足で中庭へと向かった。

今回エスデスは、自分の配下の軍を北方の守りとして残し、最低限の戦力だけを連れ

て帝都に帰還している。

北の異民族を撃破したとは言え、全てを殲滅した訳ではないし、北西にはまた、別の異民族が存在し、帝国の版図を狙って侵攻の機会を伺っている。

それらへの対抗策として、帝国最強を誇るエスデス隊の戦力は重要な位置づけを締めていた。

エスデスが中庭へと降り立つと、それを待っていたように3人の男が膝を突く。

リヴァ、ニャウ、ダイダラ

エスデスが自軍の中核戦力とも恃む、三獣士の面々である。

「お前達に新しい命令をやろう。今までとは、ちと趣向が異なるが」

エスデスの言葉に対し、リヴァ達は口元にそれぞれの笑みを浮かべて顔を上げる。

「何なりとお申し付けください、エスデス様」

「僕達3人は、エスデス様の忠実な僕」

「如何なる時、如何なる命令にも従います」

エスデス軍の中でも、やはりこの3人は別格だ。

単純な戦闘力は勿論、エスデスへの忠誠と言う意味でも、他の兵士達より図抜けている。

この3人は何れも、エスデスの為なら笑って死地へ飛び込んで行く猛者達である。

そんな彼等が今回狩るべき目標は、考えられる限り最高の獲物となる事は間違いない。何しろ、相手は帝都を騒がす凶賊ナイトレイド。油断をすれば間違いなく、こちらが食い尽くされるの程の強敵である。

故にエスデスは、自分の配下の中で最強である、この3人を投入すると決めたのだ。やがて、エスデスの命令を受けてリヴァ達が中庭を出て行く中、1人の少年が入れ替わりに歩いて来るのが見えた。

トキハはすれ違う際に、リヴァ達と気軽な挨拶を交わすと、その足でエスデスの元までやって来た。

「どうだ、宮殿の暮らしは？」

「息が詰まる。よくこんな所で生活できるな」

素っ気ないトキハの言葉に、エスデスはフツと笑みを浮かべる。

何とも、この少年らしい回答だった。確かに、宮殿内は護衛の兵が多く、やたらと規則にうるさい面がある。慣れない人間ではいくが詰まる事だろう。

出会った頃はボロボロの旅装束を着ていたトキハも、今は提供された帝国軍制式軍装に身を包んでいる。

北方で拾われ、そのままエスデスに協力したトキハは、彼女の帝都帰還に便乗する形で、自身も帝都に来ていた。



「リヴァ達、出撃するの?」

「ああ。陛下からの勅命でな」

言つてから、エスデスはため息交じりにトキハを見やる。

「今回の件、お前も手伝つてくれたら、もう少し話は簡単なんだがな」

「言つたはず。俺にはやる事があるつて」

対して、トキハは素つ気ない口調でエスデスの申し出を突っぱねた。

エスデスから視線を外し、トキハは遠くを見やるように目を細める。

そう、自分には成すべき事がある。

その為に帝国に入ったのだ。

ならば、他の些事に関わっている暇は無かった。

だが、

それを聞いたエスデスの瞳が、面白い物を見付けたとばかりに輝きを放つた。

「ほう、目的とはな。そう言えばまだ、お前が帝国に来ようとしていた理由を聞いていなかったな」

「……………そうだね」

そう言えば、まだ話していなかった事を思い出し、トキハは頷きを返す。

エスデスは帝国に入る為に色々と便宜を図ってもらっている。彼女になら、話してお

いても良いと思った。

面白そうな話を聞けることを期待して待つエスデス。

それに対し、トキハはボソツと言った。

「仇を探している」

「仇？」

問いかけるエスデスに対し、トキハは領きを返す。

トキハは、帝国のある大陸の、更に東にある島国の出身である。

そこでトキハは、ある程度裕福な家庭で育った。

国の武術指南だった父に幼いころから剣を習い、同年代の少年たちの中では一番の使い手だった。

母親も氣立てが良く、トキハはそんな両親が自慢だった。

そのまま行けば、トキハは何の不自由もしない、幸せな一生を送った事だろう。

だが、そんな幸せは、ある日突然、乾いた砂のように崩れ去った。

ある夜、突然屋敷に押し入ってきた3人の凶賊が、何もかも奪って行ったのだ。

武術師範だった父は、寝こみを襲われて応戦する事も出来ないまま惨殺された。

騒ぎに気付いた母は、幼いトキハを蔵の中に隠した後、どうにか自分も逃げようとしたが、やはり捉えられて斃り殺しにされてしまった。

自警団が駆けつけるのが、あと数刻遅ければ、トキハの命も危なかったかもしれない。こうして、一夜にして両親を失ったトキハ。

だが、そんなトキハに、国は冷たい仕打ちで答えた。

凶賊相手に何の抵抗もできないまま殺されたトキハの父を、軍の重責である武術指南役に据えていた事を国の恥と考えた官僚達は、トキハの父の名を登録から抹消し、事件その物を無かった事にしてしまったのだ。

当然、1人残されたトキハには何の保証も庇護も与えられず、家名も家財も没収。殆ど身一つで放り投げられた。

親戚や父の弟子だった者達も、押さないトキハには見向きもしなかった。誰もが「凶賊に殺された恥知らずな武術指南の息子」に関わる事を避けたのだ。

「そんな俺に、唯一残されたのが、これだった」

そう言つて、トキハは手にした刀を掲げて見せる。

この刀は、トキハの父が家宝として、家の地下蔵に隠しておいたのだ。その為、国に没収される事も無かったのである。

これは、ただの刀ではない。鞘に収まった状態でさえ、その禍々しさは、隣に立つエスデスにも伝わってくるようだ。

《邪神転生 玉梓》  
じゃしんでんしやう たまずき

初めて見た時は気付かなかったが、これも帝具の一つである。

500年前の帝国内乱で国外に流出した帝具の一つが、巡り巡ってトキハの家に受け継がれて来たらしかった。

両親を殺され、この帝具を手にしたトキハはその後、幼い身でありながら優れた剣術の腕を買われ、用心棒や暗殺稼業をしながら両親の仇を追い求め、この帝国までやって来た訳である。

「あいつらは、許さない．．．．．絶対に見つけ出して、俺が斬る」

低い呟きと共に、手にした刀を握り締めるトキハ。

そんなトキハに、エスデスは興味深そうな視線を向ける。

正直、殺されたトキハの両親には、何の興味も湧かない。

「弱肉強食」はエスデスの生きる上でのモットーであり、生き様でもある。この世は強い者が生き残り、弱い者は皆、蹂躪され、踏みつけられても何も言えない。どんな綺麗事を唱えたところで、それが真理だ。

エスデス自身、そのモットーを常に体現しながら生きている。

トキハの両親は弱かったから殺された。幼いトキハは弱かったから、両親を守れなかった。ただ、それだけの話である。

だが、その両親が殺された事から来る事で得られた、トキハの強さは興味深かった。

トキハは強い。今だ10代と言う若さにありながら、その強さは群を抜いていると言つて良いだろう。

それは北方異民族軍との戦いにおいて、《北の勇者》ヌマ・セイカの側近2人を一瞬で斬り殺した事で証明している。

帝具の存在に加えて、トキハ自身の力もまた大きな戦力となる事は間違いない。

現在、エスデスが構想中の特別警察組織に、是が非でも欲しい逸材だった。

「なるほどな」

話を聞き終えたエスデスは、納得したように頷くと、名案を思い付いたようにトキハに言った。

「では、その仇探しとやら、私が手伝つてやろう。なに、こう見えて私も將軍だ。使えるコネは多いからな」

エスデスとしては、ここで仇探しを手伝つて、その代りトキハが自分に協力するよう持つていくつもりだった。

だが、

「いらぬ。自分で探すから」

そう言うトキハは、踵を返してエスデスに背を向け、そのまま歩き去ろうとする。

人の手を借りる気は無い。今までも、そしてこれからも。

トキハはこれまで、1人で仇を追い求めてきた。ならば、ここから先も1人でやるつもりだった。

だが、

「ほほう」

そんなトキハに、エスデスは勝ち誇ったように言う。

「当てはあるのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エスデスの指摘に、ピタツと動きを止める。

「この広い帝国を、お前1人で探して回るわけか。いったい何年かかるだろうな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そもそも、お前は帝国に来たばかりだろう。知り合いはいるのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあ、それでもやると言うのなら、敢えて止めませんが、そこまでの馬鹿は、流石の私でも見た事が無いぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぐうの音も出ないトキハ。

自他ともに認めるDSのエスデスに、口げんかで勝てるはずがなかった。

一方、自身の勝利を確信しているエスデスは、不敵な笑みを少年の背中に容赦なく浴びせる。

少々、大人げない光景ではあるが。

くるつと、再度踵を返すトキハ。

もつとも、その表情は、先程よりも少し仏頂面になっている気がするのを見間違いではないだろう。

「うん、どうした？　行くなら止めはせんぞ」

「……………気が変わった」

そんなトキハを見て、エスデスはフツと笑う。

勝ち誇るエスデスに対し、不愛想にそっぽを向くトキハ。

勝敗が何れであるかは、火を見るよりも明らかだった。

「まあ、そう焦って動く事もあるまい。腕の良い情報屋には何人か心当たりがある。『果報は寝て待て』と言うだろ」

そう言うのと、トキハの頭を軽く叩くエスデス。

振り向くと、エスデスは苦笑とも微笑ともつかない笑みを、トキハに向けてくるのだった。

その時、

廊下を複数の足音が、こちらに向かって近付いて来るのが耳に聞こえてきた。振り返るトキハとエスデス。

その視線の先には、白一色のマントに身を包んだ一団が、整列して歩いて来る。その先頭に立つ男。

他の者とは違い、紅いマントに身を包んだ男は、湖面のような静かな瞳を向けると、エスデスに向かって笑い掛けた。

「これはエスデス将軍。無事なる帰還を、お慶び申し上げる」

静かな、しかし心の底まで染み渡るような、存在感のある声が発せられる。

それに対し、エスデスも笑みを持って応じる。

「久しいな、ヒースクリフ、一別以来か。お前達の活躍は聞き及んでいるぞ」

帝国近衛軍特別機動部隊「血盟騎士団」団長ヒースクリフ将軍

近衛軍内において、ブドー大将軍が自身の右腕とも恃む人物であり、自身も帝具を操る剣士として名を馳せる人物である。

しかし、そのような大層な肩書きなど、見た目からは想像もできない程、ヒースクリフは穏やかな顔付をしている。

剣士と言うよりも、おとぎ話などに登場する魔法使いを連想させる出で立ちだ。

剣を取って戦場を駆けるよりも、どこかの学校で教鞭でも取っていた方が、余程似



合っている気がする。

と、エスデスはヒースクリフの背後に控える少女に目をやった。

「そちらはっ？」

「はい。こちらは私の副官で、」

「お初にお目に掛かりますエスデス將軍。血盟騎士団副団長を務めるアスナと申します」

初めて会うエスデスに対し、アスナはやや緊張気味にエスデスに挨拶する。

無理も無い。何しろ、相手は帝国最強を地で行く存在だ。緊張するなど言う方が無理な話である。

そんなアスナに対し、エスデスはフツと笑い掛ける。

「活躍は聞き及んでいる。血盟騎士団の副団長と言えば、如何なる凶賊であろうとも、名前を聞いただけで震え上がるとか。しかし、それがこんな可愛い少女であるとは思わなかったぞ」

「いえ、そんな……」

思いもかけずに褒め言葉を貰い、顔を紅くするアスナ。

帝国最強に褒められたのだ。それも、武勲と容姿双方を。嬉しくないはずが無かった。

そんな2人のやり取りを横目で見ていたヒースクリフが、口を開いた。

「いずれ、機会を設けて、北での土産話など聞かせてもらいましょう」

「連中が弱すぎたから大した話にはならんと思うが、まあ、暇つぶし程度得良ければ、その内にも」

そう言うときエスデスは、部下達を引き連れて去って行くヒースクリフを送る。

やがて、一行の姿が見えなくなるのを見計らうように、トキハは口を開いた。

「強いね、あいつ」

ポツリと呟くトキハに対し、エスデスはホウツと口元を吊り上げて尋ねた。

「それはヒースクリフの事か？ それともアスナ嬢の方か？」

「どっちも、かな」

トキハは2人の事を思い出しながら言った。

アスナは強い。トキハとそう変わらない歳だと思われるが、既に何度も実戦をこなして、その可憐な容姿に似合わない、ある種の凄味のような物を身に着けている感すらある。

一方のヒースクリフとは言えば、こちらはもう、トキハにとっては別次元の強さと言つて良いかもしれない。正直、底が見えないと思えるほどの強さが、ヒースクリフからは感じられた。

「それが判るなら、お前も充分に見込みがあるよ」

そう言ってからエスデスは、付け加えるように口を開く。

「覚えておけ、トキハ。もし今の帝国軍内で私に勝てる存在がいるとすれば、それは二人。一人は大将軍のブドー。そして、もう一人が、あのヒースクリフだ」

その言葉に、トキハは思わず息をのむ。

エスデスをして負けるかもしれない、と言う可能性を示唆させるほどの存在がいるとは。

正直、トキハからすれば、想像の埒外である。

いや、それより何より、

「エスデス、何で嬉しそうなの？」

「うん？」

不思議そうに尋ねるトキハ。

自分が負けるかもしれない可能性について語るエスデスだが、その口元には愉悦の笑みが見えかべられている。

「当然だろう。私を負かす程の相手だぞ。やり合えばさぞ、楽しい戦いができるはずだ。想像しただけでも心が高鳴る」

「あつそ……」

嬉しそうに語るエスデスに対し、トキハはそつけない返事を返す。

流石は戦闘狂と言うべき台詞である。

恐らくエスデスにとっては、戦って戦って、その果てに敗れて死ねるのであれば、自分の死ですら享樂の一つとしてとらえる事ができるのであろう。

つまり、今のエスデスは自分の好む世界にどっぷりと浸かり、欲しいままに貪っているのだから。

「ある意味、羨ましい状況ではあるよね」

「ん、何か言ったか？」

「別に」

そこで、エスデスはからかうような笑みをトキハに向ける。

「まあ、そんな事よりもお前には、アスナ嬢の美しさの方が目に入ったのではないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エスデスの言葉に、トキハは先ほど顔を合わせた血盟騎士団副団長アスナと言う少女の事を思い出す。

整った顔立ちに、流れるような茶色の髪が特徴の少女。

確かに、あれほど美しい少女など、故郷でも見た事が無い。一瞬、伝説上の良きものである天使が降臨したのかと思った程である。

しかし、

明らかにからかい目的で話を振ってきたエスデスは、笑いながらトキハを見据えてきている。

その顔が何となく腹立たしかったので、

「別に」

先程と同じ言葉で、お茶を濁しておいた。

## 第11話 「宮殿での邂逅」

## 第12話「偽ナイトレイド現る」

2

折り重なるような悲鳴が、連続して聞こえてくる。

大気中に舞う血飛沫は、それだけで視界を朱に染めるようである。

赤い飛沫が飛び散る時、確実に1人分の命が失われていた。

「ハーハッハッハ!! そらそら、逃げろ逃げろゴミクス共がア!!」

耳障りな笑い声が、そんな彼等の耳に木霊する。

目を転じれば、小高い丘の上に立った青年が、弓を手にして眼下で逃げ惑う人々を見下ろしている。

青年は小奇麗な服を着て身なりを整えており、どこかの貴族の子息であると考えられる。

それに対し、逃げ惑う人々は皆、襤褸を纏っている。恐らく、スラムや地方から連れてこられた人々なのだろう。

その青年が放つ矢によつて、また一人、犠牲者が地面に倒れた。

これは、青年による狩りだった。

人間を標的にし、逃げ惑う彼等に矢を射かけて狩る。それが青年の人生にとつての唯一の楽しみだった。

貴族の四男として生まれた青年にとつて、日常は退屈極まりない物だった。

家督は兄である長男が継ぐ事が決まっておリ、その長男に万が一の事があつても二男と三男が控えている。つまり、四男の青年では、どうあがいても家を継ぐ事が出来ないのだ。

それが判っている為、家中の誰もが青年には見向きすらしない。

何をやつても無駄。青年の未来は青年が生まれる前から定められていた。

日々、鬱屈した毎日を送る青年が、そんな日常の中で見出したのが「人間狩り」だった。

文字通り、人間を獲物に見立て、狩りの要領で殺していく。

獲物は弓や銃を使う場合が多いが、相手が抵抗できない女子供であつた時には、剣や槍で直接殺す時もあった。

勿論、狩場の周囲には彼の、と言うより彼の家に仕える兵士達が固め「獲物」を逃がさないように監視している。

更に「獲物」を狙い、矢を放つ青年。

しかし、もともと武術の心得がある訳でもなく、弓を使っているのも単なる雰囲気重視した結果に過ぎないため、お世辞にも腕が良いとは言えない。

青年が放つた矢は、てんで明後日の咆哮へと飛んで遺棄、木の幹に突き刺さるだけにとどまった。

その様子を見て、青年は舌打ちする。

「クソツ ゴミクズの分際で、この俺の矢をかわすとは生意気なツ」

吐き捨てるように言うと、背後の兵士に目配せする。

「おいッ やれ」

「はッ」

青年の命令を受けた兵士達が、さきほど逃げ延びた「獲物」に駆け寄り、手にした剣で斬り伏せる。

地面に倒れる「獲物」。

その光景を見据え、青年は口元に薄ら笑いを浮かべる。

最高だった。



この人間狩りをしている時だけが、彼にとって人生に価値ある瞬間だった。

どうせ「獲物」はスラムの住民や地方で暮らす田舎者。何の取り柄も存在価値も無いクズたちである。そんな奴等を何人殺そうが構わない。むしろ薄汚い奴等を消して、国を美しくする手伝いをしていと言う達成感すらあつた。

この瞬間こそが、彼にとっての全てであつた。

「そらッ 逃げないと殺しちまうぞお!!」

言いながら、更に弓を引き絞る青年。

次の瞬間だった。

飛来した四条の光が一瞬にして、弓を構えた青年の体を貫いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

自分の身に何が起こしたのかすら理解できず、呆けたような声を仰げる青年。

腕から力が抜け、手にしていた弓が地面に滑り落ちる。

撃ち抜かれたのは、両手首と両膝。

傷口からは、鮮血が溢れだす。

飛び散る深紅の血飛沫は、先程から見慣れている光景と同一のものである。

しかし先程と異なる点は、その血飛沫が青年自身の体から飛び散つていと言ふ事であ

る。



やがて全てが終わった時、その場に立っていたのは2人の少年だけだった。

「こいつが今回の標的か？」

「ああ。護衛の兵士は全部倒したから、後はこいつだけだ」

剣を構えながら尋ねるタツミに、キリトは低い声で答えると、おびえた目で自分達を見上げてくる貴族の青年を見やる。

シノンのシエキナーで奇襲を掛け、そこへタツミとキリトが飛び込んで護衛を全滅させるという今回の作戦は、予想以上にうまくいった。

剣を構えて前へと出るタツミ。

その姿に、青年は涙と鼻水でぐしょぐしょになった顔を向ける。

「な、何なんだよ、お前等ッ どうしてこんな、ひどい事……お、俺が何したつて言うんだよ!」

怯えきった声で尋ねてくる青年の目には、本気でこの事態を招いた原因が何であるか判らない、と言った感情が見て取れる。

どうやらこの青年は、自分が如何に外道な行いをしたのかと言う考えすら、頭に無いらしい。

これは別に、この青年だけが例外と言う訳ではない。

特権と言う名の毒に浸かり、脳までとろけさせた今の貴族たちの大半は、身分の低い

者達を人間とすら見ていない。

だからこそ、こんな非道な真似を躊躇無くできるのだ。

揃って嘆息する、キリトとタツミ。

この手の人間に何を言っても無駄な事は判り切っている。ならば、自分達にできる事を速やかに実行するだけだった。

「出血大サーブリスだ。地獄に送ってやるから、そこでじっくり考えな」

そう言つて剣を振り翳すタツミ。

その刃が振り下ろされる瞬間まで、青年は自分がなぜ殺されなくてはいけないのか、ついに気付く事は無かった。

## 2

学生と殺し屋。

光と闇。

ある意味、相反する二つの身分を持ちながらも、シノンは最近では、その両方を両立

させる事に慣れ始めていた。

自分のロッカーを開きシエキナーを収めたバッグを入れると、念のために鍵を閉め、その足で自分の教室へと向かう。

一仕事を果たしたばかりだと言うのに、それを表情に出さない程度には、シノンも成長していた。

今回の任務は、密かに人間狩りと称してスラムから浚ってきた人々を殺していた、とある貴族の子弟の抹殺。問題の子弟だけでなく、その護衛も人間狩りに加担して手を貸していたのだから同罪である。

出撃メンバーはキリト、タツミ、シノンの3人だけだったが、仕事自体は特に問題が起こる事も無く、無事に完了する事が出来た。

元々、何の取り柄も無く遊びほうけている貴族の四男坊と、それに追従して墮落した護衛の兵達である。帝具を持つキリトやシノンは勿論、殺し屋として場数を踏み、急速に成長しつつあるタツミの敵ではなかった。

こうして、無事に仕事を終えたシノンは、その足で帝都に戻り、翌日の授業に出席するべく登校したのである。

すれ違う学生たちの顔を眺めながら、シノンはホッと息を吐く。

平和な光景だ、と思った。

帝国は今、内乱と言う未曾有の危機に晒されていると言うのに、帝都の内部はこうして、学生が笑顔で生活できる程度の平和は保たれている。

誰もが、1000年続いた帝国が倒れる事などあり得ないと、心の底から思っているのだ。

平和な面を見せる帝国の表の顔と、その裏で行われている戦争と言う裏の顔。

果たしてどちらが、今の帝国の本当の姿なのか？

時々、そう考える事がある。

と、

「シノのん」

慣れ親しんだ愛称で呼ばれてシノンが振り返ると、友人の可憐な姿が目飛び込んできた。

学生服姿のアスナは、特徴的な茶色の髪をなびかせてシノンの元へと駆け寄ってくる。

当然だが、アスナの腰には愛用の細剣は無い。今は血盟騎士団副団長としてのアスナでは無く、学校に通う一学生であるアスナとしてこの場に立っていた。

相変わらず綺麗だと思う。

駆け寄ってくるアスナを眺めながら、シノンはそんな事を考える。

「アスナ、おはよう」

「おはよう。今日は早いなね」

アスナの言葉に、シノンは苦笑を返す。

最近、夜の仕事もあるせいとか、少し登校が遅れる事も多い。怪しまれないように、なるべく欠席だけは避けるようにしているのだが、それでも、多少の無理が生じる事は避けられなかった。

昨日は仕事の後、アジトでは無く、帝都にある自分の部屋に戻ってきていた為、遅れずに登校する事が出来たのだ。

「て言うかアスナの方こそ、最近は放課後になると急いで帰る事が多いよね。何かあるの?」

「うん、家の事情で、ちょっとね」

言ってから、アスナはシノンに気付かれない程度に、顔を伏せる。

実際には家の事情では無く、血盟騎士団の仕事をして居る為、放課後はなるべく早く上がるようにしているのだが、それをシノンに話すわけにはいかなかった。

だが、当然の事ながらアスナは、自分が近衛軍に所属している事をシノンに話す事はできない。血盟騎士団は精鋭部隊である為、内部機密情報に関しては重大なかん口令が敷かれているのだ。

親友を騙す事について、若干の抵抗感を感じつつも、アスナは口を閉じるしかなかった。

ある意味、シノンとアスナの関係程、複雑な物是他にあるまい。

暗殺者と近衛兵。

まさか相反する二人の人間が、親友として同じ学び舎で過ごしているなどは、当人たちも含めて、誰も知る由も無かった。

「あ、でも、今日は割と暇だから、どこかに行くなら付き合えるよ」

「そう？ なら、良いお店見つけたから、付き合いなさいよ」

そう言つて笑いあう少女達。

その光景だけを見るなら、彼女達が戦いと言う非日常の場に身を置いているとは、とても思えなかった。

だが、少女達は互いに、欺瞞を抱えている。

その事を知らずにいる事は、果たしてお互いにとって幸せなのか不幸なのは課は、当人たちを含めて、誰にも判らない事だった。

やがて、クラスが違う事もあり、シノンとアスナは手を振つて別れる。

背中を向けて去つて行くアスナに手を振り、自分も教室に向かうべく踵を返すシノン。



その時だった。

「良い店があるんだったら、是非とも俺も連れてって欲しいな」

「あんたなんか、アスナに紹介できるわけないでしょ」

廊下の陰から、ごく自然に投げ掛けられた言葉に、何の気なしに反応するシノン。  
と、

「ツ!？」

数歩進んだところで、思わず振り返って声の主を見る。

果たしてそこには、

殺し屋が、学園指定の制服を着て立っていた。

線の細い、女の子のような印象のある少年が、口元にはふてぶてしい笑みを浮かべて、シノンに手をあげている。

そのあまりにも現実離れた光景に、思わずシノンは絶句してしまった。

「あ、あ、あんた、何でここにツ……」

普段の黒ずくめの恰好に見慣れてしまったせいか、なかなか違和感のある風体である。

だが、当のキリトとは言えば、そんな事は知った事ではないとばかりに、馴れ馴れしくシノンに近づく。

「シノンの護衛するんなら、学生に成りすました方が良いと思つてな。なかなか似合つてるだろ」

「……………」

シレットとした感じに告げるキリトに対し、シノンはと言えば無言のまま、睨み付ける。今この場にシエキナーがあつたら、迷う事無く目の前の男に矢を放つているのではないだろうか？

だが、とうのキリトはと言えば、そんな少女の感情などどこ吹く風とばかりに、ニヤニヤとした笑いを顔に張り付けている。

「……………ストーカー？」

「人聞きの悪い事言わないでくれ」

腹立ちまぎれにボソツと告げたシノンの言葉に、キリトはガツクリと肩を落として反論する。

しかし、

女の子の後をつけ回し、ついには学校にまでやってくる野郎が一匹。傍から見たら、確かにストーカーと思えない事も無い。

「帝具はどうしたのよ？」

「エギルの店に預けて来た」

あつさりと答えるキリト。

まあ、エギルはナイトレイドの協力者の1人だし、性格的にも（少なくとも目の前のストーカー野郎よりは）信用できるから問題は無いだろう。

とは言え、キリトがわざわざ学校まで来てシノンと接触したのは、何も彼女のストーカー……もとい護衛だけが目的ではない。

気を取り直して声を潜めると、そつと耳打ちする。

「ちよつと、厄介な事態が起こっている。まだ授業始まるまで時間があるだるだろ。少し付き合ってくれ」

「え？」

訝るシノンを連れて、キリトは屋上の方へと歩き出した。

### 3

元大臣チヨウリは、先代の皇帝の代に国政を担い、善政を敷く事によって帝国の礎を盤石な物とした功労者である。

世が世なら「中興の祖」として名を馳せ、歴史に名を残す事も夢では無かったかもしれない。

しかし、現皇帝を擁して台頭したオネストとの政治闘争に敗れ失脚。その後は故郷に引き籠つて隠居生活をしていた。

そのチョウリが今、護衛に囲まれながら帝都への道を再び辿っていた。

「……………この村もひどいな。民あつての国だと言つのに」

馬車の窓から見える風景に、チョウリはため息交じりに言葉を漏らす。

人々に活気は無く、村全体の空気が沈んでいるのは、見ただけでもわかる。

やせ衰え、生きる希望すら見いだせず、ただ朽ちていく事しかできない国民たち。

繁栄の絶頂にあると言われる帝国も、栄えているのは帝都と一部の地方都市ばかり。

農村部は貧困にあえぎ、餓死者が後を絶たないと言う。

かつてチョウリが大臣であつた時は、国を繁栄させる為に如何なる手をも尽くし、民からも絶大な支持を得た物である。

だが、そうした功績によって得られた繁栄も今や、大臣をはじめとした一部の俗物たちによつて食いつぶされようとしている。

そして、帝都の宮殿に住まう者達は、誰一人として、その事を顧みようとはしない。

その末期的な状況を座視する事は、チョウリには絶対にできなかった。

「そんな民を憂い、毒蛇の巣である帝都に戻る父上は立派だと思えます」  
誇らしげにチョウリを褒め称えたのは、娘のスピアである。

長い髪を持ち、凜とした顔立ちの美しい女性はしかし、その手に大振りな槍を持っているのが、何ともアンバランスな光景である。

だが、そんな娘に対し、チョウリは信頼に満ちた視線を向ける。

「命惜しさに隠居している場合では無いからな。このままでは国が亡ぶ。こうなった  
ら、儂は、あの大臣ととことん戦うぞ」

やせ衰えた身ながら、チョウリの心に宿る闘志は、誰よりも熱く燃えている。

チョウリは今度こそ命がけで最後まで戦い、オネストと刺し違えてでもこの国を正しい方向に導くつもりだった。

たとえ志半ばで自分が倒れたとしてもかまわない。必ずや自分に続く者が現れ、帝国  
を変える為に戦ってくれることだろう。

そんな父の決意を、スピアは誇らしげに見る。

「安心してください。父上の身は私が守ります」

そう言つて、勇ましく槍を掲げて見せるスピア。

スピアはチョウリが抱える護衛部隊の隊長を務めており、幼少期から皇拳寺で修行  
し、槍術の免許皆伝を受け取る程の腕前を持っていた。

この旅の途中で何度か会った盗賊の襲撃も、スピアが中心となって全て撃退している。

そんなスピアを、チョウリは苦笑しながら見据える。

頼もしい事は頼もしいのだが、この勇ましきのせいで、なかなか嫁の貰い手が無い事が悩みの種である。

娘の事を誇らしく思う一方で、チョウリとしては、早く孫の顔が見てみたいという想いもまた存在していた。

と、その時だった。

それまでゆっくりと走っていた馬車が、急に停車する。

何事かと、身を乗り出して馬車の前方を確認したスピアは、険しい表情で槍を握る手に力を込めた。

一行の行く手を遮るように、3人の男が道を塞いでいる。

中央に少年のような小柄な男、左右にそれぞれ、壮年の男性と、手に斧を持った大男。明らかにこちらを標的と定め、交戦の意志を示しているのが判る。

警戒を強めるスピア。たった3人の襲撃者はしかし、これだけの護衛を前にして、道を譲る気は無いらしい。

「また賊かッ 治安の乱れにも程があるぞ!!」

舌打ち交じりの父の言葉を受け、スピアは扉を開けて馬車の外へと出る。

賊はたったの3人。どれ程の実力者かは知らないが、こちらは30人の護衛部隊だ。しかもスピアは皇拳寺出身の槍の達人。まともに戦って負けるはずが無かった。

「陣形を組めッ 今までと同じように蹴散らす!!」

スピアの指示を受け、護衛の兵士達は武器を手に、3人を取り囲んで行く。

それに対して、賊の方は大柄な男が斧を手に前へと出た。

その瞬間を見計らうように、スピアを中心に、護衛部隊が一斉に襲い掛かる。

洗練された動きで、斧男に迫る兵士達。

スピア自らが鍛え、今回の護衛役に選抜した兵士達は、期待通りの実力を発揮して、これまで全ての賊を屠り尽くして生きた。

今回も、必ずやそうなる筈。

スピアは、そう信じて疑わなかった。

次の瞬間、

斧を持つ男の剛腕が旋風を伴って旋回する。

吹き荒れる強風が、大気を粉碎する。

「なッ!?!」

思わず絶句するスピア。

一撃。

ただ、それだけだった。

そのただ一撃で、護衛の兵士は根こそぎ粉碎され、斬り飛ばされてしまった。

最前線で槍を構えていたスピアは辛うじて防御が間に合ったものの、槍は中途から斬り飛ばされ、自身も腹部を横一線に斬られる

崩れ落ちるスピア。

「馬鹿な………」

スピアは、信じられない、と言った感じに言葉を漏らす。

まさか、皇拳寺皆伝である自分の槍が、手も足も出せないとは。

絶望感に打ちひしがれるスピアの前に、少年のような外見の男が、ニコニコとした笑顔顔を張り付けてしやがみ込んだ。

「へえ、お姉ちゃん、やるねえ。ダイダラの攻撃を受けて死なないなんて」

無邪気に囁かれる声は、正しく純真な少年を思わせる。

しかし、周囲に兵士達の死体が転がる中で囁かれる声は、どこか精神のバランスを欠いた不気味さを感じさせる。

「でも………」

言いながら、男は懐から大振りなナイフを取り出す。



「これから起こる事を考えると、死んどいたほうが楽だったかもね」  
そう言つて無邪気に笑う男。

それに対して、スピアは恐怖のあまり、背筋が寒くなるのを止められなかった。

一方、護衛を一掃した大男は、チョウリの乗る馬車目がけて、大斧を振り上げようとしていた。

一閃と共に破壊される馬車。

馬車を操つていた御者は、その一撃で大きく吹き飛ばされて地面に叩き付けられる。

チョウリ自身は、馬車が破壊される寸前に脱出した為、どうにか難を逃れる事が出来たが、しかし、その行為は、彼の寿命をほんの数秒伸ばしただけに過ぎなかった。

逃げた先に待ち構える、壮年の男が、地面に座り込んだチョウリを冷やかな目で見下ろしている。

紳士然とした姿と物腰は、3人の中では、もともともな外見をしている。

しかも、着ている制服は見覚えのある物だった。

「お、お前はッ 帝国の士官か!？」

「はい。あなたの政治手腕は尊敬しておりました」

そう言つて、恭しく頭を下げる男。

その物腰一つとっても、教養を持った人物である事が伺える。あるいは、この男であ

るならば、話を通じるかもしれないと思った。

「ならばなぜ、私の命を狙う!？」

説得を試みようとする問いかけるチョウリ。

自分はこので倒れる訳にはいかない。何としても帝都へ行き、オネストによる恐怖政治を打倒しなくてはいけないのだ。

その為に、諦める訳にはいかない。

だが、その行為は全くの無駄でしかなかった。

「主の命令は絶対ですのぞ」

冷徹な声で告げる男。

次の瞬間、

一閃された手刀が、チョウリの首を容赦なく斬り飛ばした。

「しっかし、大臣も面倒くさい手を使うよな。政敵排除だったら、いつもみたく罪着せればいいのに」

「ブドー大將軍庇護下の文官に、その手は通じんよ」

仕上げるピラを撒きながらダイダラのボヤキに、同じくピラを撒きながらリヴァが応

じる。

今回彼等に与えられた任務は、反オネスト派の文官暗殺である。

エスデスが構想する特別警察に必要な7人の帝具使いを集めるには、相応の時間がかかる。そこで、その時間を利用して、オネストは自分の政策に反対する文官達を一掃してしまおうと考えたのだ。

賢しらに正論を吐く文官たちの存在は、オネストにとつて煙たい存在でしかない。無論、一人一人の力は大したことは無い。オネストが権力を振るえばすぐにでも叩き潰せるだろう。

しかし、連中が結束し、反オネストの動きを強めれば厄介な事になりかねない。最悪、<sup>革命軍</sup>反乱軍と連動して、国家転覆などと言う不屈きな事を考えるかもしれない。

それらの事を警戒したオネストは、エスデスに頼んで文官暗殺を依頼したのだ。

エスデスとしては、本戦前のほんの余興みたいなものである。

ただ、少々特殊なのが、暗殺達成の後に、このビラまきをする事だった。

「あー、そつかつ それで俺等の出番か!!」

「前の現場でも説明しただろうが」

説明を聞いて豪快に笑うダイダラに、リヴァは呆れ気味に嘆息する。

ダイダラの戦闘力は凄まじいのだが、所謂、単細胞キャラである為、細かい事は一切

気にしないのが困りものだった。

まあ、余計な事をいっさい考えず、ただ戦場で思う存分暴れる事だけを考えている事は、ダイダラの長所である。リヴァは考えているのだが。

2人がピラを撒き終える頃、軽い足音と共にニヤウが駆けてくるのが見えた。

「ねえねえ、見て見てリヴァ!! じゃーん!!」

そう言つて嬉しそうにニヤウは、手にしたものを掲げる。

それは、白いデスマスクである。肌は色白で妙に整つており、目や鼻、口が不気味に浮かび上がっているのが判る。

「またコレクションが増えたよ!!」

デスマスクを見せ付けながら、嬉しそうに笑うニヤウ。

だが、そのデスマスクの縁には、何やら赤黒い物がこびりつき、更にあごの部分から赤い液体が滴っているのが見える。

あまりにも生々しいデスマスク。

ハッキリ言つて、見ていて気分が悪くなる代物である事は間違い無い。

それは、剥いだばかりのスピアの顔だった。

ニヤウは、美しい女性の顔を剥いで、デスマスクとしてコレクションする趣味を持っているのだ。

ある意味、3人の中で最も残忍な性格をしているのが、このニヤウであろう。彼の部屋には、今まで収集した数々の女性のデスマスクが所狭しと並べられているのだ。

何とも、おぞましい趣味もあつたものである。

「相変わらず趣味悪いな、ニヤウ……」

ニヤウが嬉しそうに掲げるのデスマスクを見て、流石のダイダラもウツと息をのむ。自他ともに認めるほどに豪胆で残虐なダイダラでも、ニヤウのこの趣味にだけはついていけなかった。

一方のリヴァは、何でもないと云つた風に、ニヤウのデスマスクを見ている。

この中で一番年長者で、長く軍にいるリヴァにとつては、ニヤウの趣味などまだまだ可愛い物である。戦場では、もっとおぞましい光景をいくらでも見て来た。

「ちやんと、トドメは刺したんだろうな？」

「あはは、剥いでる途中でシヨック死しちやつたよ」

あつけらかんと返事をするニヤウに、頷きを返すリヴァ。

これで、任務は完了だった。

「よし、帰還するぞ。作戦成功を祝い、料理を作つてやろう」

リヴァのその言葉を聞いていて、

それまで意気揚々としていたダイダラとニヤウは、途端に震えだした。

「い、いや、いらないうそそれは」

「あの味は帝具級の破壊力だろツ エスデス様ですら、数秒気絶したまわずさぞ!!」

「そうだよツ トキハなんて三日三晩、意識不明だったんだから!!」

言い募るダイダラとニヤウ。

リヴァの趣味は料理なのだが、その味は破滅的と言って良い程にまずく、いったい何をどうすれば、あのような味が再現できるのか不思議で仕方が無かった。

北方異民族との戦いでも振る舞われたのだが、その際に現出した大参事は、押し知るべしと言ったところである。

「大丈夫だ。今度は隠し味に、エビルバードのよだれを入れてみた」

「入れるな、そんなもんツ!!」

落ち着き払ったリヴァに、ツツコミを入れながらその場を去って行く三獣士たち。

残されたピラには、漆黒の鳥と共に、「N i g h t R a i d」の文字が書かれていた。

「で、話って何よ?」

風の強い屋上に出て、シノンはキリトに尋ねた。

キリトがわざわざ、人気の無い所まで連れて来たと言う事は、ナイトレイドの仕事がらみと言う事だ。

それに対し、キリトは手すりに身を預け、眼下の学校の風景を覗き込むようにしながら口を開いた。

「まず一つ、エスデス将軍が、北を制圧して戻ってきた」

その言葉に、シノンは息をのんだ。

帝国最強を名実ともに謳われるエスデス将軍の名前は、シノンも知っている。

それが戻って来たとなると、事態はナイトレイドにとって容易ならざるものとなりつつあった。

「でも、ナジエンダさんの話だと、まだ1年くらいはかかるって……」

「ああ、完全に予想が裏切られたよ。それも、悪い方向にな」  
吐き捨てるように言うキリト。

ナイトレイド側の計画としては、エスデスが北の制圧に気を取られている隙に体勢を整え、革命軍が動く為の盤石の態勢を築いてしまおうと考えていたのだ。

しかし、その案は予想をはるかに上回る速度で帰還したエスデスによって、御破算と

なってしまうた。

「それともう一つ、今、帝都近郊で、文官の連続殺人事件が起こっている」  
「あ、それ、ニュースでやってた」

帝都の外に出た文官が次々と殺害される事件。警備隊も調査に動いているが、未だに解決の兆しが見えていないそうだ。

もつとも墮落しきっている上に、オーガ、セリユーと言った主力メンバーを欠いている今の警備隊が、賊と遭遇してもどれほど役に立つか知れたものではない。

その点に関しては、ナイトレイドにも責任の一端はあるのだが。

「その犯行現場に、こんな物が落ちていたらしい。アルゴに頼んで、1枚手に入れてもらった」

そう言つてキリトが掲げた紙を、シノンはぞ着込んでみる。

そこには、翼を広げた漆黒の鳥が描かれていた。シノンにとつても、よく見慣れたデザインの鳥である。

「えッ ナイトレイドのマーク？ ……でも、何かデザインが違うような……」  
漆黒の鳥は、ナイトレイドのトレードマークである。

しかし、それを見たシノンは、デザインの詳細に違和感を覚えた。

ピラに書かれている鳥は、本物のナイトレイドのトレードマークに比べると、若干ず



んぐりして鈍重そうな印象があった。

もつとも、それは見慣れた人間にとつての印象である。馴染の無い人間が見れば、本物と見分けがつかないであろう。

「要するにパチモンつて事だな。ホシはどうやら、俺達に罪をかぶせたいらしい」

ピラを内ポケットに収めながら、キリトは自分の考えを披露した。

そもそも、ナイトレイドは犯行現場に、このような自分達の存在を示すような物を置いておくような事はしない。自分達はあくまでも闇に潜む者であり、光の中に身を晒すべきではないと考えているからだ。その点から考えても、今回の一連の犯行は、ナイトレイドの行動と矛盾している。

加えて、狙われている文官たちは、所謂「良識派」と呼ばれる人々であり、彼等は現在の帝国の在り方を憂い、どうか改革を行おうとしている者達ばかり。

ナイトレイドの標的は、あくまでも腐敗した官僚達であり、彼等のような良識派官僚は標的に含まれる事はあり得なかった。

キリトは再び顔をあげてシノンを見る。

「今回の一連の殺人事件なんだが、俺はどうも、エスデスが関わっている気がする。確証は無いんだけど」

「どうして？」

訝るように尋ねるシノン。

「タイムイングが合いすぎるんだよ。あいつが帰ってきた途端、今回の事件が起こり始めた。エスデスの帰還と、今回の文官殺しは、連動して考えるべきだと思う」

「じゃあ、エスデス将軍が、文官たちを殺してると言うの？」

シノンは率直な考えをぶつけてみる。

エスデスが手を下して、良識派の文官殺しを行っているのだろうか？

しかし、それではエスデスのイメージに合わない。伝え聞くエスデスの残虐性は、相手が強敵であればある程に強く発揮される。文官のような力の無い人間を直接狩るのは、彼女のキャラクター性にそぐわなかった。

それに関しては、キリトも同意見なのだろう。難しい顔のまま考え込んでいる。

「それは判らない。何しろ、情報が少なすぎるあらな。直接手を下しているのか、あるいはたんに命じているだけなのか……いや、待てよ……」

キリトは説明しながら、頭の中で整理する。

今回の文官殺しで、最も得をするのは誰か？

それは間違いなく、彼等の政敵であるオネスト大臣と、その取り巻き達だ。何しろ、殺されているのは反オネスト派を掲げ、帝国の改革を主張する者達なのだから。良識派の文官が一掃されれば、オネスト派は大手を振って今以上に国政を意のままにできる。メ

リットは幾らでもあった。

加えて、エスデスは裏でオネストと繋がっていると言う噂もある。

もしキリトの想像通り、文官殺しの犯人がエスデスないし、その関係者であるとすれば、今回の一件、裏で糸を引いているのは大臣のオネストと言う事になるのではないだろうか？

あの大臣ならやりかねない、というか、確実にやるといふ気はする。

だが、いずれにしても証拠は無い。

ナイトレイドは無法者の殺し屋集団だが、それだけに証拠も無しに仕事をする事は許されなかった。

「シノン、もしかしたら、近いうちに大きな戦いがあるかもしれない。君も覚悟しておいてくれ」

「……判った」

真剣な眼差しをするキリトに、シノンも緊張した面持ちで頷きを返す。

敵の狙いが何であるにせよ、勝手に名前を使って暴れているような輩を許すわけにはいかない。近いうちに必ず、ナジエンダから出撃命令が下る事が予想された。

ちようどその時、会話をする2人の元に予鈴を告げるベルが鳴り響いてきた。

どうやら、予想以上に長く話し込んでしまっていたらしかった。

「あつと、私、もう行かないと」

「ああ、引き留めちゃったな。悪い」

踵を返すシノン。

その時だった。

突然、突風が二人の間に吹き抜けた。

「キャツ!?!」

捲れあがったスカートを、とつさに押さええるシノン。

しかし、

白と水色のストライプ柄が可愛らしいパンツは、後ろに立っていたキリトの視界にバツチリ映り込んでしまった。

小振りながら張りのあるお尻は柔らかかそうな印象があり、つい「触ってみたい」と思える程である。

スカートを押さええながら、顔を真っ赤にして振り返るシノン。

対して、キリトも顔を赤くして後ずさる。

殺し屋だろうが何だろうが、キリトも年頃の少年である。同年代の少女の艶姿を見て、何も感じない筈が無かった。

「……あんだ、まさかこれを狙って、ここに連れて来た訳じゃないでしょうね?」

「ち、違う違うッ 誤解だ!! アクシデント!! 冤罪!! 不慮の事故!!」  
必死に否定しようとするキリト。

しかし、恥ずかしさで目に涙を浮かべたシノンには、聞く耳持たんとばかりにキリトににじり寄る。

「お、落ち着け、シノン。冷静に、ここは冷静に、な?」

「問答、無用よ!!」

キリトの言い分を一蹴するシノン。

そのままシエキナー……は無いので、素手で殴り掛かる。

「だから誤解だつてば!!」

「ぼつちり見ておいて誤解もへつたくれも無いでしょうが!!」

逃げるキリトに、追うシノン。

平和な学校な屋上で、殺し屋2人が間拔けな鬼ごっこをいつまでも続けていた。

第12話「偽ナイトレイド現る」

終わり

## 第13話「船上の激突」

1

全長が2500キロにも及ぶ大運河。

帝国国内にとつて、貴重な水上交通手段であり、国営水運業の中心となっている、いわば帝国の大動脈と言える。

この運河を完成させるに当たって、当時の帝国はのべ100万人とも言われる民衆を労働力として投入、本来なら20年以上はかかるであろう工程を、僅か7年で終わらせている。

当然、その際に生じた民への負担は大きく、帝国への不信感が強まった事は言うまでも無い。

しかし、事は決して悪い面ばかりではない。

運河が帝国にもたらした利益は莫大であり、それによって帝国の経済面が潤ったのも動かしがたい事実である。

長い目で見れば、運河の完成が早かった事は、プラス面の方が大きかったと言える。また、運河がもたらす恩恵は、経済面だけではない。

それは今、波止場に停泊している巨大な船が物語っていた。

龍船と呼ばれる豪華客船は、大運河での運行を目的に建造された巨大船舶である。

それ1隻が、まるで城塞の如き巨大さを誇り、内部には宮殿並みの内装と、最高級のスタッフによるもてなしによって、この世の天国とも言うべき空間が現出している。

その龍船の甲板に今、キリトとタツミは立っていた。

「ほんとデカいよな、この船。うわっ 地上からもめっちゃ見られてる」

少し興奮気味になタツミの言葉に、傍らのキリトは苦笑する。

気持ちは判る。田舎から出てきたタツミは、こんな大きな船など見た事は無いだろう。

それについてはキリトにも覚えのある話である。帝都に来るまではせいぜい、釣り船に乗った事がある程度である。故郷の田舎に釣り好きな老人がいて、彼にせがんでよく乗せてもらったのを今でも覚えていいる。

今回、タツミの設定は地方から出てきた富豪の御坊ちやま。キリトは、その護衛役の

付き人と言う事になっている。

そう考えれば、これくらいはしゃいでいた方がそれっぽく見えるかもしれない。  
しかし、

「あんまりはしゃいで、落っこちるなよ。その時は助けてやらないからな」

「いや、やらねえよ。て言うか落ちたら普通に死ぬだろ、これ」

「いやいや、やってみないと判らないぞ。じゃあ、早速試して……」

「みないし!!」

ギャーギャーと騒ぎ始める少年2人。

と、次の瞬間、

ゴンツ　ゴゴンツ

「あだツ!」

「いって……」

突然、脳天に奔った衝撃に、仲良く頭を押さえるタツミとキリト。

そんな2人の傍らに、僅かな気配が浮かんだ。

「お前達、いくら何でもはしゃぎ過ぎだ。表向きはしゃぐなどは言わんが、敵がどこからくるか判らない以上、常に気は引き締めておけよ」

「あ。兄貴」



「言われなくても判つてるよ。けど、殴る事無いだろう」

軽くコブができた頭を押さえ、口々に言い募るキリトとタツミ。

ブラートは現在、インクルシオの奥の手である透明化機能を使い、キリトたちと共に龍船に潜入している。

これは、ブラートの顔が既に、手配書として出回っている事が原因である。

今回の任務は、そこまでして戦力を投入しなくてはならない程、難易度の高いミツシヨンとなる事が予想されていた。

ことの発端は数日前、アジトで行われた会議の場での事である。

最近、帝と近郊で起こっている、連続文官殺害事件。

その凶行は既に4件目になり、被害者も60名を数えるに至った。

しかも座視できないのが、犯行現場に決まればらまかれているピラに漆黒の鳥のマークが描かれており、ナイトレイドによる犯行である事が示唆されている点だった。

これは明らかに、大臣側の罠だった。

大臣としては、政敵である閣僚を葬ると同時に、それをナイトレイドの仕業に見せかけて悪名を広められるのだから、願っても無い状況と言う訳だ。

加えて、この犯行の裏には、明らかにもう一つの狙いがある事が透けて見える。

すなわち、「本物」をおびき出して狩る事。ナイトレイドがノコノコと現れたところ

を、万全の態勢で待ち構えた刺客達が葬ると言う訳だ。

まさに一石三鳥。大臣側は、そこまで計算して今回の事件を仕掛けて来たのだ。

利口な人間なら、今回の誘いはスルーする事だろう。敵が万全な体制で待ち構えている所へ、わざわざ飛び込んで行くことほど愚かな事は無い。

だが、ナジエンダはあえて、虎口に飛び込む選択を下した。

勝手に名前を使われた以上、相応の報いを与える。それが殺し屋の掟である。

たとえ相手が誰であろうと、ナイトレイドの名を騙ってタダで済ませる心算は、毛頭無かった。

方針が決まれば、あとは行動あるのみである。

大臣派に狙われる可能性があり、尚且つ、宮殿の外に出る予定のある文官は2人。

そこで、ナイトレイドも部隊を2つに分けて行動する事になった。

今回、マインはセリユーと戦った際の傷が完治していない為、出撃は見合わせている。

また、レオーネは帝都にいるエスデスの動向を探る任務を帯びて単独行動している為、出撃メンバーは、2人の他にナジエンダを除いた6人となる。

ブラート、キリト、タツミチームは、龍船上でのパーティに出席する人物を、

アカメ、ラバック、シノンチームは、帝都近郊の村に行く人物を、それぞれ護衛する事になった。

勿論、殺し屋が政治家をおおっぴらに護衛する訳にはいかないので、あくまでも密かに潜行する形での護衛となる。

そこで、ブラートはインクルシオの透明化機能を使い、龍船に潜入したと言う訳だ。「でもさ、兄貴」

タツミはチラツと護衛対象の文官に目を向けながら言った。

「あの爺さん、あんだだけたくさんの護衛に囲まれてんだぜ。そうそう手出しできるとは思えないけど？」

「油断は禁物だ。相手が帝具使いなら、多少の護衛なんぞ、いてもいなくても、大して変わらんしな」

楽観論を述べるタツミに対し、ブラートは透明化したまま窘める。

確かにタツミの言うとおり、文官の老人は常に護衛の兵士を引き連れて歩いている。簡単には手出しできない、と言うのはその通りなのだ。

しかし、それでも不可能を可能にしてしまうのが、帝具の恐ろしい所である。

今回の事件にしたところで、4件目の元大臣チョウリは、30名の護衛と共に殺害されている事を考えれば、油断はできない。

多少の護衛など、紙の壁と同じだった。

「了解、そんじゃ、俺は船底の方を見回って来るよ。怪しい奴とかいないかさ」

「おい、キリト。大丈夫かよ、爺さんから離れて」

そう言つて踵を返すキリトに対し、タツミは訝るように言う。

いつ、誰が、どこから襲つてくるか判らない以上、護衛対象から離れるのは危険だと思ふのだが。

対して、キリトは僅かに振り返つて笑みを見せる。

「大丈夫だよ。何かあつたら、すぐに駆けつけるし。それに、ここに居たら俺、浮いてしまふだろ」

確かに、船上はパーティに華やかなムードに包まれ、タキシードやドレスに身を包んだ男女が、楽しげに語り合っているのが見える。

そこに来て、地味な黒ずくめのコートを羽織り、背中には剣まで背負っているキリトの姿は、明らかに浮いていた。

「こつちは任せる。一回りしたら戻つて来るよ」

そう言つと、キリトは船底へと繋がる通路の方へと向かった。

華やかな雰囲気には背を向け、キリトの足はタラップを伝つて階下へと降りていく。

流石、帝国が誇る豪華客船だけあつて、内部の構造も広大且つ複雑である。まるで、それ自体が一つの迷宮であるかのようだ。

キリトは事前に知らされていた内部構造を思い出しながら、奥へと足を進めていく。

その時だった。

「キリト」

背後から声を掛けられ振り返ると、そこには見慣れたリーゼントが見の男が立っていた。

「ブライト、どうしたんだよ？　爺さんの護衛、タツミー人じゃ荷が重いだろ」

訝るキリト。

タツミの能力を信用していない訳ではないが、相手が帝具使いだったとしたら彼の手に残る。キリトかブライト、どちらかがタツミと一緒にいるべきところである。

「インクルシオの透明化機能が限界に来たからな。一旦、解除したところだ」

「なるほどね。帝具の奥の手つても、色々と大変だよな」

そう言つて肩を竦めるキリト。

帝具を持つと言う事も半端な物ではない。帝具使いは帝具使いなりのリスクがあると言う事だ。

対して、ブライトは何かを探るような視線をキリトへ向けて来た。

「な、何だよ？」

「いや、奥の手ね……」

訝るキリトに、ブライトは笑みを浮かべた顔で告げる。

「お前、俺達に何か隠しているだろ？」

「……………」

意味ありげに言うブラートに対し、キリトは無言のまま視線を返す。

ブラートの質問はあえて主語が省かれているが、その質問の意図について、キリトには心当たりがあつたのだ。

秘密主義的なキリトの性格は、ナイトレイドの全員が知っている事である。だからこそブラートは、キリトが何かしら重要な事を、胸の内に秘めていると感じたのだ。

「お前の帝具は文献にも載っていないか？ ほとんど特別な物だ。恐らく、帝具の中でも後期に造られた物だろう。だからこそ、謎も多い」

現在、帝具の中で、その能力が完全に把握されている物は、実は少ない。殆どの記録が500年前の内戦で失われてしまった為、正確な事が記された文献が少ないのが原因である。

恐らく、現在の帝具使い達でも、自分の帝具を完全に把握できている者は大勢いると思われた。

エリユシデータも、そうした帝具の一つである。

記録らしい記録はほとんど残っておらず、僅かに名称のみが文献の片隅に書かれていただけである。それが無かったら、この黒ずくめの剣が帝具である事すら気付かなかつ

た事だろう。

そんなブライトに対し、

「まあ、そう言う事もあるかもな」

キリトはそう言つて肩を竦める。

何にせよ、そう簡単に口を割る気は無い、と言う事だろう。秘密主義振りは相変わらず、と言う事か。

もつともブライト自身、先の質問は、明確な答えを期待しての物でもなかったらしい。どうやら、キリトがそう答える事も予想していたようだ。

「まあ、良いさ。何にしても、今までお前の判断は間違つた事は無いからな」

いざという時に、必ずやキリトは力を発揮してくれる。故にブライトは、キリトの實力を疑つてはいなかった。

「それはそうと……」

そこで、ブライトは話題を変えるように口を開いた。

「お前は、もう大丈夫なんだろうな？ この間の事を、まだ引きずつてる、なんてことは無いな？」

ブライトの問いかけに対し、

キリトは僅かに、顔を俯かせる。

ブラートが言っているのは、シエーレの死について、キリトが未だに未練を残していないか、と言う事である。

シエーレの死によるショックは、皆の胸に深く刻まれている。

新人のタツミやシノン、相棒だったマインは勿論ショックは大きいですが、シエーレの死に間に合わなかったキリトの心の傷も、決して小さなものではない。

だが、

キリトはブラートを見て笑みを浮かべる。

「いつまでも、引きずっているようじゃ、この業界じゃやっていけないだろ」

そう言うのと、僅かに口元を引きしめた。

「仇は必ず取る。それが、俺がシエーレにしてやれる、唯一の事だよ」

そう告げるキリトの瞳に迷いは無く、真っ直ぐにブラートを見つめ返している。

殺し屋の供養は、ただ相手を殺す事のみ。シエーレを殺した奴には、いずれ必ず報いを受けさせる。

救い難い事だが、それが殺し屋としての掟だった。

「そうか、なら良い」

口元に満足げな笑みを浮かべるブラート。

キリトはもう大丈夫だ。ちゃんと立ち直って、前へと進もうとしている。



ならば、これ以上、この話を引つ張るのは野暮と言う物だ。

「まあ、辛くなつたらいつでも言えよ。俺がいつでも添い寝して慰めてや……」  
「俺、もう少し下の方見て来るよ」

ブラートが何か言う前に、キリトは足早にその場を後にする。

これ以上、一緒に居たら何を言われるか判つた物ではなかった。

「まったく、ブラートはあれさえなければいい奴なんだけどな」

キリトは足を勧めながら、ぼやき交じりに呟く。

ブラートはナイトレイド一の強さを持ち、経験ある大人として頼りがいがあるのだが、如何せん、いつもいつもホモ言動を繰り返してくるため始末に負えない。

そんな事を考えながら、キリトは更に下へと向かつていく。

時刻的に見て、そろそろ街区を抜け、陸地からの視線がまばらになってくる頃である。

それはつまり、暗殺者にとって仕事のしやすい地形の場所が近付いていると言う事だ。

「敵が仕掛けて来るなら、そろそろだな」

呟いた時だった。

龍船の奏でるエンジン音に紛れて、何かが聞こえてくるのが判つた。

「何だ？」

訝るように足を止めるキリト。

微かに聞こえてくるのは、機械的な音ではない。もっと心地良い、心にしみわたるような音だ。

「これは………笛か？」

首をかしげるキリト。

妙な事だ。こんな場所で笛の音が聞こえるなんて。

だが、決して不快ではない。むしろ、聞いているだけで気分が良くなってくる。

何だろう？ ずっと聞いて居たくなるような、そんな笛の音。

次の瞬間、

「ッ!？」

思わずキリトは、息をのみながら膝を突く。

突然、全身から力が抜けるような感覚に襲われ、立っている事が出来なくなったのだ。

「な、何だ、急に………」

立っている事ができず、壁に手を突きながらズルズルと崩れていくキリト。

このままでは、意識を失うのも時間の問題である。

「………そうかッ あ………笛は」

絞り出すように呟くキリトは、先程から聞こえている笛の正体に思い至り舌打ちす

る。

あれはただの笛の音ではない。恐らく、敵の攻撃だ。

落ちかけている思考をフル回転させ、確か文献にあった帝具の中に、相手の戦意を奪う物があつた事を思い出す。

間違いない。偽ナイトレイド達は、シノン達の方では無く、こちらに来たのだ。

だが、

そうしている間にも笛の音は途切れることなく響き、キリトの全身から力が奪われていく。

「ま、ずい．．．．．」

視界が、徐々に暗くなる。

とうとう、意識まで落ち始めたのだ。

全身の力が入らず、視界も暗くなっていく。

闇が支配し始めた視界の中、

キリトは最後の力を振り絞って、背中のエリユシデータに手を伸ばした。

驚愕するタツミ。

彼の目の前で、それまで船上パーティを楽しんでいた出席者たちが、次々と倒れていく光景が見えた。

「な、何だよ、これ……」

絞り出すように呟くタツミ。

おかしくなり始めたのは数分前。妙な笛の音が響き始めた頃からだった。

初めは、誰かが余興ついでに笛を吹いているのかと思つたが、程なく出席者たちが糸の切れた人形のように、その場に倒れはじめた時、タツミは異様な事態に気付いた。

周りを見回せば、既にまともに立っている人間は一人もいない。

タツミ自身、先程から極度に疲労したように体が重くなり、今や立っているだけでも精いっぱいの状態である。

その間にも、不思議な笛の調べが聞こえてくる。

不気味な音色だった。

耳を塞いでも、音は脳に直接響いてくる。

こんな事は普通では絶対にありえない。恐らく、敵が何らかの攻撃を仕掛けて来た

推察された。

既に護衛対象の文官や、その護衛達も完全に無力化され、甲板に転がっている。

「これは……まずい」

そうしている内にも、タツミの体からは徐々に力が抜けていく。このままでは、意識が墜ちるのも時間の問題。

そうなると、護衛対象の文官を守るものがいなくなってしまう。

背後から床を踏む音が聞こえたのは、その時だった。

「ああ、隠れているのは怠かったぜ」

背後からに声に、とっさに振り返るタツミ。

すると、そこには背中に巨大な斧を背負った巨漢の男が、こちらに向かって歩いてくるところだった。

相手もまた、立っているタツミの存在に気付いて顔を上げる。

「お、何だ、この状況で、まだ頑張ってるのか？」

船蔵から出てきたダイダラは、演奏を聞いても未だに立っているタツミを見て、ニヤリと笑みを浮かべる。

キリトやタツミが察した通り、この笛の音はニヤウのスクリームによるものである。

船上パーティーの会場では、人の目が多すぎて暗殺がやりにくい事は、三獣士たちの方

でも予測済みである。

そこで、笛の音によって護衛を眠らせ、その間に文官を殺害してしまおうというのが、今回の三獣士たちの作戦だったのだ。

その目的は、既に半ばまで達成された事になる。

何しろ、既に甲板上で立っていられているのはタツミー1人の状態である。あとの者は、文官の護衛役も含めて、全員が寝入ってしまったている。

正に、タツミが最後の砦と言っても過言ではなかった。

そのタツミの前に立ったダイダラは、尚も強い意志を秘めて立つ少年を、面白そうに眺める。

「運が無かったな小僧。催眠にかかってりや記憶は曖昧。生かしておいてやったものを  
「よ」

「………て事は、テメエが偽ナイトレイドか？」

ダイダラが話す内容を聞いて、断定するようにタツミは言った。

この状況で姿を現した、と言う事は、目の前の巨漢が偽ナイトレイドであり、連続文官殺害事件の犯人と言う事で間違いないだろうと考えたのだ。

タツミの質問に対し、ダイダラは口元の不敵な笑みを浮かべる。

「と言うと、そっちは本物さんかい？ こりやあ良い」

ダイダラ達からすれば、本物のナイトレイをおびき出して始末する事も任務の内である。こうなる事は想定内の範囲内だった。

警戒を強めるタツミ。

対してダイダラは足元に落ちていた剣を拾うと、タツミの方へ投げてよこした。

飛んできた剣を受け取るタツミ。同時に、警戒するような眼つきでダイダラを睨みつける。

「……………何のつもりだ？」

こちらに武器を与えるなど、リスクが高すぎる。いったい、何を考えているのか？ 訝るタツミに対し、ダイダラは笑いながら告げる。

「俺はさ、戦って経験値が欲しいんだよ。最強になるためにな」

言いながら、ベルヴァーグを抜いて構えるダイダラ。

どうせ戦うなら、相手が強い方が殺し甲斐もある。

戦って戦って、経験値を上げ、そしてやがては高みへと上り詰める。それこそがダイダラの目標である。

その為なら、多少のリスクを背負うくらい、ダイダラにとっては当然の事だった。

対して、タツミも剣を持って構えを取る。

「掛かって来いよ。この位置なら、人も倒れていないし、やりやすいだろ」

「……あ、そ」

挑発するダイダラに対し、タツミは低い声で言いながら、剣を鞘から抜く。相手の目的がどうあれ、掛かってこいと言うなら躊躇うつもりはない。何より、偽ナイトレイドを見逃す気は毛頭無かった。

「じゃあ、良い経験させてやる」

鞘を払うと同時に跳躍。勢いをそのままに斬り掛かる。

「地獄めぐりだ!!」

疾風の如く、ダイダラへ斬り掛かるタツミ。

対して、

「良いゼエ、その威勢の良さ!!」

迎え撃つダイダラは、真っ向から大きくベルヴアークを振り翳す。

「すっげエ、ぶっ壊し甲斐がある!!」

「ツ!?!」

ダイダラの凄味のある笑みに、一瞬吞まれるタツミ。

一瞬、突撃の速度が鈍る。

そこへ、勢いの付いた斧が、動きを鈍らせたタツミに襲い掛かった。

とつさに手を手を床について突撃にブレーキをかけ、攻撃をキャンセルするタツミ。



そこへ、大斧が容赦なく振り下ろされる。

直撃を受け、粉碎される甲板の床板。

だが、タツミはとつさに突撃を止めた為、間一髪のところまで攻撃を逃れる。

「な、なんて威力だッ!?!」

背筋が寒くなるタツミ。

もし、判断が一瞬でも遅かったら、タツミの体は真つ二つにされていた事だろう。

対照的に、ダイダラは面白そうに、顔面に笑みを刻む。

「音にやられた体で、よくよけたじゃねエか。なら……」

言いながらベルヴアークを中央から分離、片方を大きく振りかぶる。

「これはどうだッ オラッ!!」

一閃された腕から放たれたベルヴアークの片割れは、旋回しながらタツミに向かって

飛翔していく。

「そんな物、当たるかよオ!!」

とつさに、身を沈めて回避するタツミ。

ベルヴアークは、回避したタツミに命中せず、そのまま旋回しながら後方へと飛んで

いく。

だが次の瞬間、

「何っ!？」

驚愕に、目を見開くタツミ。

タツミの視界の中で、通り過ぎた筈のベルヴアークが旋回して戻ってくるのが見えた。

帝具《二挺大斧ベルヴアーク》は、勢いが続く限り標的の追尾を続ける能力がある。その為、いったん回避に成功したとしても油断できないのだ。

飛んできた斧に腹部を、僅かに斬り裂かれるタツミ。

とつさの事だったが、タツミはどうか後方に跳躍して回避する事に成功したのだ。だが、ベルヴアークは尚も勢いを失わず、更にタツミへと迫ってくる。

甲板に膝を突いた状態のタツミには、もう一度回避するだけの余裕は無い。

その刃が至近距離まで迫り、

次の瞬間、

振り上げられた漆黒の剣が、飛んできたベルヴアークを切り払った。

そのまま勢いを削がれ、ダイダラの手の中へと戻る斧。

タツミもまた、どうにか体勢を立て直して立ち上がる。

そんな中、

「間に合ったか……」

タツミを守るように現れた少年は、漆黒のロングコートを靡かせ、剣を携えた少年が立っていた。

「キリト!!」

「悪いタツミ、ちよつと遅くなった」

苦笑交じりに言ってから、キリトは視線をダイダラへと向ける。

「………エスデス軍三獣士の一人、ダイダラか。予想が大当たりだな」

三獣士の存在はあまりに有名である為、キリトも要注意人物として頭に叩き込んでいる。

つまり、こいつらが一連の事件の犯人と言う訳だ。

エスデスが今回の事件に絡んでいる事を予想していたキリトだったが、その予想が正に的中した形である。

そして、

「こいつは手間が省けたな。犯人の方からノコノコ出て来てくれるとは」

声に導かれるように振り返ると、ブラートが引き締まった巨体で甲板に立っていた。

「エスデスの部下が犯人だったか。俺達の名を騙って暗殺とは、随分と姑息な手を使うじゃねえか。そんなんじゃ、帝国最強の名が泣くぜ」

「ハッ エスデス様がこんな回りくどい手を使うかよッ 全ては大臣の差し金さ」

挑発するようなブラートの言葉に、ダイダラはあっさりと事実を語る。

話しても問題無いと思っっているのか、それとも単純に考え無しなのか。いずれにしてもこれで、ホシ確定である。

「それにしてもテメエ等、よく動けるな。無気力化の演奏を聞いているはずなのに」  
「ああ、そう言う演奏だったのか」

訝るようなダイダラの言葉を聞いて、ニヤリと笑みを見せるブラート。

「だったら、効かないはずだぜ。俺の中の熱い魂は、他人に鎮められる物じゃないからな」

不敵に言い放つブラート。

堂々としたその姿からは、演奏によつて腑抜けている様を見てとる事はできなかつた。

だが、ダイダラは気付いた。ブラートの右の太腿が、赤い血に染まっている事に。

聞こえてきた笛の音が、帝具による広域攻撃であるとききに判断したブラートは、自ら太腿を大きく抉り、その痛みを持って洗脳を打ち破つたのだ。

かなり危険な賭けであったことは間違いない。一步間違えば、自ら戦闘力を落としてしまう可能性すらあつた。

しかし、そこで躊躇う事無く実行するからこそ、ブラートはナイトレイド最強足り得

るのだ。

「キリト、お前は大丈夫なのかよ？」

「まあな、ちよつとした裏技つて奴だよ」

尋ねてくるタツミに、そう言つて手に持ったエリュシデータを掲げて見せるキリト。

その時、

ダイダラの両脇を挟むように、二人の人物が甲板に降り立った。

三獣士の残る二人、リヴァとニヤウである。

ニヤウの演奏で船全体を無気力化した、甲板上での戦闘音を聞き付け駆け付けて来たのだ。

「やはり、ナイトレイドが来ていたか」

「予定通りだね」

ナイトレイドをおびき寄せて狩る。それは三獣士たちの作戦の一環。

これで、全ての罪をナイトレイドにかぶせる事ができる。キリトたちを殺し、彼等の首を下手人として晒せば、誰もが一連の犯行をナイトレイドの仕業として疑わないだろう。

勿論、むざむざと殺される気は、キリトたちには毛頭ない訳だが。

「役者が揃ったな」

静かな声と共に、エリユシデーダの切っ先を持ち上げるキリト。

おびき出されてノコノコ現れた、と言う意味では、三獣士たちも同様である。キリトたちも万全の態勢で今回の戦いに臨んでいるのだ。

ここまでは双方ともに予定通り。ナイトレイド、三獣士共に揃い踏みした形である。対峙する両者。

その中で、

「あなたは……………」

1人、ブラートは驚愕に包まれた表情で、リヴァを見ていた。対するリヴァもまた、険しい表情をしてブラートを見ている。

「兄貴、どうしたんだよ?」

尋ねるタツミにも、ブラートは答えない。

そんな中、

「……………久しいな、ブラート」

リヴァは重々しく口を開いた。

ブラートとリヴァ。

互いに交わされる視線には、敵意の他に確かな回顧の念が混じっているのが判る。

「兄貴、あいつ知っているのか?」

「ああ。良く知っているよ。お互い、敵じゃなかったら酒を酌み交わしたくなるほどに  
な」

硬い表情でリヴァを睨んだまま、ブラートは頷きを返す。

その緊迫した表情から、キリトも思い出したように口を開いた。

「……元帝国陸軍、南方討伐軍所属リヴァ隊副将。それが、帝国軍時代のブラー  
トの肩書きだったな」

数年前、帝国南方に勢力圏を持つ異民族のバン族が、帝国の圧政に対して反旗を翻し  
た。

当初、帝国軍はバン族討伐に12万もの大軍を動員したのに対し、バン族軍は僅か1  
万。戦いは、帝国軍の圧倒的勝利に終わると思われていた。

しかし、南方特有の疫病や害獣、大型危険種が討伐軍を次々と襲い、帝国兵達は戦う  
どころか、軍としての秩序を維持する事すら不可能になった。

そこへ、地の利のあるバン族が奇襲を仕掛けて来た事で、帝国軍の戦線は崩壊。戦い  
は泥沼化の様相を見せていった。

結局、戦いは最終的に、最強部隊であるエスデス隊が投入された事で一気に勝敗が決  
し、帝国軍の勝利に終わる事になる。

そんな中、リヴァ隊は戦争初期に戦線投入された部隊の一つである。

優れた指揮官と、よく訓練された精強の兵達によって構成されたリヴァ隊は、士気の低下した帝国軍内にあつて、ほとんど唯一の気を吐いた部隊である。リヴァ隊がいなかったら、帝国軍はエスデス隊の到着前に全面潰走していたときえ言われている。

だが、それほどの活躍を見せたリヴァ隊だが、その活躍に見合つた評価はされなかつた。

南方作戦中に帝国中央で政変が起こり、現大臣オネストが政権を掌握した事が原因である。

オネストは軍の高官に至るまで、全員に賄賂を強要し、それに応じない者を皆、罪を着せて処罰していったのだ。

リヴァも、そうして罷免された一人である。

清廉潔白なりヴァは、賄賂を強要するオネストのやり方に従う事ができなかつたのだ。

「リヴァ將軍、あなたが、なぜ……」

「私はもう、將軍ではない。エスデス様に拾われてからは、あの方の忠実な僕だ」  
呟くように言うと、リヴァは右手の白手袋を取り去る。

その中指に怪しく光る指輪は帝具《水龍憑依ブラックマリン》である。  
ブラート。



そしてリヴァ。

かつて共に戦った仲間であり、そしてまた立場を越えた友でもあった2人が今や敵同士となり、避け得ぬ戦いの場にて対峙していた。

同時に、キリト、ニヤウ、ダイダラの3人も身構える。

「タツミは下がってろ」

低い声で、キリトは言う。

ここから先は帝具戦になる。帝具を持たないタツミでは、三獣士に対抗するのは難しいだろう。

しかし、

「もし、俺達がやられたら、その時はタツミ、お前が最後の切り札になる。頼んだぜ」

「ああ、気を付けろよキリト」

キリトの言葉に、頷きを返すタツミ。

確かに、キリトの言うとおりだ。帝具を持たない自分では足を引っ張る可能性が高い。ここは素直に従っておくのが得策だろう。

だが、

タツミは手にした剣を握り締める。

万が一の時は、迷わず割って入る。その為の準備は怠る心算は無かった。

次の瞬間、

ナイトレイドと三獣士。

双方は弾けるように、互いの敵目がけて襲い掛かった。

第13話「船上の激突」

終わり

## 第14話 「ナイトレイドVS三獣士」

1

視界の先では、貧困にあえぐ村の住人達に、米が施されている光景が映し出されている。アカメ、ラバック、シノン班が密かに護衛している官僚は、その様子を満足そうに眺める。

アカメ、ラバック、シノン班が密かに護衛している官僚は、その様子を満足そうに眺めていた。

彼が今日、この村にやって来たのは、私財を投じて購入した大量の備蓄米を放出し、村の住人達に配る為だったのだ。

その日の食事にも事欠く村の住人達にとって、備蓄米の放出は正に天からの恵みであると言つて良いだろう。

皆の嬉しそうな顔が、潜んでいるシノン達の場所からも見えていた。

「さすが良識派、ナイス施しだね」

様子を見ていたラバックが、口笛交じりに賞賛を送る。

こうしている間にも、ラバックは周囲にクローステールの糸を張り巡らせ警戒をしている。これで、もし不審な人物が村に接近すれば、即座に察知できる。

「あの量なら、民も一息つけるわね。良識派って言われるだけの事はあるわ」  
シノンもシエキナーを手にしながら頷く。

万が一敵が来た場合このチームなら、村雨を持つアカメが前衛を担当し、シノンが後衛、ラバックがクローステールの変幻自在さを利用して遊撃的な立ち位置になるだろう。互いの死角を補い、あらゆる距離レンジに対応できる、万全の布陣である。

その点で行けば、全員が前衛担当の白兵専門部隊となっている、ブライト、キリト、タツミ班に比べると、打撃力では劣るものの、汎用性では勝っているチーム構成と言える。「何だか、見ていたら私もお腹がすいてきた」

食いしん坊キャラのアカメが、そんな事を言いながら腹の虫を鳴らしている。

緊張感が無い少女剣士の様子に、苦笑するラバックとシノン。

まったくこの娘は、どこに行ってもマイペースを崩す事が無い。

「ほら、俺のあげるから、敵が来たら頼むよ、ほんと」

そう言っつてラバックが差し出した携帯食料を、

アカメは迷う事無くかぶり付いた。  
ラバックの腕ごと。

その様子を呆れ気味に眺めながら、シノンは再び警戒するように村の様子に目を向ける。

現在までのところ、偽ナイトレイドが現れる気配は無い。

もし、敵に襲撃の意図があるなら、とつくの昔に仕掛けてきている筈。しかし、それが無いと言う事は、敵はこちらではなく、運河の方へと行ったと考えられる。

その時だった。

「おっと、結界に反応だ」

糸の様子を確かめていたラバックが、やや緊張気味に声を上げる。

同時にシノンも、手にしたシエキナーを構え、ラバックの捉えた目標を探す。

「標的か？」

「数は、4・・・5・・・いや、どうも動きが素人くさい。俺等の偽物を名乗れる程じゃあないね」

問いかけたアカメに否定の言葉を返すラバック。

同時にシノンの目も、標的を捉えた。

村外の様子を伺うように、怪しい風体の男達が、それぞれ手に剣やナイフを構えてい

るのが見える。

「夜盗みたいね。どうやら施し米に釣られてやって来たってところかしら」

言いながら、シノンはシェキナーの弦を引き絞る。

同時に、瞳が射撃に必要なデータを弾き出し、照準を合わせていく。

相手が標的では無いとは言え、明らかに不屈きな動きをする輩を野放しにする気は無い。

そもそも武器を持って村に侵入しようとしている時点で、まっとうな連中ではないのは明らかである。

腐肉に釣られて寄ってくるハイエナを、見過ごす事はできない。

あの施し米は、村にとっての命綱である。邪魔はさせない。

「狙えそうか?」

「問題無い」

尋ねるアカメに、短く答えるシノン。

マインの指導に加えて数度の実戦を重ねる事で、狙撃手としてのシノンの腕は格段に上達を見せている。

既にその実力は、怪我をして戦線離脱しているマイン本人を補って余りある程だ。

三人がいる位置と、夜盗達が潜んでいる場所はかなりの距離が開いているが、シノン

の腕ならば問題無く、全員を射抜く事が可能だった。

しかし、

こちらに現れたのが、あの程度の小物であるとする、本命はやはり運河の方である  
と考えるべきだった。

無事だろうか？

ふと思ひ浮かべられるのは、キリトの顔だった。

普段は飄々として捉え所が無く、まるで人生を鼻歌交じりで歩いているような印象さ  
えある少年。

そこで、シノンは首を振る。

何であんな奴の事を、自分が心配しなくてはならないのか？

いつもいつも人を食ったような態度をしており、そのくせ自分の事となると徹底的な  
秘密主義を貫いているのも気に食わない。先日など、パンツまで見られている。

いけ好かない。

それが、キリトに対する、シノンの偽らざる本音である。

しかし、シノンは知っている。

そんなキリトも、その内実では年相応にナイーブな面を持っている事を。

あの、シエーレが死んだあと、訓練で倒れた時、シノンにだけに見せた弱々しい姿が、

どうしても印象として残っている。

できれば、行って掩護してやりたい。つい、そう思ってしまった。

だが、こちらの文官が襲撃される可能性が、まだ完全に零でない以上、持ち場を離れる事は許されなかった。

シエキナーを握る手に力を込めるシノン。

同時に、発生した光の矢を解き放つ。

矢は一瞬にして駆け抜けると、今にも村内に侵入しようとしていた先頭の夜盗に命中。首から上を容赦なく吹き飛ばす。

突然、仲間の首が手品のように消失した事で、夜盗達の間にも動揺が走る。

シノンの目には、残った夜盗達が、慌てふためくさまが手に取るように見て取れた。こうなると、狙撃手の少女にとっては良いカモである。

その間にシノンは、更に二射目を放つ。

二人目の夜盗も、確実に射抜いて倒す。

しかし、矢を放ち、自分の仕事をこなしながらも、シノンの心は遥か彼方、大運河の上にいるであろう少年に想いを馳せている。

『キリト、無事でいて……』

自分でも気づかないうちに心の中で呟きながら、シノンは弓を引き続けた。



## 2

ブラートとリヴァ。

かつて二人は、共に戦場を駆け抜けた戦友同士。

否、苦楽を共にした親友であると言っても良い。

だが、その2人が今、敵同士となって、互いに激突していた。

ブラックマリンの能力を使い、水を操って遠距離攻撃を仕掛けるリヴァ。

対して、インクルシオを纏ったブラートは、どうにか距離を詰めようとする。

インクルシオの副武装であるノインテーターと言う銘の槍を掲げ、飛んでくる水の攻撃を弾くブラート。

一方のリヴァも、接近戦時におけるブラートがいかに脅威であるかは判り切っている。その為、可能な限り遠距離で仕留めようとしてくるのが判った。

接近戦ではブラートが有利。遠距離戦ではリヴァが有利。

戦いは必然的に、間合いの削り合いと言う形で推移していた

やがて、ブラートの槍が、全ての水を弾く。

そのまま距離を詰め、斬り込めるか？

そう思った瞬間、

ブラートが見ている目の前で、船外の水面が大きく盛り上がった。

鎌首を持ち上げる巨大な蛇。

ある意味、ブラックマリントは優雅な帝具である。水を操り、様々な形の攻撃を繰り出す事ができる。

この蛇もまた、ある種の芸術的とも言える優美な姿を誇っていた。

だが、その攻撃力は驚異的の一言に尽きる。

「水圧で潰れるブラートツ 深淵の蛇!!」

上空に飛び上がった蛇が、ブラートへと襲い掛かる。

このまま喰らえば、強烈な水圧によるダメージは免れない。

さりとて回避したとしても、蛇は船に襲い掛かり、水圧によつて船は大破する事だろう。

その状況下でブラートは、

「ウオオオオオオオオオオオオオ!!」

槍を掲げ、一気に飛び上がる。

真つ二つに斬り裂かれる蛇。

あれだけ巨大な蛇を、一刀のもとに斬り捨てるブラートの技量は、見事の一言に尽きる。

そのまま、勢いを殺さず甲板上のリヴァに斬り掛かるブラート。

だが、

「それも予想済みだ。お前なら、必ず蛇を潰しに来る事は判っていたからな」  
言いながらリヴァは、更なる追撃を敢行する。

長く共に戦ってきたリヴァには、予知能力のようにブラートの動きが判っている。故に、常に先回りできる戦術を組む。

渦巻く水面。

一斉に盛り上がる。

「受けるブラート、濁流槍!!」

次の瞬間、先端が鋭く尖った無数の槍がブラートへと襲い掛かる。

空中にあつて身動きが取れないブラートに、これをおかす術は無い。

槍は次々とブラートに突き刺さり、彼を更なる空中へと弾き飛ばす。

だが、

「水を掛けられたぐらいで、俺の情熱は消せねエ!!」

魂の叫びをあげるブラート。

フェイスマスクが破損する中、インクルシオの防御力は辛うじてリヴァの攻撃に耐え抜いた。

対して、

静かに甲板に立ったりリヴァは、ゆっくりと上空を見上げた。

「そう、あれではまだ、お前を倒せない。判っているつもりだ」

ブラートの強さを、リヴァ程理解している者は他にいない。

ブラートの異名の元となった《100人斬り》の異名は、南方戦線において、バン族の特殊工員128人を1人で倒した事から来ている。

戦闘力、精神力、信念、勇猛さ。

その全てにおいてブラートに勝っている人間がいるとすれば、上官であるエスデス以外にリヴァは知らない。

「だからこそ、最大最強の奥義を馳走してやろう!!」

輝きを増すブラックマリン。

同時に、船の周囲から無数の龍が姿を現す。

「水龍天征!!」

一斉に襲い掛かる龍の群れ。

目を見開くブラート。

奥義と言うだけの事はあり、それは、今までの攻撃の比ではなかった。たとえインクルシオの防御力を持ってしても、防ぎきる事は敵わない。

牙を剥きながら迫る龍。

対して、ブラートは成す術がない。

次の瞬間、

一瞬にして飲み込まれるブラート。

攻撃の全てが命中し、彼を吹き飛ばす。

正に会心の一撃。

必殺の攻撃を放ち、ニヤリと笑みを浮かべるリヴァ。

だが、そんな彼も無傷ではない。

大技を連続して放った衝撃は大きく、口からは鮮血がしたたり落ちている。

しかし、だからこそ勝利への確信も大きい。

これだけやって、倒せないはずが無かった。

「……………やったか？」

そう呟いた。

次の瞬間

「そう言うセリフを吐くって時はなっ!!」

上空から降り注ぐ声に、思わず我に返って振り仰ぐリヴァ。

見上げる天。

水の晴れたその空に、

槍を掲げたブラートの姿があった。

既に鎧もコートもボロボロ、ブラート本人のダメージも小さくない。

しかしそれでも、胸に宿った熱い戦意を一切失う事無く、ブラートは槍を繰り出してリヴァに斬り掛かる。

「たいてい、やってねえんだよ!!」

繰り出される槍。

その攻撃の前に、息をのむリヴァ。

もはやリヴァに、その攻撃を回避する術は無い。

次の瞬間、ノインテーターの刃は、リヴァを真っ向から斬り裂いた。

「グハツ!？」

鮮血を吐き出しながら、数歩後退するリヴァ。

その体は袈裟懸けに斬り裂かれ、傷口から赤い液体がとめどなく噴き出している。

明らかに致命傷。勝負はあった。

遅れて、甲板に降り立つブラート。

同時に、ブラートが纏っていたインクルシオも解除される。リヴァの放つ大技を喰らい続け、ブラート自身も限界だったのだ。

とは言え、かつての戦友同士の対決は、ブラートに軍配が上がるのは確かだった。

「……………惜しいな」

口から血を吐き出しながら、リヴァは告げる。

「ブラート、お前ほどの男が味方にくれたら、どれほど心強かった事か……………」  
お前なら、エスデス様の副将でも務まったはずだ」

「生憎だが、国に仕える気はもうねえよ」

対して、ブラートは素っ気なく答える。

彼が国を裏切ったのではない。国が彼を裏切ったのだ。

既に帝国と言う国家に完全に見切りをつけているブラートにとって、帝国は倒すべき存在であり、戻る場所ではないと言う事だ。

「まして、俺はこれでも民の味方のつもりだぜ。大臣とつるんでるエスデスの部下じゃ、それは気取れないだろ」

大臣は民をしいたげ、エスデスは弱い民など見向きもしない。

そんな者達と相いれる事は、ブラートには到底できそうになかった。

「民の味方、か……殺し屋が言って良いセリフだとは思えんな」

「だから、控えめに言ったのさ」

答えるブラートに対し、リヴァはフツと笑う。

ブラートと違い、リヴァは帝国に残る道を選んだ。

その理由は、エスデスと言う女傑の放つ強烈な個性に惹かれたからに他ならない。

かつて、將軍としての名誉も地位も剥奪され、罪人として裁かれようとしていたり  
ヴァを救い、全ての罪を消して自らの軍に招き入れたエスデス。

リヴァは、そんなエスデスを慕い、今日まで彼女の元で戦い続けてきた。

エスデスが命じれば、どんな非道でも行い、エスデスが命じれば、どんな存在である  
うと蹂躪してきた。

いつしか、かつてブラートが慕った清廉潔白な軍人としてのリヴァは消え去り、エス  
デスを主と仰ぐ、忠実な僕となっている自分がいた。

だが、その事に後悔を抱いた事は無い。



好きなだけ暴れられ、好きなだけ蹂躪できる解放感。

何より、かつて自分を陥れ、失脚させた薄汚い官僚達ですら、今のリヴァには恥も外聞も無く媚を売ってくる。その快感に、リヴァは完全に取りつかれていた。

かつて何もかも奪われた自分が、今度は奪う側に回っていると言う事実が楽しくて仕方が無かった。

片や最強の暗殺者。

片や帝国最強の片腕。

帝国に絶望したと言う過程はブライトもリヴァも一緒だが、結果は完全に真逆となっていた。

「ブライト……」

静かな声で、リヴァはかつての友に語りかける。

「お前に信念がある事は判った。だが、私にも信念があり、そしてエスデス様の配下の者としての意地がある」

不吉な言葉を継げるリヴァ。

同時に、彼の体内を流れる血流が、急激に勢いを増す。

「その意地に掛けて、お前の命だけは貰っていく!!」

言い放つと同時に、

ブラートの攻撃によって開いた傷口から、一斉に血飛沫が迸る。

ブラックマリン奥の手 血刀殺けつとうさつ。

血液もまた液体である以上、ブラックマリンによって制御する事は可能である。

それ故リヴァは、自身の敗北が免れないと悟った時、最後の切り札を使つて相打ちを狙つたのだ。

迫る刃。

対して、

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

ブラートはとっさに背中から剣を抜き放つと、飛んでくる血の刃を切り払う。

やがて、全ての血刃が切り払われた時、

リヴァは、甲板にゆっくりと倒れ込んだ。

「……わが命を振り絞つた一撃にすら、対応するか」

その意識が、ゆっくりと沈んで行く。

「見事だ……ブラート」

笑みを浮かべるリヴァ。

最後の最後に戦えた相手が、かつて友であった事に満足するように、

その笑みはとても満ち足りた物であった。

対峙するキリト。

向かってくるのは三獣士の内の二人、ダイダラとニヤウ。

ともに、キリトを挟み込むようにして向かってくる。

「俺の攻撃に耐えられるか、小僧!!」

ベルヴァークを振り翳すダイダラ。

対抗するように、キリトはエリユシデータを下段から振り上げるように繰り出す。

その様子に、ニヤリと笑うダイダラ。

「ハッ 馬鹿め!! そんな細い剣なんで、へし折ってやるよ!!」

ぶつかり合う両者。

剣と斧の刃がこすれ合い、火花が盛大に飛び散る。

次の瞬間、

大きく弾かれたのはダイダラの方だった。

「ぬおッ!」

思わず、たたらを踏んで後退するダイダラ。

対してキリトは、ニヤリと笑う。

「残念だったな、へし折れなくて」

静かに言い放つと同時に、剣を繰り出すキリト。

高速で袈裟懸けに放たれる剣技は、未だに体勢を整えていないダイダラに襲い掛かる。

「うおウツ!」

思わず、バランスを崩しながらも、キリトの剣を受け止める事に成功したダイダラ。

そのまま、有り余る膂力でキリトの体を弾き飛ばそうとする。

だが、それよりも一瞬早く、キリトは後方宙返りをしながら後退、ダイダラから距離を取る。

そこへ、

「馬鹿めツ 動きを止めたね!!」

スクリームを打撃用武器として構えたニヤウが襲い掛かって来た。

スクリームの強度は通常の笛より遥かに高いため、鈍器としても使用できるのだ。

振るわれる笛は、

しかし、それよりも早く、キリトがエリユシデータを擦り上げるように振るい跳ね除ける。

「おわっ とつとつ!」

とつさに、空中でバランスを取り戻しながら甲板に着地するニヤウ。  
そこへ、斬り込んで来たキリトの剣を、とつさにスクリームで受け止めた。

「……………君、おかしいんじゃない？ 何で普通に動けるのさ？」

スクリームにより無気力化の演奏を流され、船全体は眠りについた状態にある。  
にも拘らず、キリトは何も問題が無いように動いている。

ブラートのように、体の一部を抉って意識を覚醒させている様子も無い。そもそも、  
キリトがそんな事をしたなら、痛みで戦うどころではなくなるだろう。

「さあな。腕がへボすぎたから、効果が無かったんじゃないのか？」

「ぬかせッ!!」

挑発するような言葉に、ニヤウはとつさにスクリームを振るってキリトの剣を弾く。

そこへ、ベルヴアークを掲げたダイダラが突っ込んでくるのが見えた。

「何だつて良いさッ 俺が吹き飛ばしてやる!!」

叫びながら、ベルヴアークを袈裟懸けに振るうダイダラ。

対して、

キリトはとつさにその場から跳躍。ダイダラの斧を回避すると同時に、自身はトンポ  
を切るようにしてダイダラの顔面を踏み台にし、そのまま後方に着地した。

「グアッ テメエ!!」

踏まれた顔面を押さえ、苦悶の表情を浮かべるダイダラ。

その様子を見ながら、ようやくキリトが油断できない相手であると悟ったのだろう。ニヤウとダイダラは、それまでの雑な攻めを改めるように、慎重に間合いを詰めてくる。

「持久戦かよ……」

対抗するように、キリトもまたエリユシデータを構え直す。

とは言え、

あまり時間を掛け過ぎるのは得策とは言いがたい。

なぜなら、キリト自身、スクリームの演奏による影響を受けていない訳ではないのだ。それを、ある方法で無理やり無効化しているにすぎない。

時間を掛ければ、また状況を覆される事もあり得る。

「スゲー……」

戦いの様子を眺めていたタツミが、感嘆の声を上げる。

タツミにとっては初めて目撃する帝具戦の様相に、少年は圧倒されていた。

タツミ自身、武術にはかなりの自信があるが、やはり帝具戦ともなると戦いの次元が全く違ったものとなってくる。

正直、目で追うのがよつとの状態だった。

一方のニヤウとダイダラの方でも、キリトの存在が脅威と映り始めたのだろう。それ

までの戦いで見せていた油断が完全に消えているのが判る。

「ダイダラ、少し時間を稼いで」

「あん？」

ニヤウの言葉に一瞬、訝るような顔をするダイダラだが、すぐにその意図に気付きにやりと笑う。

「成程な。任せとけ」

そう言うと、ベルヴァークを二丁に分離、片方をキリト目がけて投擲する。

「キリト、気を付けろ!!」

その様子を後方から見ていたタツミが叫ぶ。

「あの斧、どこまでも追っかけて来るぞ!!」

「なるほど、それがあいつの能力か」

タツミの言葉に領きを返しながら、キリトは飛んできた斧を、身体を傾ける事で回避する。

頭のすぐ横を駆け抜けていくベルヴァーク。

しかしタツミの言うとおり、あるていど飛翔すると、ベルヴァークは勢いを殺さずにターンして再びキリトに戻ってくる。

その動きを冷静に見据えるキリト。

次の瞬間、下段から鋭く斬り上げたエリユシデータが、ベルヴアークを弾き飛ばす。勢いを失い、舞い上がるベルヴアーク。

だが、

「オラアツ まだ終わりじゃねエぞ!!」

ダイダラが勢い込んで言い放つと同時に、もう片方のベルヴアークを投擲。その隙に、放物線を描いて戻ってきた片割をキャッチする。

舌打ちするキリト。

飛んできたベルヴアークを横ステップで辛うじて回避しつつ、どうにか反撃の隙を伺おうとした。

その時だった。

背後から聞こえてきた笛の音に、思わず動きを止める。

その視線の先では、スクリーンを口に当てたニヤウが、先程とは別の曲を吹いている所だった。

やがて演奏も終わる時、

驚くべき変化が起こった。

ニヤウの体が、一気に膨らんで行く。

それまでは少年のように華奢な外見だったと言うのに、見る見るうちに筋肉質に盛り



上がり、着ている服ははちきれんばかりに膨らむ。

顔つきも大人びた者に変化し、まるで最前までとは別人であるかのように思える程だった。

「奥の手、《鬼人招来》。悪いけど、一気に決めさせてもらおうよ」

催眠効果のある演奏によって自身の能力を強化し白兵戦能力を、飛躍的に向上させる。それがスクリームの奥の手である。

ニヤウの参戦に合わせて、距離を詰めてくるダイダラ。

その手のベルヴアークが掲げられる。

「オラツ 死ねエ!!」

放たれるベルヴアーク。

正面から、旋回しながら飛んでくるベルヴアークを回避するキリト。

だがそこへ、後方からスクリームを振り翳したニヤウも同時に迫る。

正面にはダイダラ。後方からはベルヴアークとニヤウ。

キリトがどれか一方に対応しようとすれば、即座に背後から別の攻撃が襲ってくる事になる。

完全な包囲網がキリトに襲い掛かる。

その状況において、

キリトはダイダラを目標と見定め駆け出した。

対して、ニヤリと笑みを浮かべるダイダラ。

既にダイダラの中では、必勝パターンが形成されていた。

キリトがどんな攻撃をして来ようとも、ダイダラは耐えきる自信が充分にある。その間にニヤウとベルヴァークが背後から襲う。それで終わりだ。

「死ねェ!!」

ベルヴァークを振りかざすダイダラ。

次の瞬間、

キリトは右手に構えたエリユシデータを、弓を引くように大きく引き絞る。

加速するキリト。

その動きは、ダイダラの目測を大きく狂わせる。

「なッ!?!」

顔を引きつらせるダイダラ。

だが、もはや防御も回避も間に合わない。

「ヴォーパルストライク!!」

突き込まれる刃。

その一撃が、ダイダラのど元を貫通し吹き飛ばした。

鮮血を撒き散らして倒れ込むダイダラ。

同時に、主を失ったベルヴアークも、コントロール不能となり甲板に転がる。

キリトは三方向から包囲された状況を冷静に見極め、どこを突けば最も包囲網を突き崩せるかを判断したのだ。

ベルヴアークやニヤウを攻撃しても、突き崩せるのは包囲網の一角のみ。その場合、背後から攻撃を喰らってアウトである。

だが、ダイダラを倒す事ができれば、ダイダラとベルヴアーク、双方を一気に無力化できる。

キリトはそこまで計算した上で、瞬時にダイダラ攻撃を決定したのだ。

轟音を上げて、床に落下するダイダラ。

だが、戦いはまだ終わっていない。

「ダイダラの仇、死ね!!」

拳を振り翳して迫るニヤウ。

その体は、既にダイダラと比べても遜色無い程に膨れ上がっている。なまじ、顔付が端正なままなので、却って不気味な感すらある。

対して、キリトは未だに動く事ができない。

ヴォーパルストライクを放った硬直が解けず、次の動きが取れないのだ。

それを見越したタイミングで、ニヤウが攻め込んでくる。

その拳がキリトを捉えると思った。

次の瞬間、飛翔してきた剣がニヤウに襲い掛かる。

「くそッ!？」

とつさに、キリトへの攻撃を諦めて、飛んできた剣を払うニヤウ。

キリトの危機に、とつさに剣を投げたのはタツミだった。

帝具戦では手も足も出せなかったタツミだが、それで戦いを投げた訳では決してない。

タツミはタツミなりに状況を見極め、キリトを掩護できる最良のタイミングを計っていたのだ。

「サンクス、タツミ。ナイス掩護だ!!」

言いながら振り返るキリト。その視界の彼方で、剣を投げたタツミが親指を立ててサムズアップしている。

同時に、右手に持ったエリユシデータを、捻り込むような姿勢で左の脇に構える。

「くそッ とんだ邪魔を!!」

苛立つような声と共に、ニヤウは再びキリトへと向き直る。

しかし、その時には既に、キリトも攻撃態勢を整えていた。

駆けるキリト。

対して、ニヤウの反応は一瞬遅れる。

一気に距離を詰めたキリトが、真正面から剣を振るう。

交錯する両者。

次の瞬間、

左から右に奔ったキリトの剣は、間髪入れずに再び、右から左へと返される。

その間、刹那以下。

目撃した人間は誰もが、二つの斬撃が左右同時に放たれたようにも感じた事だろう。

「スネークバイト!!」

告げるキリト。

次の瞬間、

キリトの剣に斬り裂かれたニヤウの体から鮮血がほとばしる。

「グッ 馬鹿な……」

信じられないと言った面持ちで、その場に膝を突くニヤウ。

スクリームの奥の手を使い、能力を強化した自分が、ここまであっさりとやられるとは。

次の瞬間、

剣を振り上げたキリトが、ニヤウの目の前に立った。

冷ややかに見下ろしてくる、漆黒の少年。

その鋭い眼差しが射抜いた瞬間、数々の戦場で猛威を振るった三獣士ニヤウは、魂の底から震えるのを感じた。

目の前にいるキリトから発せられる威圧感が、完全にニヤウを凌駕していた。息をのむニヤウ。

だが、彼にできたのはそこまでだった。

鋭く、キリトの剣が振り下ろされる。

次の瞬間、ニヤウの顔面は縦に斬り裂かれる。

キリトの剣が、真っ向からニヤウを斬り下ろしたのだ。

ニヤウの手から、スクリームが零れ落ちる。

次の瞬間、

轟音と共に、巨体が甲板に倒れ伏す。

同時に、能力が解けたのか、膨らんでいた身体が急速にしぼんで行った。

ニヤウ撃破を確認した瞬間、キリトは思わず、その場で膝を突いた。

「グッ!?!」

込み上げる疲労感を必死でこらえ、甲板に突き立てたエリユシデータを杖代わりにして、辛うじて倒れるのを防ぐ。

それでもしないと、あつという間に意識を失ってしまいそうだった。

「キリト!!」

駆け寄ってきたタツミが、とっさにキリトの体を支える。

「キリト、お前やつぱり、笛の影響が………」

タツミが見て居た限りでは、キリトは敵の攻撃を受けていない。にも拘らず、これほどのダメージがあると言う事は、スクリームの影響であると考えるべきだった。

そのタツミの言葉に対し、キリトは苦笑で返す。

「ちよつと、無理しすぎたかもな」

実のところ、キリトはスクリームの影響を無効化していた訳ではない。強引なやり方で、無理やり体を動かしていたのだ。

帝具エリユシデータの能力は、その元となった剣豪の技を、使用者が模倣できる点に

ある。

これはつまり、体の動きを剣がアシストしてくれるわけだが、キリトはこの能力を利用し、動かない身体を能力で補正する事で辛うじて動かしていたのだ。

しかし当然、そんな事をすれば体に掛かる負荷も半端な物ではなくなる。

その為、戦いを終えた途端、キリトには凄まじいまでの疲労感が襲ってきたのだ。

「大丈夫なのかよ?」

「ああ、問題無いさ。少し休めば、これくらい」

心配してくれるタツミに、キリトはそう言つて笑い掛ける。

そこへ、リヴァを撃破したらしいブラートが歩いて来るのが見えた。

「終わったようだな」

倒れているダイダラとニヤウの遺体を見て、ブラートは頷きながら言つた。

三獣士撃破。

これで、偽ナイトレイドによる文官連続殺人事件は、ストップするはずである。

「よし、後は連中の帝具を回収して撤退するぞ。他の連中が起きてこないうちに……」

ブラートがそこまで言つた時だった。



トスツ

軽めの音が鳴り響く。

何の音なのか、誰もが一瞬判らなかつた。

だが、

気が付いた時には、

ブラートの胸に、1本のナイフが突き刺さっていた。

「兄貴?」

タツミが声を掛けた瞬間、

「ガハッ!」

突如、ブラートは口から大量の血を吐き出し、その場に膝を突いた。

崩れ落ちる巨体。

「兄貴!」

「ブラート!」

タツミとキリトが驚愕な声を上げる中、

くぐもった笑い声が、龍船の上に響き渡った。

第14話「ナイトレイドVS三獣士」

終わり

## 第15話 「黒白のジョーカー」

1

ギリツ

思わず、キリトは自らの歯を噛み鳴らした。

床には倒れた三獣士たちの姿。

リヴァ、ニヤウ、ダイダラ、いずれも致命傷を受けて床に転がっている。

偽ナイトレイドを名乗っていた彼等を撃破し、任務完了しようとした矢先の出来事だった。

ブラートの胸に突き立った一本のナイフが、全ての運命を狂わせた。

とつさに、ナイフが飛んできた方向を見るキリト。

そこには、不気味な影を引く三人の人物が立っていた。

「こいつは Good Luck だ。ナイトレイド最強の男を狩れるとは」

口笛交じりに囁かれた言葉に対し、キリトは不愉快そうに眉をしかめた。

三人の男の内の一人。真ん中に立つフードの男に、キリトは嫌という程見覚えがあった。

「お前は、あの時の……」

それは、あの夜。

シエーレがセリユーに殺された時、キリトを邪魔したダガー使いの男だった。

「よう、また会ったな、黒の剣士。元氣そうで嬉しいぜ」

僅かに見える口元で、笑みを見せる男に対し、キリトはエリユシデータを持ち上げ、警戒するように切っ先を向ける。

だが、そんなキリトの様子など、まるで脅威にならないと言わんばかりに、フード男は肩を竦めて見せる。

「できれば、エスデス軍の連中と共倒れになってくれればベストだったんだが、まあ、ここまで痛めつけてくれれば充分だろ。これはこれで、面白い状況だしな」

眉をしかめるキリト。

悔しいが、奴の言うとおりである。スクリームの無気力化演奏に加えて、帝具の能力を利用した強引な戦闘で、既にキリトの体はボロボロに近い。

これ以上の戦闘は、不可能に近かった。  
だが、

実際に戦った事のあるフードの男は勿論、初めて見る二人の男も侮れない実力者である事が判る。

1人は目の部分が赤く染まっている髑髏の仮面をかぶり、足元まで覆う外套にすっぽりと身を包んでいる。

もう1人は、こちらは目の部分をくりぬいたズタ袋で顔を隠し、手にはナイフを持っている。

異様な姿の三人から発せられる雰囲気は尋常な物ではない。

対してこちらは、キリトが消耗し、タツミは帝具を持っていないので、事実上、戦いに参加させる事は難しい。

そして、

「兄貴、しつかりしろ!!」

悲痛なタツミの声に振り返ると、甲板に膝を突いたブラートが、口から大量の血を吐き出していた。

事態は明らかに尋常ではない。

吐き出される血と共に、ブラートの命が削られて言っているのが判った。

「兄貴ッ 何で、こんな浅い傷でッ!？」

「ムダムダムダ〜」

焦慮を募らせるタツミを嘲笑うように、ズタ袋の男が、その即席とも言える仮面の下から、せせら笑いを上げる。

「そいつが何で苦しんでいるか判るかー？ ナイフで刺されたからじゃねえぞ」

「………まさかッ!？」

その言葉の真意に気付き、キリトは全身の毛が逆立つ想いだった。

ただナイフで刺されただけにしては、ブラートの状態は重篤すぎる。しかもブラートは、リヴァとの戦いで解除されたインクルシオの他にも、胸部にブレストプレートも付けて防御を固めているのだ。

ナイフは、そのブレストプレートを貫通する形で突き刺さっている。

その技術自体は大したものかもしれないが、同時にブラート自身の傷は鎧の上から受けた為、思っているよりも浅い筈なのだ。

にも拘らず、ブラートの状態は瀕死と言って良い程に悪化している。

「まさか、毒………」

「ピ〜ンポ〜ン」

ケラケラと笑うズタ袋の男は、手にしたナイフを掲げて見せる。

「毒武器の扱いには慣れてんだよねー、俺。いくら体鍛えてるつたって、体の中までは鍛えられないっしょ」

「そう言う事だ。そいつはもう、助からねえよ」

言いながら、外套の男は腰の鞘から例の肉斬り包丁のような大型ダガーを取り出す。

先程から一言もしやべらない髑髏仮面の男の存在も、不気味な異彩を放っている。

「覚えておけ。俺達の名は《ラフィン・コフィン笑う棺桶》。俺達には帝国も革命軍も関係ねえッ お前ら全員ぶっ殺し、地べたに這わせる事だけが、俺達の願いだ!!」

そう言つて、高笑いを上げるフード男。

ラフィン・コフィン。

初めて聞くその名前に、キリトは戦慄を覚える。

キリト達自身、自分達の一してある事がまっとうだと思つた事は一度も無い。

どれだけ取り繕つたところで、やっている事は人殺しだし、そこに正義などありはしない。

しかし、その根底には常に、圧政に虐げられてきた民を想う心があり、そんな彼等の為に、いつか国が変わるその時まで、戦い続けようと言う意思があつた。

だが、目の前の連中は違う。

こいつらはただ、混乱しきつた今の状況を楽しみ、火に油を注ぐ事だけを目的にして

いる。

人がもがき苦しみ、死の淵へと落ちていくのが楽しくて仕方がないのだ。そんな奴等がいるとは。

キリトは、剣を構えて前へ出ようとする。

だが、

「おっと、勘違いするなよ」

恐らくリーダー格と思われる外套の男は、前へと出ようとするキリトに対し、片手をあげて制する。

同時に、ダガーを持った手を大きく水平に掲げた。

「今日のお前の相手は俺達じゃねえ。こいつだ」

そう言うのと、背中に向けた刃を、掻き斬るように横一線に引く。

何をツ　と思った瞬間。

驚くべき事が起こった。

切り裂かれた軌跡をたどるように、

空間が真つ二つに斬り裂かれたのだ。

避けた空間からは、何か黒い煙のような物がにじみ出ているのが見える。

明らかに、尋常な光景ではなかった。



驚いて見守る中、ラフィン・コフィンの3人は、危険を回避するようにその場から飛び退く。

一体何が起こるのか？

固唾をのむようにして見守る中、

空間の裂け目に手を掛けるようにして、

《それ》は、姿を現した。

人間に数倍する巨体に、ヤギのような顔を持つ青黒い姿の巨人。

手には無骨な剣まで握っている。

「き、危険種？」

タツミの驚愕する声が聞こえてくる。

キリトもまた、あまりにも現実離れた光景に、声も出せないでいる。

あのフード男。

あいつの帝具は、危険種を自在に召喚する事ができると言うのか？

そこで、キリトはある事を思い出して、ハツと我に返る。

「まっずいッ!？」

振り返れば、未だに甲板にはスクリームの影響で起き上がる事ができないでいる乗

客たちが転がっている。

彼ら全員を今から起こし、あの危険種が暴れ出す前に全員を逃がす事は不可能だ。何より、ここは運河を航行する豪華客船の上。逃げ場など端から存在しない。

「こいつは西方で暴れまわっていた超級危険種の一体、グリーンムアイズだ。なかなか捕まえるのに苦労した逸品だぜ」

フード男はニヤリと笑うと、両手を大きく広げて見せた

「さあ、イツツ・シヨウタータイム!!」

まるで謳い上げるように、高らかに宣言する。

「民を守るのがナイトレイドなんだから!! なら、そこに無様に転がってる愚図共を、全員コイツから守って見せろよ、黒の剣士!!」

## 2

最悪の戦いが、幕をあげようとしていた。

グリーンムアイズと呼ばれる危険種は、目の前に転がる獲物の群れに歓喜するように咆哮を上げ、今にも襲い掛かってきそうな気配を見せている。

ラフィン・コフィンの作戦は正に、「最悪」の一言に尽きる。彼等は危険種をけしかけ、自分達は高みの見物を決め込むつもりなのだ。

「クソッ」

舌打ちするキリト。

相手は超級危険種。

対して、こちらは手負いのキリト一人だけ。ブラートは既に、瀕死の重傷を負って動ける状況ではない。

だが、それでも、

「やるしか、ない……」

悲壮な決意と共に、キリトはエリユシデータを構え直す。

せつかく偽ナイトレイドから守り抜いた文官や、その他の民達を、こんな形で殺させる訳にはいかなかった。

と、

「加勢するぜ、キリト!!」

そんなキリトの傍らに、剣を構えたタツミが並ぶ。

帝具を持たないタツミだが、この状況下では間違いなく貴重な戦力である。

その勇ましい姿は、今のキリトにとって何よりも頼もしかった。

「頼りにしてるぜ」

互いに笑みを交わす、キリトとタツミ。

次の瞬間、

雄たけびをあげて、グリーンムアイズが突っ込んで来た。

強烈な突撃と共に、手にした大剣を振り翳すヤギ頭の悪魔。

対して、

「おオオオオオオ!!」

エリユシデータ的能力によってアシストを得たキリトは、真つ向から振り下ろされる刃に対抗する。

振り上げられた剣。

激突の一瞬、

「グッ!?!」

キリトの腕に、へし折られそうなほどの衝撃が襲い掛かり、少年の体は僅かにノックバックする。

靴底の鋌で甲板を噛みながら、衝撃を堪えるキリト。

鋭く斬り上げられた剣は、辛うじて悪魔の大剣を弾き飛ばす事に成功する。

だが、

「クソツ……」

思わず飛びそうになる意識を、どうにか首を振って引き戻す。

先の戦闘におけるダメージは、確実にキリトをむしばんでいる。

既にエリユシデータの能力補正無しでは、まともに戦う事はできない状態である。

対して、

キリトに剣を弾かれたグリーンアイズは、僅かに後退したものの、体勢を崩すことなくその場に立っている。

互いの質量差がありすぎる為、並みの攻撃では体勢を崩す事すらできないのだ。

そこへ

「こつちだ、デカブツ!!」

剣を構えたタツミが、背後からグリーンアイズに襲い掛かる。

身軽なタツミは壁を使った跳躍で悪魔の頭の高さまで到達すると、同時に剣を横なぎに振るう。

鋭い一閃。

しかし次の瞬間、タツミが振るった剣は、グリーンアイズの強固な表皮に阻まれ、僅かに表面に傷をつけただけで弾かれてしまう。

「何っ!?!」

驚愕と共に、反動で弾かれるタツミ。

対して、グリーンムアイズはタツミの存在に気付き、振り向き様に拳を振るってくる。旋回する剛腕。

大気を粉碎するような一撃を前にして、

「クソッ!?!」

とつさに空中で体勢を入れ替えたタツミは、グリーンムアイズの一撃を回避。そのまま甲板に着地する。

「こいつ、随分と硬いぜ!!」

「危険種だけの事はあるって事だな」

タツミの声に頷きながら、キリトは攻撃の動作へと入る。

剣を担ぐように構えると、同時に大きく跳躍。グリーンムアイズの肩の高さまで飛び上がる。

「ヴァーチカルアーク!!」

Vの字に放たれる剣閃。

普通の人間が相手ならば、致命傷を与える事すら不可能ではない威力を秘めている。しかし、

剣はまたも、空しく弾かれる。

キリトの体は、反動を受け、空中で錐揉みする。

剣が当たった場所に目を向けると、僅かに表皮を斬り裂いた跡は見られるが、それだけである。致命傷どころか、掠り傷と言うにすら遠かった。

能力アシストを得た攻撃ですら、グリーンアイズにろくなダメージを与えられないのだ。

「何か、弱点でもあればッ．．．．．」

着地と同時にグリーンアイズの攻撃を回避しながら、キリトは焦慮に駆られたように呟く。

視界の端では、タツミが連続して剣を振るい攻撃を仕掛けているが、芳しい戦果を挙げているとは言い難い。

やはり、並みの攻撃ではダメージを与える事は難しい。

何か、決定的な一撃を与える事ができなければ、この場での全滅すらあり得た。

一方、タツミは数度にわたって行った攻撃を全て弾かれ、舌打ちしながら後退する事を余儀なくされていた。

硬すぎる。

タツミの攻撃では全て弾かれ、グリーンアイズに対し決定打を与える事はできなかった。

「クソツッ このままじゃッ」

タツミは剣を構え直しながら、チラツと背後を見やる。

そこには、甲板に転がっているたくさんの人々の姿がある。

今はまだグリーンアイズは、張り付くように自身の周りを飛び交っているキリトとタツミの存在に引きずられるように、足を止めて応戦しているが、いずれ、その牙の矛先を転がっている人々に向けるであろう事は、想像に難くない。

それだけは、何としても阻止しないとイケないのに。

しかし、タツミの攻撃力ではいかんともしがたい。

そもそも、帝具を使ったキリトの攻撃ですら、掠り傷を負わせるので精いっぱいなのだ。タツミの力では足止めするのがせいぜいだった。

その時、

「タツミ……」

かすかな声で呼ばれ、タツミは振り返る。

するとそこには、床に転がった状態でこちらを見ているブラートの姿があった。

「兄貴、意識が戻ったのか!？」



慌てて駆け寄るタツミ。

それに対し、ブラートはうつすらと開けた瞳で、弟分を見やる。

「状況は……どうなってる？」

こうやって口を開けて言葉を発するだけでも、既にブラートにとつては大儀であるようだ。掠れるような言葉は、ふとすれば聞き漏らしてしまいそうである。

「デカい危険種が暴れているよ。今はキリトが何とか抑えているけど、ちよつとまずい状況だ」

「……そうか」

ブラートは、首を傾けて戦うキリトを見やる。

今もキリトは、グリーンムアイズが振り下ろした巨大な剣を、エリユシデータで切り払っている。

通常では不可能な芸当だ。そもそも、キリトとグリーンムアイズとでは、身長で5倍以上、全体の大きさとしては10倍近い差がある。質量差を考えれば、差はさらに広がるだろう。

それでもキリトが拮抗していられるのは、能力アシストによって得られた剣速と威力、状況を正確無比に見極めるキリトの戦術眼。そして帝具の強度が重なり合っているからに他ならない。

だが、それがいかに危険な状況であるか、ブラートにはよく判っていた。

今の拮抗は、奇跡的に全ての要素が調和した結果に過ぎない。キリトがちよつとでも受けるタイミングを見誤れば、その瞬間、グリーンアイズの剣はキリトを斬り裂くだろう。

そうなる前に、手を打たないと。

しかしもう、ブラートは全身に毒が回り、体を動かす事すらできなくなっている。

そんな自分に、まだできる事があるとすれば……

「……………タツミ」

「兄貴、どうした？」

意を決して、ブラートは弟分に声を掛けた。

振り下ろされた大剣の一撃を、キリトは辛うじて弾く事に成功していた。

だが、勢いまでは殺しきれず、甲板上を大きく吹き飛ばされて後退する。

「クソッ!？」

エリユシデータの切っ先を甲板に突き立ててブレーキを掛けつつ、どうにか戦闘態勢を維持する。

その視界の中で、グリーンアイズが高らかに咆哮を上げるのが見えた。  
「……………良い気になりやがって」

舌打ちしつつ立ち上がると、再びエリユシデータの切っ先を悪魔に向ける。  
どうあれ、ここで退く事は許されない。

「ハアアアアアアアアアアアア!!」

跳躍。

同時に、突進の勢いそのままに、上段から剣を繰り出す。

振り下ろされるグリーンアイズの剣を掻い潜りながら、更に一撃。続けて一撃。  
立て続けに三連撃をくらわし、更に鋭い斬り上げを行う。

苦悶するように雄たけびをあげるグリーンアイズ。

トドメとばかりに、剣を斬り下ろすキリト。

そこで、ようやく僅かに、グリーンアイズが後退した。

怒涛の五連撃。

この技は本来、完璧に決まれば八連撃が可能になるのだが、今のキリトではこれが精  
いっぱいだった。

しかし、

荒い息を吐き出しながら顔を上げるキリト。

その視界の中で、尚もこちらに向かってくるグリーンムアイズの姿がある。その体には、僅かに傷を負った様子があるが、それだけである。

キリトの渾身の攻撃を持ってしても、大ダメージを与えるには至らなかつたのだ。

「クソッ」

舌打ちするキリト。

このままでは、キリトの体力の方が先に尽きてしまう。

どうにか、反撃の一手を打たないと。

そう思った時だった。

突如、白い尾を引く流星がキリトの後方から飛来し、グリーンムアイズの胸部を直撃した。

吹き飛ぶ悪魔。

そのまま、甲板の上にあおむけに倒れ込む。

あまりの威力に、その巨体は上甲板を突き破り、中甲板まで落下するほどであった。

「なッ!？」

あまりの光景に、思わず絶句するキリト。

自分がどうあつても倒せなかったグリーンムアイズを、ここまで吹き飛ばすとは、その視界の中で、

ゆつくりと立ち上がる人物。

龍を模した鎧を着込んだ人物は、キリトに振り返った。

「インクルシオ……ブラートか……いや……」

フルフェイスマスクに、鋭角的な装甲は、確かにインクルシオの物である。

だが、ブラートが装着していた物とは、いくつかの違いがある。

まず、ブラートが装着するときは、ロングコート状の外套を上から羽織るが、目の前のインクルシオは、体全体を覆うマントを羽織っている。腰回りの装甲も、前は無かった物だ。

全体的にマツシブだったブラートの物とは違い、こちらはややスマートの印象がある。

「お前まさか……タツミ、か？」

「ああ」

キリトの問いかけに果たして、インクルシオは頷きを返した。

自分かもはや戦えない事を悟ったブラートは、自身の相棒とも言うべきインクルシオを、次代の担い手に託したのだ。

インクルシオは元々、タイラントと呼ばれる龍型超級危険種の体を素材として使っている。

タイラントはその凶暴性故にあらゆる生命を喰らい尽くす、厄災の化身として恐れられている。

特徴的な生態として、灼熱の砂漠であろうが、永久凍土であろうが適応する能力があり、一時、始皇帝が差し向けた討伐部隊に狙われた個体は、危険を回避する為にステルス能力を身に着けたと言う。それが今日の、インクルシオの透明化機能に繋がっていると思われる。

鎧の形を取ってはいるものの、インクルシオの元になった龍はまだ生きて進化を続けていると言う。

そのインクルシオが、タツミの特性に合わせて自身を進化させたのだ。キリトは、とっさにブラートに目を向ける。

すると、

床に転がったまま、ブラートは笑みを向けて来た。

その顔は、既に毒が回っているとは思えない程、清々しい物である。

自身の魂を継いで戦ってくれる人間がいる。それだけでも、戦士としては最上の幸福なのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

視線を交わす、キリトとブライト。

キリトの脳裏には今、戦闘前にブライトに言われた事が思い出されていた。

『何にしても、お前の判断が間違った事は無いからな』

そう、キリトは今まで、常に自分で最良と思える選択肢を取って来た。

ならば、と考える。

今この状況で、取るべき「最良」とは何か？

そんな物は決まっている。

『躊躇うなよ、キリト』

ブライトの視線は、そう語っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

意を決する。

事ここに至った以上、キリトの持てる全力でもって立ち向かう以外に選択肢は無かった。

「タツミ、10秒、時間を稼いでくれ!!」

「キリトッ!?!」

言い置くと同時に、後退するキリト。

それとほぼ時を同じくして、甲板に空いた穴から、再びグリーンアイズが這い上がってくるのが見えた。

先程のタツミの一撃は、強烈だったが致命傷を与えるには至らなかつたのだ。

雄たけびをあげて突撃してくるグリーンアイズ。

振り上げた剣が、真つ向からタツミへと振り下ろされる。

だが、

今度は、タツミも吹き飛ばされる事は無い。

衝撃を真つ向から受け止め、そして押し返す。

よろけるように、グリーンアイズは数歩後退する。

同じ超級危険種として、格下の相手に負けるわけにはいかない。

まるで、インクルシオ自身が、そう言っているかのような光景だつた。

そこへすかさず、タツミが追撃を掛ける。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

跳躍と同時に、拳を振り上げて襲い掛かるタツミ。

インクルシオもまた、タツミの能力を底上げしてアシストする。



だが、グリーンムアイズの方でも、自らに向かってくる不遜な存在を叩き潰すべく向かってくる。

死闘を繰り広げるタツミとグリーンムアイズ。

その戦いを見ながら、

キリトは意識を集中していく。

心の中で呼びかける。

自分の中にある存在へ。

解き放つべきは、今だった。

次の瞬間、

背中に新たな重みが加わるのを、キリトは感じた。

その感触を確かめる間も無く、キリトは甲板を蹴って前に出る。

「良いぞ、タツミ!!」

言い放つと同時に、キリトは跳躍。右手に持ったエリュシデータで斬り掛かる。

対抗するように剣を振り下ろすグリーンムアイズ。

互いの剣が接触した瞬間、キリトは力強く剣を振り抜く。

その衝撃の重さに、グリーンムアイズはたたらを踏むように後退した。

「ハッ!」

その一瞬の隙を逃さず、キリトは仕掛けた。

左手を背中に回し、そこに現れた柄を握る。

抜き放たれる、もう一本の剣。

それは、流麗な剣だった。

エリュシデータとは対照的に、切っ先から柄尻に至るまで全てが純白になっており、先端部分の身幅に僅かな膨らみがある。

漆黒の刀身で、無骨な印象のあるエリュシデータとは対照的な、美しい剣である。

《白翼聖剣ダークリパルサー》

これもまた、帝具の一つである。

帝具は一人に付き一つ。これは鉄則である。使用する際に、半端ではない負荷がかかる為、二つ以上の帝具を持つ事は、事実上不可能なのだ。

だが、その常識を覆す光景が、そこにあった。

エリユシデータとダークリパルサー。

二つの帝具を手に、キリトは駆ける。

そして、これこそがキリトの奥の手《二刀流》だった。

エリユシデータの元となった伝説の剣豪。

彼が最も得意とし、戦場において数多の敵を斬り伏せて来た最強の剣技。

これこそが、この二刀流である。

二刀一対の帝具を手に、キリトは駆ける。

バランスを崩したグリーンムアイズに、左手のダークリパルサーを横なぎに一閃する。

斬り裂かれる巨体。

悪魔は、その一撃を前に苦悶の声を上げる。

ここに至るまでに決定打を奪えなかったキリトだが、ようやくクリティカルヒットを

放つのだ。

キリトは更に追撃を掛ける。

手にした左右の剣を大きく広げる。

その様は、まるで黒白の翼を雄々しく広げたような印象がある。

身体の回転に合わせて繰り出される剣が、グリーンムアイズを大きく斬り裂く。

甲板に降り立つキリト。

「これで………決めるッ!!」

二刀を構え、一気に駆け抜ける。

鋭く振るわれる剣。

まるで、流星が一齐に流れるような軌跡は狙い変わらず、全方位から悪魔に殺到する。

「スターバースト・ストリーム!!」

キリトの剣が閃光を刻むたび、確実にグリーンムアイズは斬り裂かれていく。

そして、

キリトが最後の一撃を放った瞬間、

グリーンムアイズは大きく方向を上げて、身体を硬直させる。

その巨体は大きく後方にのけぞると、そのまま背後へと倒れ、やがて甲板の縁から運

河へと落下していく。

巨大な水柱を上げて、悪魔は水面下に没する。

その様を、

キリトは、手にした黒白の剣を掲げ、見つめ続けていた。

龍船のすぐ脇から立ち上った巨大な水柱。

その有様を、やや離れた岸辺に立ったラフィン・コフィンの3人も見ていた。

あの巨大な水柱。

それは即ち、グリーンムアイズが敗北した事を表している。

「……………行くぞ」

やがて、リーダー格のフード男は、踵を返して残り二人を促した。

その様子を、髑髏男とズタ袋の男は訝るような視線で見る。

「え、ええ!? 帰るんすか、ヘツド?」

「今なら、あいつらを、やれると、思いますか?」

追撃を掛けて、ナイトレイドを全滅させるべきではないか、と二人は言っているのだ。

だが、

フード男は僅かに振り返ると、固い口調で言った。

「黒の剣士の奥の手に加えて、新型のインクルシオ。あれは結構な脅威だ。グリーンムアイズ級のカードは手元に無いし、今仕掛けるのは無謀つつうもんだろ。それに……………」

「それに?」

フード男は、にやりと笑って続ける。

「あんな面白い玩具を見付けたんだぜ。長く楽しまないと損だろうが」  
ナイトレイド。

奴等が思っていた以上に面白い連中であると言う事が判った。

「これから、もつと面白い事が起きる。連中を狩るのは、それからでも遅くは無いさ」  
そう言うのと、フード男は2人を引き連れてその場を後にする。  
後には、人がいたと言う形跡すら残ってはいなかった。

ブラートは薄れゆく意識の中で、二人の少年を見据えていた。

キリトとタツミ。

このたった2人の少年が、超級危険種を葬って見せたのだ。

「はは、スゲエな、お前等・・・・・・・・・・・・・・・・」

心からの賞賛を送る。

キリトが見せた奥の手《二刀流》。

何か隠しているとは思っていたが、まさかこれほどの物だったとは。  
ハツキリ言つて、度肝を抜かれた感じである。

まったく、これ程の物なら、出し惜しみなんかしていないでさっさと使えば良い物を。身体が動くようなら、絶対に今すぐキリトの頭をドツイている所である。勿論、スキャンシツプの一環でだが。

そしてタツミ。

自身の帝具であるインクルシオを受け継ぎ、立派に戦った弟分を、ブラートは誇らしく見つめる。

タツミのあの強さ。

キリトですら苦戦した危険種を、たった一人で拮抗したタツミの実力の高さは、ブラートの予想をも上回っていた。

今あれだけ強ければ、いずれは必ずブラートを越え、タツミが「ナイトレイド最強」と呼ばれる日がきつと来るはずである。

キリト

そしてタツミ。

もう、自分が必要無い。

二人がいれば安心だ。

あの二人がいれば、仲間を守り、きつと最後まで戦い抜いてくれることだろう。

ゆつくりと、目を閉じるブラート。

その心は、自分でも驚くほどに澄み切っていた。  
後を託せる者がいる。

それだけで、戦士として何と幸福な事か……………

「ああ、でも、そうだな……………」

一つだけ、心残りがある事を思い出し、フツと笑みを刻む。

それは、あの二人の活躍を、もう傍で見ることができないと言う事。

できれば、最後まで見守ってやりたかったが、それももう、今更である。

「後は頼んだぞ……………キリト……………タツミ……………」

そう呟くと、

ブラートは幸福感に包まれたまま、ゆっくりと意識を落としていった。

第15話「黒白のジョーカー」

終わり



## 第16話 「天敵、集結」

1

並んで建てられた三つの墓。

その一つ一つに、トキハは花束を置いて行く。

リヴァ、ニヤウ、ダイダラ。

それらの墓は、大運河での戦いで戦死した三獣士達の物である。

彼等との付き合いはそれほど長くは無かったが、それでも思い出は残る。

紳士然としたリヴァ、豪快なダイダラ、人懐っこいニヤウ。

皆それぞれ、遠方から来た余所者のトキハによくしてくれた。

「リヴァ．．．．．ニヤウ．．．．．ダイダラ．．．．．」

トキハが花を置くのを待つていたように、後ろに立つエスデスが口を開いた。

「お前達は敗れた。それは、お前達が弱かったからだ」

突き放すような言葉を駆けるエスデス。

しかし、その声は常の物よりも、少し固い感じがあるように、トキハには思えた。

「まったく、しようがない部下達だよ、お前等は………本当にしようがないから、仇は私が取つてやる」

言つてから、エスデスはトキハに目をやる。

「私を冷たい女だと思ふか？」

「別に。エスデスなら、多分そう言うだろうと思つていたし。それに、リヴァ達だつて、慰めなんか期待していないと思う」

エスデス軍のモットーは弱肉強食。弱い者は強い者に敗れ、ただ蹂躪されるだけ。

今回は三獣士よりもナイトレイドの方が強かったと言う、ただそれだけの話である。

慰めの言葉を掛けるよりも、仇を打つ事の方が死んでいった者への手向けとなる事を、トキハも理解していた。

「例の特別警察、そろそろ動けるんでしょ？」

「ああ、メンバーの大方は、今日中に集まる筈だ」

オネスト大臣は、エスデスが希望した7人の帝具使いを見事に期日までに集めて見せ

た。

勿論、その際に強権を発動し、かなり強引に集めたであろう事は想像に難くないが。

「そう言えば・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？」

訝るトキハを傍らに無視して、エスデスはふと、ある事を思い出す。

大臣が言うには、七人のメンバー選抜が完了し、召集令状を送った直後、飛び入りで一人、参加希望が出て来たと言う。

これで、ここにいるトキハとエスデスを加えると、メンバーは全部で十人と言う事になる。当初エスデスが考えていたよりも、規模が拡大できた。

しかも、聞いた限りでは実力に疑う余地は無く、むしろエスデスとしては願ったりな状況である。

ただ、それだけに飛び入り参加と言う形になったのが、解せない話ではあるのだが。ニヤリと笑うエスデス。

「あの男」の目論みがどこにあるのかは、エスデスにも判らない。

だがそれでも、状況的に考えて、事はエスデス好みの方向に、事は動いているようだった。

手にした資料に目を通すと、キリトは険しい顔でページをめくって行く。

大運河での戦いから数日。偽ナイトレイドを名乗って凶行を重ねていたエスデス軍三獣士を撃破した事で、一連の文官連続殺人事件は鳴りを潜めるように収束していた。

帝具も一度に大量に手に入り、ナイトレイド側としては満足のいく戦果であったと言える。

無論、ブラートを失った事への悲しみは深い。

ブラートは隊内最強の実力を誇っていただけではなく、面倒見も良く、みんなの兄貴のような存在だった。

それだけに、失われた事への寂寥感は、どうあつてもぬぐえなかった。

とは言え、それをいつまでも悲しんでいる事はできない。

ブラートの魂は、彼の相棒だったインクルシオと共にタツミが受け継いだ。

ならば、残された者達は、革命が成功するその日まで、ブラートの分も戦い続けるのみだった。

そんな中、キリトはナジエンダに頼んで、ある資料を取り寄せてもらった。

ナジエンダは今、回収した三獣士の帝具を持って、南方の革命軍本部へ向かっている。回収した帝具を革命軍で解析、役立ててもらおうと同時に、状況を報告する事が目的

である。

加えて、ナジエンダは本部と交渉して、メンバーの増員をしてもらおうとしていた。シエーレ、ブライトと主力メンバーを相次いで失ったナイトレイドの戦力は、一時的に弱体化している。マインの怪我は完治し、復帰に向けて訓練も開始しているが、それでも規模の縮小は避けられない。

そこで、新メンバーを加えた新体制で、スタートを切ろうとしていた。

資料のページをめくるキリト。

大運河での戦いで、限界を超えて帝具の力を使ったキリトは、その後何とか龍船から脱出する事に成功したものの、そこで力尽きて倒れてしまい、あとはタツミに運んでもらう形でアジトへと戻って来たのだ。

それから数日、キリトはベッドに放り込まれ、完全療養を言い渡された。

そしてつい昨日、ようやく動けるようになったところで、キリトは資料に目を通す事が出来た。

「.....ラフィン・コフィン」

苦々しく呟くキリト。

それは、あの龍船で姿を現した、3人が名乗った組織の名前。

キリトが今読んでいるのは、そのラフィン・コフィンに関わる資料だった。

ラフィン・コフィン

その存在は帝国全土で確認されている、広域指定犯罪組織の名称。

構成員は百人を下らないとさえ言われる巨大組織であり、いくつかの帝具は彼等が所持しているとさえ言われている。

その残虐性は言葉では語り尽くせぬほどであり、彼等に狙われて生き残った人間は殆どいないとさえ言われている。

ある時、事態を重く見た、とある地方領主は、私兵部隊を中心に五百から成る討伐隊を組織。このラフィン・コフィン殲滅に乗り出した。

数の上から言って、討伐隊の勝利は確実かと思われたこの戦いは、しかし誰もが予想だにできなかった結末を迎える事になる。

ある朝、領主の館に仕える年若いメイドが、庭を見て甲高い悲鳴を上げた。

驚いて、領主以下の家人たちが庭へと出てみる。

そこで、絶句した。

その庭には、出撃した討伐隊の兵士全員の首が、整然と並べられていたのだ。

流れ出た血で中庭全体が真っ赤に染まり、並べられた兵士の首は、不気味な視線を見守る一同に向けて来ていたと言う。

それは、盛大過ぎる警告だった。

「自分達に手を出せば、お前達も簡単にこうなる」と言う。

このように、ラフィン・コフィンとは、残虐な行為も厭わない最悪の犯罪者集団である。その為、早急なる殲滅が望ましいと考えられる。

最後のページには、幹部格3人の簡単な特徴が、人相書き入りで載っていた。

まず、ブライトに致命傷を与えたと思われるズタ袋の男、《ジョニー・ブラック》。この男は何種類もの毒を使いこなし、数多くの毒殺に関わって来た。

髑髏の顔に赤い目のマスクをしているのは《赤目のザザ》。隊内でも武闘派に位置づけられる一方、数多くの殺人もこなして来ており、その犠牲者は単独でも三ヶ々に上るとさえ言われる危険人物である。

そして、

「.....」

キリトは最後の1人、あのフード男に目をやった。

《POH》と言う名のダガー使い。こいつが組織のリーダーであるらしい。素性、経歴は一切不明。ただ帝具使いである事、組織随一の戦闘力を誇っている事は確実と言われている。

書類から目を放すキリト。

ラフィン・コフィンとの戦いは、まだ始まったばかりである。それを考えれば、連中

はまた、必ず現れる事になる。

「………奴等との戦い、案外長い物になるかもしれないな」

そう呟きながら、資料を閉じるキリト。

敵の実力は、未だに底が知れない感がする。ある程度、覚悟を決めてかかる必要があると感じた。

その時、

「キリト、入るわよ」

声を掛けて部屋に入ってきたのは、シノンだった。

その姿に、キリトは僅かに顔をほころばせる。

キリトが倒れている間、シノンはグチグチと不満を言いつつも面倒を見てくれたのだ。

普段は素っ気ない態度を取る事が多いシノンだが、どうやら割と面倒見の良い性格であるらしい。

ちよつと、可愛いと思った。

シノンはキリトよりも1歳年下だが、何だか妹ができた気分である。

もつとも、キリトは故郷に本物の妹が1人いるし、それでなくても、こんな取っ付きの悪い妹は願ひ下げなのだ。



「………何か失礼なこと考えてない？」  
「き、気のせいだよ」

鋭い指摘をしてくるシノンに、キリトはドモリながら否定する。

何だか最近、シノンの勘が前よりも鋭くなってきた気がするの、気のせいなのか、あるいはこの勘の鋭さも帝具の能力なのか？ キリトとしては是非とも、後者では無い事を祈るだけである。

そんなおバカな事を考えていると、シノンがキリトの頭に手を伸ばしてきた。

殴られるか？

そう思つて僅かに身構えるキリトだったが、すぐにそれが杞憂である事が判つた。

頭に手を伸ばしたシノンは、キリトの額に手を当てて来た。

「ふうん。熱は下がったみたいね。まったく、アンタの場合、多少具合が悪くても体動かすから、見ているでも大丈夫なのかどうか判り辛いのよね」

「面倒をおかけします」

そう答えつつも、

キリトはシノンの掌が齎す柔らかい温もりに、ほんの少し気恥ずかしい物を感じずには入れられない。

同年代の女の子にこのような事をしてもらうと、嬉しい以前に緊張してしまうのが思

春期の少年と言う物だろう。

そう考えれば、シノンは普段の言動に似合わず、割と無防備な所があるらしかった。

「い、いや、もう大丈夫だって」

慌てて、シノンの手から額を離すキリト。

そんなキリトの様子を、シノンは意味が分からないと言った感じにキョトンとして見詰めているのだった。

2

エスデス主導による特別警察立ち上げの日。

トキハは宮殿内の、指定された部屋へと向かっていた。

相変わらず巨大で、内部構造が複雑な宮殿内の様相には、辟易してくる。

記憶力にはそれなりの自信があるトキハですら、案内なしで宮殿内を歩けるようになるまで、しばらく時間がかかってしまった。

「こんなに複雑にして、どうするんだか」

城の構造を複雑化するのには、一応の理由がある。万が一、敵や賊が侵入した場合、これを撃退しやすくするためだ。また、複雑な構造にする事で、侵入その物を不可能にしてしまおうと言う狙いもある。

とは言え、この宮殿の複雑さは異常だと思った。

全ては、官僚達の小心から来ている。

彼等は、自分達の命が脅かされる事を恐れ、税金と労働力を湯水のように使い込んで、この複雑怪奇な構造をした宮殿を完成させたのだ。

バカバカしい事だ、とトキハは思う。

宮殿にはブドー大將軍率いる近衛の精鋭部隊が、常に目を光らせている。それだけでも賊に対する抑止力としては充分すぎるくらいだ。

だが、小心者の官僚たちは、自分達の安全を「目に見える形」で表さないと気が済まない連中ばかりであるから始末に負えなかった。

民がいくら苦しもうが、自分達の命と財産が守られればそれで充分、と言う事だろう。巨大な国家を支配しておきながら、皇帝や大臣、官僚達にとって「帝国」とは、この宮殿の中だけの事を差しているのだ。

「えっと、この辺だよな。エスデスが言ってた集合場所って」

トキハはメモに目を落としながら、廊下を進んで行く。

そこで、ようやく目的の部屋を見付ける。

「ここか………失礼します」

ドアを開けて、中へと入る。

そこで、

「えッ!?!」

思わず、中にいた人物とハモる形で、トキハは硬直した。

中には女性が1人いる。

女性、と表現したが、実際の所は「少女」と言った方が正しいだろう。年齢は、トキハと同じくらいか、少し上。

茶色がかかったロングヘアの中から、少女は可憐な瞳でトキハの方を見詰めてきている。

スラリとした白い手足に、大きすぎず小さすぎない、手ごろなサイズの胸、腹部はキュツと引き締まり、その下のお尻は好ましい丸みを帯びている。

まさに、ミドルティーン世代としては理想的なスタイルの持ち主であると言える。

で、

何でトキハにそんな事が判るのかと言えば、

目の前の少女が、下着姿だからに他ならなかった。

白地に赤い縁取りの入った、お揃いの上下が、少女を美しく飾り立てている。そうしていると、まるで天上の女神が降臨したような印象さえある。

もつとも、

その女神は、今まさに細剣を鞘から抜き放ち、その鋭い切っ先をトキハに向けてきている訳だが。

一拍置かれる、静寂の間。

次の瞬間、

「キヤアアアアアアアアアアアアアアア!？」

「うわッ!？」

少女の悲鳴とと門放たれる超高速の連続突き。

それに対し、トキハはとっさに、のけぞるようにして少女の剣をかわす。

だが、少女の攻撃は、そこで収まる事無く、次々と襲い掛かって来た。

ウェイブは、自分が屈強な海の男を目指しており、常に悪を討つ為に戦い続ける誇り高い戦士である事を自認している。

帝国海軍に所属し、日々、凶悪な海賊たちを相手に戦い続けるウェイブの實力は、海

軍内でもトップクラスである。

その為、このほどエスデス將軍が編成を進めていると言う特別警察の隊員に選ばれ、手土産を手にはるばる帝都までやって来たのだ。

だが、意気揚々と集合場所の部屋に入った途端、ウェイブはこの場所に来た事を魂の底から後悔していた。

同僚が変人すぎる。

まず、入った時に既に先着していた人物は、ガタイの良い上半身が裸であり、なぜか頭部を不気味なマスクですっぽりと覆っている。しかも、さつきからジツとウェイブを見詰めてきている。ハッキリ言って怖かった。

この時点で、先制パンチとしてはクリティカル級である。

2人目は、学生服を着た少女で、髪をショートカットにした可愛らしい女の子である。が、なぜか持ち込んだお菓子を一心不乱に頬張っている。ウェイブが挨拶しようとした瞬間、間髪入れずに返ってきた言葉は「このお菓子はあげない」だった。

3人目はウェイブと同年代くらいの女性。セリユーと名乗ったその人物は、澁刺としていて好印象を持てる。足元にいる謎生物はともかく。

だが次に、セリユーの紹介で入って来た人物に、絶句した。

赤いバラの花びらを撒き散らしながら入ってきた中年の男性は、一言で言えば「オカ

マ」だった。口調も仕草も、紛う事無く、完璧なまでのオカマだった。しかも、ウエイブに狙いまで定めている始末である。

うん、何というか……

もう帰りたいかった。

と言うか、もう帰っても良いだろうか？

5人目に入って来たウエイブよりも少し年上くらいの男性が、物腰の柔らかい優しいな性格だったのが唯一の救いであるが。

ともかく、これがウエイブの同僚たち。これから一緒に戦う仲間達と言う訳だ。激しく不安を覚える。

と言うよりむしろ、不安意外何物も存在しない状況である。

その時だった。

扉が開き、軍服を着た人物が会議室の中へと入って来た。

すらりと伸びた手足や、軍服の上から膨らんだ胸など、明らかに女性である事が判る。しかし、その顔は仮面で覆われており、窺い知る事ができなかつた。

その仮面の女性は壇上に立つと、居並ぶウエイブたちを指差して言った。

「お前達、見ない顔だなッ　ここに何をしている!？」

いきなり発せられた一方的な物言い、ウエイブはムツと顔をしかめる。

先程から感じていたストレスの連続に、いい加減、鬱憤も溜まっていたところであったから尚更である。

「おいおい、俺達はここに集合するように言われて……………」

ウェイブは、最後まで言い切る事ができなかった。

その前に、一瞬で距離を詰めて来た女が、ウェイブを容赦なく蹴り飛ばしたのだ。

衝撃と共に、成す術も無く床に転がるウェイブ。

あまりの威力に、ウェイブは悲鳴を上げる事すらできず、そのまま起き上がれずにいる。

その様子を見て、居並ぶ一同に緊張が走る。もつとも、学生服の少女だけはマイペースにお菓子を食べているが。

「賊の中には殺し屋もいる。常に警戒を怠るな!!」

ウェイブを無力化した女は、今度は物腰の柔らかかそうな優男へと狙いを定めて襲い掛かる。

だが、自分が狙われている事を悟った男は読んでいた本を閉じると、とつさに後退する事で女の攻撃を回避して見せた。これは、顔に似合わずなかなかの反応速度であると言えよう。

動きを止める女。



そこへ、背後からセリユーと、彼女の相棒であるコロことヘカトンケイルが襲い掛かった。

挟み込むように、女に飛び掛かるセリユーとコロ。

セリユーは凶悪な笑みを浮かべ、女に殴り掛かる。

次の瞬間、

セリユーは突き出した腕を女に掴まれ、勢いそのままに背負い投げの要領で床に叩き付けられた。

「グッ!？」

床板が破壊される程の威力を前に、セリユーは息を詰まらせ、その場から動けなくなってしまう。

「背後から襲うにしては、お前は殺気が剥き出し過ぎるぞ」

「クッ!？」

悔しそうに舌打ちするセリユー。見れば、ヘカトンケイルも氷漬けにされて捕まっている。

完全に子ども扱いだった。

と、

そこで、それまで無関心にお菓子を食べていた少女が動いた。

ビスケットを口に含みながら立ち上がると、腰の刀の鯉口を切つて駆ける。

そのあまりの速さに、誰もが目で追う事ができなかったほどである。

間合いに入ると同時に抜刀。横なぎの一閃を繰り出す少女。

その鋭い一閃が、女の仮面を掠める。

「……………ふざけられても、こっちは手加減できない」

低く囁かれる少女の言葉。

それに対して、

仮面の女はフツと、笑みを返す。

「それが帝具《死者行軍ししやこうぐん 八房やっふさ》か。流石の切れ味だな」

同時に、刃が震めた仮面が崩れ、床へと落ちる。

その下から、強烈な美貌を誇る素顔が顕になった。

「あ、あなたは!？」

声を発したのは、一番初めに来ていた不気味なマスクの男性である。

仮面の下から現れた、女の顔には見覚えがあつたのだ。

「エ、エスデス將軍!？」

女の正体はエスデスだった。

今日、メンバーの大半が集合すると聞いて、余興ついでに皆の実力を見てみようと考え

えたのだ。

実にエスデスらしい発想である。

その時、

「エスデス、趣味悪いよ」

ぼやくような言葉と共に、2人の人物が部屋の中へと入って来た。

一人はトキハである。しかしなぜか、その姿はボロボロに近い格好になっている。

そしてもう1人は、純白の軍服に身を包んだ、血盟騎士団副団長のアスナだった。こちらは、頬を膨らませてそっぽを向いている。

そんな二人の様子を見て、エスデスは意外そうな顔をする。

「珍しい組み合わせだな、お前達」

「強狼の現行犯です」

「この女は、殺人未遂の現行犯」

そう言つて、互いを指差すトキハとアスナ。

トキハが間違つて入つた部屋で着替えていたアスナ。

下着姿を見られたアスナは激昂し、容赦なく愛剣でトキハに斬り掛かった。

行動としては、なかなか過激な物である事は間違いない。

幸い、アスナの攻撃をトキハは全部裁く事が出来た為、大事には至らなかつたものの、

互いの第一印象が最悪な物になったのは言うまでも無い事である。

結局その後、騒ぎを聞きつけてすっ飛んできたブドー大將軍に、2人そろって大目玉をくらってしまった。

2人が遅れて来たのは、そう言った理由である。

そんなトキハとアスナを見て、エスデスは笑みを浮かべる。

「どうやら、相性が良いようで何よりだ。お前達、気が合うな」

「合って無い!!」

声をそろえる二人。タイミングもバツチりだった。

そんな中、マスクをかぶった男は、ウェイブに近寄って右手を差し出してきた。

「さっきは、ずっと黙っていてごめんね。私、人見知りって奴で、緊張してたんだよね。けど、ここじゃ多分、私が一番年上だから、しっかりしなくちゃね」

「ハ、ハア……」

人見知りって外見か？ と内心で思うウェイブだったが、思ったよりも相手の物腰が柔らかかったせいかな、第一印象の強烈なインパクトは幾分、和らいだ感じがある。

「焼却部隊から来たボルスです。よろしくね」

「あ、こここそ。俺は、帝国海軍から来たウェイブです」

そう言ってウェイブは、ボルスの手を握り返す。

焼却部隊と言うのは、その名の通り火を専門的に扱う部隊であり、スパイ容疑が掛かって処刑される者や、疫病が蔓延し手の施しようがないと判断された村を焼き払うのが任務である。

「ジョヨウ総督府から来ましたランです。どうぞよろしく」

そう言つて柔らかく微笑んだのは、最後に入つて来た優男の青年である。こうして見ると、警察などと言う荒事専門の仕事をするようには見えない。書記官のような文官か。あるいはもつと言えば、教壇で教鞭を振るう教師のようにも見える。

ジョヨウと言えば、地方の大都市の中でも犯罪発生率が最も低い都市として有名な場所である。ランの物腰の柔らかさも、そこから辺から来ていると想像できた。

「帝都警備隊のセリユー・ユビキタス、アンド、こつちが相棒のコロです。つて、さつきも名乗りましたね」

敬礼しながら、自分の行動に苦笑するセリユー。

それだけ見ると、体育会系少女のような澆刺とした印象がある。

だが、その笑顔の下に、凶悪かつ凶暴な素顔が隠されている事は、まだこの中の誰も知らなかった。

「特殊工作部隊から来たクロメ、よろしく」

素つ気なく言つたのは、学生服を着た少女である。相変わらず、お菓子をバクバクと

食っている。

しかし、

特殊工作部隊とは所謂、潜入や暗殺を主任務とする部隊であり、中には敵組織の中に単独で潜り込み目標を殺害する事もあり得る。外見の細さからは想像もできないが、クロメが先ほど見せた強さも、それで納得できる。

「中央研究開発部から来たスタイリツシュよ。よろしくね」

そう言つて自分に対しウインクしてくるスタイリツシュに対し、ウェイブは容赦ない寒気を感じる。

中央研究開発部は兵器や薬品の開発を主に扱っている部署であり、中には罪人を使用した人体実験まで行っていると言う黒い噂まであった。勿論、真偽については不明だが。

「近衛軍特別機動部隊『血盟騎士団』から来たアスナです。よろしくお願いします」  
アスナは名乗つてから、今回の自分自身の事について思い起こす。

今回の件、最後に飛び入りで参加した8人目のメンバーとは、アスナの事である。

血盟騎士団本隊は現在、団長のヒースクリフ自らが率いて南方の要害。シスイカンへと赴いている。最近、急速に勢力を拡大しつつある反乱軍<sup>革命軍</sup>へ備える為だ。

その際、アスナも当然同行するものと考え準備していたのだが、ヒースクリフから言

い渡された任務は、アスナにとって意外な物だった。

それは、エスデスの指揮下に入り、彼女が新設する特別警察に出向せよと言う事だった。

当然、アスナは反対した。皆がシスイカンの守りに付く時に、なぜ副団長の自分一人が帝都に残らなくてはならないのか、と。

だが、ヒースクリフは学生と両立しているアスナの立場を重んじ、またその剣の腕を存分に振るう事ができる警察機構への出向を命じたのだ、とアスナに説明した。

正直、団長のヒースクリフは、アスナにすら本音を見せない所がある為、言った事が真実かどうかは判らない。

しかし、それが正式な命令である以上、従わない訳にはいかなかった。

更に言えば、エスデス指揮下の新組織は、これまでにな全く新しい発想の元に生れた部隊であり、あのナイトレイドにすら対抗が可能であると言う。そのような部隊に配属されるのならば、アスナとしてもむしろ本望だった。

「北方討伐軍所属エスデス隊客将のトキハだ」

素っ気なく言ってから、トキハは傍らのアスナを睨む。

対するアスナはと言えば、そんなトキハには目もくれずにそっぽを向いている。

エスデスは気が合う、などと言っていたが、お互いの第一印象が最悪なのは、この光

景を見ただけで明らかだった。

その時、廊下の方でパタパタと走ってくる音が聞こえてきた。

一同が振り向いて視線を向ける中、駆け込んで来たのは1人の少女だった。

小柄で、髪を左右で結んだ可愛い少女である。肩のあたりには、羽の生えたトカゲが浮かんでいる。

「ち、遅刻して……す、すいませんッ!!」

余程急いできたのだろう、肩で息をしながら、少女はようやく顔を上げると、ビシツと敬礼する。

「南方方面軍斥候部隊から来ましたシリカと言います!! こっちはお友達のピナですッ

よろしくお願いします!!」

「キュア〜」

シリカの紹介に合わせて、ピナと言うトカゲ、と言うか小竜が小さく鳴き声を発する。

その言葉に、一同は目を見張った。

見た感じ、シリカと名乗った少女の年齢は、この中で一番若い。恐らく10代前半くらいだろう。

それでも南方方面軍、と言う事は、この少女は軍人と言う事だ。この若さで、驚くべき事である。



と、

「ほほう、私の招集に遅刻するとは貴様、良い度胸だな」

「ひイツ!？」

凄味を利かせるエスデスに、シリカは思わず悲鳴を上げる。

エスデスのドS振りは、帝国全土に知れ渡っている。そのエスデスを怒らせればどうなるか、想像できない者はいなかった。

「到着早々、早速で悪いが、このまま拷問部屋まで御同行願おうか？　なに、はじめての事だ。お仕置きは軽くて済ませてやる」

「あわわわわわわ」

思わず、ピナとヒシツと抱き合うシリカ。

エスデスの言う「軽く」がどの程度の事を言うのか判らない以上、安心などできようはずも無かった。

恐怖で震えるシリカ。

そのシリカに、エスデスは手を伸ばし、

そして、

笑顔で、頭を優しく撫でてやった。

「冗談だ。私の見立てでは、遠方から来るお前の到着は、あと2日は遅れるはずだったか

らな。よくぞ、これ程早く辿りついた。褒めてやる。期待しているぞ」  
「は、はい~~~~~」

そのまま、シリカは腰が抜けたように、その場にへたり込んだ。

「いじめっ子だ」

「いじめっ子ね」

「いじめっ子だな」

「いじめっ子ですね」

「いじめっ子……」

エスデスを見て、ヒソヒソと話し合うトキハ、アスナ、ウェイブ、セリユー、クロメ達。

と、そこでエスデスが振り返る。

「お前達、何か言ったか？」

「……イエ、ナンデモアリマセン」

揃って首を振る一同。

帝国最強ドS将軍に逆らえば命がいくつあっても足りなかった。

ランがシリカに手を伸ばして立たせてやるの横に見ながら、エスデスは一同を振り返って言った。

「さて、これ以上の自己紹介は、各々後日に回すとして、このあと全員、礼服に着替えて陛下に謁見するから、一同、そのつもりでいてくれ」

「えッ、いきなり陛下とですか!?!」

「初日から、随分と飛ばしているスケジュールですね」

エスデスの言葉に、ウェイブとランが驚いて声を上げる。

エスデスが言う皇帝とは、言わずもがな、この国の至高の存在だが、まさかいきなり皇帝に謁見する事になるとは思ってもしいなかったのだ。

「面倒事は、ちゃっっちゃと済ませるに限るからな」

そう言つて肩を竦めるエスデス。

そこで、何かを思い出したようにスタイリッシュユが口を開いた。

「それでエスデス様。アタシ達のチーム名とか決まってるんでしょうか?」

それは些細な事無ようできて、割と重要な事である。

自分達が何者であるか存在を他に証明して士気を向上させ、相対的に敵の士気を挫く為にもチーム名と言う物は重要な位置づけにある。

全ての賊が、自分達の名前を聞くだけで震え上がるような、そんな存在に、自分達はならなくてはならない。

エスデスの方でも、その問いかけは予想していたのだろう。頷きを淀みなく返す。

「我々は独自の機動性を持ち、凶悪な賊の群れを容赦なく狩る組織……」  
この日の為に構想していた部隊名を、一同に披露する。  
全ての凶賊に対し、天敵となる、その存在の名は、

「特殊警察イエーガーズだ」

第16話「天敵、集結」

終わり

## 第17話 「エスデスの恋」

1

テーブルの上には、贅を尽くした料理の数々が並べられている。

オードブルに始まり、メインディッシュ、デザートと、それも豪華で食欲のそそる物ばかり。

だが、それらどれ一つ取っても、一般市民には食べるどころか、匂いを嗅ぐ事すらできない物ばかりである。

まして、これら贅を尽くした料理が殆ど、ただ一人の人物が食べる一食分に過ぎないとなれば、一般市民は何と思う事だろうか？

オネストは、毎日の決まり事である皇帝との会食を行っていた。とは言え皇帝は幼く、まだそれほど食欲旺盛と言う訳ではない。

自然、テーブルの上の食材は、その大半がオネストの巨大な胃袋に収められる事となる訳だ。

「なあ、大臣」

皇帝は食事を進めながら、気になっている事を尋ねてみた。

「どうしてエスデス将軍は、恋がしたいなどと言いつ出したのだろうか？」

それは、北方異民族を討伐して帰還したエスデスが、皇帝に拝謁した際のやり取りの事。

何か褒美を与えたいと申し出た皇帝に対し、エスデスは「恋がしてみたい」と言ったのだ。

皇帝も、そしてオネストでさえ仰天したのは、言うまでも無い事である。

エスデスは今まで縦横に戦場を駆け、ただ相手を蹂躪する事だけを喜びとしてきた。

そのエスデスが、恋をしたいなどと言いつ出した事が、皇帝には解せないのだ。

翌日、帝都には季節はずれの雪が降ったとか降らなかったとか。

ともかく、誠に天変地異を疑いたいレベルの出来事であったのは間違いない。

「誰もが、年頃になると異性を欲するものです。ところが、エスデス将軍は戦うために生れてきたような人間。今まで花より戦だったのでしょうか、ついにそっちの欲も出て来たのです」

オネストは、論すように皇帝にそう言う。

もつとも、エスデスが恋する姿など、オネストも想像すらできないのだが。

いったい、あの御仁の頭の中身はどうなっているのか、付き合いが長いオネストにも、ときどき理解が及ばない事が多かった。

一方の皇帝とは言えば、今のオネストの説明に納得したように、真剣な眼差しを見せる。

「なるほど。それはぜひ、相手を見付けてやりたいな。しかし……」

言葉を詰まらせる皇帝。

エスデスの想いに答えてやりたいと言う想いはある物の、その為にはどうしても、クリアしなければならぬ問題があった。

オネストの方でも、心得ているように、ケーキのホールを一気食いしながら領きを返す。

「プライドの高い方ですから。自分の欲求を満たしていないと納得せんでしよう」

「うむ、だがないぞ、こんな男……」

そう言う皇帝は、懐から一枚の紙を取り出した。

それは以前、エスデスが提示した「恋人候補」の条件である。

それには、こうあった。

- I、何よりも将来の可能性を重視します。將軍級の器を自分で鍛えたい。
- II、肝が据わっており、現状でも共に危険種狩りができる者。
- III、自分と同じく、帝都では無く辺境で育った者。
- IV、私が支配するので年下を望みます。
- V、無垢な笑顔ができる者が良いです。

何と言うか一言、

「自重しろ」と言いたくなる内容である。

「一番目で、殆どの人間がアウトだからなあ……」

「將軍級の器と言うのが難ですな……」

そう言うのと、皇帝と大臣は揃って、深々と溜息をつくのだった。

「キュアア〜」



「キュ〜ン」

「キュアツ キュアー」

「キュキュキュ〜ン」

ピナとコロが、何やら謎の会話を繰り返している。

恐らく、

「最近は、めつきり暑くなってきたなー」

「マジでー ウケるー」

などと言った内容なのだろう。

何にしても本人（？）達も打ち解ける事が出来たようで何よりである。

新組織となる特殊警察イエーガーズの面々は、皇帝への謁見を終えた後、それぞれ改めて親睦を深めるべく、隊内における晚餐を催す事となった。

食材は、ウェイブが手土産として持ち込んだ海産物を使った鍋物を中心に、豪華な料理の数々がテーブルの上に並んだ。

調理に関しては、軍で経験済みのウェイブと、家で自炊しているアスナ、そして、なぜかできるボルスが腕を振るい、一同に美味しい鍋料理を作って見せた。

その料理を待つ間、残りのメンバーはエスデスを囲む形で歓談を行っていた。

シリカはペットたちの会話を微笑ましそうに眺め、クロメは相変わらずお菓子をばく

ついでに。

何でもそつなくこなすランは執事役としてエスデスの傍らに控え、スタイリッシュは、そんなランをうつつと見つけていた。

そんな中、セリユーは興味に目を輝かせてエスデスに尋ねた。

「隊長は、御自分の時間を、どう過ごされているんですか？」

「狩りや拷問。または、その研究だな」

拷問はエスデスのライフワークと言って良く、その腕前は帝都にいる拷問官よりも上手いくらいである。ときどき時間を見付けては自身の拷問テクニクを指導までしている。

「だが今は……」

一同が見守る中、エスデスはニヤリと笑って言った。

「恋、をしたいと思っている。」

一同に激震が走ったのは言うまでも無い。

「恋!?!」 ↑セリユー

「恋……」 ↑クロメ

「こ、恋ですか？」 ↑シリカ

「変？」 ↑トキハ

「恋、ですか」↑ラン

「恋ねえ」↑スタイリツシユ

次の瞬間、

ガシツ

エスデスはトキハの顔を鷲掴みにした。

そして、

ギリギリギリギリギリギリ

「アダダダダダダダダダダダ」

万力のような力で頭蓋骨を圧迫される。

「私は、その手の寒いギヤグは好かんのだがな」

「ゴメンナサイ」

「ここで「氷使いのくせに？」と言うのがアウトである事は、流石のトキハにも理解できた。」

そのやり取りに、居並ぶ一同は戦慄する。

帝国最強を真つ向からおちよくれる人間が、はたして何人いる事だろう？

この日、イエーガーズの面々は悟った。

「怖いもの知らず」は、本人よりも、周りで見ている人間の方が怖いのだと言う事を。

「それはそうと……」

トキハの頭を解放しながら、エスデスはセリユーに目をやる。

そのトキハはと言えば、ランが手渡してくれたおしぼりで頭を冷やしていた。

「帝具が一つ、余っていると報告があったが？」

「あ、はい。以前、悪から回収したハサミ型が詰所にあるのですが、適格者が見つからない状態で……」

それは以前、セリユーがシエーレを殺して回収したエクスタスである。

だが、帝具は適合者でなければ使いこなす事はできない為、半ばお蔵入りに近い形で放置されていた。

「そのままでは、大臣に回収されてしまうな……勿体ない」

大臣に回収されれば、そのまま彼のコレクション行きになってしまう。それでは、文字通り宝の持ち腐れである。

何とか、そうなる前にイエーガーズの方で確保しておきたいところであった。

そこで、エスデスは面白げに口の端を吊り上げて笑う。

「では、使える人材を探して、余興でもやってみるか」

ちょうどその時、扉が開き、ウェイブたちができた料理を運んできた。

漂ってきた美味そうな匂いに食欲そそられつつ、イエーガーズの面々は、これからの

戦いに、それぞれ想いを馳せるのだった。

## 2

新作だと言つて出されたコーヒーは飲みやすく、後味もすつきりした印象があつた。

お茶請けのケーキを頬張ると、より一層、味が引き立つ感じがした。

「とってもおいしいです」

「気に入つてもらえて何よりだ」

シノンの率直な感想に、コーヒーを淹れたエギルは満足そうに頷きを返した。

エギルの喫茶店は、人の出入りがまばらなせい、ナイトレイドが情報屋との待ち合わせ等に使うのに最適と言えた。

正直、店的にはそれで良いのか？ とツツコミたい事しきりだが、エギル曰く「お前等がいけない時にはちゃんと客がいる」との事なので、特に気にしない事になっている。

実際、この不況の中にあつて、きつちりと店を維持できている所を見ると、エギルの言葉はあながちウソではないようだ。

今、店内にいるのはシノン1人だけである。

この後、キリトとアルゴの二人と合流予定だが、その2人はまだ姿を見せていなかった。

シノン自身、学校が終わってすぐにやって来たので、2人は既に来ている者と思っていたのだが、当てが外れた形である。

手持無沙汰になりつつ、ふとカウンターの方に目を向けると、エギルが棚の上から酒の瓶を取出し、グラスに注いでいるのが見えた。

「昼間からお酒ですか？」

シノンは訝るように尋ねる。

エギルは生真面目な性格であり、(レオーネじゃあるまいし)昼間から酒をたしなむなどと言う自堕落さとは無縁だと思っただけに、聊か奇異な光景に見えたのだ。

そう思っていると、エギルはグラスをもう一つ取出し、カウンターの上に置いた。

「ブラートの分だよ」

「あ……………」

声を上げるシノンの前で、エギルはグラスに酒を注いでいく。

大運河の戦いでブラートが殉職した事は、既にエギルも聞き及んでいたのだろう。このグラスは、亡きブラートに捧げられた物なのだ。

「エギルさんも、ブラートさんの事を知っていたんですか？」

「ああ、あいつは良い奴だったよ。まっすぐで、どこまでも熱くて、見ていて清々しい奴だった」

故人との思い出に浸るように、エギルも自分のグラスに口を付けた。

「はじめて会った時、あいつはもう帝国軍をやめてお尋ね者になった後だったよ。この帝都にも、変装して潜入してきていた。あの頃はまだ、ナイトレイドもまだまだ動き出したばかりで、今ほど名前が知られていなかったからな、ブラートも割と簡単に帝都に入って来れたって訳だ」

同じ大人の男として、ブラートとエギルは気が合いそうな気がした。

もつとも、エギルには美人の奥さんもいるし、ブラート特有のホモ言動とは無縁だっただろうが。

その時、入り口のベルが鳴り、待ちわびた2人が店内に入ってくるのが見えた。

「遅いわよ。何やってたのよ」

「悪い悪い。ちよつとばかり、寄り道が長くなってしまったよ」

そう言いながら、キリトはシノンの隣に腰を下ろす。

「つつても、キー坊は俺つちの後からついて来ただけだけどナ。エギル、俺つちにも何かクレ」

独特なイントネーションでしゃべりながら、アルゴもカウンター席へと座った。

「いや、参ったよ。今の帝都じゃあ、エスデスが作つたつて言う特殊警察の話でもちきりだ」

「ああ、最近で来たつていうアレの事？ 私もうわきは聞いたわ」

シノンの学校でも、イエーガーズの話題で持ちきりだった。

エスデス是最強將軍であるが故に、市民の中には潜在的なシンパも多い。そんな彼女が打ち立てた新組織である。話題をさらうのは、ある意味当然の事だった。

「俺つちの調べでは、全員が帝具使い。ただし出身はバラバラで、それも海軍やら陸軍やらで下つ端やつてた連中を、根こそぎ引つ張つて来たつて感じだな」

「下つ端だからつて、侮る事はできないだろ。帝具に階級は関係ないからな。むしろ、そつう言う奴等の方にこそ、潜在的な強者はいる物だ」

言いながら、キリトはエギルが出したジンジャーエールに口を付ける。

エギルが作るジンジャーエールは他の店の物と比べて辛い事で有名だが、それが好きだつと言う客も多いとか。キリトもそうした一人である。

「それに……」

空になつたグラスを置きながら、キリトは真剣な眼差しで口を開く。

「シエーレのエクスタスも敵に取られたままだ。あれも、できれば取り戻したいところ



だし」

「それは……そうね」

キリトの言葉に、シノンは少し顔を伏せながら頷く。

こちらが使っていた帝具が、敵に使われる可能性がある、と言うのは確かに好ましい状況とは言えない。

しかしそれ以上に仲間が、シエーレの帝具を取り戻したいと言う想いは強かった。

「ま、何にしても、物騒な連中が動き出してんだ。無理しすぎるなよ」

言いながら、エギルはキリトのグラスに新たなジンジャーエールを注いでやる。

「こんな可愛い彼女残して死んだりしたら、お前それこそ、死んでも死にきれんだろ」

そう言って、ニヤリと笑うエギル。

だが、当のキリトとは言えば、キョトンとしたままエギルを見ている。

「彼女？ 何を言っとるんだ、お前は？」

「とぼけんなよ」

言つてから、傍らのシノンを顎でしゃくつて見せるエギル。

その意味を理解し、

次の瞬間、

「ブフウウウウウウウウウ!!」

キリトは飲みかけのジンジャーエールを、思いつきり吹きだした。

エギルの顔に。

「おわッ いきなり何しやがる!？」

「それはこつちのセリフだッ 何でシノンが俺の彼女つて事になるんだよ!？」  
顔を拭いながら抗議してくるエギルに、逆に抗議の声をかぶせるキリト。

一方のシノンも、顔を真っ赤にして食って掛かる。

「そ、そうですよエギルさんッ!! 何で私がこんな奴と!!」

2人から食って掛かられ、流石のエギルも強面に困惑の表情を張り付けてタジタジになる。

「いや、だってよ。お前等よく一緒にいるの見かけるし、それに……」

「それに?」

詰め寄るキリトとシノン。

「いや、とある腕の良い情報屋から聞いたんだが、お前等はアジトでも2人でイチヤイチャとしており、ある時なんかは、キリトがシノンの学校にまで行って、人気の無い屋上で相思相愛振りを周囲に見せ付けていたって聞いたぞ」

エギルが説明している間、

足音を殺して、そーつと背後から出て行こうとしている人影が一匹。

しかし、  
ガシツ

手を伸ばしたキリトに頭を掴まれ、「とある腕の良い情報屋」は、そのまま引き戻される。

「は、話を聞コウ、話せば判るヨ」

冷や汗をダラダラと流しながら言い訳するアルゴ。

対して、キリトとシノンはずイツと出場亀女に詰め寄る。

「オオコラ、ネズ公。テメエ何フカシ扱いてんだ？ 終いにや、猫に食わずぞコラ」的な目で、アルゴを睨みつけるキリトとシノン。

流星の情報屋《鼠のアルゴ》も、腕利きの殺し屋2人に睨まれては蛇に睨まれたカエル、ではなく猫に睨まれた鼠だった。

その時だった。

突然、勢いよく開かれる扉。

一同が驚いて振り返る中、飛び込んできたのはレオーネとラバックだった。

「おう、レオーネ、ラバも。慌ててどうした？」

「て言うか、走って来たの？ 外、暑かったんじゃ……」

尚も息を切らした状態の2人に、キリトとシノンは心配そうに声を掛ける。

だが、当の二人はと言えば、そんな事はお構いなしに詰め寄つて来た。  
「そ、それどころじゃねえんだよ」

ラバックが、キリトたちの言葉を遮るように言う。

次いで、レオーネも顔をあげた。

「タ、タツミが、エスデスに連れて行かれてしまったんだよー!!」

「ハアツ!!」

その言葉に、思わず愕然とするキリト。

「いったい、何がどうなればそうなるのか？」

前後の状況が判らない為、何が起きているのかさっぱりわからなかった。

取りあえずレオーネとラバックは、エギルからもらった水を飲んで一息つくくと、状況を順を追って説明した。

キリト達とは別行動で情報を探るべく、ラバックの貸本屋で合流した3人は、そこでエスデスの話題となり、そのまま流れ的に、タツミがエスデスの主催した武術大会に出場する事になった。

優勝者には賞金も出ると言うこの大会に、タツミは故郷への仕送り額を増やすと言う目的もあつた。

そうして、見事に優勝を果たしたタツミだったが、その直後、舞台の上に直接降りて

きたエスデスが、タツミを鎖でつないで、そのまま連行していったと言う。

「おい、つまり、それはどういう事なんだよ？」

「いや、だから、俺達にも何が何だか、さっぱりなんだよ」

お手上げ、とばかりにラバックは肩を竦める。

実際、タツミに何らかの落ち度があり、それで正体がばれたと言う雰囲気ではなさそうだ。

ならばこそ、尚更、なぜこのような事態になったのかが判らなかつた。

「とにかく、すぐに行動するぞ」

キリトは真剣な眼差しで言う。

目的はタツミの救出。

状況が状況だけに、慎重に動く必要があつた。

「ラバとレオーネは、いったんアジトに戻ってアカメ達と今後について話し合ってくれ。場合によってはアジトを引き払わなくちゃいけないかもしれない。俺とシノン、このまま帝都に残って、可能な限り情報を集めるぞ」

「わ、判ったッ」

「了解よ」

キリトの指示を受け、一同は動き出す。

だが、そんな中でもキリトは焦燥感を募らせずにはいられない。

もし、タツミが宮殿に連れて行かれたとしたら、外部からの救出はほぼ不可能に近い。何とか、タツミが自力で脱出する可能性に賭けるしかない。

今のキリト達にできるのは、ただタツミの無事を祈る事だけだった。

3

で、そのタツミはといえば、

現在、イエーガーズの詰所に連行されてきていた。

椅子に座り、鎖で縛られている。

そんなタツミを取り囲む、イエーガーズの面々。

だが、

その様子は敵意と言うよりも、むしろ戸惑い、もつと言えば呆れていると言った感じでタツミを見ていた。

「と言う訳で」

一人、意気揚々とした感じのエスデスが、タツミを指示して言う。

「イエーガーズの補欠になったタツミだ。みんな、面倒を見てやってくれ」

その言葉に、ガツクリと肩を落とす一同。

流石に、この行動は予想外過ぎだ。

「いや、面倒見てやってくれて、犬や猫じゃないんですよ……」

「エスデスの奇行は今に始まった事じゃない。いちいち気にしてたら、こっちが疲れる」  
ため息交じりのアスナを、トキハがそう言つて慰める。

「市民をそのまま連れて来ちゃったんですか？」

見た目に反して、この中では常識人の部類に入るボルスも、呆れ気味に尋ねる。

対して、エスデスは嬉しそうに答える。

「暮らしに不自由はさせないさ」

断じて、そう言う話ではない。

と、皆がツツコミたい気分だったが、誰も実行しようとはしない。

ツツコんだら、負けるのは確実だった。

「それに、部隊の補欠にするだけじゃない。感じたんだ、タツミは、私の恋の相手になる」  
そう告げるエスデスの顔は嬉しそうに紅潮している。

あの試合の決勝戦。

圧倒的な武力を見せ付けたタツミは、大観衆の声援が自分に向けられていると感じ、最高の笑顔を浮かべた。

その笑顔が、エスデスの心を掴んだのである。

その他にも、帝都では無く辺境の村出身である事。大型危険程度なら一人で倒せる事。年下である事など、エスデスが皇帝に提出した条件にも全て合致している。

エスデスの「理想」に正に合致していると言つて良かった。

「けど……」

そこで、ウエイブが勇気を出して聞いてみた。

「何で首輪なんかかしてるんですか？」

「愛しくなったから、つい、ガチャリと」

「正式な恋人にしたいのなら、外されては？」

ウエイブの後を引き継ぐように、指摘したランの言葉に、エスデスは考え込む。

確かに、タツミはペットではない。これから恋人となつてもらふのだ。そこに違いを出す為にも、首輪はするべきじゃないと思つた。

もつとも、それは初めに気付くべきだろう。と全員がツツコみたい心境だったが、やはり誰もツツコまない。

くどいようだが、ツツコんだら負けである。



「確かにな。外そう」

そう言つて、首輪が外され、あつさりとは解放されるタツミ。

もつとも、それで逃げられると思える程、タツミも愚かではない。

「ここは伏魔殿とも言える宮殿の中。加えて10人の帝具使いからなる特殊部隊相手では、たとえインクルシオを使つたとしても、逃げられるとは思えなかつた。」

「そう言えば……」

タツミの鎖を外してやつたエスデスは、ふと思ひ出したように一同を見回して言つた。

「この中で、結婚していたり、恋人がいたりする者は？」

その質問に対し、

誰もが沈黙する中、

1人、

手を上げた。

ボルスが。

『いや、その顔でかい!!』

全員が心の中で、(今度こそ)ツッコんだのは言うまでも無い。もつとも、いつも覆面をしているボルスの顔を知る者はいないのだが。

「ボルスさん、本当ですか？」

「うん、結婚六年目。もう、できた人で、私には勿体ないくらい」

尋ねるセリユーに、ボルスは照れたように大柄な体をくねらせる。

因みにボルスの奥さんは近所でも評判の美人である。気立ても良く、その奥さんによく似た、可愛らしい娘さんもいる。

容姿に似合わず、なかなか勝ち組人生である。

「あ、あのー」

そこで、状況に流されるまま沈黙していたタツミが、手を上げて発言した。

「気に行つてくださるのは嬉しいんですけど、俺、宮仕えする気は、全然無いと言  
か……」

そもそも、ここには強引に連れて来られた身である。正直なところ、勝手に話を進めないでほしい、と言うのが本音だった。

しかし、

「フフツ 言いなりにならない所がまた、染め甲斐がある」

「いや、話聞いてくださいよ!!」

「諦めろ。エスデスは止まらない」

抗議するタツミに同情するように、トキハは彼の肩を叩きながら言った。

泣く子とエスデスには勝てない。

これは帝国人として、当然の如く押さえておくべき常識だった。

「まあまあ、今はいきなりすぎて混乱しているんですよ」

取り持つように、前に出ながら言ったのはセリユーだった。

その姿を見て、タツミは全身の毛が逆立つ想いだった。

タツミは彼女を知っている。

セリユー・ユビキタス。

元帝都警備隊隊員であり、シエーレの仇。

その笑顔の下に狂気と異常な正義をはらんだ危険人物。

ナイトレイドにとって、憎むべき相手である。

だが、そんなタツミの感情など知らぬげに、セリユーはタツミに歩み寄ってくる。

「セリユーさん、タツミさんの事知ってるんですか？」

「はい。以前、帝都で迷子になっていた事を保護したんです」

シリカの質問に答えながら、セリユーは笑顔でタツミの頭を撫でてやる。

対して、タツミはジツとこらえ、されるがままになっている。

本音を言えば、今すぐに手を振り払いたい。

自分の思う事を全てぶつけ、シエーレの仇を取りたいところである。

だが、それはできない。

今は亡きブラートも、前に言っていた事がある。

『熱いだけじゃ生き残れないぜ。常に冷静になり、周囲に気を配るんだ』

そう、ピンチの時ほど冷静に状況を受け止め、雌伏してチャンスを待つのだ。そうすれば、必ず逆転の機会は訪れるはず。

そして、これは同時に、タツミにとつてはチャンスでもある。

脱出の機会を待つまでの間、イエーガーズ各面々の特徴。特に、その存在意義とも言うべき帝具についてつぶさに観察し、情報を持ち帰るのだ。それができれば、これからの戦いはぐつと有利になる筈。

『大丈夫………大丈夫だ』

タツミは心の中で、そう言い聞かせる。

その脳裏に浮かぶのは仲間達の顔。

アカメ、レオーネ、ナジエンダ、マイン、ラバック、キリト、シノン。

そう、自分には仲間がいる。信頼できる友が、今も自分の為に動いている筈。

そう考えれば、この苦しい状況の中であつて、タツミの心は驚くほどに落ち着いて行くのだつた。

## 第17話 「エスデスの恋」

終わり

## 第18話「イエーガーズの初陣」

1

帝都近郊に、ギョガン湖と言う湖がある。

大きさはそれほどでもないが、周囲はうっそうとした森が茂り、街道からもやや外れて居る為、地元民以外が近付く事は殆ど無い。

だが近年、このギョガン湖が、帝国を悩ませる種になっていた。

湖の畔。小高い丘の上に大昔に廃棄された砦があるのだが、最近になって、そこに盗賊の群れが住み着くようになったのだ。

勿論、発見後、すぐに討伐部隊が差し向けられたが、数度にわたって行われた作戦は、悉く失敗に終わっていた。

先述した通り、地形的には街道から外れた小道の先と言う場所にあつて大兵力の展開

が難しい事。砦自体は古いが、いつの間にか改築と増築が進められ、城塞並みの防御力を誇っている事。常駐している賊の数が当初の見積もりよりも膨大であったこと等が原因である。

この砦があるせいで周辺達の賊たちは活発化し、旅人や近隣の村が被害に遭う一方、対症療法的に、出てきた賊を討伐しようにも、賊達は不利になればすぐに砦へと撤退してしまう為、殆どイタチゴッコに近い状況になっていた。

早急なる状況打破を望む帝国だったが、打開策の無いまま、ただ悪戯に賊達の跳梁を許す結果となっていた。

この難攻不落とも言える砦を攻略するには、一騎当千の実力を持つ少数精鋭部隊を投入する以外には無いと考えられる。

それらの状況を受け、イエーガーズの面々は、砦の見える場所に立っていた。

今回のギョガン湖砦殲滅作戦が、彼等にとつての初陣となる。

参加メンバーはエスデス（とタツミ）を除く9名。これは同時に、エスデスが隊員達の実力を図る為の試験的な意味合いも兼ねていた。

対ナイトレイド戦を意識して編成されたイエーガーズだが、ナイトレイドは神出鬼没で、その拠点がどこにあるかも判然としていない。

そこでまず、こう言った所在の判っている賊から討伐していく事となったのだ。

元より、相手が凶悪な賊であるならば、イエーガーズが動く事に躊躇いは無かった。  
「さて……………」

夜でも煌々と明かりをともし皆の様子を見ながら、ランが口を開いた。

「周辺の地形は頭に叩き込みましたが、作戦はどうしましょうか？」

「勿論、正義は堂々と、正面から!!」

勢い込んで答えたのはセリユーである。

確かに、これだけのメンツが揃っているのだ。下手な小細工は、却って状況を悪くしかねない。

そう言う意味で、シンプルだが的確な作戦案であると言えた。

「うう、緊張します。大丈夫でしょうか……………」

この中で最年少のシリカが、不安げに顔を伏せながら呟く。

彼女自身、南方戦線でそれなりの実績を積んだからこそ今回の抜擢なのだが、それでも年齢の低さからくる不安は隠しきれないようだ。

「大丈夫だよ」

そんなシリカの肩を、ボルスが優しく叩いた。

「いざとなったら私達もいるし。シリカちゃんも安心して」

「ボルスさん……………はい、ありがとうございます」



見た目の不気味さに反して、この中では比較的常識人の部類に入り、尚且つ性格的にも優しいボルスの存在は、こういう時に非常に頼りになった。

「じゃ、行こう」

トキハは低く呟くと、玉梓を手に歩き出す。

それに続くイエーガーズの面々。

街道側から砦にアクセスできるのは、細い小道が一本だけ。当然、その道は砦側から監視を受けている。

イエーガーズが接近すると、それに呼応するように砦から武器を持った男達がワラワラと飛び出してきた。

「おい、お前等ツ　ここがどこだかわかって来てんだらうな!?」

「正面からとはいい度胸じゃねえかッ」

「生きて帰れると思うなよ!!」

イエーガーズがたつたの9人と知り、一息に捻り潰そうと息巻いている。

中には、アスナ、セリユ、クロメ、シリカらを見てテンションを上げている者もいる。全て、予想通りの反応だ。ゲスはゲスなりに、こちらの期待を裏切らないものである。

「まず、私とドクターの帝具で道を開きます」

そう言つて前へと出たのへセリユーである。

同時に、傍らのコロへと目をやる。

「コロ、5番!!」

指示を受けたコロは、頭部を巨大化させ、セリユーの右腕にかぶり付いた。

先のシエーレとの戦いに辛うじて勝利したセリユーだったが、その代償は大きく、両腕を失つてしまった。

その両腕を、今は高性能義手で補っているのだが、これがただの義手ではない。

セリユーとスタイリツシユは、セリユーの上司だったオーガとの付き合いで、以前から交流があつた。

そのスタイリツシユは、人体改造も行う事ができる程の腕を持つマツドサイエンティストである。

スタイリツシユは己の研究成果の全てをつぎ込んでセリユーの腕を治療すると同時に、彼女の体にある改造を施した。

その真価が、今問われる。

ズルリと、コロの口からセリユーの腕が引き出される。

次の瞬間、誰もが戦慄する。

セリユーの腕に装着された、円錐状のドリルは、セリユーの体よりも巨大で凶悪な

フォルムをしている。

「十王の裁き5番。正義閻魔槍!!」

凶悪な笑みと共に、セリユートのドリルが回転を始める。

突撃するセリユート。

そのあまりの光景に、賊達は皆、啞然としたまま立ち尽くす事しかできない。

たちまち、悲鳴が交錯し、ドリルに巻き込まれた賊達は、肉片と化して砕け散って行く。

更に、怯んだ敵はコロが飛び掛かって捕食。食い散らかしていく。

その頃になって、賊達の方でもようやくやく、イエーガーズが尋常な存在ではないと悟ったのだろう。慌てて砦の方へと引き返していく。

このまま門を閉ざし、籠城する構えだ。

だが、そんな事は許さないとばかりに、セリユートは追撃に移る。

「次、7番!!」

再びコロがセリユートの右腕にかぶり付く。

今度は、長大な砲身を持つ大砲が引っ張り出された。

「正義、泰山砲!!」

放たれる砲撃。

凄まじい威力を秘めた砲弾は、今まさに閉じようとしていた砦の門を、一撃で粉碎して見せた。

これこそが、ドクター・スタイリツシュの自信作《十王の裁き》である。

セリユー専用にかスタマイズされた各々の武器は、帝具には劣るものの、それでも必要十分な威力と性能を秘めている事が、たった今の先制攻撃によって証明された。

スタイリツシュ自身は戦闘能力は皆無である物の《神ノ御手パーフェクター》と言う手袋型の帝具を保有している。これは手先の精密動作性を数百倍に引き上げる能力があり、これによつてスタイリツシュはどんな細かい作業であつても問題無くこなす事ができるのだ。

反面、スタイリツシュ自身は戦場に立つ事はできない訳だが。

「なら、ドクターの護衛も必要ですかね？」

「あら。心配してくれるのね、嬉しい」

指摘するウェイブにウインクを返しつつ、指を鳴らすスタイリツシュ。

次の瞬間イエーガーズを取り囲むように、無数の人影が姿を現した。

ウェイブたちがとっさに緊張して身構える中、彼等は皆、スタイリツシュを取り囲むようにして立った。

「彼等は、あたしが自ら作り出した強化兵よ。将棋で言えば「歩」つてところかしら。こ

の子達が守ってくれるから、あたしは大丈夫よ」

一同が感嘆する。

戦闘力こそ皆無な物の、その程度のハンデなど問題無い程、高性能な帝具である。否、それを使いこなすスタイリッシュこそが、と言うべきだろうか。

「いずれ、帝具をも超えるスタイリッシュな武器を造る事が、アタシの夢よ」

それは壮大だが、決して実現不可能な夢だとは思えない。そう思わせる程の性能を《十王の裁き》は秘めていた。

ところで、

「あの……」

ランが控え気味に手を上げて発言を求めた。

「話をしている間に、クロメさん、もう突入してしまいましたか?」

冷静な発言に、ハツとする一同。

「そ、そう言えば、トキハさんとアスナさんもいません!!」

「あ、あのガキども、人の話聞きなさいよね」

シリカとスタイリッシュが揃って慌てる中、一同はなし崩し的に戦闘に突入していった。

流石は暗殺部隊出身というべきだろう。

砦の前庭に突入したクロメは、圧倒的な身のこなしと、帝具、八房を十全に使いこなす腕前を存分に見せつけ、押し寄せる敵を次々と切り捨てていく。

「この程度の敵、帝具の能力を起動するまでもないね」

薄笑いを浮かべて呟くと、八房を横なぎに一閃。近付こうとした敵を容赦なく斬り捨ててる。

「こ、この女ツ 可愛い顔して、なんて腕だ!?!」

賊達に戦慄が走る。

まさか、こんな少女が、これほどの戦闘力を有しているなど、彼等にとつては想像の埒外だった事だろう。

その間にもクロメは砦内を駆け抜け、次々と賊を屠って行く。

「全部終わったら、組み替えて遊んであげる。お人形さん達」

そう言つてクロメは、ゾツとする笑みを浮かべた。

その時、クロメの背後の物陰から、彼女を狙う銃口があった。

クロメの凶刃を逃れた賊の1人が、手にした銃で彼女を狙っているのである。

角度的に、クロメからは死角になっている為、彼女は気付いていない可能性が高い。

「死ねッ ガキが!!」

トリガーを引こうとする男。

だが、その前に壁伝いに背後から接近したウェイブが、鋭い蹴りを放った。

顔面にウェイブの蹴りを喰らい、トリガーを引く前に昏倒する賊。

そこで、ようやくクロメは振り返った。

「危なかったな」

クロメに対し、ウェイブは会心の笑みを向ける。

「別に気にしなくて良いぞ。仲間同士、助けあうのは当たり前だしな」

だが、

「やっ 別に。気付いてたし」

「マジで!?!」

恰好よく決めたつもりが、自分がやった事が余計なお世話だったと知り、ウェイブは愕然とするのだった。

巨体を揺らしながら突進してくるボルスの存在感は、それだけで圧倒的な光景である。

ちよつと、見ていて怖いが。

そのボルスを射殺すべく、砦内から一斉に弓矢が射かけられる。

圧倒的なまでの攻撃の前に、逃げ場は埋め尽くされる。

だが、ボルスは慌てない。そもそも初めから、逃げ道など考えてもいなかった。

「これも、お仕事だから……」

哀愁と諦念を込めて呟くとともに、ボルスは背中の装備を取り出した。

常識人であり、優しい心を持つボルス。

だが、任務があり、仲間を守る為ならば、ボルスは喜んで地獄の使者になるつもりだった。

巨大なタンクとホース。それに噴射口が一体となった武器。

火炎放射器型帝具《煉獄招致ルビカント》。

数々の罪人や反乱分子を焼き殺してきた、ボルスの帝具である。

噴射口から放たれた炎が、飛んできた矢を一本残らず焼き尽くす。

それだけではない。極大の炎は砦にも襲い掛かり、壁と言わず人と問わず、容赦無く



飲み込んでいく。

慌てて水を被る賊達。

だが、ルビカンテの帝具としての恐ろしさは、ここからである。

急いで水を被り、火を消そうとする賊達だったが、すぐに異常事態に気付く。

炎が、消えない。

ルビカンテの炎は、一度着火すると、標的を燃やし尽くすまで決して消えないのだ。そうしている間にも、炎は貪欲に犠牲者を飲み込んで行く。

やがて彼等は、骨まで燃やし尽くされ、物言わぬ屍と化していくのだった。

「ピナ、行くよ!!」

「キュアアア!!」

相棒の小竜に声を掛けると、シリカは腰から短剣を抜き放ち、敵の中へと踊り込んで行く。

その身のこなしは、小柄な事も相まってかなりの素早さを誇っている。

一方、賊達の方でも相手が子供だと侮ったのだろう。すぐにシリカを取り囲むようにして近付いて来る。

「ガキがッ いきがつてんじゃねえぞ!!」

「こいつはとつ捕まえて、たつぷりとお仕置きしてやらないとなあ」

下卑た笑いを浮かべて、シリカに手を伸ばそうとする男達。

だが、彼等はすぐに、自分達の浅はかさを思い知る事になる。

「ヤア!!」

鋭い掛け声と共に、地を蹴るシリカ。

同時に、手にした短剣が鋭い軌跡を描いて襲い掛かった。

放たれる斬撃を前に、賊達は次々と斬り飛ばされ、あるいは急所に刃を突き立てられていく。

シリカを見て、まるで小動物のような印象を受ける者も多い。

勿論、その印象は間違いではない。彼女の可愛らしさは、手乗りサイズの動物を連想させられるだろう。

だが、そんな小動物でさえ、突き立てるべき牙は持っている。

そもそも、彼女がいた南方戦線は、かつてのバン族の反乱からも判る通り、決して楽な任務地ではない。

そのような場所で活躍し、イエーガーズに引き抜かれる程の実力を持っているのだから、シリカの実力もまた、押しして知るべしと言ったところだろう。

更に、

「ピナ、ブレスお願い!!」

「キュアー!!」

シリカの求めに応じ、彼女の上空を旋回していたピナが急降下。

口から高出力のブレスを放ち、シリカを攻撃しようとしていた賊を炎で飲み込んで行く。

《龍精天翔フェザーリドラ》

ピナは危険種の幼生では無く、れつきとした生物型帝具である。その特性は主に寄り添って戦闘を掩護する事にある。

コロことヘカトンケイルのような爆発的な戦闘力には欠けるものの、小型で小回りが利き、なおかつ飛行可能である点から、汎用性の高さが伺えた。

イエーガーズの攻勢は、ますます勢いを増しつつある。

少数とは言え全員が帝具使い。それも大半が激戦区からの転任組と言う事もあり、並みの賊程度では相手にもならない。

数百人規模でいた賊達は、既に生き残っているのはほんの一握りである。

もはや、砦は陥落寸前の状態にまで追い込まれていた。

「じよ、冗談じゃないッ こんな地獄とは、さっさとおさらばしてやる!!」  
何人かの賊が、裏口からけもの道へと続く退避路に向かおうとした。

その時、

上空から飛来した数枚の羽根が、弾丸のような勢いで襲い掛かり、彼等の頭を正確に撃ち抜いて行つた。

当然、致命傷である。

賊の一人が、最後の力を振り絞つて、背後を見やる。

そこには、美しい翼を広げた一人の青年が、微笑を浮かべて佇んでいた。

「……………天……………使？」

その言葉を最後に、賊は崩れ落ちる。

だが、彼が最後に見て、彼に断罪の審判を下したのは天使ではなかった。

「一人も逃すわけにはいきません」

そう呟いたランの背には、美しい一対の翼が広げられている。

《万里飛翔マステイマ》

現在、存在が確認されている数少ない飛行型の帝具の1つであり、同時にその羽根は、弾丸のように飛ばす事で射撃武器として使う事もできた。

砦の9割は既にイエーガーズによつて制圧され、残つた賊達の運命も旦夕に迫りつつあつた。

もともと、街道を通る旅人や、近隣に住む村人を襲つていたような連中である。一騎当千の実力を誇るイエーガーズの敵ではなかつた。

それでも、残つた賊達は窮鼠とかし、逃げられないならせめて人たちなりとも浴びせようと、襲い掛かつてくる者も少なくない。

だが、そんな彼等の運命もまた、完全に確定されていた。

白い軍服をと赤いスカートを靡かせ、アスナは鋭い踏み込みで相手との距離を詰める。

その速さに、誰もが追いつく事ができない。

放たれる光速の8連撃。

その一撃一撃が、全て必殺。

たちまち、急所を貫かれた賊達が、血しぶきを上げて地面に倒れ伏す。だが、空中に飛び跳ねた血の一滴ですら、戦女神を濡らす事能わない。

その前にアスナは、既に次の標的へと駆け抜けていた。

少女の凄まじいスピードを前に、誰も追いつく事ができない。

勿論、アスナの技量が高い事は間違いない。既にこの歳で近衛軍に所属し、血盟騎士団の副団長を任されるアスナの実力は伊達ではない。

だが、彼女の強さにはもう一つ、大きな要素が存在した。

それは、彼女が手にしている細剣。

《閃光一刃ランベントライト》

細剣型の帝具であり、その特性は、使用者の速力を極限まで強化する事にある。

帝具発動中のアスナを捉える事は、誰にも不可能だった。

と、

「へー 結構やるね」

横合いから掛けられた声に、アスナは動きを止めて振り返る。

そこには、玉梓を肩に担ぐようにして立つ、トキハの姿があった。

ムツとするアスナ。

トキハののんびりした様子が、何となく癪に障ったのだ。

「あのね、遊んでないで、君も少しは……」

言いかけて、アスナは口をつぐんだ。

少年の背後には、いくつかの賊の死体が転がっているのが見える。

アスナが戦っている間、トキハもまた敵と戦っていたのである。それも、アスナに気付かれない程、静かに。

「へえ………」

少しだけ、感心したようにアスナはトキハに目をやる。

最初の印象がアレすぎたせいでトキハの事を色眼鏡付きで見ていたアスナだが、どうやら実力的には申し分ない物を持っているらしかった。

もつとも、そうでなければ、わざわざエスデスが客将に招いたりはしないのだが、  
だが、

「なにぼうつとしてる？ 悪い物でも食った？」

「………」

台無しにするようなトキハの発言に、アスナは思わず、無言のままランベントライトを振り上げようとする。

その時だった。

「ツ!？」

突如、

微かな風切り音が響いた。

トキハはとっさに振り返ると、飛来したナイフを玉梓で切り払う。

キンツ

軽い金属音と共に、真つ二つに折れて地面に転がるナイフ。

トキハは、油断なく刀を構え、ナイフが飛来した方向を見る。

「何が……」

遅れて振り返るアスナ。

その視線の先には、

「あつちやゝ 失敗かよ」

「思った、よりは、やるな」

闇の中に不気味にたたずむ、2人の男がいた。

ジョニー・ブラックとザザ。

南部にあるラフィン・コフィンのアジトに戻る前に、この砦に立ち寄った2人だったが、そこに折り悪く、イエーガーズの襲撃に出くわしてしまったのである。

イエーガーズの襲撃によって砦が壊滅状態に陥る中、2人は脱出する為に反撃に出たのだった。

「さて、このまま帰るつてのは、ちよつとばかり癪だよな」

「無論、だ。手土産くらい、持って、いくぞ」

言いながら、ザザはゆらりとした足取りでジョニー・ブラックから距離を取る。



ちょうど、ジョニー・ブラックとザザで、トキハとアスナを挟み込むような格好だ。膨れ上がる殺気。

「来る」

「判ってる」

短く頷き合う、トキハとアスナ。

次の瞬間、

ジョニー・ブラックとザザは、タイミングを合わせて2人に襲い掛かった。

### 3

ゆらりとした動きから、一気に襲い掛かってくる。

その挙動は、不気味な髑髏の面と相まって、まるで実体のない亡霊を連想させる。

静と動を混ぜ合わせたザザの動きを前に、アスナの感覚が一瞬惑わされた。

「クッ!？」

襲い来る、鋭い突き込み。

だがそれでも、一瞬速くアスナが動いた事でザザの攻撃は僅かにそらされた。しかし、

「速いッ……」

眩きと共に攻撃を回避しながら、アスナは自身の中で警戒レベルを上げる。

ザザの攻撃の鋭さは、アスナの予想をも上回っていたのだ。

「やるな……だが、まだ行くぞ」

不気味な声で眩きながら、ザザは更なる攻撃を繰り返してきた。

ポロポロのマントを跳ね上げるようにして攻撃を仕掛けるザザ。

その武器を見て、アスナは思わず目を見張る。

「レイピア……いえッ……」

一瞬、自分と同じ武器を使用しているのかと思っただが、すぐにそうではないと気付く。

レイピアには一応刃があり、「斬る」事も可能だが、ザザの武器は戦端が鋭利に尖り「斬撃」と言う要素を完全に排している。

エストックと言う、刺突に特化した武器だ。

その鋭い突き込みを、アスナはランベントライトを振るって辛うじて裁きつつ、どうにか体勢を立て直そうとする。

だが、そうはさせじと迫いすがるザザ。

その素早い攻撃を前に、アスナは成す術無く後退を余儀なくされた。

一方、トキハの方でも、ジョニー・ブラックを相手に、苦戦を強いられていた。次々と繰り出されるナイフの攻撃を前に、足止めを喰らうトキハ。

「おらおら、よそ見していると刺しちゃうぜ〜!!」

「いったい、何本ある!？」

飛んできたナイフを玉梓で弾き、同時に距離を詰めようとするトキハ。

だが、その正面から再びナイフが迫り、足止めを余儀なくされる。

「遅エゼ!!」

放たれる投げナイフ。

対して、後方宙返りをしながら回避するトキハ。

着地と同時に、顔を上げる。

そこへ、両手にナイフを構え、ジョニー・ブラックが斬り掛かってきた。

その刃を、とっさに回避しようとするトキハ。

だが、

「ッ!？」

直感、とても言うべきだろうか？

トキハはとつきに回避せず、玉梓を横なぎに振るってジョニー・ブラックを牽制した。  
「おっとッ」

ずた袋の奥から、くぐもった声を発するジョニー・ブラック。

崩れた体勢で放ったトキハの斬撃は、ジョニー・ブラックを捉えるには至らなかった。  
しかし……

「やるじゃーん。良い勘してるよ、お前」

せせら笑うように言いながら、ジョニー・ブラックは手の中のナイフを弄ぶように見せ付ける。

その刃が、怪しく光っているのをトキハは見逃さなかった。

「………毒？」

呟くトキハに、しかしジョニー・ブラックは返事を返す事は無い。

代わりに、地を蹴って襲い掛かって来た。

「バーカッ そう簡単に答を言うかよ!!」

突き込まれるナイフを、ステップを刻んで回避するときは。

相手が毒使いである可能性がある以上、下手に剣を交えるのは、命取りに繋がりがかねない。

ジョニー・ブラックの鋭い攻撃を、辛うじて回避しながら後退するトキハ。

ちよūdとその時、ザザの攻撃を回避しながら、どうにか後退してきたアスナと背中を合わせる形となった。

「あなたも、随分と苦戦しているわね」

「……………そつちに言われたくない」

苦笑交じりに告げるアスナに、ムツとした口調で答えるトキハ。

ただ実際のところ、2人揃って苦戦を強いられているのは事実である。

砦の制圧は、ほぼ完了してる。残るは、このザザとジョニー・ブラックくらいの物だった。

「……………打開策、あるけど、乗る？」

トキハは低い声で告げる。

この状況を一気に覆せるかどうかは判らないが、少なくとも意表を突く事はできると考えていた。

「……………気は進まないけど、聞くだけ聞いてあげるわ」

不承不承と言った感じに、頷きを返すアスナ。正直、彼女もまた、現在の状況に不満を抱いていたのだ。

「相談は、終わった、か!？」

「これで、おつわり〜!!」

左右両方から、斬り込んでくるザザとジョニー・ブラック。

次の瞬間、

トキハとアスナは、互いに背中を合わせながら、位置を入れ替えるようにターンした。

「ツッ!」

驚愕するザザとジョニー・ブラック。

一瞬、動きを鈍らせるラフィンコフインの2人。

その隙を、イエーガーズの2人は見逃さない。

トキハはザザを、アスナはジョニー・ブラックを見据え、

攻勢に転じる。

「ハアっ!!」

鋭い突きを放つアスナ。

その攻撃の前に、思わず手にしたナイフを弾かれるジョニー・ブラック。

一方、トキハは玉梓を逆袈裟に一閃。ザザの手にあるエストツクを、半ばから斬り飛ばした。

「チッ」

舌打ちするザザ。

柄だけになったエストックを投げ捨てると、その下面の下から相棒に目配せする。  
「退くぞ」

「あいよッ ここは三六計だなー!!」

言いながら、後退していくザザとジヨニー・ブラック。

それに対し、

トキハとアスナは、追撃する事もできずに立ち尽くすのだった。

第18話「イエーガーズの初陣」

終わり

## 第19話「両雄邂逅」

1

朝起きて出仕したエスデスは、いつも以上につやつやとしている印象があった。

それもそのはず。何しろ、昨夜は一晩中、タツミを抱き枕代わりにして眠ったのだから。

その快適な寝心地と言ったら、どんな贅を尽くした寝台で眠るよりも気持ち良かったほどである。

もつともタツミの方はと言えば、その緊張のせいで一睡もできなかったのだが。

そんなエスデスの前に、先日のギョガン湖での戦いの詳細をまとめた報告書を手に、トキハとアスナが立っていた。



「・・・・・・・・・・以上です」

報告を終えたアスナは、そう言つて、書類を執務机の上に置いた。

報告の内容は主に、トキハとアスナが最後に交戦した二人組。ザザとジョニー・ブラックについてだった。

砦にいた大半の賊は雑魚と称しても良い程度の物でしかなかったが、その中で、2人の存在だけは別格と言つても過言ではなかった。

結局、ザザ達だけは取り逃がしてしまい、今回の大勝利の中で、唯一の心残りとなつてしまった。

「・・・・・・・・・・成程。ラフィン・コフィンか・・・・・・・・これはまた、随分と大物が掛かつてくれたものだな」

「ラフィン・コフィンは、主に南部で活動を続ける組織ですが、それがなぜ、帝都近郊にいたのが気になる所です」

言いながら、アスナは唇をかみしめる。

あの二人の実力は、アスナと同等か、あるいはそれ以上だった。

自分が戦場に立って、敵を倒しきれなかった事が悔しいのだ。

「そう悲嘆するな」

そんなアスナを見て、エスデスは苦笑しながら声を掛ける。

「お前達はよくやってくれた。砦にいた賊どもを倒しつくし、強敵の情報も持ち帰ってくれたんだ。それを誇るべきだろう」

「ありがとうございます」

そうは言ったものの、大物を取り逃がしたのは事実であり、先の任務において、画竜点睛を欠いた感があるのは否めなかった

そんなアスナの気持ちを察したのだろう。エスデスはフツと笑み向ける。

「今日、この後、タツミ達を連れてフェクマに狩りに行く予定だ。お前達も付いて来い。良い気分転換になるだろう」

「狩り……」

エスデスの申し出を聞いて、トキハは低い声で呟く。

確かに、良い考えかもしれない。狩りに行けば獲物を追って身体を動かす事ができる為、淀んだ思考を追い払う事ができるかもしれない。なかつた。

「判りました。一緒にさせていただきます……」

「うん、何だ？ 何でも聞いてくれ」

「うん、何だ？ 何でも聞いてくれ」

訝るように尋ねてくるアスナに、エスデスは視線を向ける。

「『フェクマ』って、何ですか？」

「『フェ』イ『クマ』ウンテンの事だ。それくらい、常識だろう」

と、ドヤ顔で説明するエスデス。どうやら、本人的には上手い事を言つたつもりらしい。

が、

トキハとアスナが、揃つて微妙な顔をしたのは言うまでも無い事である。

そして、

「………そんな事言つてるの、エスデスだけだと思う」

ボソツとツツコむトキハ。

これに関しては、アスナも全くの同感だった。

エスデスへの報告を終え、トキハとアスナがイエーガーズの詰所に戻ると、ちょうど、それに続く形でタツミが部屋の中に入つて来た。

まだ朝であるせいか、出仕しているメンバーは少ない。

トキハ、アスナ、タツミの他には、特にする事に無いウェイブと、只管お菓子を食いまくっているクロメがいるだけだった。

「よう、昨日はよく眠れ………なかつたみたいだな」

「ま、まあな」

入ってきたタツミに声を掛けようとしたウェイブが、顔面に大きな隈を作った少年の顔を見て、苦笑気味の同情を寄せる。

エステス程の美人と、一晚ベッドを共にするなど、本来なら望外の幸せと言つても良いだろう。

しかし、男女関係における経験が少ないタツミには、刺激が大きすぎるシチュエーションであつた事だけは間違いない。

結局、昨夜は何も無かつたのだが、それでも純情な少年にとってはある意味、戦場よりも過酷な一夜であつた。

と、

そこでふと、タツミはテーブルに座つて、一心不乱にお菓子食べているクロメに目をやった。

切れ長の瞳に、美しく整った顔立ち。細身の体は、まるで人形のようなのだ。

そして何より、張れるだけ張つた食い意地。

タツミの中で、何か繋がる物があるような気がした。

と、そこでタツミの視線に気付いたららしいクロメが、鋭い眼差しを上げる。

そして、

「このお菓子はあげない」

そう言つて、素早く袋を抱きかかえるクロメ。

その姿に、タツミは確信を抱く。

間違いない。この食い意地は、アカメに通じるなにかだった。

と、そんなタツミの視線を怪訝に思ったのか、クロメは不審そうな眼差しを向けて来た。

「て言うか、何？ さつきからじろじろと」

「あ、いや、失礼かもしれないけど、手配書のアカメって奴に似てるなつて思つて」

とつきにごまかすが、嘘は言つていない。実際似ているのは確かなのだから。

「あ、それは俺も感じていた。そこのところ、どうなんだよ？」

そこで、ウェイブが意外な援護射撃をしてくれた。と言う事は、タツミの勘違いと言  
う訳でもないようだ。

対して、

クロメは口元に薄笑いを浮かべて言つた。

「優等生の身内だよ。帝国を裏切つちやつたけどね。早くもう一度会いたいなあ。会つて、私の手で殺してあげたいの。だって、大好きなお姉ちゃんだもん」

まるで闇の中から這いずり出てくるような声に、聞いていたタツミとウェイブは身を

震わせる。

そんな中一人、トキハだけは不思議そうに首をかしげている。

「アカメって誰？」

「手配書くらい見ておきなさい。ナイトレイドのエースよ」

ため息交じりに説明してやるアスナ。

ナイトレイドは目下、イエーガーズにとつて最重要目標であり、アカメはそのナイトレイドの中で最も危険な人物と目されている。

警察組織にいる以上、当然の如く押さえしておくべき情報の筈なのだが、当のトキハはと言えば、アスナの説明に呑気に返事を返している。

どうにもイマイチ、緊張感に欠けていた。

ちようどその時、扉が開いてエスデスが入ってくるのが見えた。

「タツミ、今日から数日、フェクマに狩りに行くぞ。ウェイブとクロメ、トキハとアスナも同行しろ。フェクマは潜伏にはもってこいだ。危険種を狩りつつ賊を探すぞ!!」

狩りで隊員達の技量を見極めつつ、イエーガーズの仕事もこなす。と言うのが、エスデスの考えである。

まあ、それはそれとして、タツミは疑問に思った事を率直に尋ねてみた。

「あの、『フェクマ』って、何ですか？」

一同の間に舞い降りる、重苦しい沈黙。  
ややあつて、トキハがボソツと言った。

「ほらね」

この時、

一同のやり取りを、物陰に隠れていたスタイリッシュユが、怪しげな視線で眺めている事には、

その場の誰も気付いていなかった。

フードを深く被った女性は、周囲に人の目が無い事を確認してから、裏路地へと穿いて行く。

元より、穩行には自信がある。

心配を消し、足音を殺せば、たとえ昼間であつても人の目に付かずに行動できる自信があつた。

彼女が《鼠》の異名で呼ばれているゆえんである。

やがて、地下水路へと続く扉の前に立つと、再度、尾行が無い事を確認してから、音も立てずに扉を開いた。

「おお、アルゴ、どうだった？」

中へと入ると、待ちわびていたように一組の男女が声を掛けて来た。

キリトとシノン。帝都に残ったナイトレイド2人とは、この場所で落ち合う手はずとなっていた。

「タツミ君の行方は？」

「うむ。やはり睨んだ通りだったヨ。タツ坊はエスデスに連れられて、宮殿に連れて行かれていた」

アルゴの報告に、キリトとシノンは舌打ちするしかない。

流石の2人も、城塞以上の防御力を誇り、ブドー大將軍と彼に鍛えられた精銳の近衛部隊が自ら守る宮殿に、何の備えも無しに入り込む事は不可能だった。

いずれ、革命決行の時には、ナイトレイドは宮殿に潜入して、大臣とその一派に連なる汚職官僚達を暗殺する任務を帯びる事になるだろう。そのために必要な根回しも、徐々に進められつつある。

だが、今はまだ、宮殿潜入を実行できる段階ではない。準備は全くと言って良い程進んでいないし、ここで無茶をすれば、全ての苦勞が水の泡となりかねない。



事實上、タツミを外部から救出する事は不可能と言つて良かった。

「クソツ どうすれば」

キリトは苛立つたように壁を拳で殴る。

このままでは、タツミにどんな災難が降りかかるか？

否、こうしている間にも、タツミの身に危険が迫っているかもしれないのだ。

いつそ、無理を承知で宮殿に突入するか？

いや、それでは結局、袋小路に入つてしまふに等しい。失敗したら無論の事、仮に成功したとしても、宮殿内の警戒レベルを上げてしまふ事になり、いざ革命決行の段階になつて、宮殿の防備を固められてしまふ事になる。

「キリト」

迷うキリトに対し、シノンがそつと肩を叩いて話しかけた。

「焦らないで。今はタイミングを待ちましょう」

「シノン……」

シノンの言葉に、キリトは高ぶつた心が落ち着きを取り戻していくのが判つた。

同時に、不思議な思いにも捉われていた。

ついこの間、殺し屋になつたばかりのシノンの言葉で、自分がこんなにも落ち着いていると言う事に驚く。

シノンがナイトレイドに入ってから、共に行動する時間が長かったのはキリトだが、それ故に彼女の言葉は心に沁み渡るようだった。

「シノツチの言うとおりだぜ。ここは焦るべきじゃナイ」

2人の様子を見ながら、アルゴも口を開いた。

「それに、俺っちの調べでは、ちよつと気になる情報があるんだ」

「気になる情報？」

アルゴの言葉に、キリトとシノンは身を乗り出す。

どんな些細な事でも構わない。今はほんの少しでも情報が欲しい所だった。

「先日、ギョガン湖の砦をイエーガーズが壊滅させたのは知っているダロウ？」

「ああ、あの盗賊やら、追剥やらの巣窟だろ。それがどうしたんだ？」

ギョガン湖の砦の件はナイトレイドの方でも情報を掴んでいた。

元々、あの砦に集っていたのは、革命軍とは何のつながりも無く、ただ力の無い民を狙って悪事を働く外道たちだったのだ。

もし討伐の依頼が入れば、ナイトレイドが彼等を殲滅していただろう。

それだけに、イエーガーズが動いてくれたのは、手間が省けたとも言える。

「その時に、タツ坊らしき人物が、イエーガーズと一緒に行動していたって話だよ」

「どういう事だよ？」

首をかしげるキリト。

タツミがイエーガーズに捕まったのなら、外に連れ出されるのはおかしい。

そもそも今回の一件、初めから判らない事だらけである。

なぜ、エスデスはタツミを連れ去ったのか？　そこからして理由が判然としない。

タツミがナイトレイドである事がばれたと言うなら、理由としては理解できるのだが、どうも状況を考えるに、そうではない気がする。

もしエスデスがタツミを捕縛以外の目的で連れ去ったのだとしたら、救出する望みは充分にあるだろう。

もつとも、

まさか《帝国最強》のエスデスが、タツミを恋人にするために連れ去ったなどは、流石のキリトでも、そこまでは考えが及ばないのだった。

「それから、これは未確定情報なんだが」

身を乗り出すキリトとシノンに、アルゴは説明する。

何でも、今日から数日、エスデスはフェイクマウンテン周辺で狩りをする為に宮殿を空けるのだから。

その情報を聞いて、キリトは考え込む。

「チャンスかもな」

もしタツミを連れて外に出て来るなら、救出のチャンスはあるかもしれない。勿論、エスデスやイエーガーズの存在は脅威だが、それでも宮殿内から連れ出すよりも、ずつとチャンスは増えるはずだった。

「アルゴ、悪いがこの情報、アジトにいるアカメたちにも伝えてくれ」  
「判った」

頷くアルゴ。

次いで、キリトはシノンを見やる。

「俺達は、フェイクマウンテンに先回りして、襲撃できるポイントを探そう。場合によっては、力づくでタツミを取り戻す必要もあるからな」

「判ったわ」

シノンは頷きを返すと、シエキナーを強く握る。

状況によっては、エスデスとの交戦もあり得る。

現状のシノンでは、帝国最強を相手には手も足も出ないだろう事は、火を見るよりも明らかだった。

相変わらず、うつそうとしたところだ。

フェイクマウンテンの中を駆けまわりながら、キリトは周囲に警戒の気を配る。

アルゴからの情報通り、エスデスを含むイエーガーズ数名が、このフェイクマウンテンに入っていくのは確認している。

その中に、タツミの無事な姿を見付ける事が出来た時は、思わず胸をなでおろした物である。

だが、やはりと言うべきか、エスデスも一緒になって出てきた。

どうにかして、エスデスとタツミを引き離し、その間にタツミを連れ出さなくてはならない。

その算段について考えていた時、更なる僥倖が起こった。

イエーガーズは三班に分かれ、それぞれ別行動を取ったのだ。

エスデスと黒いセーラー服を来た少女は山の西側へ、黒い軍服の少年と、白い軍服を着た少女は山の東側へ、そしてタツミと最後の1人は山頂の方向へと向かった。

これはチャンスである。

万が一戦闘になったとしても、タツミと2人で掛かれば押し切れる筈。

そう判断したキリトは、いったんシノンと別れて、単独でタツミ達を追いかける道を選んだ。

尾行しながらフェイクマウンテンを歩くなら、単独で身軽の方が得策であると考えたのだ。

暫く物陰に身を隠しながら様子を伺っていると、危険種の群れと交戦を開始した際に、タツミが密かにインクルシオを着装して戦線離脱するのが見えた。

そこで、今はキリトも、タツミを追いかけている所である。

それにしても、

「速いな、タツミの奴。もう見失っちゃまったぞ」

走りながら、ため息交じりに呟くキリト。

恐らくインクルシオの能力で脚力を底上げしているのだろうが、まさか自分が追いつけない程だとは思わなかった。

もう少し、スピードを上げようか？

そう思った時だった。

突如、

「ッ!？」

木立の陰から殺気が浮かび上がったのを、キリトは見逃さなかった。

次の瞬間、

緑の生い茂るスクリーンを、

銀色の閃光が斜めに両断した。

とつさに身を翻すキリト。

前髪が一房、斬り裂かれて宙に舞う。

「なッ!?!」

雖揉みする視界の中、

キリトは見た。

斬り裂かれた木立の間を割るように、

茫洋とした瞳の少年が、刀を構えて向かってくるところを。

『こいつ、イエーガーズの!?!』

確か、エスデスやタツミと一緒にいるのを見かけた少年である。

年の頃は、キリトと同じくらいか、それよりも少し下くらい。

あどけなさの残る幼い顔立ちの中で、光の薄い瞳が、真つ直ぐにキリトを見据えて斬

り掛かってきた。

愕然とするキリト。

迂闊だった。まさか、すぐ間近に接近されるまで、相手の存在に気付かなかったとは。

殺し屋にあるまじき失態である。

タツミの方に集中するあまり、他の要素に気が回っていなかったのだ。

否、

それ以前に、目の前の少年の技量が、かなり高い事が伺える。

すぐ近くに接近するまで気配を悟らせなかったのは、それだけ穩行に優れている証しだ。

「……………危険種かと思った」

着地しながら、トキハは第一声でそう言った。

同時に、手にした玉梓の切っ先を、キリトへと向ける。

「えっと……………そうそう、特殊警察イエーガーズ……………て言っても、できたばかりだから判らないか」

取ってつけたような名乗りをするトキハ。

それに対し、妙にずれた事を言う奴だな、とキリトは内心で苦笑する。

何だか、慣れていない子供が、警察ごっこをしているような印象さえある。

だが、油断はできない。

警戒がおろそかになっていたとは言え、間合いに入られるまでキリトが接近に気付かなかったほどの相手だ。相当な使い手である事が判る。



だが、それ以上考えている時間は無かった。

「答えないって事は、怪しい……」

そう告げた瞬間、

トキハは滑るような動きで、キリトとの間合いを詰めて来た。

「ッ!？」

鋭く横なぎに繰り出された斬撃を、後退しつつ回避するキリト。

同時に、手は背中のエリユシデータを抜き放つ。

「怪しきは罰せよ」と言うべきか、どうやら問答無用らしい。

トキハは、自分の質問に答えないキリトを怪しいと判断し、力づくで従わせる方向に切り替えたのだ。

「……………」

剣を抜いたキリトに対し、僅かに眉根を上げるトキハ。

明確に抵抗の意志を見せたキリトに対し、こつちも警戒心を強めている様子だ。

一方でキリトの方でも、相手がイエーガーズである以上、手を抜く事はできない。ここからは、命がけの胎児となる。

しかも、今はタツミとの合流が最優先の状況である。

ここは全力でトキハを振り切り、戦線離脱するのが得策だった。

「行くぞッ」

短い声とともに、キリトは仕掛けた。

同時に能力を発動。一気呵成に襲い掛かる。

鋭く繰り出される、垂直4連撃。

バーチカルスクエアの剣閃が、トキハへと迫る。

「ッ 速い!?!」

対して、キリトの鋭い攻撃に、トキハは思わず目を見張った。

トキハ自身、スピードには自信があるのだが、それでもキリトの剣が繰り出す速度は、思わず反応が遅れる程だった。

ガキンッ

とつさに繰り出した玉梓で、バーチカルスクエアを弾くトキハ。

だが、

キリトの動きはそこでは止まらない。

バーチカルスクエアの技後硬直を抜けると同時に、更にダツシユ。突進の勢いをそのまま剣に乗せて真つ向から斬り込む。

「クッ!?!」

舌打ちしつつ、さらに後退してキリトの剣を弾く。

戦いはキリトの有利に進んでいる。

奇襲によって先制したトキハだが、完全に巻き返された形である。

「.....」

ムツとした表情で、キリトを睨むトキハ。

相手が何者かは判っていないが、それでもこのまま押し切られるのは良い気がしない。

一方のキリトは、そろそろ戦闘を切り上げる算段を考え始めていた。

ここで戦闘を長引かせるのは、キリトの本意ではないし、仕事ではない以上、トキハを無理に殺す必要性も無い。

顔を見られたのは痛かったが、キリトの顔は手配書には載っていないので、ナイトレイドとばれる危険性は、今のところはまだ低いだろう。

ならば、この場は離脱してタツミとの合流を急ぐべきだろう。

そこまで考えて、踵を返そうとした時だった。

「ッ!？」

ゾクリ、と背中に不穏な寒気を感じ、思わずキリトは足を止める。

振り返る、視線の先。

そこには、玉梓を掲げて立つトキハの姿がある。

だが、

その姿は、キリトの見ている目の前で、みるみる内に変貌していく。双眸は毒々しいまでの深紅に染まり、髪は不気味な白に変化する。

釣り上がった瞳は、まるで鬼のようにキリトを睨んでいた。

「そうか……その刀が、お前の帝具だったのか」

言いながら、キリトはエリユシデータを構え直す。

直感で、離脱は困難と判断。ある程度の交戦続行は避けられないと考えたのだ。

次の瞬間、

トキハが仕掛けた。

数メートルの間合いが、一気にゼロになる。

「うッ!？」

今度は、キリトが息を飲む番だった。

あまりの攻撃速度を前に、反応がワntenポ遅れる。

同時に、トキハの紅い双眸が、キリトを睨む。

横なぎに振るわれる玉梓の刃。

その攻撃を、キリトは上空に跳躍する事で回避する。

だが、

次の瞬間、

上昇するキリトを追って、トキハもまた跳躍してきた。

対空砲弾のように駆け上がって来るトキハ。

鋭い斬撃が、再びキリトへ襲い掛かる。

「クソッ!?!」

悪態をつきながら、自身もエリユシデータを繰り出して迎え撃つキリト。

互いの刃が、空中で激突。凄まじい金属音が鳴り響く。

次の瞬間、押し勝ったのは、

トキハの方だった。

「グッ!?!」

空中で錐揉みするキリト。

上空と言う足場の無い場所での激突。しかも、トキハは跳躍の勢いをそのまま攻撃に点火する事が出来た為、キリトに対し完全に有利に立ったのだ。

バランスを崩して落下していくキリト。

それでも、どうにか体勢を立て直して着地する。

「クソ、これ程とはな……」

舌打ちするキリト。

先程までとは明らかに異なるトキハの攻撃力を前に、完全に状況は逆転していた。

帝具《邪神転生 玉梓》。

その能力は、自身の能力強化にある。

能力を解放する事によってトキハは、脚力、筋力、感覚、反応力、自身の全ての要素を極限まで強化する事ができるのだ。

鋭い斬撃を繰り出すトキハに対し、辛うじてエリユシデータを振るって攻撃を防ぐキリト。

先程までとは状況が逆転し、トキハの攻撃力を前に、キリトは防戦一方に追い込まれていた。

振るわれる斬撃を回避し、或いはエリユシデータで防ぐものの、次の瞬間にはトキハはあり得ない反応速度を見せて次の攻撃につなげてくる。

焦燥を増すキリト。

このままでは離脱どころか、追い込まれてやられてしまう。

どうにかして逆転しないと。

そこへ、再び斬り込んでくるトキハ。

一気に、間合いへと入る。

次の瞬間、

キリトは左手を背中に回す。

そこに現れる、白い柄。

出現したダークリパルサーを、抜き放ち、接近してきたトキハに向かって斬り掛かる。

「ッ!？」

これには、トキハも虚を突かれた。

とつさに玉梓を掲げて防御するトキハ。

そこへ、キリトの斬撃が襲い掛かる。

凄まじい速度の剣閃。

威力の高い攻撃の前に、トキハの防御が押し切られる。

吹き飛ばされるトキハ。

「グッ!？」

地面に大きく吹き飛ばされながらも、どうにか体勢を立て直して着地する。

しかし、

顔を上げた視線の先に、キリトの姿は無かった。

「……………逃げた?」

探ってみても、周囲に気配を感じる事は無い。

どうやら、完全に見失ってしまったらしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

仕方なく、トキハは高ぶった気を静め、能力を解除する。程無く、トキハの姿は元の少年の物へと戻って行った。

同時に、そつと胸に手をやって、そこに生じた微かな疼きを押さえる。

「・・・・・・・・大丈夫。これくらいなら」

自分に言い聞かせるように呟いた時だった。

先程の物とは違う気配が近付いて来るのが判った。

ややあつて、繁みをかき分けるようにして、アスナが姿を現した。

「もう、トキハ君。いつの間にか先に行かないでよ。探すのに苦労したわよ」

言つてから、アスナはトキハを見やる。

「ん？ 何かあつたの？」

「・・・・・・・・別に」

そう言つて、ごまかすトキハ。

結局、あいつが誰だったのか、ここで何をしていたのか、一切わからない以上、どう説明したら良いのかも判らなかつた。

まあ、良いか。

トキハは内心で、そう呟く。



あれほどの実力者だ、放っておいても、いずれまた出会う事もあるだろう。正体に関しては、その時にでも改めて聞けばいい。

そんなトキハに、不思議そうな目を向けるアスナ。

だが、トキハはそれ以上、何も語ろうとはしなかった。

一方、戦線離脱に成功したキリトは、安全圏まで来た事を確認してから大きく息を付いた。

「……随分、手ごわい奴だったな」

まさか、奥の手まで使わされることになるとは思わなかった。

イエーガーズ。

これからの戦いに際し、随分と厄介な奴等が出て来た物である。

「気を引き締めないとな」

そう言うときリトは、タツミ達との合流を急ぐべく、改めて足を速めるのだった。

## 第20話 「スタイリッシュ強襲」

1

夜であるにもかかわらず、ナイトレイドのアジトではどんちゃん騒ぎが興じられていた。

もつとも、今日くらいは無理のない話とも言える。

何しろ、エスデスに拉致されて、半ば軟禁に近い形にあったタツミが、自力で脱出してきたのだから。

その際、敵の追撃を受けて負傷する事態になったが、どうにかインクルシオの透明化機能を使い、切り抜ける事に成功したのだとか。

以前のタツミなら、交戦して切り抜ける道を選択したはずである。それを考えれば、

少年の着実な成長をうかがわせる話だった。

こうして敵を振り切る事に成功したタツミは、ダメージで動けなくなっていたところを、キリトたち同様、搜索に来ていたアカメとラバックに助けられ、帰還する事に成功したのだった。

「それにしても信じられねえ……」

ラバックは酒の入ったジョッキを片手に、どんよりした目でタツミを見やる。

「あのエスデスが、タツミに惚れるなんて」

「確かにな。何か、悪い夢でも見たんじゃないのか？」

ラバックのボヤキに対し、キリトも大いに同感だとばかりに頷く。

伝え聞くエスデスの凶暴振りを考えれば、とてもではないがイメージに合わなかった。

まことに、天変地異を疑いたいレベルである。

もつとも、当の本人たるタツミはと言えば、それどころではなかったのだが。

「ほんと、夢だったら、どんなに良かったか……」

そう言って、ガックリと肩を落とす。

他人から見れば羨ましいシチュエーションでも、当の本人からすれば、恥ずかしさと緊張の連続で精神が擦り切れる思いだった。

正直、二度と会いたくない、と言うのが偽らざる本音である。

まあ、その気持ちは痛い程に判るが。

「フンッ タツミに最初に目を付けたのは、この私だ。エスデスなんかには渡さないよ」

酒の入った勢いで言い放ったレオーネは、そのままタツミの首に腕を回す。

レオーネの豊かな胸を顔に押し付けられ、赤面するタツミ。

その様子を見て、シノンが呆れたようにため息を吐く。

「レオーネと言い、エスデスと言い、タツミ君って、意外と年上にモテるタイプよね」

「好きでそうなってるわけじゃねえ……」

贅沢なぼやきを放つタツミ。

そんなタツミに対し、

シノンは口調を改めて尋ねた。

「あのさ、タツミ君。イエーガーズの事なんだけど……」

「どうかしたのか？」

レオーネの腕から逃れつつ、タツミはシノンに向き直る。

タツミは、ただ無抵抗に連れ去られていた訳ではない。

イエーガーズと行動を共にしている間、彼等の戦力や装備している帝具の特徴をできる限り観察し、それを情報として持ち帰ったのだ。

タツミが持ち帰つて来たイエーガーズの情報は、ナイトレイドにとつて宝石よりも貴重な物である。これらの情報があれば、今後の戦いを有利に進める事も不可能ではない。

だが、その中で一つ、シノンにはどうしても無視できない情報があったのだ。

「メンバーの一人は『アスナ』って言うのよね？」

「ああ、そうだけども……どうかしたのか？」

怪訝な顔つきで尋ねてくるタツミに答えず、シノンは考え込む。

まさか、そんな筈はない。

自分の中で浮かんだ考えを、即座に否定する。

同じ名前を持つ人間なんて珍しくない。それは、彼女とて例外では無い筈。

「シノン、どうかしたのか？」

「あ、ううん。何でもない」

心配そうに覗きこんでくるキリトに対し、シノンは慌てて首を振る。

そうだ。単なる思い過ごしに過ぎない。きっと別人だろう。こんな事は、よくある話なのだから。

自分の中で無理やり、そのように考えるシノン。

だが、胸の内に浮かぶ疑念は、どうしても消える事は無かった。

その頃、

アジトから少し離れた小高い丘の上で、様子を伺う一団がある事に、ナイトレイドの一同はまだ気付いていなかった。

その集団の中央に立つドクター・スタイリッシュは、口元に笑みを浮かべ、彼方にあ  
る崖の中腹に建つ人工物を眺めていた。

「どうやら、あれがナイトレイドのアジトって事で間違いないみたいね」

自身の勘が当たった事を悟り、スタイリッシュは内心で喝采を上げていた。

きっかけは、タツミだった。

エスデスに見出される形でイエーガーズの補欠となったタツミだが、スタイリッシュ  
は当初から、彼に疑惑の目を向けていた。

一般人の鍛冶屋と名乗ったタツミだが、どうにもスタイリッシュの目には、状況に順  
応し過ぎているように見えたのだ。

メンバーとも打ち解け、多少の戸惑いは見られたものの、概ねトラブルも無く、イエー  
ガーズに解けこんでいた。

普通の一般人なら、あれほどの異常事態に慣れるのに相応の時間がかかる筈。にも拘

らず、入ってすぐに重農を見せたタツミの様子は、スタイリツシユには却って奇異に見えたのだ。

タツミには何か裏がある。

スタイリツシユは、長年、研究の過程で多種多様な人間を見続けてきた観察眼から、そのような結論付けた。

そこで、タツミがエスデスの元から逃げたと聞いたスタイリツシユは、イエーガーズとは離れ、独自の行動に出たのだ。

自身が改造した強化兵を引き連れ、エスデス達とは別行動を取ってタツミ捜索を開始した。

強化兵の中には、感覚器を改造して索敵に特化した者がいる。

スタイリツシユの周囲に取り巻いている3人が、それだった。

巨大な尖ったな鼻を持つ瘦身の男は嗅覚を強化した《鼻》。この《鼻》が、逃げたタツミの匂いを追って、アジトの場所を突き止めた。

筋骨隆々とした体軀をしており、革製の衣服に身を包んでいる《目》は、視力を強化しており、どんな細かい物も見逃さない。アジト周辺に張られた糸の結界も、この《目》が見破って無力化している。

3人目の細身で中性的な外見をした男は《耳》。聴覚を強化しており、たとえば数キロ離

れた先の囁き声も聞き分ける事ができる。今はスタイリッシュの傍らにあつて、情報収集に努めている。

「さて、そろそろかしらね」

呟くように、時間を確認するスタイリッシュ。

既に1人、強化兵を先行してアジトへと潜入させている。

そいつの攻撃が、戦闘開始の合図となる予定だった。

勿論、それだけではない。

本格戦闘に備え、自慢の戦闘職も連れてきている。

スタイリッシュは振り返り、彼等に目をやった。

「カクサン。あなたの帝具は、メンテナンスするって言う名目で持ち出したんだから、傷付けちゃダメよ」

「ワハハハハハ。俺の頭脳と体力で、使いこなして見せます」

「カクサンと呼ばれた巨漢の男は、そう言つて豪快に笑いながら、手にした帝具を掲げて見せる。

次いでスタイリッシュは、岩に座つて体の調子確かめている瘦身の男に目を向けた。

「トビー、アンタは大物狙いよ。いける?」



「最高のコンディションです。誰にも負ける気がしません」

力強い返事が返ってくる。

ほくそ笑むスタイリッシュ。

「じゃあ、あなた達もビンビンに暴れて来なさいな。手筈通りにね」

最高の手駒たちを従えたスタイリッシュ。

彼には、勝利以外の結末はあり得なかった。

## 2

未明。

遅くまでタツミ達とどんちゃん騒ぎをしていたレオーネは、会議室の床で目を覚ますと、未だに眠気の冷めない頭を振りつつ、風呂場へと向かった。

会議室の床には、レオーネに付き合つて深酒をしていたタツミとラバックが転がつているのが見える。どうやら、二人とも完全に酔いつぶれてしまった様子だ。

3人の少女達とキリトの姿が無い所を見ると、そちらは早々に自分達の部屋へと戻つ

て休んだらしい。

大きく欠伸をするレオーネ。

「まだ、ねむ……………」

眩きながら、しよぼしよぼする目を擦る。

取りあえず、顔でも洗ってすつきりしたかった。

レオーネは湯船の淵に屈みこむと、湯を手ですくい、顔に持っていく。

程よく湯気の立った湯を顔に付けると、さわやかな気分が広がるのが判る。

それを何度か繰り返すと、ようやく眠気も冷めて来た。

「……………ん？」

その時、

水面の揺らぎの中に、何かが映った気がした。

目を凝らして、水面に顔を近づけるレオーネ。

次の瞬間、

ドスツ

突如、水面下から飛んできたナイフが、レオーネの顔面に突き刺さった。

その間、僅か一瞬。

レオーネには、対応する時間すら無かった。

そのまま、水しぶきを上げて湯の中へと倒れ込むレオーネ。

入れ替わるように、湯の中からナイフを手に男が現れる。

革製のストラックスに、上半身には素肌の上からジャケットを被った、軽薄な印象の男だ。

この男こそが、スタイリッシュが先行して潜り込ませた特殊工作担当の強化兵である。

男は倒れたレオーネを見て、ニヤリと笑う。

「けひっ やりましたぜスタイリッシュ様。このトロローマが、1人仕留めましたぜ。引き続き、任務を続行します」

そう言うと、トロローマと名乗った男は、次なる標的を求めてアジトの中へと足を踏みこんで行った。

彼の役目は遊撃。気配を消して物陰に隠れ、敵が隙を見せた瞬間を逃さず仕留めるのだ。

その実力は、たった今、レオーネを一撃で葬った事から証明されていた。

「……との事です。スタイリッシュ様」

「上出来よ。流石は桂馬の役割。敵地へ飛び込んだわね」

トローマの囁きを察知した《耳》の報告に、スタイリッシュは満足げに頷きを返す。スタイリッシュは自身の手駒である強化兵達を、将棋の駒に例えている。

斥候役で、常に自分の傍らに置いておく《目》《鼻》《耳》は金と銀、機動力が高く、武術に優れるトビーは飛車、堅い防御で敵陣を蹂躪するカクサンは角行、身軽な動きでトリッキーな戦術を得意とするトローマは桂馬。

そして、この場にはないセリユーは、真つ直ぐにどこまでも突撃していく攻撃を得意としている事から、香車に分類している。

当然、王将はスタイリッシュ自身と言う訳だ。

そして、もう一人。

スタイリッシュは、背後に立つ青年にチラツと目をやる。

その男は、本来なら将棋には存在しない駒だが、その戦闘能力の高さは戦闘員の中でもずば抜けている。故にスタイリッシュにとつての切り札のような存在だツラ。

「あんたも、期待しているわよ。存分に戦いなさい」

「判っています、スタイリッシュ様。どうぞ、ご期待ください」

頷きを返すと、スタイリッシュは再びナイトレイドのアジトに目をやる。

これで狼煙は上がった。あとは一気にたたみかけるのみ。

「さあ、チーム・スタイリツシュ。熱く激しく攻撃開始よ!!」  
颯爽と腕を振るスタイリツシュ。

同時に、森のあちこちから湧き出すように、強化兵の戦闘員たちが次々と飛び出していく。彼等が将棋で言うところの《歩》と言う訳だ。

「いい、なるべく死体は損壊しないように持つて帰るのよ!! 生け捕りなんかできた人は、一晩愛してあげるわ!!」

スタイリツシュの激励に答えるように、戦闘員たちが怒涛の如くナイトレイドのアジトへと向かっていく。

その数は100以上。これだけの大兵力を投入すれば、たとえ悪名高いナイトレイドと言えども叩き潰せるはずだった。

「しかし、良いのですか? エスデス様に賊の事を、お知らせしなくても?」

「ナイトレイドに、その帝具、こんな最高の実験素材がいっぱいなよ。独り占めしないでするのよ」

《目》の質問に対し、スタイリツシュは笑みを浮かべながら言う。

ナイトレイド全員の死体が手に入れば、今後の研究も進み、スタイリツシュの夢である、帝具を越えた最高の武器開発も大きく前進する事になる。

セリユーを連れて来なかったのも、そう言った事情故である。

イエーガーズに入隊して以来、セリユーはエスデスに対して崇拜に近い念を抱いている事は、付き合いの長いスタイリッシュには手に取るようにわかった。彼女に話したら、エスデスに知らされるのは火を見るよりも明らかだった。

たとえ香車セリユーがいなくても、飛車と角行、更に切り札があれば、有利な盤面を形成できる自信がスタイリッシュにはある。

更に、

それだけではない。他ならぬエスデス自身の事もある。

帝国最強の武力と、ゆるぎないドSな性格。そして、それを貫き通せる信念。

スタイリッシュにとって、エスデスは正に理想の具現である。

だが、そんなエスデスが、恋をして腑抜けてしまった。

タツミの事ばかりを見て、タツミの事しか頭に無いエスデス。

そんなエスデスなど、スタイリッシュは見たくなかった。

だからタツミは、必ず捕まえて、散々お仕置きして殺してやるつもりだった。全ては

エスデスの目をさまし、元のドSでスタイリッシュなエスデスに戻す為に。

ある意味、スタイリッシュもまた、エスデスに惹かれている人間の一人であった。

「戦闘員がアジトに突入しました」

「さあ、ショーの始まりね。ゾクゾクするわ」

## 3

異変に、最初に気付いたのは警備担当のラバックだった。

クローズステールの糸による結界は、アジト周囲の広範囲に張り巡らせてある。たとえば、どんな存在であっても結界に触れればラバックの知る所となる。

だが、今回の事態は、あまりにも異常だった。

大量の敵が、いきなりアジトの至近に出現したのだ。

こんな事、今まで一度も無かった。アジトに近付こうとした存在は、全て事前に察知できた筈なのに。

ラバック自身は知りえない事だが、張り巡らされた糸は全て、《目》によって事前に察知され、回避されていたのだ。

いかに無限に近い長さを誇るクローズステールでも、アジト全体を覆い尽くす事は不可能だった。

既に敵はアジトの内部にまで侵入している。急いで仲間達にも知らせないと。

そう考えた時だった。

突如、天井を突き破り、戦闘員の1人が飛び込んできた。

「もう、中まで入られたのかよ!？」

とつさに身構えるラバック。

無表情の仮面の奥で、不気味な眼光が光り、ラバックを睨んでいるのが判る。

次の瞬間、

「敵………コロス!!」

戦闘員が飛び掛かってくる。

とつさに、身を翻して攻撃を回避するラバック。

同時に戦闘員の首に糸を掛け、そのまま振じる。

強烈な音と共に、戦闘員の首がへし折れる。

並みの人間なら、これで即死だ。

だが、

驚いた事に戦闘員は、首が折れた状態のまま、更にラバックに襲い掛かって来た。

スタイリッシュの戦闘員達は生命力や生存力に優れる改造が施されている。痛覚も取り除かれている為、多少身体を損壊した程度では動きを止める事は無い。

「クソッ!？」



舌打ちしながら回避しようとするラバック。

だが、それよりも早く戦闘員は襲い掛かって来た。

振るわれる腕が、ラバックを襲う。

攻撃は、確かにラバックを捉え、その体を抉る。

こちらも、致命傷級の傷である。

だが、

戦闘におけるしぶとさと言う意味では、ラバックも負けていなかった。

「糸には、こんな使い方もあるんだぜ」

ニヤリと笑うと、ラバックは服の下からクローステールの糸を引っ張り出す。

その腹には、幾重にもクローステールの糸が巻かれているのが見えた。ラバックは服の下に糸を仕込む事で、自身の防御力を高めていたのだ。

更なる追撃を仕掛けてくる戦闘員。

だが、今度はラバックも落ち着いて対応する。

複雑に腕を動かし、糸を束ね合わせて槍を形成すると、向かってくる戦闘員目がけて、

正面から投擲する。

放たれた槍は、戦闘員の心臓を貫通。そのまま弾き飛ばす。

床に転がる戦闘員。

「どうやら今度こそ、完全に仕留めたらしい。」

「俺は貸本屋だ。糸の使い方なんて、店にある漫画にいくらでも書いてあるのさ」  
不敵に笑うラバック。

普段は支援役に徹する事が多いため、目立つ事が少ないラバックだが、その実力は決して低くは無い。雑兵如きで對抗できるはずも無かった。

その時、背後から足音が聞こえ、ラバックは振り返る。

「また来やがった………の………か………」

そこで、ラバックは固まった。

視界の中、廊下一杯に溢れる程、戦闘員達が迫ってきている。

床を這いずるようにして向かってくる姿は、まるで大量の虫が湧いてきているように、かなり不気味である。

ちよつと、予想外の光景だった。

冷や汗を流すラバック。

「だ………団体さんは、ご遠慮願いたいわけ………で!!」

次の瞬間、ラバックは勢いよく踵を返し、脱兎の如く駆け出した。

だが、戦闘員達も一斉にラバックを追って這い寄ってくる。

「ウオオオ、けつこう速エ!!」

後ろを振り返れば、もうすぐそこまで迫っている。

このままでは早晩、追いつかれてしまう。

その時、

低空を跳躍するようにして、戦闘員達の波を飛び越え、鋭く飛び込んできた影がある。  
アカメだ。

どうやら、寝ている間に異変に気付いたらしい。チェック柄の可愛らしい寝巻のまま、手には村雨を持っている。

着地と同時に、アカメはラバックを庇うように振り返る。

「私の後ろへ!!」

言い放つと同時に村雨を抜刀、襲い掛かってきた敵を次々と斬り捌いて行く。

廊下を埋め尽くす程だった戦闘員達が、次々と数を減らしていく様に、ラバックは口笛交じりに賞賛する。

「さすがだぜ、アカメちゃん!!」

ナイトレイドのエースは伊達ではない。雑兵如き、万軍で襲い掛かったとしてもアカメには敵わなかった。

その時、

「敵ながら見事な腕前、感服しました」

静かな声と共に、戦闘員達の屍を踏み越え、2人の側近を背後に従えたトビーが、アカメとラバックの前に姿を現す。

戦闘員達が暴れている隙に、彼等主力メンバーもアジトへの侵入を果たしたのだ。対して、アカメは油断なく村雨を構え直す。

一目で、トビーが尋常な実力ではないと感じていた。

これまでのような雑兵とはわけが違う。油断すれば、アカメと言えども危ないかもしれない。

そう考えた次の瞬間、

腕に仕込んだ刃を展開すると同時に、トビーは床を蹴って疾走する。

「我が名はトビー。アカメ殿に一騎打ちを所望する」

言い放ちながら、トビーは壁や天井を蹴ってトリツキーな動きを見せる。

視覚を攪乱しながらアカメへと接近。鋭く斬り掛かるトビー。

しかし、アカメも負けてはいない。

素早く村雨の刃を返すと、襲い掛かってくるトビー目がけて横なぎに一閃する。

交錯する両者。

アカメの刃は、確実にトビーを捉える。

しかし、

「この感触は……」

刃に伝わる感触が、常の物とは違うと感じ、アカメは警戒を強める。

その証拠に、アカメの剣は確かに命中したにもかかわらず、トビーは平然とした顔で立っている。何より、村雨に斬られたのに平然としていられるのは、明らかにおかしかった。

スタイリッシュによって改造されたトビーは、全身を機械に変えている。その為、村雨の呪毒も効果が無いのだ。

更なる攻撃を繰り出すトビーに対し、アカメも村雨を振り翳して迎え撃つ。

掩護に入ろうとするラバックだが、トビーの取り巻きが邪魔をして来るため、それも果たせないでいた。

壁を破壊する形で前庭に飛び出したタツミは、既にインクルシオを着装していた。

着地した先、タツミ達が日々の鍛練で使用している前庭は、既に戦闘員達で埋め尽くされていた。

まさか、ここまでの事態になるとは、思っても見なかった。

だが、感傷に浸っている暇はない。

「こいつら、ドクター・スタイリッシュの強化兵か!？」

言いながら、タツミは地を蹴って前へと出る。

群がる敵兵に対し、次々と拳を振るう。

たとえ強化兵であっても、帝具使いの敵ではない。

たちまち、なぎ倒されていく戦闘員達。

タツミは圧倒的な戦闘力を発揮して、彼等を圧倒していた。

その時だった。

「おう、出てきた出てきた。鎧の兄ちゃんの手は、俺がするぜ」

背後からの声にタツミが振り返ると、そこには巨漢の男、カクサンが口元に笑みを浮かべて立っていた。

トビーにやや遅れる形で侵入を果たしたカクサンは、ちょうど飛び出してきたタツミと鉢合わせした形である。

振り返り、身構えるタツミ。

だが、カクサンが背中に背負っている物を見て、思わずタツミは目を剥いた。

「ツ その帝具は……」

あまりにも見覚えのある帝具。忘れようとしても、忘れられる物ではない。

「フフ、良いだろ。《万物両断エクスタス》。ご機嫌な、俺の帝具さ」

巨大なハサミ型の帝具は、間違いな、く亡きシェーレの帝具エクスタスである。かつて、シェーレが使っていた帝具が敵の手にある。

その光景を見るだけで、タツミの脳は沸騰しそうなほどに煮えたぎった。

「それは、<sup>テメエ</sup>手前のじゃねえ!!」

言い放つと同時に、タツミはカクサンに向かつて飛び掛かった。

群がってくる戦闘員の群れ。

その頭上から、光の矢が次々と降り注ぎ撃ち抜いて行く。

今日は帝都の部屋には帰らず、アジトの寝室で眠っていたシノンには、襲撃によって目を覚ますと、すぐさまシェキナーを取り出して応戦を始めたのだ。

着替える余裕が無かったため、下着の上から学生服のYシャツを羽織っただけというラフな格好をしているが、この際、そこに気を使っている余裕は無かった。

窓から見える階下には、今にもアジトの建物に入ろうとしている戦闘員達がいる。

そこに狙いを定めると、シノンは光の矢を放つ。

直撃を受けた戦闘員が吹き飛ばさまを確認すると、すぐさま、次の攻撃に移るシノン。しかし、敵は後から後から湧き出して来ていた。

「何で、いきなりこんな事に!？」

苛立たしげに言いながら、弦を引き絞り矢を放つシノン。

シエキナーの能力アシストによって得られた正確な照準は、戦闘員の急所を正確に撃ち抜く。

既にシノンの狙撃によって、幾人もの戦闘員が倒れているが、群がる波は一向に収まる気配が無い。

「クッ」

舌打ちすると、シノンは部屋を飛び出す。

室内の狭い窓からでは、狙撃にも限界があると感じたのだ。

そのまま廊下を走ると、窓を開けて新たな射点を確保する。

再び弦を引き、矢を放つシノン。

再び始まる狙撃。

光の矢は、正確な照準で戦闘員を射抜く。

しかし、既に戦闘員達はアジトの内部にも入り込んでいるらしい。このままでは、陥落も時間の問題だろう。

「とにかく今は、できる事をやるしか……………」

シノンがそう言いかけた時だった。



「おやおや、こんな所に一匹いましたね」

突然の声に振り返ると、そこには長身の青年が歩いて来るのが見えた。

警戒心を顕にするシノン。

それに対し、男は口元に笑みを浮かべて対峙する。

「お初にお目に掛かります、ナイトレイドのお嬢さん。私はチーム・スタイリツシュに属するクイントと申します。短い間でしようが、お見知りおきを」

その落ち着き払った態度に、シノンはゴクリと喉を鳴らす。

かなりの強さである事が伺える。

弓を構えるシノン。

しかし、

「遅いですよ」

低い呟きと共に、距離を詰めてくるクイント。

その速度を前に、シノンの照準は間に合わない。

顔を引きつらせるシノン。

やられる!?

そう思った。

揃えられたクイントの指。その先端に光る爪が、怪しい輝きを秘めて、シノンを斬り

裂こうと迫ってくる。

スローモーションのように迫る爪。

クイントの攻撃が、シノンを斬り裂こうとした。

次の瞬間、

ガキンッ

金属音が鳴り響き、クイントの体は大きく弾かれる。

「むっ!？」

衝撃と共に、後退を余儀なくされるクイント。

対してシノンは、シエキナーを胸に抱くようにして立ち尽くしている。

そんな中、

シノンを守るように、漆黒の背中が立ち出でる。

「うちのお姫様に、勝手に手エ出してんじゃねえよ」

鋭い声で言い放つと、キリトはエリユシデータの切っ先をクイントに向けた。

第20話「スタイリッシュ強襲」

終わり

## 第21話 「アジト攻防戦」

1

アカメとトビーの対決は、達人同士、白熱した物となっていた。身体能力は、両者ほぼ互角。

しかしトビーはスタイリッシュの改造によって、脳など一部の重要器官以外は全て機械に置き換えられている為、村雨の呪毒を完全にブロックしている事に加え、全身のあらゆる場所に武器を仕込んでいる。

加えて、痛覚神経も除去されている為、いくら斬られようとも戦闘力が落ちる事は無い。

徹底的に「対アカメ」を意識した身体の造りをしているのだ。

これには、流石のアカメも苦戦を免れないかに思われた。

しかし、アカメも一歩も引かずに対峙する。幼少期から、帝国の特務機関で暗殺者と

して特別教育、今日まで多くの存在を葬つて来た手練の殺し屋たる少女にとって、この程度の不利は何度も経験しており、今更慌てるには値しなかった。

相手が村雨の攻撃を封殺できると判つた時点で、アカメは直ちに攻撃方法を切り換える選択をした。

一斬必殺ができないのなら、卓抜した剣技を恃みに刻み切るしかない。

元より、強力な帝具を持っているからと言つて、アカメはそれのみを頼りに戦つていく訳ではない。

帝具を無力化できる存在が出現した場合に備え、常に次善の策は用意していた。

トビーが腕に仕込んだ刃で斬り掛かつて来るのに対し、アカメは村雨を擦り上げるようにして振るい對抗する。

ぶつかり合う刃が火花を散らす。

「貰つたッ!!」

そこで、トビーは勝負を決するべく、両腕、両足、計4か所から刃を出現させ、四刀流を持つてアカメに斬り掛かる。

對抗するように、アカメは下段から擦り上げるように、村雨を繰り出す。

次の瞬間、

トビーの左腕は、肩の付け根から斬り飛ばされた。

宙を舞う自身の腕を見て、一瞬、驚愕するトビー。

だが、すぐに体勢を立て直しにかかる。

斬られた肩口から、別の刃が出現。再びアカメに斬り掛かってくる。

トビーが繰り出す刃を、後退しつつ防ぐアカメ。

その一瞬の隙について、トビーは更に追撃を掛ける。

口の中から出現する銃口。これは、セリユーにも施されていた改造だ。

零距离から放たれた弾丸を、しかしアカメは超絶的な反応でスライドし、間一髪で回避してのける。

放たれた弾丸が長い黒髪を揺らす中、アカメは射撃によって生じた一瞬の隙を突いて斬り上げ、トビーの右腕を斬り飛ばした。

これで、両腕を失ったトビー。

だが、トビーは尚も諦めない。

今度は、斬られた右腕の傷口から銃口が出現する。

しかし、

トビーが照準を向けた時には既に、アカメは攻撃態勢を整えていた。

床に這う程に低い姿勢を取ったアカメは、村雨を抜き打つような格好をして、見上げるようにトビーを睨む。

「下、ですと!?!」

驚愕するトビー。

だが、反応は一步遅れる。

そして、それはアカメに対しては完全に致命傷だった。

横なぎに振るった斬撃が、トビーの右足を斬り飛ばす。

バランスを失い、倒れ掛かるトビー。

更に、そこへ、背後から槍が飛んできてトビーを背中から刺し貫いた。

槍の攻撃は、アカメによるものではない。

「おのれ………横槍とは無粋な………」

苛立たしげに振り返るトビー。

そこには、投擲の構えを取ったまま、不敵に笑うラバツクの姿がある。槍を飛ばした

のは、彼だった。

彼の足元には、トビーの側近2人が転がっているのが見える。

少し時間は掛かったが、ラバツクは側近2人に完勝していたのだ。

「アジトがヤベーつてのに、のんびり観戦しているつもりはねーよ」

不敵に言い放つラバツク。

これで2対1。しかもトビーは満身創痍の状態である。

勝敗は、決したも同然であった。

「……まあ、あのまま1対1で戦い続けていても、私の負けでしたがね……」  
諦念したように、トビーは呟く。

技量においてはほぼ互角だった。武装面では、むしろトビーの方がアカメよりも勝っていたと言える。

だが、戦闘は終始、アカメ優勢のまま推移した。

「教えてくださいアカメ。私があなたに劣っていたのは何ですか？」

「……攻撃はとても激しかったが、反面、隙は大きかったと思う」  
質問に対するアカメの答えに、トビーは納得したように笑みを浮かべる。

なるほど、それは確かに、と思った。

トビーは戦闘力を維持し続ける為に痛覚を除去されていたが、痛みを感じない故に、防御の必要性が薄くなってしまっていたのだ。

ダメージを受けないが故に、切り捨てた防御が、トビーの命を結果的に縮めた事になる。

戦闘能力を向上させる為に受けた手術が、却って自分の致命傷になるとは思っても見なかった。

次の瞬間、

アカメは村雨を横なぎに振るい、トビーの首を斬り飛ばした。

2

振るった剣が、音を立てて折れ飛ぶ。

その様に、タツミは思わず目を見張った。

対して、対峙するカクサンは会心の笑みを浮かべている。

インクルシオを纏う事で戦闘力を上げているタツミだが、剣の方は、強化されたカクサンの筋肉に当たった瞬間、耐え切れずにへし折られたのだ。

「肉を切らせてッ」

同時に、カクサンはエクスタスを取り出して振るう。

「骨を断アつ!!」

「クツ!?!」

挟み込まれる刃がタツミを襲う。

両側から迫る刃に対し、一瞬、身を翻すタツミ。



金属音と共に挟み込まれた瞬間、

刃は、タツミの右手首を掠め、僅かに血を滲ませた。

どつと、冷や汗がタツミを襲う。

インクルシオを纏っていなかったら、今の一撃で致命傷を喰らっていたかもしれない。  
い。

「む、良い反応だな。斬り落としてやろうと思ったのに………」

感心したように呟くカクサン。

その間に、タツミは着地して体勢を立て直す。

しかし、カクサンの防御力は予想以上だ。剣で斬っても斬れない相手では、外から殴っても効果は薄いだろう。

加えてエクスタスの攻撃力までも備えて居る為、厄介極まりなかった。タツミの攻め手は封殺されているに等しい。

「折角固い鎧を持っているのに可哀そうにな。こっちはこの世の全てを斬る帝具。防御力なんぞ、無視だ無視」

そう言つて、自慢げにエクスタスを掲げるカクサンに対し、タツミはギリツと歯を噛み鳴らす。

嘲笑うようなカクサンの姿を見るだけで、頭の中身が弾け飛びそうな怒りに捕らわれ

る。

「返せッ それはシエーレのだ!!」

突撃するタツミ。

シエーレの優しき。

シエーレの温もり。

シエーレの声。

シエーレの笑顔。

それらが脳裏によみがえる。

その全てを、目の前の男は土足で踏み躪っているのだ。

群がる戦闘員をなぎ倒し、カクサンに迫るタツミ。

だが、

「ああ？ 知れねえな、誰だよそれは？」

言い放つと同時に、タツミを殴り飛ばすカクサン。

膂力において劣るタツミは、その衝撃に耐えきれずに吹き飛ばされる。

「詰まらねえ事言っつてんじやねえよ。もつと楽しもうぜ、兄ちゃん」

「詰まらない……だど……」

血が、沸騰する気がした。

シエーレが殺されて以来、ナイトレイドの誰もが悲しみを乗り越えようと必死に戦ってきた。

タツミも、キリトも、ブライトも、マインも、ラバックも、ナジエンダも、レオーネも、シノンも、そしてアカメも。

皆、シエーレの死を無駄にしない為、彼女を忘れない為に。

だが今、カクサンは公然と、そんな皆の想いに唾を吐きかけて見せたのだ。

「ふ、ぎげんな………」

許せなかった。

目の前の男が。

まるでオモチャのように、シエーレの帝具を弄ぶカクサンが。

次の瞬間、

タツミの手に、一振りの槍が出現する。

幅広の刀身を持つ大槍。

インクルシオの副武装「ノインテーター」である。

ブライトも常用していたこの槍を、タツミもまた、この土壇場で使いこなせるようになったのだ。

あるいは、タツミの熱い魂にインクルシオが応えたのかもしれない。

「行くぞ!!」

地を蹴って疾走するタツミ。

その速度は先程よりも明らかな上昇を見せ、殆ど疾風が駆け抜けているようにさえ見える。

たなびくマントを従え、カクサンに迫るタツミ。

間合いに入ると同時に、ノインテーターを繰り出す。

「うおッ!?!」

その素早い動きを前に、とつさに防御に回るカクサン。

エクスタスの刃が、ノインテーターを弾く。

だが、タツミは動きを止めずに、更なる攻撃へと移る。

跳躍と同時にノインテーターを振りかぶると、勢いをつけて振り下ろす。

対して、カクサンもまた、エクスタスを振り上げるような形で迎え撃つ。

両者の刃が激突して火花を散らす中、タツミは空中で体勢を入れ替え、カクサンを飛び越える形で、その背後に着地する。

「チッ、こいつ、ちよこまかと動きやがって!!」

振り返ろうとするカクサン。

だが、動きはタツミの方が速い。

「遅エ!!」

横なぎに振るわれるノインテーター。

その一閃が、逆袈裟にカクサンを斬り裂く。

「グツ!?!」

巨体から血飛沫が上がる。

浅い傷だったが、自身の強固な筋肉が斬り裂かれたカクサンは、思わずたたらを踏むようにして後退する。

「やってくれたな、この野郎……」

絞り出すようなカクサンの低い声。

どうやら、無敵と信じていた自分の防御力を斬り裂かれ、頭に血が上っているらしい。

それに対し、タツミは油断なくノインテーターを構える。

状況は互角と言うべきだったが、尚も攻撃力と防御力に関しては、エクスタスを持つカクサンの方が勝っている。

その状況を、タツミはスピードで翻弄する事で拮抗させているのだ。

決め手に欠けるタツミの苦戦は、火を見るよりも明らかだった。

その時、

ザッ

軽い足音が聞こえ、タツミとカクサンは同時に振り返る。

そこには、重砲撃仕様に換装したパンプキンを携えたマインが、鋭い眼つきでカクサンを見据えて立っていた。

やはり就寝中だったのか、リボンをあしらった可愛らしい寝間着姿をしており、普段はツインテールにしている長い髪も、今はストレートに下ろしている。

「いつまでチンタラやってるのよ。こっちはだいたい片付いたわよ」

言ってから、

マインは思わず言葉を詰まらせた。

彼女も、カクサンの手の中にあるエクスタスの存在に気付いたのだ。

「チツ 雑魚は足止めもできなかったのか。合流されてしまったじゃないか」

そう言って、カクサンは苛立たしげにため息を吐く。

雑兵を大量投入する事でナイトレイド達を分断して、その隙にアジト内部へ侵入したトビー、カクサン、クイント、トローマの精鋭4人が各個撃破する、と言うのスタイリッシュの立てた作戦だった。

だが、その作戦は予想を超えたナイトレイド側の抵抗によって、頓挫しつつあった。

そもそも、殺し屋の戦いは単独、もしくは少数の行動が基本である。たとえ分断されたとしても、ナイトレイド達は独自に戦う術を幾らでも持っていた。

対して、

「マインはそんなカクサンの言葉に耳を貸さず、静かにパンピングを持ち上げて構える。」

「……さつきと片付けるわよ。敵がエクスタスを持っているってだけで腹が立つ」  
静かな怒りを燃やすマイン。

対して、カクサンは嘲笑を向ける。

「『さつきと片付ける』だあ？ おいおい、今の状況考えて物言えよ。アジトが発見されて敵に突入されて総攻撃喰らってんだよ!!」

「だからこそよ」

嘲るカクサンに対し、あくまでも冷静な口調を崩さないマイン。

その事が、カクサンの痛に触れる。

「余裕ぶってんじゃねえよ!!」

エクスタスを振り翳して突進するカクサン。

対抗するように、タツミもノインテーターを構えて前へ出る。

「やらせねエ!!」

横なぎに振るわれる槍の一撃。

それに対し、カクサンは跳躍して回避する。

「お前の相手は後だッ　まずはそっちの女から……」

言いかけて、カクサンは言葉を止めた。

視線の先には、パンプキンを構えたマインの姿がある。

だが、その銃口に込められたエネルギー量は、半端な物ではない。

もはや銃と言うより、大砲と言った感じだ。

出現する、極大のエネルギー砲。

その大きさが、マインの怒りを如実に表してる。

「撃て、マイン!!」

「判ってる!!」

引き絞られるトリガー。

放たれるエネルギー弾によって、周囲は昼間のように照らし出される。

まるで、太陽が地上に出現したかのような光景だ。

「な、ちよつ、デカっ!」

驚愕するカクサン。

だが、もはやどうしようもなかった。

放たれた砲撃はカクサンを飲み込んで、一瞬にして分子レベルまで解体していく。

断末魔の悲鳴を上げるカクサン。



やがて、その巨体は塵も残さず消滅する。

「残ったのは、最高強度を誇るレアメタル製の帝具《万物両断エクスタス》のみだった。能力を甘く見たわね。ピンチの時ほどアタシは強くなるのよ」

静かな声音で告げると、

マインは地面に転がったエクスタスに近付き、そつと手を伸ばす。

その目に浮かぶ涙。

見れば、傍らのタツミも、天を仰いで涙を堪えているのが判る。

「……………おかえり、シエーレ」

エクスタスを優しく抱きしめるマイン。

長い紆余曲折を経て、

今ようやく、シエーレの魂は、愛する仲間達の元へと帰って来たのだった。

### 3

戦況は、徐々にだがナイトレイド側が盛り返しつつあった。

各メンバーの奮闘により、チーム・スタイリツシュの戦闘員達は大半が喪失し、戦線維持が困難となりつつあった。

その事は、《耳》を通じて、スタイリツシュ本人にももたらされる。

「カクサンがやられました。トビーも先程……既に歩兵も大半がやられています」「あらやだ。流石に困ったわね」

ここまで抵抗されるのは、流石のスタイリツシュとしても予想外だった。

彼の計画では、この時点ですでにナイトレイドの半分は制圧している筈だったのだ。

しかし今だに、最初のトロローマが上げた戦果以外、芳しい報告は上げられてこなかった。

もつとも、兵隊がいくら死のうと、スタイリツシュにとつてはどうでも良い事だった。

どうせこいつ等は皆、元々は罪人として処刑されるはずの所を、減刑を条件にスタイリツシュの研究に協力する事を約束した連中である。

勿論、スタイリツシュには約束を守るつもりは毛頭なく、死ぬまで使い潰す気であるのだ。

どうせ、代わりは掃いて捨てるほどいる。ここでナイトレイド達と、その帝具を手に入れる事ができれば、戦闘員全員を使い潰したとしてもお釣りがくるくらいだった。

しかし、それもナイトレイドを捕えない事には始まらなかった。

「クイントの方はどうなっているかしら？」

「現在、敵メンバーの1人と交戦中。状況は優勢の模様です」

《耳》からの報告に、スタイリツシユは考え込む。

クイントが生き残っているのは予想通りだが、それでも状況はこちらにとつて不利である。

このまま撤退すれば、収支は完全に赤字だ。どうかして、逆転の一手を刻まない事には。

「……奥の手の準備を、しておく必要があるそうね」

スタイリツシユは、誰にも聞こえない声で、そう呟いた。

数度にわたつて繰り出す剣戟は、全てクイントの体によつて防がれる。

そして次の瞬間には、反撃の為に斬り込まれる。

揃えられた指の爪が、刃のように輝き、キリトへと襲い掛かってくる。

とつさに、横跳びに回避するキリト。

次の瞬間、

クイントの指はキリトの背後にあつた壁に突き刺さり、これを斬り裂く。

「無駄ですよッ!!」

クイントは口元に笑みを浮かべ、後退するキリトに追撃に移る。

対抗するように足を止め、剣を振り翳すキリト。

真つ向から振り下ろされるエリュシデータに対し、クイントも自らの腕を交差させて防御の姿勢を取る。

次の瞬間、

ガキーンッ

あり得ない音と共に、エリュシデータの刃はクイントの腕に防ぎ止められる。

「ッ またか」

驚愕するキリトに対し、クイントはニヤリと会心の笑みを浮かべる。

キリトの攻撃は、全てクイントの体を斬り裂く事無く抑えられ、次の瞬間には反撃を喰らう。

先程から、この調子の繰り返しだった。

見ればクイントの腕には、何か鱗のような物がびっしりと張り付き、それが繰り返した剣を、悉く防ぎ止めているのが判った。

「人体改造かッ!?!」

その正体に気付いたキリトが呻き声を発する。

帝具の攻撃すら防ぎ止める程の人体改造を行うとは、流石に予想外過ぎる事態である。いかにすれば、そのような事が可能になるのか、キリトには皆目見当もつかなかった。

対して、クイントは更なる攻勢をかけるべく前へと出る。

「その通り!!」

連続して繰り出される手刀の攻撃を、キリトはエリュシデータで防ぎながら後退しつつ、体勢を整えようとす。

そうはさせじと、クイントも追いつがる。

その体には、いたるところに強靱な鱗が張り巡らせ、あらゆる攻撃を完全にストップすると同時に、強化され、刃のように鋭い爪を武器に攻撃を繰り出す。

「カクサンの防御力と、トビーの機動力を併せ持つ存在。言わば、将棋には無い駒『クイン』に相当する存在、それがこの私、クイントだ!!」

横なぎに繰り出されるクイントの攻撃を、キリトはとっさに屈みこむ事で回避。

同時に、間髪入れずにエリュシデータを斬り上げるが、その時には既にクイントは宙返りをするような軌跡でキリトを飛び越え、背後に着地していた。

単純な防御力だけではない。攻撃力においても卓抜した物を持っていた。

「故に、私はチーム・スタイリツシュの『切り札』足り得るのだよ!!」

連続して繰り出されるクイントの攻撃を、辛うじて後退する事で回避するキリト。

同時に、距離を置いて体勢を立て直しを図る。

「キリト!!」

シエキナーで群がってくる敵兵を排除していたシノンが声を掛けてくる。

彼女の放つ矢によって、相当数の敵が葬られているが、尚も複数の敵がと巻に包围している状況であり、シノンがキリトの援護に入るのは難しい。

そんなシノンの目から見ても、今のキリトの苦戦は火を見るよりも明らかだった。

「心配すんな、シノン」

キリトは流れ出た汗を、コートの袖でグイツと拭うと、再びエリユシデータの切っ先をクイントへ向ける。

そんなキリトを、クイントは勝ち誇るように見据える。

「随分とがんばるね、君。けど、強がりはやめたまえよ」

言いながら、両手を構えて攻撃態勢を取る。

「君の力は私に届かない。それは一連の戦闘で、既に判り切っている筈だ。それでも尚、抵抗しようとするのは、等しく愚か者の行為だ」

「まあ、仲間内じゃ、結構バカ呼ばわりされる事が多いのは確かだな。不本意だけどな」  
嘯くキリト。

「来いよ。限界をぶち切る力って奴を見せてやる」

挑発するように言い放つキリトに対し、クイントは沈黙しながら睨み据える。気に入らなかつた。

状況は間違いない。クイントが優勢であると言うのに、尚も強気な態度を崩さないキリトの存在が苛立たしかつた。

「良いでしょう……」

スツと体勢を低くして、突撃に備えるクイント。

「ならば、さっさと死ぬが良い!!」

次の瞬間、床を蹴って一気に突撃する。

キリトを正面に見据えた状態で、最高速度で迫るクイント。

キリトがどんな攻撃を繰り出して来たとしても問題は無い。自分の防御力を剣で貫く事はできないのだから。

そうして間合いに入った瞬間、切り刻んでやる。

頭の中で思い描いた戦術を実行するクイント。

両手の爪が怪しく光り、一気に繰り出される。

対して、

キリトはエリユシデータの切っ先を、突撃してくるクイントに向けたまま、

自身も前へと出た。

繰り出される高速突き。

その数、5連撃。

鋭い切っ先が、次々とクイントの体に突き刺さる。

「なッ!?!」

思わず、驚愕して動きを止めるクイント。

強靱な装甲は、キリトが放つ全ての攻撃を防ぎ止め、ダメージは入らない。

だがキリトの強烈な剣戟を前に、クイントの突撃の勢いは完全に削がれてしまう。

そして、

キリトの攻撃は、そこで終わらない。

「ハアアアアアアアアアアアア!!」

大上段に振りかぶったエリユシデーダが、体勢を崩しているクイントへ振り下ろされる。

縦に振り抜かれる刃。

その一撃は、クイントの防御装甲に当たって火花を散らす。

流石はスタイリッシュ自慢の切り札と言うべきか、この段になって尚、キリトの攻撃を防ぎ止めている。



だが、キリトは尚も動きを止めない。  
振り下ろした剣を、再び勢いよく振り上げる。

「ウオツ!?!」

その刃をまともに受け、今度こそ完全にバランスを崩すクイント。

そこへ、

トドメとも言うべき、再度の上段斬りが襲い掛かる。

一挙に放たれた、高速8連撃。

その攻撃を前に、度重なるダメージで歪みを来していたクイントの装甲は耐えられなかった。

今度こそ、

キリトの剣はクイントの体を完全にとらえ、真っ向から斬り裂く。

「ハウリング・オクターブ」

キリトが低い眩きをした瞬間、

クイントは身体から鮮血を吹き出し、前のめりに倒れ込んだ。

剣を一振りして、鞘へと戻すキリト。

そこへ、ひたひたと背後から足音が近付いて来るのが聞こえた。

「片付いたみたいね」

自身もシエキナーで戦闘員と戦っていたシノンが近付いて来る。

既に、この辺に敵はシノンによって一掃されている。残りがどれくらいかは判らないが、かなりの数を減らす事に成功したのは間違いない。

「お疲れシノン。じゃあ、他の奴等を掩護に……」

言いかけて、言葉を止めるキリト。

そんなキリトに、シノンは怪訝な眼差しを向ける。

「どうかした？」

「い、いや……」

なぜか、顔を紅くして言葉を詰まらせるキリト。

対して、シノンはますます不信感を募らせる。

やがて、意を決してキリトは口を開いた。

「その……シノン、その格好……」

言われて、シノンは改めて自分の恰好に目をやる。

寝ていたところを襲撃されたせいで、シノンは起きた時のまま、ずっと戦っていた。

しかし、今日は泊まる予定が無かったため、寝間着等の準備はしていなかった。そこで、下着の上からYシャツを羽織るだけという、ラフな格好で寝ていたのだ。

胸元は上3つのボタンが外され、膨らんだ胸が僅かに見えている。寝る時に苦しいか

らと、ブラは外されているようだ。

そして、裾からはパステルブルーのパンツと、眩しいくらい白く、スラリと伸びた足が惜しげも無く晒されている。

少女の艶姿は、殺伐とした戦場にあって可憐に咲き誇っている。

次の瞬間、

顔を真っ赤にしたシノンは、迷う事無く突撃すると、キリトに殴り掛かる。

グーで。

「ドワアッ!?!」

直撃を喰らって吹き飛ぶキリト。

何とも、締まらない2人だった。

## 第21話 「アジト攻防戦」

終わり

## 第22話「狂科学の申し子」

1

トビー、カクサン、クイントが立て続けに討たれた事で、チーム・スタイリツシュの戦線はほぼ崩壊状態となり、戦いの流れは、完全にナイトレイド側に傾きつつあった。

戦闘員はまだある程度残っているが、主力はほぼ全滅し、残存兵力が減殺した雑兵のみでは、一騎当千のナイトレイド相手に、戦線の維持すら難しい事は火を見るよりも明らかである。

その為、強敵たちを排除したナイトレイド達が反攻に転じ、残った戦闘員を次々と排除していった。

後はスタイリツシュ本人を捕捉して倒す事ができれば、戦いは終わりである

そんな時だった。

はるか上空から、重々しい音が響き渡ってくるのに気付いた一同は、敵味方の区別なく、一斉に振り仰ぐ。

程無く、視界の彼方で、空を飛ぶ三角形の生物が見えてきた。

それは、南方に生息する飛行型特級危険種のエアマンタである。生息数はが少ないのか、あまり見かける事は無いのだが、こうしてごく少数ながら飼いならして乗り物として重宝している人間もいるらしい。

「何だあれ？ 新手か？」

「ちよつと待って」

それを仰いでいたタツミとマインの目にも、エアマンタの姿は目撃されていた。

マインはパンプキンに付属している照準用スコープを取り出して左目に装着。もう一度確認の為に振り仰ぐ。

その視界の中で、エアマンタの背に乗る4人の人影が確認できた。

うち、3人はフードを目深にかぶって居る為、確認する事はできない。

だが、最後の一人には見覚えがあった。

鋭い眼光に、右目には眼帯をした精悍な女性。右腕には無骨な義手が装着されている。

その姿を見て、マインは歓喜に顔を輝かせた。

「ボスだわ!!」

それは、南方の革命軍本部に赴いていたナイトレイドのリーダー、ナジエンダだった。奪った帝具の輸送と、新戦力の補充を目的に革命軍本部へ行っていたナジエンダだったが、アジトが襲撃されたこのタイミングで戻って来たのだ。

「おお!! いいタイミング!! そしてズリイ!!」

拳を掲げて喝采を上げるタツミ。

そのタツミに、マインは不審な視線で見る。

「何でよ?」

「あんな格好良い物に乗って登場だぜ。俺も乗ってえ!!」

「はあ? 前から思ってたけど、アンタのセンス、ちよつとおかしいわよ」

歓声を上げるタツミを見ながら、呆れた様子を見せるマイン。

どうやら、少年の感覚は少女には理解しがたい物があるらしかった。

だが、

そんなマインを、木陰から怪しく見つめる影があった。

トローマである。

レオーネを倒した後、潜伏していたトローマは、他のメンバーを襲撃するタイミング

を計ってアジト内部を徘徊していたのだ。

そして、視界の先には、無防備に背中を晒すマインの姿があった。

笑みを浮かべるトローマ。

マインは背中を向け、トローマの存在には気が付いていない。襲撃するには、絶好のタイミングである。

「けひッ 可愛い可愛いお嬢さん。背中がガラ空きだぜ」

ナイフを手に木陰を飛び出すトローマ。その手にはナイフが握られている。

その切っ先がマインへと迫り、

次の瞬間、

横合いから砲弾のように飛び出してきたレオーネが、容赦なくトローマを蹴り飛ばした。

「さつきはよくもやってくれたな、この野郎!!」

既にライオネルによって変身し、身体能力強化したレオーネの攻撃力は強烈である。並みの人間なら一撃で即し決定である。

トローマが死ななかつたのは、彼がスタイリッシュによって、肉体を強化されているからである。

しかし、その改造は彼の命を救う事は無く、却って地獄へと引きずり込んで行く。

「グフオオオオオオ!!」

吹き飛ばされ、無様に地面を転がるトローマ。

その首をレオーネが掴み上げ、容赦なく締め上げる。

「ギ、ギギ………苦しい………助けて………」

首の骨を折る勢いで締め上げるレオーネ。

凶暴な牙を剥いた獅子の前に、桂馬如きが敵う道理は無かった。

「私はなア………奇襲するのは好きだけど、されるのは大ツツツツ嫌いなんだよ!! 丈夫に強化されてるっぽいけど、その分楽に死ねるとは思うなよ!!」

スタイリツシユ顔負けの外道セリフを吐くレオーネに、見ていたタツミとマインは揃ってドン引きする。

だが、

トローマは尚も反撃に出た。

「けひっ」

苦しそうに血を吐きながらも、笑みを浮かべるトローマ。

足の爪先から、仕込みナイフが出現。そのままレオーネに蹴り掛かる。

しかし次の瞬間、

向かってきた刃を、レオーネはとんでもない方法で受け止めた。



何と、トローマのナイフを、レオーネは歯で噛んで受け止めたのだ。

「いっつ……さつきもこうやって……」

驚愕に、目を見開くトローマ。

それが、彼の最後の言葉となった。

レオーネはトローマの細い体を振り回すと、力づくで地面に叩き付ける。

地面が大きく陥没するほどの衝撃が、余すところなく桂馬の体を粉碎する。

トローマは、今度こそ絶命した。

「ふう、奇襲でもらった一撃が効いた効いた」

言っただけでレオーネは、つい相手を一撃で倒してしまった事に気付いて舌打ちした。

翩り殺しにする心算だったのに、これでは失敗である。

「ね、姐さん、今の、大丈夫なの？」

様子を見ていたタツミが、恐る恐ると言った感じに尋ねてみる。

他の人間がやったら確実に致命傷を喰らっていた一撃だが、当のレオーネは平然とした物である。

対して、レオーネは不敵な笑みを見せた。

「変身した私は治癒力も高まっているから、これくらいなら」

ライオネルの能力により強化されるのは、身体能力だけではなく、こうした恩恵も受

けられるのだ。

復帰するまでに少々時間がかかったが、今のレオーネは万全の状態で戦線復帰を果たしていた。

そこへ、複数の足音が聞こえてきた。

「皆、無事か!!」

トビーを倒したアカメとラバックが歩いて来る。

その少し後からは、クイントを仕留めたキリトとシノンの姿もあった。

これで、全員の無事が確認されたわけである。

だが、

「あれ、キリト、お前その顔、どうした？ やられたのか？」

「いや、まあ、ちよつと、な」

タツミの質問に、言葉を濁すキリト。その頬には、明らかに打撲痕と思われる腫れがあった。

しかしまさか、シノンの恥ずかしい恰好を見てしまい、報復としてぶん殴られた、とは言えなかった。

そのシノンと言えば、今度はちゃんと制服を着こんで現れていた。

「そうか、お前が負傷するほどの相手となると、かなりの強敵だったんだな」

「お、おう。けど、ちゃんと倒しといたから安心しろ」

そう言つて、ごまかすように苦笑するキリト。

その傍らでは、シノンが不機嫌そうにそっぽを向いていた。

その時だった。

周囲に一齐に気配が浮かび、同時に現れた戦闘員達によつて、ナイトレイド達は包囲されてしまう。

緊張が高まる中、それぞれが帝具を構えて円陣を組む。

「まだ、残りがいやがったか……」

「けど、こいつらで多分全部だ。残りの糸に反応は無い」

ラバックがクローステールの様子を確かめながら言う。

主だった戦闘員は全滅。雑兵も殆どが撃退され、敵も壊滅状態と言う事だ。

あと一息で終わる。

そう思った時だった。

突如、タツミの傍らに立っていたアカメが、急に糸が切れたように、その場に倒れた。

「アカメ、どうした!?!」

慌てて声を掛けるタツミ。

しかし、倒れたのは彼女だけではない。

ラバックが、シノンが、マインが、レオーネが、キリトまでが、タツミの見ている前で、次々と倒れてしまった。

「み、みんな、いったいどうしたんだよ!？」

無事に立っていられているのはタツミだけ。これが異常事態である事は、火を見るよりも明らかである。

「か、体が、急に………」

しびれた体で、絞り出すように呟くマイン。

他の皆も同様だった。

急に体がしびれ、全く動かなくなってしまったのだ。

「この感じ、船の時と似た、まさか、また催眠か?」

龍船での戦いを経験しているタツミは、真っ先に同様の可能性を疑った。

あの時は三獣士の一人ニヤウが、帝具の力を使って広域催眠を仕掛けてきた。その時と同じではないかと考えたのだ。

しかし、辛うじて意識を保ちながら、アカメは首を振る。

「いや、違う……これは……毒か………」

アカメの予想は正しかった。

戦闘員の大半を撃破され、計画がとん挫しそうになったスタイリツシュは、封印していた自身の切り札を開封したのだ。

散布された毒は、スタイリツシュの調査した中でも最凶の逸品である。

本来ならばスタイリツシュであつても使用を躊躇う程に巨力な代物なのだが、殺し屋であるなら、毒に対する態勢も強いであろう事を考慮した結果、使用に踏み切ったのだ。勿論、予め切り札の使用も考慮に入れており、自分達は風上に陣取っておく事も忘れなかった。

「インクルシオ以外には、靦面に効いています」

「フフ、予定通りに。うまくいったわ。インクルシオの鎧には効果が薄いみたいだけど、それも時間の問題よ」

《目》からの報告を受け、スタイリツシュは満足そうに笑う。

押し返された時にはどうなるかと思つたが、これで帳尻は合うだろう。

応援に来たナジエンダ達も、毒の効果があるうちは降りて来る事はできない。彼女達は、自分の仲間達が捕えられるのを、上空でただ手をこまねいている事しかできないだろう。

勿論、言うまでも無く、スタイリツシュと強化兵たち全員には、対応した解毒剤を投

与済み。体内に取り込んでも、何も問題は無かった。

「本当は活きの良い実験体ナイトレイドに、こんな新薬投入したくなかつたんだけどね。これ自体、つくるのにすごい手間がかかる貴重品だし。けど仕方ないわッ 味方がこんなにやられてるんですもの!!」

「さすがスタイリツシユ様!!」

「お優しい!!」

「しかも無臭で、私にも優しい毒です!!」

わざとらしく芝居じみた嘘泣きをして見せるスタイリツシユを、揃ってよいしよする  
《目》《耳》《鼻》の3人。

彼等の中では、既に戦いは終わったも同然のように扱われていた。

ノインターターを構え、タツミはじりじりと近づいてくる戦闘員達を牽制する。

既にまともに動けるのはタツミー人だけ。状況は完全に追い詰められつつある。

毒に多少の耐性があるらしいアカメ、帝具のアシストで無理やり動く事ができるキルト、そして回復力の高いレオーネが、辛うじて立ち上がり、応戦の構えを見せているが、動きはどう見ても鈍い。

シノンとラバック、マインに至っては、立ち上がる事すらできないでいる有様だ。やはり、俺がみんなを守らないと。

そう思つて前に出ようとするタツミ。

その時だった。

突然、天空から衝撃が襲い掛かつて来た。

吹き飛ばされ、宙を舞う戦闘員達。

地を割る程の一撃は、包囲網を一瞬にして突き崩す。

「な、何だ!？」

誰もが驚愕する中、

ゆつくりと、もうもうと立ち込める砂煙の中で、

ゆらりと、人影が立ち上がる。

それは、長身の男性だった。

精悍な顔つきをし、鋭い眼光は全てを射抜くように放たれている。

頑健な体はまるで百鍊の武将のそれであり、手には先端に分銅のような重しを備えた

棍が握られている。

だが、ただの人間ではない事は、見ればすぐに判った。

頭の両脇にから、まるで猛牛のような角が突き出している。その事が、精悍な男の外

見を、よりシャープに引き立てていた。

「……………味方、だよな？」

レオーネが男に視線を送りながら、半信半疑に呟く。

目の前で、群がる敵を蹴散らしたのだから、一応は味方と判断する事ができるだろうが、しかし、相手の正体がわからない以上、油断もできなかった。

同様に皆が疑念に満ちた視線を男に向ける中、その様子をエアマンタの上から見ているナジエンダは冷静に状況を見据えていた。

「スサノオはともかく、今、私やお前達が下りるのはやばそうだ。まずは、ここから指示を出す」

「了解」

「判りました、ナジエンダさん」

背後にいる残り2人の返事を聞きながら、ナジエンダは再び足元に目をやった。生身の自分達が下りる事はできないが、彼1人だけならば何も問題は無かった。

サツと腕を振るうナジエンダ。

「さあ、目の前の敵を駆逐しろ、スサノオ!!」

そのナジエンダの命令に対し、

「判った」



スサノオと呼ばれた男は、巖かな声で返事を返す。  
次の瞬間、

スサノオが手にした棍の先端部分から、スクリユー状の刃が分銅を取り囲むように出現する。

同時に、突撃するスサノオ。

棍を強烈に回転させ、容赦なく振りまわす。

たちまち展開される、圧倒的な光景。

刃に接触した戦闘員達は、たちまち粉碎され、斬り裂かれていく。

それは、台風の如き様相だった。

戦闘員達は、誰一人としてスサノオに触れる事すら敵わない。全て、あつとうてきな力の前に叩き潰されていく。

押しつぶそうと群がってくる一団のあるが、それらも全て、スサノオに返り討ちにされ吹き飛ばされた。

まるで勝負にならない。

生き残っていた戦闘員全てが、スサノオの足元で軀と化するのに、それから一分も掛からなかった。

これには、彼方から戦況を見守っていたスタイリッシュ達も驚愕を隠せなかった。

「ど、どういふ事よ、これは……」

スタイリツシユが、呆然と眩きを漏らす。

生物である以上、毒が全く効かないと言う事はあり得ない。

だが現実には、スサノオは毒ガスが充満している筈の戦場で、平然と戦い続けていた。たつた一人を相手に、蹂躪し尽くされたチーム・スタイリツシユ。

その時だった。

スサノオを取り囲むように散らばっていた遺体が、一斉に内部から膨れ上がるようにして爆発する。

数十体もの遺体が一斉に爆発する様は強烈であり、辺り一帯が爆炎に包まれた。

この時、スサノオに毒が効かないと判断したスタイリツシユが、遺体の処分がてら、戦闘員達を自爆させたのである。

こんな事もあるうかと、予め戦闘員達の体には爆薬が仕掛けられていたのだ。

衝撃と爆風が吹きすさび、辺り一面の視界が覆い尽くされる。

巻き上がる煙に覆い尽くされる中、徐々に視界が晴れていく。

そして全ての煙が取り払われた時、

そこには立ち尽くすスサノオの無惨な姿があった。

爆風の衝撃によって半身は吹き飛ばされ、左腕は失われている。明らかに致命傷であ

る。

だが次の瞬間、

まるで時間が巻き戻るようにして、スサノオの体は元に戻り始めた。それどころか、吹き飛ばされた衣服まで元通りになる。

「これは……まさか……」

倒れたままのメインが、呻くように呟く。

「生物型……いや、人間型の帝具、か？」

キリトもまた、驚きに満ちた表情で言った。

《電光石火スサノオ》

キリトの言ううたとおり人間に近い形をした生物型帝具であり、高い戦闘能力を備え、元は要人警護用に開発された帝具である。

生物型帝具である以上、胸にある核を破棄されない限り、何度でも復活する事ができるのだ。そして当然、毒などの特殊な攻撃も無効化できると、

スサノオは、倒れたままのメインにジッと目を向ける。

「な、何よっ！」

たじろくメインに、大股で近付くスサノオ。

そしてしゃがみこむと、

慣れた手つきで、彼女の髪をセットし始めた。

「……………よしっ」

「な、何が？」

ピシッとセットされた髪で、マインは状況が呑み込めないまま啞然とするしかなかった。

その頃、

上空から戦況を見詰めていたナジエンダは、次の一手を刻もうとしていた。

これ程の大規模侵攻だ。必ずどこか近場に司令部があり、状況を見守っている存在がいるはず。

毒が散布された事と風向き、そして比較的高所で、状況把握がしやすい場所を重点的に索敵に掛ける。

すると程無く、アジトから少し離れた崖の上に、数人の人影が立っているのが確認できた。

そのうち1人は、帝国中央開発部に所属していたドクター・スタイリツシュである事が判る。

「……………やはりな」

ナジエンダは確信を込めて頷く。

アジトの場所を知られ、襲撃を受けた以上、1人として生かして帰すつもりは無かった。

「スサノオ、南西の森の中に敵が潜んでるぞ!! 逃さず潰せ!!」

「判った!!」

ナジエンダの指示を受け、地を蹴るスサノオ。

その頃、《耳》の報告によつて自分達の所在がばれたスタイリツシユ達も、撤退に掛かつていた。

戦闘員は精鋭、雑兵共に全滅。残っているのは斥候用の3人のみ。これでは増援を得て、完全に体勢を立て直したナイトレイド達に勝てる訳がない。

ここは一旦後退してイエーガーズと合流、他日改めて襲撃を仕掛けるべきだったが、

そんな彼等の頭上、低空スレスレを、ナジエンダ達の乗ったエアマンタが飛び去つて行つた。

その衝撃で、吹き飛ばされるスタイリツシユ達。

「あいつ……意地でも逃がさないつて訳ね……」

ナジエンダの執念を感じ取り、スタイリツシユは戦慄する。

状況はいよいよ、彼等にとって手詰まりになりつつあった。

そこへ現れるスサノオ。ナジエンダがスタイリツシユ達の動きを封じている隙に追いついてきたのだ。

これで、王手である。

「ご安心くださいスタイリツシユ様!!」

「我等は将棋で言えば金や銀。必ずやお守りします!!」

そう言うと、《耳》《目》《鼻》が前に出て、スサノオの前に立ちはだかろうとする。

だが、スタイリツシユは樂觀視できなかつた。

こいつらは所詮、偵察用であつて、戦闘力は皆無に近い。戦闘員数十名を1人でなぎ倒したスサノオの相手は不可能。

完全に手詰まりだつた。

仕方がない。

スタイリツシユは腹の内です苦笑すると、白衣の内ポケットに手を入れる。

「こうなつたらもう!! 腹を括ってエ!!」

スタイリツシユは懐から注射器を取り出すと、迷う事無く自分の腕に突き刺す。

「切り札その2、危険種イツパアアツ!! これしかないようね!!」

次の瞬間、

スタイリツシユの体が大きく膨れ上がる。

「来た来た来たアアア!! これぞ究極のスタイリツシユ!!」

着ていた白衣が破け、風船のように一気に巨大化して行く。

やがて腕が伸び、足が生え、巨大な頭部が出現すると、更に体は巨大化していく。無表情の仮面を張り付けたようなその姿は、不気味の一言に尽きる。

身体の所々に機械じみたパーツが見えている事から考えて、単純な生物とは一線を画しているのは間違いない。

「私自らが危険種となる事でエ お前ら全員を吹き飛ばす!!」

叫びながら、さらに膨れ上がって行くスタイリツシユ。

「おお、美しい!!」

「さすがスタイリツシユ様!!」

賞賛する《鼻》と《目》。

彼等にとつては、スタイリツシユのやる事ならば何でも良いらしい。

だが次の瞬間、スタイリツシユを取り込んだ危険種は、巨大な腕で2人を掴み、そのまま口へと持っていく。

驚く間もなく、大きく持ち上げられる《目》と《鼻》。その視界の中で、巨大化したスタイリツシユが迫ってくる。

「あなた達はあたしの貴重な栄養よ!! 一つになりましょう!!」

そう言うと、そのまま《目》と《鼻》を口の中に放り込み、咀嚼して飲み込んでしま  
う。

更にスタイリツシユは、逃げようとした《耳》にも掴み掛り、同様に丸呑みにしてし  
まった。

「良いわア!! 栄養となる肉を豪快に食してレベルアップ!!」

更に、巨大化の速度が速まるスタイリツシユ。

その姿は既に、全高で50メートル以上。重量にすれば数100トンに達しようかと  
いう巨体にまで膨れ上がっていた。

そして、額の中央付近からは、スタイリツシユ本人の体が飛び出ている。

「でも、まだまだ『アレ』には届きそうも無い……更に高みに立つ為にも、もつ  
と大きくならなくちゃあ」

言いながらスタイリツシユは、足元のスサノオに掴み掛る。

「さあ、アンタも頂くわア!!」

伸ばされる、巨大な腕。

対して、とっさに回避して、反撃に転じるスサノオ。

しかし、振り翳された棍は、危険種の硬い装甲に当たって弾かれる。



「硬いな……」

眩いた瞬間、危険種の攻撃をまろにくらい吹き飛ばされるスサノオ。

直前で防御に成功した為にダメージは少ないが、それでもスサノオの攻撃すら決定打足りえないのは事実である。

一方、

戦いの様子は、離れた場所で見守っていたキリト達からも見る事が出来た。

「何なの……あれ……」

「気持ち悪い……」

危険種と化したスタイリツシュを見て、シノンとマインが生理的嫌悪感を顕にする。

確かに、今のスタイリツシュの姿は、どのような危険種よりもおぞましい物がある。

スサノオが奮戦して食い止めてはいるが、彼が敗れば、その矛先がこちらに向くのは間違いなかった。

「……やるしか、無いな」

決意を込めて立ち上がるキリト。

同時に、自身の中で意識を集中させ、眠っている存在を呼び起こす。

程無く、

キリトの背中に、白い柄の流麗な片手剣が姿を現した。

「キリト!!」

背後から声を掛けるシノン。

キリトもスタイリッシュの毒を受けており、万全の状態とは言い難い。そんな彼を、シノンは心配そうに見つめている。

対して、

キリトは優しく笑い掛ける。

「大丈夫だよ、シノン」

言ってから、キリトは彼方で戦い続ける、スサノオとスタイリッシュに目をやる。

「俺はあの人の援護に行く。戦闘に復帰できそうな奴は続いてくれ!!」

言い放つと同時に、キリトは地を蹴って大きく跳躍する。

これが、最後の戦いだっただ。

スタイリッシュからの攻撃を回避しながら、スサノオは隙を見付けて反撃に転じる。振りかざされる棍の一撃。

しかし、やはり結果は同じである。

並みの人間なら一撃で粉砕できるはずのスサノオの攻撃は、スタイリツシユにダメージを与える事すらできずに弾かれる。

「ハツハツハツ どうしたのよ生物帝具!! もっと攻めてきてもいいのよ!!」

挑発するように言いながら、スサノオに掴み掛ろうとするスタイリツシユ。

次の瞬間、

高速で飛来した黒と白の閃光が、スタイリツシユを刺し貫いた。

右手にエリュシデータ、左手にダークリパルサーを構えたキリトが、危険種スタイリツシユの巨体へと斬り掛かる。

突撃の勢いそのままに、突き込まれる二振りの刃。

しかし、

「クッ!?!」

両腕に感じる痺れに、キリトは思わず舌打ちを漏らす。

想像を絶する強固な装甲は、キリトの剣を持つてしても貫く事は敵わない。

「ハツ 飛んで火にいる夏の虫イ!!」

標的をキリトに変更したスタイリツシユは、嬉々とした掴み掛ってくる。

だが、その前に、伸ばした腕はスサノオの棍によって弾かれ、大きく反らされる。

「サンクス!!」

「うむ」

短いやり取りを交わす、キリトとスサノオ。

同時にキリトは跳躍し、スタイリツシュへと迫る。

能力によってアシストされたキリトの体は、砲弾のような勢いでスタイリツシュへと襲い掛かる。

スサノオの援護によって生じたこの一瞬の隙に、スタイリツシュを削りきるのだ。

繰り出される斬撃。

描かれる「型」をなぞりながら、黒白の剣閃が迸る。

「シャイン・サーキュラー!!」

身体の回転に合わせて繰り出される、強烈な連撃。

その一撃一撃が、正に必殺。

スタイリツシュもさすがと言うべきか、最初の数発は見事に耐えきって見せる。

帝具の攻撃を完全にストップするのだから、その防御力が相当な物である事は疑いない。

だが、

キリトも諦める気は無い。

更なる連撃を繰り出し、文字通り「削って」いく。  
やがて、

「ぬあッ!?!」

思わず悲鳴を上げるスタイリツシュ。

キリトの繰り出す剣が、ついに彼の装甲を斬り裂き、内部機構にまで及び始めたのだ。  
だが、

キリトにできるのは、そこまでだった。

やがて、技を撃ち切ったキリトは動きを止める。

その姿に、

スタイリツシュは冷や汗を流しながら、笑みを浮かべる。

「フ………、フフフ、残念だったわねえ　ボウヤ!!　あたしの勝ちよ!!」  
勝ち誇って言い放つスタイリツシュ。

だが、

次の瞬間、

キリトは、

口元に笑みを浮かべて、スタイリツシュを見返す。

その笑みに一瞬、スタイリツシュはゾクリと悪寒を感じる。

「……………やれ、シノン」

囁くような言葉。

次の瞬間、

飛来した光の矢が、キリトの剣によって穴の開いた装甲を、正確に射抜き、内部を刺し貫いた。

「なッ!?!」

まさかの一撃に、巨体を維持できずに膝を突くスタイリッシュ。

その視界の彼方、  
アジトのすぐ前で、

膝を突いた状態で、シエキナーを構えているシノンの姿がある。

この極遠距離。しかも、装甲の裂け目と言う僅かなウイークポイントを、シノンは正確に射抜いて見せたのだ。

体内にダメージを喰らい、大きくバランスを崩すスタイリツシュ。

内部がシエキナーの攻撃で食い破られ、思うように動かなくなってしまったのだ。

「おのれッ こしやくな!!」

それでも、どうにか強引に体を動かそうとするスタイリツシュ。

その時、

「これで終わりだ、スタイリツシュ!!」

凜と響く叫び声。

見れば、インクルシオを纏ったタツミが、背中にアカメを背負う形で戦場に到着していた。

アカメは毒の関係で、未だに体が思うように動かない。そこで、比較的ダメージの少なかったタツミが、ここまで運んできたのだ。

「何それ? 二人羽織り? フラフラなアンタ達は、潰れちやいなさあい!!」

言いながら、腕を振り上げるスタイリツシュ。

だが次の瞬間、

横合いから放たれたエネルギー弾が、その巨大な腕を直撃して弾く。

目を転じれば、エアマンタの上でパンプキンを構えたメインが、ナジエンダに支えられるようにして照準を定めていた。

尚も諦めない、とばかりにもう片方の腕を伸ばすスタイリツシュ。

だが、今度は飛び込んできたスサノオが、棍で弾く。

そこへ、アカメを背負った状態で駆け抜けていくタツミ。

「まだまだよ!!」

最後の足掻き、とばかりに本体周囲から注射針の付いた管を無数に伸ばすスタイリツシュ。恐らく近接防御用の武器らしい注射針は、一斉にタツミへと迫る。

だが次の瞬間、

飛び込んできた漆黒の影が、2人を守るように立ちはだかる。

「やらせるかよ!!」

キリトは両手のエリユシデータとダークリパルサーを振るい、全ての注射針を切り払う。

これで、今度こそ王手<sup>詰み</sup>だ。



「行け、タツミ!! アカメ!!」

キリトの声に背を押されるように、

自身の間合いまで入ったアカメは、タツミの背から跳躍。一気にスタイリツシユ本体へと迫る。

同時に、村雨の鯉口を切り抜刀。

横なぎの一閃が、スタイリツシユ本体の胸部を斬り裂く。

危険種の体は強靱な装甲に覆われていたスタイリツシユだが、そこだけは人間の体のままだったのだ。

ただちに、村雨の呪毒がスタイリツシユの体を駆け巡り、心臓を食い散らかしていく。

「そ、そんな……」

自分の体が毒に侵食されていくのを感じ、スタイリツシユは絶望の中に沈みゆく。

「ま……まだ、いろんな実験が……した、かつたのに……な、なぜ……あたしがこんな……不幸な目に……」

手前勝手な今際のセリフと共に、呪毒は完全にスタイリツシユを食い尽くす。

やがて、その巨体は、轟音を上げて地面に倒れ伏した。

同時に、落下してきたアカメの体を、タツミが抱き留める。

「五体満足で死ねたんだ。お前はまだ幸せだろう」

アカメの冷やかな言葉が、凄まじかった激闘のフィナーレとなって響き渡る。やがて、勝者であるナイトレイド達を称えるように、上り始めた太陽が、ゆっくりと皆を照らしていくのだった。

第22話「狂科学の申し子」

終わり

「随分と、派手にやられたな………」

タバコに火をつけたナジエンダが、嘆息交じりに呟きを漏らす。

戦いが終わり、ようやく地上に降り立つ事が出来た彼女達だったが、スタイリツシュ達の攻撃によって破壊し尽くされたアジトの有様には、声も出なかつた。

アジトはナイトレイドにとつての家である。それなりに愛着もあつた。その家が敵に破壊され、落胆を禁じ得ない様子である。

もつとも、

周囲を見回せば、ナジエンダを囲むように仲間達が顔を見せている。

アカメ、タツミ、キリト、レオーネ、シノン、ラバック。

この場に1人も欠ける事無く立っていられるのは、奇跡に近かつた。

「しっかしボス。よく、あんなタイミングで帰って来れたね」

未だに体が思うように動かないラバックに肩を貸してやりながら、レオーネが不思議そうに尋ねる。

確かに、アジトが敵の襲撃を受ける状況の中でナジエンダが帰還したのは、タイミン  
グが良すぎた感がある。

「占いの帝具を使ったんだ。そうしたら、アジトの方角に凶と出てな。それで取り急ぎ、  
新メンバーを連れて戻って来たってわけさ」

「へえ、帝具にも色々あるのね」

感心したように言うシノン。

ようやく毒も抜けて来ており、辛うじてだが立って歩けるくらいに回復していた。

「それでナジエンダ、これからどうするんだ？」

尋ねるキリト。

アジトがこの有様では、当面は暗殺稼業どころではないだろう。それどころか、明日にはイエーガーズが押しかけてくる可能性もある。

「どこか、いったん身を隠した方が良いと思うぞ」

「そうだな。まずは生き残る為の手を打つとしよう」

キリトの言葉に、ナジエンダが頷きを返した。

その時だった。

「あの……」

ナジエンダが連れて来た新メンバーの内の1人が、声を上げた。

一同が視線を向ける中、その人物はじつと、キリトを見詰めているのが判る。

「どうかしたのか？」

訝るキリト。

そんな中、

その人物は、顔を覆っていたフードを取り払う。

その下から現れる、素顔。

長い金髪をポニーテールに纏め上げ、キリツと整った目鼻は、どこか妖精めいた美しさ  
と可憐さがある。

しかし、

その姿を見て、キリトは思わず息を飲んだ。

互いに見つめ合う、キリトと少女。

やがて、どちらからともなく口を開いた。

「もしかして、……リーファ、か？」  
「お兄ちゃん……」

## 第23話「兄と、妹と」

1

マーグ高地。

帝都から南東へ800キロ離れた僻地にある峻厳な土地である。

峻厳に切り立ったテーブルマウンテンが多数点在している事が特徴であり、その為、周囲には他では見られない、独自の生態系の形成が確認されている。

当然、未知の強力な危険種も多数確認されており、旅人の運行路からは外された、正に帝国の中でも辺境中の辺境であると言える。

このマーグ高地に今、ナイトレイドの各メンバーは集っていた。

先に、ドクター・スタイリツシユ率いる部隊の襲撃を受けたナイトレイド。

結果的にスタイリツシユを含む全ての敵を殲滅。こちらの被害は皆無に等しかった

ものの、敵にアジトの情報を知られたのは痛かった。

このままでは、いずれ再び敵の襲撃を受ける可能性もある。

もつとも実のところ、その危険性は皆無であり、スタイリツシユは抜け駆けを狙ってナイトレイドを襲撃した為、まだアジトの情報は、イエーガーズを始め他の敵には知られていないのだが。

しかし、やはり万が一の事を考えると安心はできない。加えて、襲撃によつてアジト自体も修復不能なダメージを受けてしまった。

そこでナイトレイドは、ほとぼりが冷めるまでの間、このマージ高地に身を隠す事にしたのだ。

地形が複雑なマージ高地は潜伏にはうってつけである。

また、危険種の生息も多いため、それらを狩る事で、修行にもなる筈だった。

「新しいアジトの場所は、今、革命軍の偵察隊が帝都近辺を探ってくれている。それまで、私達はここでレベルアップだな」

「でも、ここって結構、寒いですね」

そう言つて、シノンは自分の両腕を抱くようにして身を震わせた。

今回のマージ高地行きに際し、シノンは学校の方に休学届を提出して同行してきていた。



「標高も結構な物だからな。ここで修行すれば、それは必ずイエーガーズと戦う時の力になる筈だ。」

ナジエンダがそう言った時だった。

一同をここまで乗せて来たエアマンタがふわりと浮きあがると、そのまま飛び去って行ってしまった。

「あ……あれ？ 行っちゃったけど、良いの？」

首をかしげたるマイン。

折角、飼いならしているのに、勝手に飛んで行ってしまつて良いのだろうか？ どうせなら、自分達で使つた方が良いと思うのだが。

「貴重な乗り物だからな私達が独占する訳にはいかないのさ」

「帰巢本能を利用して、巢のある革命軍本部に帰つたのよ」

ナジエンダの説明に捕捉するように口を開いたのは、革命軍本部からナジエンダがスカウトしてきた新たなメンバーである。

軽くウエイブの掛かつた長い髪に、整つた顔立ち。スレンダーだが、均整のとれたプロポーションを持つ、モデルのような外見の女性だ。

黙つていれば、完璧な美人である事は間違いない。

しかし、

「マインって、そんな事も知らないんだねー アハハハハハハ」

軽い言動が、雰囲気を一気にぶち壊す。

からからと笑う女性に、元々短気なマインのボルテージは、一気に上昇を見せる。何やらのつけから、不穏な空気を垂れ流してくれていた。

そこでふと、タツミが何かを思いついたように声を出した。

「もしかしてだけどき、あれに乗ったまま帝都の宮殿に突入で来たんじゃないかな？」

確かに、発想としては悪くない。

戦いとは、頭上を制した方が圧倒的に有利となる。

空を飛べる帝具の数が少ない以上、空から宮殿へ強襲を仕掛けるのは有効な手段であるように思える。

しかし、

「無理だ」

アカメはタツミの言葉を、言下に否定する。

「宮殿の上空には、帝具で飼い馴らされてる危険種がいる。空から近付けば、そいつらに食われてしまうだけだ」

「……本当に、守りだけはガツチガチなんだな」

タツミは呆れるしかなかった。

自分の保身ばかりを最優先に考える連中の考える事は、ある意味、強敵と戦う以上に難儀な事だ。

「さて、まずは新メンバーの紹介と行こう。まずは……あれ？」

新たに加わった3人のメンバーを、改めて紹介しようとしたナジエンダだが、その姿が見えない

目を転じれば、先ほどマインをからかっていた女性は、今度はアカメを抱きしめるような形でまとわり付き、少女の特徴的な黒髪を撫でていた。

「アカメちゃんって近くで見ると、本当に可愛いんだあ」

「……何だ、いきなり？」

鬱陶しそうに女性を見るアカメ。

何となく、過剰なスキンシップをする飼い主と、それを嫌がっている黒猫のような印象がある。

「私はチエルシー。同じ殺し屋同士、仲良くしましょう」

そう言うのと、ポケットから棒付きの丸飴を取り出し、アカメへ差し出す。

「はい、これあげる」

「………歓迎するぞ」

あっさりと餌付けされるアカメ。どうやら、長旅でお腹が空いていたようだ。

チエルシーの方でも、アカメの食い意地の事も知っている様子。どうやら、こちらのメンバーの情報も、色々と調べてきているらしい。

「でもチエルシー……さんはマイン達以上に殺し屋には見えないって言うか……」  
「見た目で判断するな。アカメと同じくらい暗殺シゴトを成功させている凄腕だぞ」

タツミの言葉を窘めるナジエンダ。

確かに。

キリトはチエルシーを見ながら考える。

相手を見た目で判断してはいけないのは殺し屋としての鉄則である。たとえ直接的な戦闘能力が低くとも、「殺し」の能力に優れる暗殺者は幾らでもいる。チエルシーも恐らく、そうした能力の持ち主なのだろうと推察された。

「そしてこっちが革命軍の本部から譲り受けて来た私の新しい帝具、《電光石火スサノオ》だ」

そう言うとなジエンダは、傍らに立っているスサノオを指し示す。

「自動で動く生物型だから負担が少ない。過去の負傷で全力が出せない今の私でも使いこなせるわけだ」

戦闘力については、先の戦いで立証済みである。このスサノオだけでも、頼もしい戦力が加わってくれたものである。

これからますます激化する戦場にあつて、その真価を大いに振るつてくれることが期待される。

「あ、あらためてよろしく」

そう言つて、恐る恐る手を差し伸べるタツミ。

だが次の瞬間、スサノオの目がギラリと光つた。

何事か、と見守る一同。

次の瞬間スサノオは、まさに「電光石火」のスピードでタツミの足元に屈みこむと、僅かに出ていたシャツを、ズボンの中にしっかりと押し込み、身なりを整えてやつた

「よしッ!!」

満足そうに頷くスサノオに一同は、ただただ哑然とする。

「性格は意外と几帳面だ」

「そう言えば、あたしの髪も直していたわね」

その時の事を思い出し、呆れるマイン。

どうやら、思つた以上に面倒くさい性格であるらしい。

「で、肝心の能力は何なの？ 肉弾戦が強いってだけ？」

レオーネの質問に、ナジエンダはフツと笑みを浮かべる。何となく、その質問を待つていたような雰囲気がある。

「フッフッフ……では見せてやろう。驚くなよ」

不敵な態度を見せるナジエンダ。

対して、一同はごくりと生唾を飲み込み、次に起こる驚愕の事態に備える。

いったい、何が飛び出すのか？

どんなすごい力を披露してくれるのか？

一同の期待の視線が集中する中、

「やれ、スサノオ!!」

ナジエンダが凜とした声で号令と共に、鋭く腕を振るう。

「……判った」

低い声で頷きを返すスサノオ。

次の瞬間、スサノオは動いた。

手始めに斧を取り出して木を切つて来ると、削り出した材木を基に、頑丈な住居を手早く立てていく。

それが終わったら、今度は、皆の溜まった衣類を川で洗濯する。

更に、取つて来た食材で、手の込んだ料理を作り始めた。

「や、何か凄いなだけどき、何すか、これ？」

「家事をしているようにしか見えななんだが？」

「その通り!!」

呆れ気味に尋ねるラバツクとタツミに対し、ナジエンダは昂然と胸を逸らす。

「スサノオは元々、要人警護用に造られた帝具だ!! 戦闘力は勿論、付きつきりで守れるように、家事スキルが完備されている!! 炊事洗濯、何でもござれ!! 作れる料理のレパートリーは、1000種類にも及ぶ!!」

ずれている。

と、ツツコみたいなのはシノンだけではないはずだった。

さんざん期待を持たせておいて、出て来たのがコレかい!!

誰もが、思わず心の中で叫んでいた。

「戦闘と何も関係無いでしょうが!!」

「いやいや、すごく便利だぞ、これは。それに、ちゃんと戦闘用の切り札もあるし。な？」

「ああ」

激しく突っ込むマインに、そう言つて頷き合うナジエンダとスサノオ。

何にしても、心強い新たな仲間達の存在に、タツミの心は期待で高鳴って行く。

これからの戦い、きつと頼れる力になってくれるだろう。

タツミは、そう確信する。

しかし、

「やーい、貧乳く　チビく　チツパイチツパイ」

「キシヤー!!」

「料理ができてイケメンでも帝具でしょ。やーッ　負ける気しないね」

「?」

マインをからかうチエルシーの傍らで、ラバックがスサノオ相手に無駄な見栄を張っている。

何と言うか、今後のチームワークに激しく不安を覚える光景だった。

そんな中、

シノンは、ふと、一連の騒ぎに加わらずにいた2人に目を向けた。

キリトとリーファ。

先の戦いの後、劇的な再会を果たした兄妹だったが、その様子は明らかになぎこちなさが見て取れる。

否、一方的にぎこちない雰囲気を出しているのは、キリトの方だ。



リーファの方は、何とかコミニケーションを取ろうとアプローチを仕掛けているが、キリトの方が拒絶している感じである。

そんな2人の様子を見て、嘆息するシノン。

どうやら、チームワークに難があるのは、何処も同じであるらしかった。

## 2

シリカは、恐縮した体でテーブルについていた。

目の前には、随分と豪華な料理が並べられ、手を出す事さえ憚られてしまう。

「さあ、シリカちゃん。遠慮はいらないからね。食べて食べて」

そう言つて明るい声で食事を勧めてくるのは、彼女の同僚であるボルスである。

イエーガーズの最年少であり、南部から出て来たばかりのシリカを、1人で官舎に泊まらせるのは忍びないと感じたボルスは、自分の家に下宿させる事を提案したのだ。

シリカも、最初は断つた。

ボルスの申し出は、実際のところシリカにとつてもありがたい事だったが、自分1人

の為に、そのような手間を取らせてしまうのは申し訳なかったのだ。

だが結局、ボルスだけではなく、面倒見の良いウエイブやアスナ、果てはエスデスにまで説得され、こうしてボルス家の厄介になっていた。

ボルスとしては他にも、トキハや、帝都で一人暮らしをしているアスナの事も引き取って良いと申し出たのだが、そこは2人から丁重に断られてしまった。

「そんな、私なんかの為に、勿体ないですよ、こんなにたくさん」

並べられた料理を前にして、かえって恐縮した体で縮こまるシリカ。同僚とは言え、他人の家に上がり込んで、このような歓待を受けては悪い気がした。

そんな少女の肩を、優しい手が包み込んだ。

「遠慮しなくて良いのよ。うちの人が家に同僚の人を連れて来るなんてめったにない事なんですから、我が家だと思って、くつろいでねシリカちゃん」

そう言って笑い掛ける女性は、ボルスの妻である。

太もも付近まである長い髪をストレートに下ろし、やや切れ長な瞳は、しかし優しくうな微笑を浮かべている。

成程、真面目なボルスが皆の前でのろけるだけの事はある。ちよつと、そこらではお目に掛かれない程の美人だった。

ボルスとは恋愛結婚だったらしく、近所でも評判のおしどり夫婦である。見ているシ

リカも羨むほどの熱愛振りを見せていた。

更に、

「ねえねえ、お姉ちゃん!! あとで一緒に遊ぼうよ!!」

「キュアー!!」

ピナを胸に抱いた小さな少女が、嬉しそうな笑顔を満面に浮かべてシリカに駆け寄ってくる。

母親に面立ちが似た少女は、ボルスの娘のローグである。

どうやら物怖じしない性格であるらしく、初めて会ったシリカとも打ち解け、ピナともさっそく友達になってしまっていた。

そのピナも、ローグの胸に抱かれ、心なしか楽しそうな顔をしているように思える。

「ほら、ローグ。お姉ちゃんが困っているでしょ。遊ぶのは、ご飯を食べてからよ」

「はあ、」

たしなめる母親の言葉に、素直に従うローグ。どうやら、教育もキツチリと行き届いているらしい。

やがて、4人はテーブルを囲み、楽しい食事が始まった。

ボルスの妻は美人なだけでなく料理も上手で、シリカはこれまでめつたに食べた事も無いような食事に目を丸くしては、ボルス達を和ませていた。

それは、長く戦場に身を置き、こう言った「家族の語らい」を久しく忘れていたシリカにとつては、とても楽しいひと時だった。

「良い子ね」

ベッドの上で、抱き合うような格好で並んで眠るシリカとローグに毛布を掛けてやりながら、ボルスの妻は慈しむように、2人の少女を見据える。

遊び疲れたのだろう。2人は静かな寝息をたてながら目を閉じている。ピナもまた、2人の枕もとで丸くなり、共に眠りに落ちていた。

「こんな小さな子が軍にいるなんて。いったい、何があつたのかしら？」  
「うん。悲しい事だね」

憂うような妻の言葉に、ボルスも頷きを返す。

シリカは10代前半。本来なら学校へ行き、友達と楽しく遊んでいる事が許される年れだ。

しかし彼女は軍人として戦い続けて功績を上げたからこそ、今はイエーガーズに所属している。

その辿つて来た道が、平坦である筈が無かった。

自分達の任務は過酷だ。

ボルスは、つい先日の事を思い出す。

エスデスの指示を受け、ボルスはラン、ウェイブ、トキハ等と共に、スタイリツシュ研究室の自宅捜索を行った。

スタイリツシュの連絡途絶を聞いた時は、イエーガーズの一同にも不安が広がった物だが、そこでボルス達は更に驚愕する事になる。

研究室内部には、高価な研究機材や貴重な資料が、そのまま手つかずで残されていたと言うのに、内部には人の気配が全くしなかつたのだ。

まるで、研究室はそのままに、中の人間だけが、そっくりそのまま神隠しにでもあつたような感じである。

スタイリツシュの研究室では、長年にわたつて違法な人体実験が連日のように行われ、犠牲者の数も3ケタでは効かないとさえ言われている。

そのような場所であるだけに、戦慄を禁じ得なかつた。

だが、冷静になり分析を進めるにつれ、今回の一件はオカルトの類では無く、人為的に引き起こされた物であると言う推測が建てられた。

恐らくスタイリツシュは、敵のアジトを発見し、強化兵達を率いて強襲を掛けたものの、振り返りに会つて全滅。スタイリツシュ自身も討ち死にした。

それが、エステスの見解だった。

恐らく、スタイリツシユはもう、この世にはいないだろう。

そして同時に、正しく「明日は我が身」である。

ボルス自身、いつ命を落とすかは判らないし、その覚悟もできている。  
しかし、

愛する家族を残していく事だけは、辛かった。

それに、シリカのような小さな子に、そんな過酷な運命を背負わせるのも苦しかった。

そんな夫の苦悩を悟ったのか、妻はそつと、肩に手を置いて来る。

「どうか、無茶はしないでね。あなたも、シリカちゃんも」

「うん、判ってるよ」

そう言うボルスは、愛おしそうに妻の手を握りしめた。

3

なるほど、これは修行になるな。

危険種の群れに囲まれながら、キリトは心の中でそう呟く。

キリトは今、修行を兼ねた狩りを行う為、山の中腹辺りまで下りてきていた。

帝都近郊に比べて危険種の種類が違う。その為、知識にある奴等に比べると行動パターンも異なり、動きを先読みする事が難しい。

少しでも油断しようものなら、こちらが鋭い爪や牙の餌食になりかねない。

加えて、マージ高地は標高が高く酸素が薄いため、常の身体能力を発揮する事が難しい。

標高の高い場所で生まれ育った人間は、標高の低い場所で生活している人間よりも、遥かに高い身体能力を発揮すると言う。

これらの要素が帝都に戻った時に、キリトたちの能力を飛躍的に高めてくれるはずだった。

キリトを獲物と見定めて突っ込んでくる危険種。

巨大なクマのような姿をした凶悪な外見は、それだけで威嚇効果は抜群であり、竦み上がりそうな迫力がある。

だが、キリトはスツと目を細めて熊型危険種を見定めると、右手に持ったエリュシデータを、弓を引くように構え、切っ先を相手に定める。

解き放たれる剣閃。

ヴオーパル・ストライクの一撃が、熊の体の中央に真つ直ぐ突き刺さる。

悲鳴のような咆哮を上げて、地面に倒れ伏す熊。

間髪入れず、キリトは振り返る。

その時には既に、背後から別の危険種が迫ってきていた。

だが、慌てる必要は無い。

その事を見越して、既に能力は発動済みだった。

身体を動かそうとして、腕や足に僅かな鈍りを感じる。

「ッ!？」

息を吐きながら、しかし頭の中は冷静さを保ちつつ、次の動きへとつなげる。

身体がいつもより動かないなら、いつも以上に索敵に意識を向け、敵の動きを先読みするのだ。

勿論、相手に先んじて行動を起こすのも重要である。

迫る敵に対し、振り向き様に横一闪を繰り出すキリト。

その一撃が、背後から迫った危険種の胴を、一刀両断にしてのけた。

キリトによって斬られた巨体が、轟音を上げて地面に転がる。

危険種を仕留め、動きを止めるキリト。

既に周りには、キリトが倒した危険種の屍が、地面を埋め尽くすほどに転がっている。



これで、当面の食糧には問題無いだろうと、普通なら思うところであるが、ナイトレイドには欠食児童（アカメとかアカメとかアカメとか）が多いため、安心はできない。この程度なら3日で食い尽くされてしまうだろう。

「仕方ない。もう一働きするか」

苦笑しながら呟いた、次の瞬間、

背中を向けているキリトに、背後から狼型の危険種が襲い掛かってくる。

跳躍と同時に鋭い牙を剥き、キリトへと迫る狼。

キリトはとつさにエリユシデータを持ち上げ、狼型危険種を迎え撃とうとする。

次の瞬間、

大気を斬り裂いて飛来した光矢が、今まさにキリトに襲い掛かろうとしていた狼の頭部を撃ち抜いた。

突進の勢いを一撃で吹き飛ばされ、絶命し地面に転がる狼。

そこで、キリトは振り返り、自身の獲物を横取りした相手を見やる。

「相変わらずのポッチプレイ？ あんたも大概よね」

呆れ気味に言ったのは、茂みから出てきたシノンだった。どうやら、彼女も狩りに来ていたらしい。

と言っても、前衛担当のキリトと違い、狙撃手のシノンとでは修行の内容も異なる為、

当然ながらやり方も違ってくるのだが。

こちらに向かつて歩いて来るシノンの様子を見て嘆息すると、キリトはエリュシデーを背中への鞆へ納める。

「……………別に手出ししなくても、今のは倒せたんだけどな」

気配を探っても、既に周囲に危険種が近付いて来る様子はない。どうやら、ここら辺の連中は全て狩り尽くしたらしかった。

獲物の数が多いので、後で誰かに運ぶのを手伝ってもらわれないといけないが。

そんな事を考えながら、キリトはシノンに向き直る。

「それで、どうかしたのか？ わざわざこんな所まで来て？」

マーズ高地は難所である為、移動には困難を擁する。

キリト自身、この狩場に来るのにはそれなりの時間がかかっている。身体能力に劣るシノンなら、尚の事だろう。

それでも追って来たと言う事は、それなりの理由があつての事なのだろうと思つた。

対して、シノンはムツと眉をしかめて見せる。

「どうした、じゃないでしょ。あんた、リーファの事はどうする心算なのよ？」

「……………それは」

その指摘は予想していなかったらしく、キリトは言葉を詰まらせる。

確かに、ここに來てからキリトは、リーファと碌に話していない。声を掛けられれば、生返事を返す程度である。

「このままじゃ、こつちの気まで滅入って來るわ。何とかしなさい」  
「いや、何とかって……」

強引な物言いに、キリトは呆れたような声を出す。

そんなキリトの様子を見ながら、シノンは今度は少し声のトーンを落として尋ねる。

「あんた、リーファの事嫌いなのか？」

「そんなはずないだろ」

そこは即座に否定するキリト。

確かに素つ気ない態度を取っていたのは事実だが、実の妹を嫌うほど落ちぶれた心算は無かった。

「ただ……」

「ただ？」

詰め寄ってくるシノンに、キリトは少したじろいたように後じさる。

どうやら、事情を話さない事には、許してくれそうになかった。

「……ずっとリーファは、故郷で幸せに暮らしていると思っていたんだ」

ややあつて、キリトは観念したように口を開き、己の胸の内を語り出す。

「それが、俺も知らないうちに革命軍に入つてて、いきなり目の前に現れれば、そりや、驚くだろ」

「何か理由があるんじゃないの？ それを聞かないと話にならないでしょ」

腰に手を当てて、呆れたような口調で言うシノン。

シノンの指摘はいちいちもつともであると言える。

故郷で暮らしていた筈のリーファ

そのリーファが、なぜ革命軍に入ったのか。それを知る必要がキリトにはある。そうしないと、話は進まなかつた。

と、その時だつた。

「……………村がね、帝国軍の攻撃を受けたの」

憂いの色を帯びた声が、風に乗って聞こえてくる。

導かれるように振り返るキリト。

そこには、いつの間に來たのか、リーファが佇んでいた。

思わずとつさに、キリトはシノンを見やる。

対して、口元にフツと笑みを浮かべて返すシノン。

どうやら、リーファが近くにいるのを知っていて、話題を振つたらしい。

担がれた事を悟り、シノンを睨むキリト。対して、シノンは内心で喝采を上げる。

普段、割とからかわれる事が多いため、一矢報いた感じである。

とは言え、今問題にすべきはシノンではない。

報復ははずれ然るべき形ですとして、キリトは取り急ぎ、リーファに向き直った。

「どういう事なんだリーファ。村が帝国軍の攻撃を受けたって……」

キリトの村は、特に特徴らしい特等の無い、ごくごく平和で長閑な村である。

帝国の持つ内戦や侵略とは全くと言って良い程無縁である筈だった。

それがなぜ、帝国軍の攻撃を受けるなどと言う事態に陥るのか？

問われたリーファの顔は、どこか憂いを秘めているようにも見え、流れ出る涙を堪えているのが見える。

「……お兄ちゃんが、村を出て暫くした頃だった。村の一部の人達が革命軍に協力している事が判って。その事を理由にして、帝国軍が攻めて来たの」

リーファは、今でも覚えている。

交渉も抗弁も許されず、問答無用で攻撃を開始した帝国軍。

敵兵に蹂躪される村の人々。

老人も、女性も、子供でさえ区別なく、皆が殺されていった。

そして、忘れもしない。最後に現れた部隊。

「帝国軍焼却部隊。あの人たちが、残った村を全て焼き尽くして行った」

特に脳裏に残るのは、あの不気味なマスクをかぶった焼却部隊の男。

村の殆どは、あの男一人に焼き尽くされたような物である。

そんな中、何とか命からがら村を脱出したリーファは、只管に逃げ続け、そして3日後、街道沿いで力尽きて倒れたところを、革命軍の斥候部隊に拾われたのである。

「俺のいない時に、そんな事が……」

悔しそうに呟くキリト。

もし、その場に自分がいたら、そんな事にはならなかったのに、とも思う。

「みんなみんな、死んでしまったんだよ、お兄ちゃん!!」

泣き崩れるリーファ。

シノンはそのなリーファに駆け寄ると、優しく抱きしめる。

「辛かったわね、本当に」

「シノンさん……」

リーファもまた、シノンに縋るように、その胸に顔をうずめる。

そこで、シノンは立ち尽くしているキリトを睨みつけた。

妹にこんな思いまでさせておいて、アンタは何もしないのか？ シノンの鋭い眼光

が、そう語っている。

ややあつて、キリトは大きく息を吐く。

今のリーファを、ここまで追い込んでしまったのは自分だ。

ならば、傷ついた妹を救う為に、自分は戦わなくてはならない。

「……………判ったよ」

そう呟くように言うと、キリトもまた、泣きじやくるリーファに歩み寄る。

「俺が悪かった、リーファ。一緒に戦おう……………いや……………」

言い直すキリト。

「俺と、一緒に戦ってくれ」

「お兄ちゃん……………」

「敵は強い。お前の力が必要なんだ」

飛び込んでくる妹を、しっかりと抱きしめるキリト。

離れ離れになり、互いに知らないまま数奇な運命をたどっていた二人の兄妹は、ようやく一つに慣れたのだ。

その様子を、傍らのシノンは微笑ましそうに眺めていた。

第23話「兄と、妹と」

終わり



## 第24話 「少年の心、少女の想い」

1

帝都南方に広がる鉾山地帯。

帝国にとって貴重な財源であり、多くの抗夫達が働いている場所でもある。

坑道内部は迷路のように複雑化しており、全体像を把握している人間は皆無であると言つて良い。

まるで地獄の底まで続いているようにも思える坑道の先は、灯り無しでは一步も進む事ができない闇の世界と化している。

その闇の底から、

「ソレ」は姿を現した。

作業を続ける抗夫達。

そんな彼等の目の前に姿を現したのは、ただただ不気味な存在だった。手足があり、頭部があり、二足歩行している点は人間と同じである。

だが、その巨体は通常の人間の三倍以上を誇り、更に顔面は子供が泥をこねたように、グロテスクな外見をしている。

まるで泥人形ゴレムのような外見。

その泥のような表皮の下から、ギョロリとした目が抗夫達を睨みつける。

「う、ウワアアアアアア 見た事も無い危険種だアアアアア!!」

「逃げろオオオオオオ!!」

道具を放り出して逃げようとする抗夫達。

だが、その行動はすぐに、無駄な努力へと代わる。

逃げようとした彼等を危険種は掴みあげ、そのまま頭から貪って行く。

首を挽がれ、身体を咀嚼されて絶命していく抗夫達。

その様子を、闇の奥から見つめる目が合った。

「クッククックッ こりゃあ、良い玩具が手に入ったぜ」

食い散らかされる抗夫達を見ながら、笑みを浮かべる男。

闇の中にあつて、その姿を伺う事はできない。しかし、不気味に笑う口元だけはくつきりと見て取る事が出来た。

自らが作り上げた惨劇に対し、心の底から愉悦を感じている笑いである。

「久しぶりの帝都だ。親父に挨拶する前に、少しばかり楽しませてもらうぜ」

そう呟くと、再び闇の中に溶け込むように消えていく。

後には、抗夫達の断末魔の悲鳴と、生肉を咀嚼し、骨を粉碎する耳障りな音だけが残っていた。

蹴り出したボールが、放物線を描いて宙に舞いあがる。

落下してきた球体を、ウェイブは器用に足で受け止め、更にもう一度、頭上へと上げる。

器用な物だ。

見ていたトキハが、ぼんやりとそんな事を考える。

たちまち、周囲の子供達から起こる拍手喝采。

「兄ちゃんすげー!!」

「格好良い!!」

「教えて教えてエ!!」

子供達が群がってきて、ウェイブに縋りついて来る。

「ここらこら、ちよつと待て、順番に教えてやるから」

群がる子供達に辟易しつつも、笑顔を崩さないウエイブ。どうやら本人も、子供達に慕われてまんざらではない様子だ。

その様子を、傍らでトキハ、アスナ、クロメの3人が眺めていた。

「ウエイブさんって、けつこう保父さんとか似合いそうよね」

「て言うか、あれはもう、同レベルだと思う」

感心したように言うアスナに対し、クロメはお菓子をポリポリと食べながら返事をした。

ここは、アスナの知り合いが経営している孤児院である。敷地内には併設された教会も有り、運営は、その教会の方が行っている。

今日は非番だったイェーガーズの4人は、アスナの誘いで、この孤児院に慰問、実質的には遊びに来た訳である。

ここにいる子供達は皆、戦争や夜盗の襲撃で親を亡くした子達ばかりである。

そんな子供達を哀れに思った、アスナは血盟騎士団時代から何度か、時々ひまを見付けては、こうして遊びに来ていたのである。

「いつもすみません、アスナさん」

背後から声を掛けられて振り返ると、メガネをかけた大人しそうな女性が歩いて来る

のが見えた。

黒いシスター服を着ている所を見ると、どうやら彼女がこの孤児院の責任者であるらしかった。

「サーシャさん。また、お邪魔させてもらっています」

「ありがとうございます。おかげで、子供達もあんなに楽しそうで……」

ウエイブに遊んでもらっている子供達を微笑ましそうに眺めながら、サーシャはクスクスと笑う。

子供達も、普段はあまり接する事の無い人たちが遊びに来てくれたおかげで、いつも以上にはしゃいでいるのが見て取れた。

「本当にありがとうございます。お仕事、忙しいのでしょうか？」

「ええ、まあ……」

サーシャの言葉に、アスナは苦笑する。

実際、エスデスのドS振りは、仕事の方でも発揮されている。

とにかく賊の情報が入ったら即出撃。一切の仮借なく働かされる物だから、疲労も溜まると言う物だ。

一方で、非番の日はきちつと休みはくれるし、任務後には特別手当も出してくれるので、不満を述べる方が筋違いなのだ。

「エスデスの場合、全部、自分基準だから」

「確かに、そうよね」

ボソツとぼやきを吐き出したトキハに、アスナも嘆息交じりの返事を返す。

メリハリをしつかりと付ける良い上司である事は間違いないのだが、いかんせん、エスデスのやり方に他人が付いて行くのは容易な事ではなかった。

幸いにして、イエーガーズの面々は皆、それなりに修羅場をくぐつて来た猛者たちばかりなので、この程度の事で根を上げる者はいないのだが。

「イエーガーズのご活躍は、私の所にも聞こえてきています。あなた方がいてくれるから、私達が平和に暮らせる事も理解しています」

サーシャはアスナを見ながら、少し憂いを帯びた表情で告げる。

「けど、どうか、お体は大事になさってください。アスナさん達に何かあったら、あの子たちも悲しみますから」

「ありがとうございます」

サーシャの気遣いに頭を下げるアスナ。

彼女達のように、日々の生活を一生懸命生きてる人たちを守るためにイエーガーズがある。

そう考えると、わざわざ近衛から出向する形でエスデスの配下になった意味もあると

言う物だろう。

視界の中で、リフティングに失敗したウェイブが、顔面にボールを受けてひっくり返っている姿がある。

その様子に笑い転げる子供達。

見ているトキハとクロメも、その様子には笑顔を浮かべている。

一時、戦いを忘れさせてくれる楽しい光景。

その様子に、アスナもまた、釣られるように笑顔を浮かべるのだった。

## 2

新戦力、特にスサノオの加入は、ナイトレイドにとって大きなプラスとなった。

戦力として大きい事は勿論、日常生活を支える家事スキルは大きい。

これまで家事は分担制。炊事に関してはアカメ（つまみ食い込み）とタツミがほぼ一手に引き受け、ときどきシノンが手伝うくらいである。

だが、そこにスサノオが加わったおかげで、出される料理のレパートリーは飛躍的に

多くなった。

戦い続ける上で、休養と言うのは大切である。

美味しい物を食べ、充分な休養を取ってこそ、いざ仕事の時には100パーセントの力を発揮できるのだ。

「いやー、スーさんの料理は最高だなー 修行の疲れが吹っ飛ぶよ」

「ありがとう、スーさん!!」

いかにも満足、と言った感じのレオーネとアカメ。

今日も修行に狩りにと大忙しだった。

アジトにいた時と違って、買い出し班が街に行つて食料を調達してくる訳にもいかないので、1日の狩りの量も増えている。修行も一緒にできて、一石二鳥と言う訳だ。

「スーさん、あした稽古しようぜ!!」

タツミは剣を片手にスサノオに話しかけている。

ちなみに「スーさん」と言うのは、いつの間にか定着したスサノオの愛称である。

「だから言つたらう、スサノオは凄いと。みんな、判つたか」

タバコをふかしながら自慢げに言うナジエンダ。

断つておくと、すごいのはスサノオであつてナジエンダではないのだが、まあ、そこは「すごいスサノオを従えているナジエンダはすごい」と言う事で納得しておこう。



「……ナジエンダは、昔のマスターに瓜二つんだ」

ふと、スサノオは昔を懐かしむような口調で言った。

帝具として生まれ、1000年の時を生きて来たスサノオ。

昔のマスターと共にあり続けたのが、もうどれほど昔であったのかは想像もつかない。

しかし、こうして、記憶に残る程すばらしい人物だったと言う事は間違いない。だからこそ、こうして昔のマスターの面影があるナジエンダの呼びかけに答え、彼女の帝具になったのだろう。

「なるほど、さぞかし素敵な人物だったのだろうか」

「いや、ボス。それ自分で言いますか」

自画自賛込みのナジエンダのセリフに対し、ツツコみを入れるタツミ。

元々、ナルシスト的な草が多かったナジエンダだが、何やらスサノオを得た事で、さらに磨きがかかった気がした。

「ああ」

そんなナジエンダを見て、スサノオは感慨を込めて言い放った。

「『彼』は素晴らしい將軍だった!!」

「『彼』!!??」

愕然とするナジエンダ。

描写的には、頭に金ダライでも落とされたほどの衝撃を味わっている。

ナイトレイド・リーダー、ナジエンダ。20代「女性」。

彼女こそ、チーム一の「イケメン」である。

次の瞬間、爆笑が沸き起こる。

「男と瓜二つとか!! さすがボス!!」

「ね、姐さん、そんな笑っちゃダメだつて!!」

「いや、でも、これはウケるつて!!」

笑いまくるレオーネ、タツミ、キリト。

と、

ギリギリギリギリギリギリ

わざとらしく、義手の関節を鳴らして見せるナジエンダ。

その様子に、キリト、タツミ、レオーネは揃って顔を青くする。

ナジエンダがわざと義手を鳴らす時は、割と本気で怒っている時である。

やがて、

仲良くナジエンダからゲンコツを貰い、説教を喰らうキリト達。

その様子を、シノンは呆れ気味に見つめる。

「何やってんのよ、アンタ達」

相変わらず、漫才のネタには事欠かない職場である。

その横で、ラバックは何やら不機嫌そうに、一同のやり取りを眺めていた。

「クツ みんなあつという間にスーさんに懐きやがって。これじゃあ、俺のポジションが取られちまうぜ」

着任直後から、何かとスサノオと張り合う事の多いラバックだが、基本となるスペックが違うので相手になっていけないのが現状である。と言うかそもそも、スサノオの方は、なぜラバックが絡んでくるのか判っていない節がある。

つまり、完全にラバックの独り相撲だった。

「何怒ってるんですか、ラバックさん？」

「て言うか、ラバは元々、今のお笑いポジションでしょ」

呆れ気味に返事をするリーファとマイン。

こちらは食後のお茶を楽しんでいるところであり、それぞれ手には、スサノオ特製のケーキがある。

その時、扉がわずかに開き、猫のような小動物が入ってくるのが見えた。

毛並みが綺麗なネコ科の危険種は、しかし凶暴さなどかけらも感じさせない愛くるしさで、トコトコと室内に入ってくる。

「マーグパンサーの子供だわ。こいつらって、人を恐れないのよね」

そう言っている内に、マーグパンサーはマインにする寄って来ると、甘えるように体を擦り付ける。どうやら、餌をねだっているらしい。

マーグ高地は人跡が少ないせいか、こうして危険種の子供であっても、人を警戒しないのである。

「な、何よ、言つとくけど、餌なんてあげないわよ……」

素っ気ない態度を取ろうとするマイン。

しかし、あどけない顔で見上げてくるマーグパンサーは、少女の心をくすぐってくる。見ているだけでも、心が癒される光景である。

そんなマーグパンサーの様子に、マインも鉄の精神を發揮しきる事はできなかった。

「し、仕方ないわね。ちよつとだけよ」

そう言つて、ケーキを切り分けて与えようとするマイン。

次の瞬間、

子猫のようなマーグパンサーの目が、獰猛に光る。

それは正に、獲物を狩る肉食獣の眼つきだ。

マインが気を逸らした一瞬の隙に跳躍。同時に、少女の手から、ケーキの乗った皿を奪つてしまった。

呆然とするマインを尻目に、着地するマーズグパンサー。

その姿は見る見るうちに変化し、可憐な女性の姿になってしまった。

「フッフッフ 頂だニヤ〜ン」

からかうように、チエルシーは、マインを見ながら言った。

先程のマーズグパンサーは、彼女の変装だったのだ。

「な、何すんによチエルシー!!」

「マインって、あまりにも隙多すぎでしょ」

激昂するマインを余所に、さっさとケーキを平らげてしまうチエルシー。まったく悪びれた様子は無い。

一方で、見ている一同は、面白い帝具の登場に、興味がそそられている。

「けっこう便利だな、それ」

「でしょ。好きな物に何でも変装できるからね」

そう言うのとチエルシーは、傍らに置いておいた化粧箱を取り出して見せる。

「化粧箱型の帝具《変身自在ガイアファンデーション》。私の帝具よ」

効果はたった今見せた通り、容積の大小に問わず、何にでも変身する事が出来、その能力を模倣する事も可能になる。例えば、鳥に変身すれば、空を飛ぶ事もできる。

ただし、相応に負担も掛かる為、無理な変身はあまりできないらしいが。

当初、キリトが睨んだ通り、やはりチエルシーは戦闘要員では無く、暗殺専門だった。この帝具を使って標的の近親者に化けて接近し、油断したところを一撃で葬り去るのが、彼女の「殺し」のやり方と言う訳だ。

「メインはもつと隙無くさないと、次の殉職者になっちゃうわよ」

「何よッ あんたの帝具だつてばれたら終わりでしょうが!!」

食つて掛かるメインと、それを適当に居なすチエルシー。

傍から見ると何やら、姉妹みたいで微笑ましい光景だった。もつとも、やる方はともかく、やられる方は不本意極まりない事だろうが。

先述した通り、マージ高地に拠点を移したナイトレイドは、日々の修行も兼ねた狩猟の日々に明け暮れていた。

人跡未踏の高地には、群れで活動している危険種も多く存在している。つまり、それだけ食材が豊富に存在していると言う事だった。

勿論、少しでも油断すれば、自分自身が「食材」になりかねないのだが。

その緊張感が、心身の修養に繋がる訳だ。

シノンもまた、毎日のようにシエキナーを片手に狩りへと出かけていた。

わざわざ学校に休学届を出してまで、今回のマーズ高地行きに同行した彼女である。慣れない土地で惰眠をむさぼる心算は無かった。

元より、新規加入者で、他のメンバーに比べて戦闘力に長けているとは言い難い。一日でも早く皆に追いつく為に、努力は欠かさなかった。

意識を集中して、弓を引き絞る。

息を殺し、気配を殺し、辿る視線の先には、食事をむさぼるネコ科の危険種の姿がある。

更に、意識を絞り込むシノン。

相手は、茂みに身を隠すシノンの存在に気付いていない。

次の瞬間、指が自然と矢を放す。

一瞬の飛翔。

光の矢は真っ直ぐに飛び、

そして、標的を見事に刺し貫いた。

「よしッ」

手ごたえを感じ、喝采を上げるシノン。

あとでレオーネかスサノオ辺りに連絡して、獲物を回収してもらおう。小動物程度の大きさならシノン一人で運べない事も無いが、流石に大型危険種を一人で運ぶ事はでき

なかった。

その時、頭上で一瞬、日が陰った。

振り仰ぐシノン。

そこで思わず、目を見張った。

妖精が、いる。

背中に薄い羽根を4枚広げ、上空を舞う姿は、まさしく可憐な妖精そのものである。

「……………リーファ?」

見入っていたシノンは、そこで相手の正体に気が付き眩いた。

妖精はリーファである。

長い金髪を風になびかせ、手にした長剣で逃げる危険種を追いかけている。

「やアアアアアアアアアアア!!」

すれ違う一瞬、

手にした剣を横なぎに振るう。

そのあまりの剣速に、シノンは一瞬、リーファの姿を見失ってしまった程である。

翼を斬られ、落下していく危険種。

見事な剣の腕前である。兄と比較しても遜色無いかもしれない。

と、



そこで、リーファの方がシノンの存在に気付き、手を振って来た。「シノンさん!!」

そのまま高度を落とし、シノンの元へとやってくる。

その姿に、思わず目を奪われるシノン。

元々、リーファは水準をはるかに上回る美少女である。それが背中羽根と相まって、まるで本当に、絵本の中の妖精が飛び出して来たかのようだ。

「それが、リーファの帝具なの?」

「はい。《妖精舞踏フェアリー・ダンス》です」

それは文献でも見つかっておらず、たまたま遺跡を発掘調査をしていた革命軍の調査隊が発見した帝具である。

イーガーズのランが持つ「万里飛翔マステイマ」同様、数少ない飛行型帝具である。高速巡航が可能で、それ自体が射撃系武装であるマステイマと違い、武器としては使えず、飛行速度も一步譲るものの、低高度域に機動性に優れ、接近戦に長ける者が使用すれば、自在な空中戦が可能となる。

航空戦力と言う意味ではイーガーズに劣るナイトレイドだが、これで制空権を無条件で奪われる心配はなくなった訳だ。

「あの、シノンさん、ちょっと聞いても良いですか?」

「ん、何？」

突然質問してきたリーファに、怪訝な顔で尋ねるシノン。

深刻な顔をしているリーファ。何か深刻な質問があるのかもしれない。

「その……お兄ちゃんの事なんですけど」

「キリトが、どうかした？」

予想された質問だった。

妹としては、自分が知らない間、兄がどのような生活をしていたかが気になる所だろう。

「心配なんです。お兄ちゃん、無茶する事が多いし」

「それは、確かにね」

シノンも納得したように頷く。

今までのキリトの行動を見ると、明らかに無謀と思える行動を何度かしてきている。それを考えれば、リーファの心配はもつともだと言えた。

「前に、お兄ちゃんの仲間だった人たちが全員殺されちゃって、それでお兄ちゃん一人が生き残った時は、本当にひどくて……」

「ちよつと待って」

リーファの言葉を遮るシノン。

「どういう事、キリトの昔の仲間が全員殺されたって？」

「え、お兄ちゃん、話してないんですか？」

今度はリーファが驚く番だった。

キリトの秘密主義は、とことんまで徹底していたらしい。

「お兄ちゃん、昔はナイトレイドとは違う、地方を回りながら、世直しみたいなことをする小規模なチームに所属していたんです。名前は確か……そう『月夜の黒猫団』だったかな？」

正直、聞いてて微妙なセンスの名前だな、とシノンは思ったが、そこはつつましく口をつぐんでおいた。

「それで、一体何があったの？」

「それが、お兄ちゃん、詳しい事は全然話してくれなくて……」

ただ、リーファは今でも覚えている。

身を打つように降りしきる雨の中、一人で村へ戻ってきたキリトの姿は、忘れられる物ではなかった。

ずぶ濡れになり、沈み切ったキリト。

見ていたリーファは、もしかしたら、そのままキリトも死んでしまうのではないかと思った程である。

その後、キリトの噂を聞いてスカウトに来たナジエンダに誘われる形で、革命軍に入り、暗殺者としてナイトレイドになった訳である。

「そんな事が……」

仲間達の死が、キリトを暗殺者としての道へ向かわせた。

だとすれば、それはとても悲しい事のように、シノンには思えるのだった。

3

孤児院からの帰り道。

トキハとアスナは、並んで寮へと向かう道を歩いていた。

ウエイブとクロメは、この後夜勤が入っている為、一足先に詰所の方へと行っていた。

トキハは同年代の少年としてはやや小柄な部類に入る為、並んでみると若干ながらアスナの方が背が高いのが判る。

そんな二人が地面に落としたりした影も同様に、アスナの方が若干ながら長く描かれていた。

「ねえ、アスナ」

そんな時、不意にトキハの方からアスナに声を掛けて来た。

「どうかしたの？」

「さっきの子達……」

トキハは、先ほどの孤児院での事を思い出しながら言った。

あの後、トキハやアスナもウェイブと共に加わり、子供達を交えてゲームなどをして楽しんだ。

クロメはその横で、相変わらずお菓子を独占して食いまくっていたが、そんな彼女も、子供達が遊ぶ様子を見て、心なしか楽しそうにしていたのを覚えている。

「あの子たちに、親はいないの？」

「うん。みんな戦争で焼け出されたり、夜盗に襲われたりしてね」

このようなき時世である。親を失った子供に待つ過酷な運命は、想像に難くない。

親戚に引き取られるのは、最良の部類だろう。大半は奴隸として売り飛ばされるか、浮浪児に身をやつすかといったところである。あるいは、そのまま野垂れ地ぬ可能性だってある。

だが、あそこにいた子供達は皆、幸せそうに笑っていたのが、トキハには印象的だった。

「……………」

「どうかしたの、トキハ君？」

怪訝な面持ちで、トキハを見るアスナ。

僅かな沈黙の後、トキハは口を開いた。

「幸せだね、みんな。アスナや、シスターたちがいて……………」

そう言つて、トキハは再び口を閉じた。

そこでアスナは、前にエスデスから聞かされた、トキハの身の上の事を想いだいた。

トキハの両親は家に押し入った盗賊に襲われ、トキハを残して殺されたと言う。そし

てトキハ自身は、その仇の消息を追つて、この帝国まで来たのだとか。

いわば、あの孤児院の子供達とトキハは、境遇が似ている事になる。

イエーガーズとして、そして復讐者として戦い続けるトキハ。

彼の強さは、危うく脆い。

きつと、誰かが支えてやらなければ、いつか倒れてしまふかもしれない。

「……………トキハ君」

そんなトキハの背中を、アスナは悲しげに見つめるのだった。

修行込みで狩りをしていても、日課だけは欠かす事ができない者である。

キリトは右手にエリユシデータ、左手にダークリパルサーを構え、剣閃を繰り出す。複雑な軌跡を描く、二振りの刃。

その一撃一撃を、指先から切つ先に至るまで、寸分の狂いなくコントロールする。

いかに帝具としてのアシストがあるとはいえ、そのみに頼り切つて戦うのは愚の骨頂である。

万が一、帝具を無力化された時に備え、いつでも戦えるように準備しておくのも重要だった。

「………何か用かよ？」

剣を振り切つた状態で動きを止めたキリトは、振り返らずに背後へと声を掛ける。

低く張りつめた声に導かれるように、草を踏む音が聞こえる。

「気づいてたんだ。相変わらず、勘が鋭いわね」

嘆息気味に立つシノン。

キリトは両手の剣を一振りすると、それぞれの鞘へと戻す。

「それで、俺に何か話でも？」

尋ねてくるキリトに対し、シノンは少し躊躇つたようなそぶりを見せる。

正直、ここから先を聞いても良いのか、と言う想いはある。

だが、やはりどうしても聞いてみたかった。

キリトの過去。

彼が如何にして、今この場に立っているのかを。

意を決して、シノンは口を開いた。

「聞いたわよ、昔のアンタの仲間の話」

「リーファか、余計な事を……」

舌打ち交じりに吐き捨てるキリト。

何やら、昔の古傷に触れられたようで、あまり気分の良い事ではない。

「アンタの事が心配なのよリーファも……」

ややあつて、シノンは付け加える。

「その……私も、ね」

その言葉を聞きながら、キリトは嘆息する。

秘密主義も、度を過ぎれば却って回りが迷惑と言う事である。

「ねえ、キリト。いったい何があったの？ あんたと、あんたの昔の仲間に……」

尋ねるシノン。

ややあつて、キリトは重々しく口を開いた。

目の前の少女は、これまで長く共に戦い続けてきた。



シノンになら、話しても良いと思ったのだ。

「……俺が昔、地方でナイトレイドみたいな暗殺を請け負うチームにいたのは事実だよ」

口を開くだけで込み上げる、苦い味が胸を侵していくのが判る。

キリトは無意識に自分の胸に手をやりながら、ゆっくりと脳内で思い出す。

その頃の事を。

「もう聞いているかもしれないが、月夜の黒猫団は、俺を含めて6人の小さなチームだった。ナイトレイドみたいに革命軍がバックにいる訳でもなく、活動費だって自分達で稼がなきゃいけないかったくらいだしな」

チームリーダーのケイタを筆頭に、ダツカー、ササマル、テツオ。

そして、チームの紅一点であり、キリトにとっては剣の弟子でもあったサチ。

皆、キリトにとって、掛け替えのない仲間達であった。

幼いころから剣術の才があったキリトは、月夜の黒猫団の一員となつて戦う事で、多くの人々を救つたものである。

だが、ある時、とある領主の依頼を受けて仕事を行った月夜の黒猫団は、キリト一人を残して全滅する事になる。

「後で知つただけで、その依頼は領主の罠だつんだ」

帝国にとって、地方で活動しているとは言え、月夜の黒猫団のような存在は目障りではなかった。

そこで、その領主は月夜の黒猫団に依頼すると見せかけて、彼等を帝国軍が待ち伏せしている場所へと誘導し、包囲して襲い掛かった。

罠であると悟った月夜の黒猫団はとっさに応戦しようとするが、数があまりにも違い過ぎた。

次々と討ち取られ、倒れていくメンバー達。

リーダーのケイタは皆を助けようと奮戦したが、やがて多勢に無勢となり、翩り殺しにされて討ち取られた。

その頃、既にエリユシデータを得て帝具使いになつていたキリトは奮戦し、二ケタに上る敵を斬り捨て、それに倍する敵を圧倒した。

その時、キリトの胸にあつたの事は、ただ一つだけ。

残つたサチだけは守る、と言う想いだけだった。

だが、その想いもまた、目の前で踏み躪られる。

兵士の剣で斬られるサチ。

助けようと伸ばしたキリトの手は、空しく空を切った。

最後に、一瞬だけ目が合った時、サチはキリトに対し、優しく微笑みかけていた。

「……その後、どうやって助かったのか、正直なところ覚えていない。気が付いたら村に居て、リーファの前に立っていた」

胸の内にあつたのは、否応の無い虚無感のみ。

なぜ、自分だけが生き残ってしまったのか？

なぜ、あの場で皆と一緒に死ねなかつたのか？

エリユシデータの柄を握るたび、キリトはそんな思いに捕らわれる。

思い出されるのは、サチの最後の笑顔。

優しい娘だった。決して、戦いに向いていた訳ではない。だが、彼女は戦い続ける道を選び、キリトに剣を教わっていた。

そんなサチを、いつしかキリトもまた、大切に思うようになっていたのだ。

もつとも、その事に気付いた時は、既に彼女は亡くなつた後だったのだが。

「サチ達は死に、俺は生き残つた。だから俺は、彼女達の意志を背負つて、帝国と戦い続けるんだ」

そう呟いたキリトの目には、悲しい決意の光が溢れている。

そのように、シノンには思えた。

想像以上に、壮絶な過去を、この少年が背負つて立っている事が判つた

そして、その過去こそが、キリトと言う少年の強さの源泉だと言う事も。

しかし、

同時にキリトの持つ強さは、脆く危うい物である。

ふとしたきっかけで、崩れ落ちるかもしれない。

支えてあげたい。

シノンには、心の中で密かに、そう思うのだった。

そして、

それは奇しくも、遥かに離れた帝都で、彼女の親友が、1人の少年に対して抱いた想いと同じであると言う事に、

未だにシノンも、

そしてアスナも、気付いてはいなかった。

第24話「少年の心、少女の想い」

終わり

## 第25話 「夜烏達の帰還」

1

謎の新型危険種現る。

そのニュースは、帝都中を恐怖のどん底へと陥れた。

出現当初は、鉾山や密林等、めったに人の入らない場所のみ出没し、被害も最小限に抑えられていた。

しかし、先日、ついに新型危険種は人里に出没し、遭遇した村人に犠牲者が出た。

特にひどかったのは、臨月を間近に控えた母子と、その夫が犠牲になった事件である。

平和だった家族は、生まれてくるはずだった未来共々、理不尽に食い散らかされたのだった。

この事態に、流石の帝国も、重い腰を上げざるを得なかった。

帝国政府は事態解決の為に、軍と、切り札であるイエーガーズの投入を決定。危険種駆除に当たさせた。

とは言え、帝国政府。特にオネスト大臣は、何も民衆の為を思つて危険種退治に乗り出した訳ではない。

そもそも彼は、民衆などに一切の気を払つてはいない。いくら死のうが知つた事ではないのだ。

せいぜい心配している事があるとするれば、輸送路を新型危険種に襲われて、自身の必要な物資や食材が手元に届かない事くらいだろう。それとて、税金を湯水のように使つて酒食を貪つているオネストからすれば、大した問題とは言えないだろう。食べる物が無くなれば、他から持つて来ればいいだけの話。その結果、民が飢えようが、野垂れ死のうが知つた事ではなかった。

今回、軍やイエーガーズの出撃を承認したのは、ただ単に、新型の危険種と言う存在に興味があつたからに他ならない。

その為、オネストはエスデスに事を依頼する際、必ず数匹は生け捕りにして持ち帰るように依頼していた。

これは、エスデスにとつてもある意味、渡りに船な事態だった。

既に帝都周辺の賊はほぼ一掃され、ナイトレイドも活動を控えている状況で、イエーガーズとしても手持無沙汰になりつつあったところである。

また、エスデス自身も、新型危険種に興味を抱いていた事から、オネストの依頼を二つ返事で了承していた。

業者へ納品予定の荷物を乗せた荷馬車が、幾分、速いスピードで駆けていく。

本来のスピードを、大幅に上回る速度だ。

その馬車を操る御者の顔は、恐怖の為にひきつっているのが判る。

「は、早く。こんな危険地帯おさらばしようぜ」

「ああ、何とか、明るいうちに帝都に入ってしまったおう」

恐怖に震えながら、手綱を操る。

新型の危険種が帝都近辺で猛威を振るっているのは、2人も知っている。それによる被害が、急速に拡大しつつあることも。

こんな場所で行くわしたら、まず命は無いだろう。

幸いにして、帝都の巨大な城壁は視界の彼方に見え始めている。このまま行けば、明るいうちに城門を潜る事ができるはず。

壁の中に入ってしまったえば、流石に安全の筈。

そう思った時だった。

突如、傍らの森の中から、巨大な影がぞろぞろと歩み出てくるのが見えた。

人間に数倍する巨体を誇り、まるで子供が土をこねて作った泥人形のようなグロテスクな外見。

間違いないく、新型危険種である。

「で、出たア!!」

驚愕する御者。

馬もまた、突然現れたか物に驚き、前足を上げて急ブレーキをかける。

そこへ、獲物を見付けた危険種たちは、一斉に襲い掛かった。

巨体でありながら、人間に数倍するスピードと跳躍力でもって襲い掛かってくる危険種。

御者の運命は、もはや決したも同然である。

迫る危険種に対し、ただただ恐怖に震えるしかない御者達。

次の瞬間、

危険種に負けない程の巨体が横合いから飛び出して来たかと思うと、首を刈り取るような勢いで危険種にラリアットを仕掛けた。



突然の奇襲攻撃に、吹き飛ぶ危険種。

一方、吹き飛ばした相手は、その巨体を持ち上げるように、ゆっくりと起き上がる。ボルスだ。

「間に合った」

安堵の声が、マスクの下から聞こえてくる。

エスデスより出撃の命令を受けて哨戒しつつ、危険種の探索に当たっていたボルスは、間一髪のところ、御者達を助ける事が出来たのだ。

ボルスを強敵と見定めた危険種たちが、一斉に襲い掛かってくる。

だが、ボルスも負けていない。

焼却部隊と言う、一見すると「戦闘」とは縁の薄い部署に所属していたボルスだが、彼もまた軍人として常に体を鍛える事に余念がない。それは、筋骨隆々とした肉体が全てを物語っているだろう。

もし、帝具無しで生身の肉弾戦をやれば、イエーガーズの中ではエスデスに次ぐ強さかもしれない。

襲い掛かって来た危険種の腰を掴み、そのままバックドロップの要領で脳天から地面に叩き付ける。

更に、倒れた危険種の足を掴むと、ジャイアントスイングを掛けて回転。周囲に群が

ろうとしていた危険種もろとも吹き飛ばす。

まさに、圧倒的と言つて良いボルスの攻撃を前に、危険種たちが明らかな怯みを見せる。

そこへ、小柄な影が割り込むのが見えた。

「ボルス、飛ばし過ぎ」

「ごめんね、でも急いでたから」

ボルスの言葉を横に聞きながら、トキハは身を低くして駆ける。

目の前に迫る危険種。

だが、俊敏なトキハの動きに、全く追隨できていない。

間合いに入ると同時に、玉梓を抜刀する。

鋭く斬り上げた剣閃が、危険種を逆袈裟に一刀両断する。

更にトキハは、その危険種の死体に足を掛けて跳躍。頂点に達すると同時に急降下を掛け、背後にいた危険種をも斬り捨てた。

そのトキハの傍らでは、アスナがランベントライトを片手に危険種に迫っている。

「やア!!」

短い気合いと共に放たれる高速の8連撃は、まるで流星の如く危険種に殺到。急所を的確に刺し貫いて行く。

更に目を転じれば、ウェイブ、シリカ、セリユー、ランも、それぞれ危険種を撃破しているのが見える。

人々を恐怖のどん底に陥れる危険種も、イエーガーズに掛かれれば子ども扱い以下である。

「トキハ君、アスナちゃん、敵を一カ所に集めて!!」

「判った……」

「了解です!!」

ボルスの指示に従い、危険種を追いたてるトキハとアスナ。

同時に、ボルスはルビカントの噴射ノズルを構える。

「これで確実に、仕留める!!」

「射線上」から飛び退くトキハ。やや遅れてアスナも続く。

2人が退避するのを見届けると同時に、ボルスはトリガーを絞った。

一斉噴射される炎。

トキハとアスナの手によって一塊に纏められていた危険種たちは、成す術も無く炎に包まれていく。

やがて、数匹だけ残った危険種は森の中へと逃げていき、残りは全て、灰になるか動かなくなってしまう。

敵の全滅を見届けたボルスは、震えている御者達の方へと振り返る。

「もう安心です、皆さん」

軽やかな声で、相手に告げるボルス。

だが、

「ひ、ひイイイイイイイイイイ!?!」

そんなボルスの姿を見て、御者達は却って怯えて後ずさる。

「あ、あの、危険種は倒しましたので・・・もう、怯える必要は無いんですよ」

そう言つて、ドスドスと御者達に歩み寄るボルス。

だが、ある意味、危険種よりも凶悪で不気味な姿の男が迫つて来れば、誰だつて怯え

てしまうのも無理はない。

逃げ出そうとする御者。

その肩を、背後からセリユーが軽く叩いて落ち着かせる。

「もう大丈夫ですよ。正義の炎が悪を滅しました」

そう言つて声を掛けるセリユーの姿に、ようやく御者達も落ち着きを取り戻している。

そこへ、ランベントライトを鞘に収めながら、アスナもやつて来た。

「特殊警察イエーガーズです。皆さんの事は、帝都の城門までお送りしますので、ご安心

ください」

「ああ、帝都の軍人さんだったんですね!!」

「た、助かった……」

安堵の声を漏らす御者達。

見た目ひとつで、この態度の違いである。現金な物、と言うほかなかった。

その様子を、ボルスは静かに見つめている。

「あの、ボルスさん、どんまい」

「て言うか、せめてマスクは取るべき」

ウェイブとトキハに励まされるボルス。

ややあつて、ポツリと声を漏らす。

「あの人たち……」

落ち込んでいるのか？

と思つた瞬間、ボルスの声は明るく転じた。

「落ち着いたみたいだね、良かったー」

どうやら、さして気にしていない様子である。

そんなボルスの姿に、ウェイブとトキハは顔を見合わせながら苦笑を浮かべた。

一方その頃、戦場から逃走した3匹の危険種は、一目散に走っていた。

ほとんど自我らしいものを持たない彼等であつても、イエーガーズが自分達の敵わない程の強敵である事は理解できるらしい。

とにかく、少しでも遠くへ。

それだけを念じるように走る。

だが、

そんな彼等の足元に急速に発生した氷が、一気に飲み込んで行く。

その間、僅か刹那。

一瞬にして巨大化した氷柱が、全ての危険種を氷漬けにした。

「捕獲完了だ」

ごくあっさりとした口調で告げるエスデス。

彼女に掛かれば、この程度の仕事は眠つていてもできる程、簡単な物である。一応、念のためにクロメも同行しているが、彼女の出番は完全に皆無だった。

「なるほど、これは確かに見た事が無いタイプだな」

自身が氷漬けにした危険種を見上げながら、エスデスは感心したように言う。

本来の危険種は、獣や、もつと不可解な怪物のような姿をしている場合が多い。しか

し、この危険種は姿こそグロテスクだが、明らかに人間の形をしていた。

と、エスデスと並ぶ形でクロメもまた、じーつと氷漬けにされた危険種を眺めている。

「……………ジュルリ……………ゴクツ」

喉を鳴らすクロメ。

「……………食うなよ」

「ハッ!？」

帝都の宮殿内に、イエーガーズの詰所が置かれている。

元々は別の用途で建造された建物だったのだが、現在は特に使われてもいなかった為、皇帝から下賜されると言う形でエスデスに払い下げられ、それを本部として使用しているのだった。

予定外の危険種狩り任務を終えて帰還したイエーガーズの面々は、思い思いの様子でくつろいでいた。

ウェイブとクロメはチェスで対決をしており、その傍らではトキハとアスナ、シリカが戦況を見守っている。

エスデスは捕えた危険種と共に大臣に報告に行っており、ランはそれに同行している

為、この場にはいなかった。

そこへ、湯気の立つお盆を持って、ボルスがやって来た。

「みんな、お茶が入ったよ。一息入れよう」

そう言つて、それぞれ専用のカップに満たされたお茶を飲み始める。

そんな中一人、ウエイブは何か憂いを抱えたような瞳で下を見ていた。

「どうかしたんですか、ウエイブさん？」

「もしかして、お茶、まずかった？」

「い、いや、そうじゃないんだ」

心配そうに尋ねてくるシリカとボルスに、ウエイブは力無く首を振りながら答える。

「俺、悔しいんだ。ボルスさんはこんなに優しい人なのに、さっきの商人たちみたいに、それを判らない奴等は、あんなふう」

ボルスを恐れ、差別していた商人たちの事を思いだし、苦々しく吐き捨てるウエイブ。

人間の印象は見た目で判断される事が多いが、確かにそう言う意味ではボルスは割を食う事が多いかもしれない。

それにしても、

「人の事が言えるの？」

「同感。ウエイブにだけは言われたくないと思う」



「しまったアアア そうだったアアア!!」

ボソツとツツコムクロメとトキハの言葉に、ウエイブは思わず頭を抱える。

イエーガーズ結成初日、ボルスの容姿を見てビビッていたのは唯一、ウエイブだけである。

まさしく「お前が言うな」状態だった。

「まあまあ、クロメちゃんもトキハ君も、それくらいで」

2人を窘めつつ、マスクの下で苦笑するボルスは、そのままウエイブに向き直った。

「ウエイブ君がそう言ってくれるのはありがたいんだけどね、私は優しくなんかないよ」  
言いながら、ボルスは自分の手を眺める。

「疫病に掛かった人たちを村ごと焼き払った事もあるし、無実を主張している人を、処刑命令で燃やした事もある。だから私は、数えきれない人から恨みを買っていると思う」

ボルスの手は、血と灰によって汚れきっている。

そしてその事を誰よりも、ボルス自身が自覚していた。

「でも、それは軍人として、命令で!!」

「誰かがやらなきゃいけないとは言え、業は業。助けた人にああいう態度を取られるのも、報いだと思っている」

勢い込んで言い募ろうとするウエイブを制して、ボルスは低い声で制する。

罪には罪の報いを。

いずれ、罰が下される事すら、ボルスは既に受け入れているのだ。その果てに、自分の命が失われる事になろうとも。

「……悲しすぎるよ、そんなの」

ウェイブは、吐き捨てるように呟く。

まだ若いウェイブは、ボルスのように達観した物の見方ができる程、成熟していなかった。

だがそれでも、目の前の立派な先輩の力になってやりたいと思った。

「俺で良ければ、いつでも相談に乗りますよ、ボルスさん」

そうウェイブが声を掛けた時だった。

扉が開き、一同の視線が入口の方へと集中する。

そこには、小さな女の子を腕に抱いた、美しい女性が入ってくる場所だった。

「あーなたっ」

「パパー!!」

入って来たのはボルスの妻と、娘のローグだった。

2人は一家の主の姿を見付けると、嬉しそうに駆け寄ってくる。

その姿には、ボルスも驚いたようである。

「ややッ 2人とも、どうしてここに!?!」

「あなたつたら、朝、一緒に作ったお弁当、忘れていくんですもの。シリカちゃんは、ちゃんと持っていったのに」

そう言うのと、男性サイズの大きな弁当箱を差し出してくる。どうやら、それを届ける為にわざわざ来てくれたらしい。

「ハッハッハ、コイツはしまった」

「パパのうっかりものー」

おどけた調子で自分の頭を叩くボルスに、ローグも愛らしい笑いを浮かべる。

そんなローグの姿を見て、シリカもピナを従えて駆け寄ってきた。

「ローグちゃん、遊びに来てくれたんですか?」

「キューアー」

「あ、シリカおねえちゃん!! ピナちゃんも!!」

そう言うのとローグは、母親の腕からピヨンと飛び降りて駆け寄って行く。

その娘の後姿を、ボルスは微笑ましく眺める。

「妻と娘は、私のやっている事を全部知っていて、尚も応援してくれているの。だから私は、辛い事があっても、家族がいれば全然平気」

そう告げるボルスに、ウェイブやトキハも、笑みを返す。

家族の為に生きる。

それがボルスが戦う原動力であるのなら確かに、他の辛い事など些事に過ぎないのかもしれない。

2

さて、

新型危険種出現の報に、俄かに動きを見せたのはイエーガーズだけではなかった。

革命軍の斥候部隊や偵察員。更にアルゴやエギルと言った協力者達から複数の情報を得たナイトレイド達も、マーズ高地における修行の日々にピリオドを打ち、新たなる拠点へと帰還を果たしていた。

新たなるアジトは規模や内装、立地条件など、旧アジトと似通っている点が多く、隠密性にも優れて居る。暗殺者達のアジトとしては、まさに最適と言えた。

だが、ナイトレイド達は、のんびりと惰眠をむさぼる為に帝都に帰還した訳では、無論ない。

各々、荷解きもそこそこに会議室に集まると、さっそくナジエンダを中心に状況確認に入った。

「戻ってきて早速だが、今回の任務は例の新型危険種どもだ」

一同が揃ったのを確認すると、ナジエンダはそう切り出した。

「奴等は群れで行動するケースが多く、僅かながら知性も見受けられる。個々の身体能力も強く、腕試しの武芸者も、挑んではやられているらしい。今でも帝都から南部の鉱山、森林に広く潜み、貪欲に人や家畜を喰らっている。毎日のようにイエーガーズや帝国兵達が駆除しているが、数が多く、まだ残りがいるらしい」

凶暴で強力、狡猾。かつ多数。

それだけでも厄介極まりない存在である。帝国側がどの程度倒したのかは判らないが、こちらも気を引き締めてかかる必要があるが、ありそうだった。

「罍の可能性はなさそうね」

「そうですね。帝国兵にも犠牲者が出て居るみたいですし」

マインの呟きに、リーファが肯定を返す。

ナイトレイドをおびき寄せるための罍、と言うのも当初は疑われたのだが、まさか帝国軍も、自軍の兵士を無駄に犠牲にしてまで罍を張ると思えなかった。流石にDSのエスデスでも、そんな非効率な事はしないだろう。大臣あたりなら考えてもおおしく

はないが。

「奴等の出現。パターンは？」

キリトが尋ねる。

現状では情報が少なすぎる。相手の特性を少しでも知りたかった。

「不明だ。当初は夜にならないと出てこないから夜光性かと思われていたが、最近では昼間でも堂々と現れるらしい」

「パターンも何もあつた物じゃないですね」

説明を聞いて、シノンが嘆息する。

あわよくば作戦を立てて先回りできれば、と思つていたのだが、これでは効果的な作戦など立てようが無かつた。

「言つてしまえば帝国に協力する形になるが、良いな？」

「勿論だぜ。今回は事情が事情だ！」

「話を聞く限り、速やかに葬るべき連中だ」

確認するように尋ねるナジエンダに、タツミとアカメが力強く頷きを返す。

民を害すると言う意味では、帝国も危険種も変わりがない。

その危険種を狩ると言うのだ。否やがある筈も無かつた。

ただ、当然ながら、下手に動けば帝国兵やイエーガーズと鉢合わせしてしまう可能性

もある。故に、そこら辺は調整し、帝国側が昼間の狩りに出るなら、ナイトレイドは夜の活動に重点を置くべきだろう。

元より、暗殺者の仕事は夜が基本である。

だが、

「ん〜・・・大きな危険を冒して化物退治ねえ。そんなのイエーガーズに任せておけばいいのに。みんな、ちよつと甘いよ」

苦言を呈したのは、壁に寄り掛かって一同のやり取りを眺めていたチエルシーである。

彼女としては危険種狩りはイエーガーズに任せ、自分達は戦力を温存すべきである、と考えているようだ。

イエーガーズとて帝具持ちである。彼等が危険種に敗れる可能性は無いだろうし、わざわざリスクを侵す必要性は無いようにも思われる。

だが、

「言いたい事は判るよ」

タツミが、固い口調で口を開いた。

その瞳には既に戦意の炎が浮かび、決意に満ちた表情が伺える。

「でも、こいつらは今も、誰かを襲っているかもしれないんだ。俺達は殺し屋だけど民の

味方のつもりだ。殲滅を早めて、1人でも多くの民を助けたい」

不退転の意志を示す少年。

その姿は、1人の男として成長した堂々たる姿が見て取れる。

誰もが、タツミの勇氣に同調するように頷く。

彼の言うとおり、民の味方であるならば、民が苦しむ今こそ、立ち上がる時だった。

「……まあ、そう言うと思つたよ。了解了解」

そう言つて肩を竦めるチエルシー。どうやら、彼女自身もこうなる展開は、初めから予想していたようだ。だが一応、注意喚起の意味でも発言したのだろう。

勿論、チエルシーの発言にも一利以上の価値はあるのだが、それでもやはり、民を見殺しにはできなかつた。

誰もが誇らしげに、タツミを見る。

その時だった。

「ツ!」

タツミの横に立っていたスサノオが、驚愕に目を見開く。

そして、重々しく口を開く。

「……タツミ、お前に一言、言っておきたい事がある」

「どうしたんだよ、スーさん？」



訝るタツミに、スサノオは深刻な口調で言った。

「ズボンのチャックが開いている。気になるから閉めてくれ」

見れば、  
確かに、

タツミのズボンの、股間にあるチャック。古式ゆかしい言い回しで「社会の窓」と呼ばれる場所が全開になっていた。

何と言うか、

先程の格好良さが、完全に台無しである。

チ————ッ

何とも、哀愁の漂う感じの音を立てて、チャックを上げるタツミ。

次の瞬間、

「せっかく決めたのに、カツコ悪ウウウウウ!!」

「ねエねエ、今どんな気持ち? どんな気持ち?」

大爆笑しながらタツミをからかうレオーネとラバック。

一方で、マインは顔を赤くしてそっぽを向いている。

「格好つけるからよ」

「マイン、どうかした?」

尋ねるシノンの呼びかけにも答えず、マインは口の中で何やらぶつぶつと言っている。

そんな中、

「すまない、タツミ……」

アカメが悄然とした態度で、タツミに謝って来た。

「気付いてはいたが、ファツシヨンかと思っていた」

「俺はそんな、開放的で自由な人間じゃないから!!」

何と言おうが、チャック全開のせいで、何をどうしようとも決まらなかつた。そんなタツミの前に、アカメは静かにしやがみこむ。

「これからは、注意して時々見よう」

「イヤアアア そんなのやめてエエエ!!」

さつきまでの恰好良さは何だったのか？ タツミは股間を隠しながら涙を流す。

「俺は民を救いたい。チャック全開で」

「ハッ倒すぞラバ!!」

「気にするな。お前のチャックは民の為に開いていたんだろう?」

すかさず追い打ちをかけるラバックとレオーネ。

そんな様子を、キリトは苦笑しつつ眺める。

何にしても、新生ナイトレイドの再出発だ。

その先に待つ激戦と勝利。そして革命が成功するその日まで戦い続けよう。

背中に負った、二振りの剣と共に。

そう心に誓うのだった。

## 第25話 「夜鳥達の帰還」

終わり

## 第26話「元凶」

1

典型的な少数精鋭部隊であるイエーガーズは、圧倒的な武力を誇るエスデスを頂点に頂く、トップダウン形式の機動部隊的な性格を持っている。

そのイエーガーズには、副長と言う立場の人間は、明確には存在しない。大抵の事は、エスデスが自分でこなしてしまう為、その役職は必要無いのだ。

ただ、落ち着いた性格で、隊員達のまとめ役になる場合が多いランが事実上、副長的な立場になり、それが暗黙の了解として成立していた。

そのランと共に花を愛でながら、エスデスは固い口調で口を開いた。

「ラン、お前にだけは話しておくが、先日、捕縛して大臣に引き渡した新型危険種だが、

「どうやら元は人間らしい」

「やはりそうでしたか……身体的特徴が一致していたので、あるいは、と思っていたのですが……」

ランの方でもある程度予想していたらしく、冷静な返答が帰ってくるが、これについても、エスデスの予想通りである。

ランはイエーガーズ隊員達の中で、最も思慮深く冷静沈着な思考を併せ持っている。故に、戦いながら相手の特徴を分析し、自分なりの考えを確立していたのだ。

「人間を危険種に変える。そんな真似ができるのは帝具使いのみ。それも、相当科学的知識に長けた人間に限られる」

言いながらエスデスの、そしてランの脳裏に、1人の人物が思い浮かべられる。

そんな事ができる人間の心当たりなど、1人しかいなかった。

「あの危険種たちはドクターの実験体……かもしれないね。出現が彼の行方不明から、暫くしてからなので」

スタイリッシュ程の科学的知識と、外道の手段であつても躊躇いなく実行する狂気があれば、あるいは可能かもしれない。あつた。

「他に根拠は？」

「以前、トキハ君たちと共にドクターの研究室を調べた時、やけに淡泊だと思ったんで

す。もっと色々な数の研究をしている筈なのに、中は大人しい物でした。恐らくは、どこか別の場所に、秘密の研究室があったものと思われます。今回の件は、そこにつなぎ止めていた危険種が出てきたためではないでしょうか？」

ランの推測が正しいとすれば、スタイリツシュは帝国すら欺いて、違法な実験をしていた事になる。

「まったく別の、第三者の帝具、という可能性もありますが……」

「それにしても無秩序すぎる、か？」

「はい」

エスデスの言葉に、ランは頷きを返す。どうやら両者は、一致した見解を持っているようだ。

そうになると、やはりスタイリツシュの死は、タツミ探索中に敵と遭遇したのではなく、敵のアジトを襲撃して実験体にしようと捕獲を試みた時に、逆に返り討ちにあった、と見る方が可能性は高かった。

「……………」 思ったよりもずっと、狂った男だったのかもしれない

そうまでしてスタイリツシュは、何を求めていたのか？

彼がいなくなった今となっては、その問いに答えを出せる存在もまた、いなかった。

「しかし、危険種の数にも限りがある筈。今も他の皆さんが駆除を行っています

し………」

「この問題は、それで終わりじゃないぞ」

ランの言葉を遮ると、エスデスは立ち上がって振り返る。

「そもそもそいつらは、本当に自力で出て来たのか？ 誰かに鍵を解き放たれたのではないのか？」

エスデスの指摘に、ランはハツとする。

確かに、その可能性は大いにあり得る。

危険種の凶暴性についてはスタイリツシュも充分に承知していた筈。ならば、檻に入るなり、薬で冬眠状態にするなり、それなりの対応措置を取ったはず。

それが、スタイリツシュの死とタイミングを合わせるように、外界に解き放たれた。偶然にしては、あまりにもできすぎている。

「判りました。この件、私も色々と調べておきます」

「任せたぞ。これは思ったよりも、根が深い問題かもしれない」

調べていけば案外、予想もしていなかった物が出てくるかもしれない。

エスデスは内心で、そのような事を考えていた。

ところで、ランは先ほどから一つ、気になっていた事を試みに尋ねてみた。

「それにしても、隊長が花を愛でるとは、珍しいですね」

エスデスは水準を遥かに上回る美人なので、花を背景に見ると一見、非情に絵になる光景のように思える。

しかし、普段のドSな性格と、彼女自身から発せられる強烈且つ凄惨な雰囲気、その印象を完膚なきまでに粉碎していた。

だが、やはりと言うべきか、エスデスの口から出てきた言葉は、可憐さとは似ても似つかない物だった。

「この花の成分は傷口に塗り込むと、激痛を誘発する。軽い拷問に使えるんだ」  
「なるほど、勉強になります」

エスデスの説明に、感心したように頷くラン。

流石、履歴書でも書かせれば「趣味：狩り、及び拷問」とでも書きそうなエスデスの事。その研究にも余念がなかった。

## 2

流石に、連日にわたって行われている軍とイエーガーズによる駆除作業が功を奏して



いるのか、出現する危険種の数は、当初に比べてかなり減少してきていた。

被害範囲も急速に減少し、徐々に追い詰めている感がある。

ナイトレイドが密かに駆除作業に参加した頃には既に、ほとんど危険種の影を見る事も無くなっていった。

「やっぱり、この辺の奴等は完全に狩り尽くされたのかね」

月明かりの下、フェイクマウンテンの山道を歩きながら、ラバックがぼやくように呟く。

現在、ナイトレイドは2班に分かれて、探索行動を行っていた。

1班は、キリト、シノン、タツミ、ラバックの4人。

もう1班は、アカメ、レオーネ、リーファ、マインの4人。

リーダーのナジエンダと、その帝具であるスサノオ、そして直接的な戦闘力の低いチエルシーは、アジトに待機して不測の事態に備える事になっている。

万が一の場合、探索班は更に2隊に分かれて行動する事もできる、臨機応変な編成となっていた。

「実は兵士が野営していたりしないだろうか？」

「帝都から近い分、夜は引き上げてるって報告にあつたら。アルゴさんからの情報にも同じこと書いてあつたし、間違いないって」

臆病なくらい慎重な発言をするラバックに対し、タツミは先を歩きながら答える。

帝国軍としては、夜に敵の襲撃を受けるリスクを避ける為、なるべく昼間に行動するようにしているのだ。

そんなタツミを見ながら、ラバックは呆れたように反論する。

「お前ね。臆病さつてのは、殺し屋の必須項目でもあるんだぞ。ナジエンダさんだってそう言つてたんだ。覚えとけ、コラ」

「それ、ラバが言うと言得力あるよな」

ラバックの言葉を混ぜ返すキリト。

何しろ、ラバック程、仲間内で臆病かつ慎重な者はいない。

常に強敵とは戦わず、自身を安全圏に置いて戦うのがラバックのやり方である。

と、書けば悪い事のように聞こえるが、決してそうではない。

ラバックは常に状況を見極め、自身ができる最大限の支援行動で仲間を助ける。それがラバックの戦い方だ。

クローステールは帝具の中でも特に、支援行動に適している。だからこそラバックは、自分が安全圏を確保する事で、仲間達を守るための戦いをしているのである。

ラバックが万全の状態で背中を守ってくれるからこそ、キリト達は正面の敵に全力を向ける事ができるのだ。

それに、

キリトはラバックを見ながら、密かに思う。

訓練などでも直接戦った事はないが、ラバックの戦闘力は侮れない物があると感じて  
る。

能ある鷹は爪を隠すと言う言葉もあるが、ラバックは自分の実力を隠していると思う  
事が時々あった。

「そう言えば……」

タツミが、ふと何かを思い出したように口を開いた。

「ラバって、ボスの事『ナジエンダさん』って呼ぶんだな」

「えっと、それは……」

タツミの言葉に、言い淀むラバック。

「それなら、私も『ナジエンダさん』だけど？」

「いや、そうなんだけどさ……ラバの言い方とシノンの言い方だと、微妙にニュ  
アンスが違うって言うか……」

一同がラバックに視線を集中させる中、

ラバックは照れくさそうに頬を掻きながら、口を開いた。

「ま、まあ、そりゃあ、な……俺とあの人は、帝国軍時代からの付き合いだから

な」

ナイトレイドの中で、ナジエンダと最も付き合いが長いのはラバックである。

地方に居を構える大商人の四男坊だったラバックは、子供の頃から何不自由ない暮らしをしてきた。

望めばどんな高価な物でも手に入ったし、頼んでもいないのに周囲の人間がくれた贈り物の山に囲まれていた。更に生来から手先が器用で、どんな事でもそつなくこなす事が出来たのだ。

しかし、持つ者の悩みというべきか、何でも手に入り、何でもできるラバックにとって、世界は退屈極まりない物だったのだ。

「何かお前、嫌な奴だな」

「最低ね」

「生きてて恥ずかしくならないか？」

「これから泣けるんだから聞けよッ あとキリト、お前ひどくねッ!」

一同から総スカンを喰らうラバックは、気を取り直して説明に戻る。

そんな退屈な日々を漫然と過ごしていたラバックだったが、それが激変する日が来た。

ラバックの住んでいた街の地方警備隊指揮官として、既に將軍の地位にあったナジエ

ンダだった。

当時のナジエンダは、大人の麗しさと少女らしい可憐さを併せ持つ、それは美しい女性だった。

一目ぼれだった。

まさに、心を奪われた、と言って良いだろう。

そこでラバックは、これまでの人生で最大限の努力をして帝国軍兵士となり、更に持ち前の器用さで、あつという間にナジエンダの傍仕えにまで上り詰めた。

そして、運命の決断の時。

ナジエンダから革命軍入りを決断した時、ラバックは自身の死亡報告書を偽造してまで、彼女について行ったのだ。

「健気だろ、俺って……」

哀愁を漂わせてラバックは言う。

「でも、報われないんだ。悲しいぜ……泣ける話だろ？」

叶わぬ恋。

届かぬ想い。

それを判っていて、ラバックはナジエンダとともにいる道を選んだ。そこに、ラバックと言う男の心があるような気がした。

「ラバ……」

そんなラバツクの男気を感じ入り、そつと肩を叩くタツミ。

次の瞬間、

「じゃあ、まず他の女の風呂を覗こうとするなよ!!」

「ハア!?!」

至極まつとうなツツコミをした。

「好きな人がいるのと、可愛い女の子を見たいって欲求は別だろ?! 何言ってるの、お前

!!」

「そんなんだから報われねんだよ!!」

まったくもって、タツミの言う通りだった。

その時、

闇の中で、一筋の光が照らしだされる。

すぐ傍らで。

ギョツとする一同に傍らで、容赦なく弓を引くシノンの姿がある。

「し、シノンちゃん、ちよ、危ないって、それ!?!」

シエキナーを向けられ、ホールドアップするように両手を上げるラバツク。

対してシノンは問え言え言え、口元には笑顔を浮かべつつも、鍔は真つ直ぐにラバツク

を狙い続ける。

おー、笑いながら殺気を放つとか、シノンも成長したなー、とキリトが呑気に感心している、シノンは口を開いた。

「まさかと思えますけどラバックさん。私のお風呂も覗いたりして無いですよね？」

「し、してないしてない、マジで!!」

「何か信用できないんですけど？」

「信じてー!!」

下手な発言をすれば、本気でラバックの頭を吹き飛ばしかねない勢いである。

「まあまあ、シノンも落ち着けて。話が進まないから」

そう言ってシノンを宥めるキリト。

本気かどうかは知らないが、こんな事でラバック殉職、なんて事にでもなれば流石にシャレにならなかった。

「まあ、ラバの男気については、今のやり取りも含めて全部、後でナジエンダに報告しておくとして……」

「キリトオ!! お前は鬼か!?!」

「どうやらマジで、この辺に敵の気配はないな」

涙目で抗議してくるラバックを無視しつつ、キリトは周囲を見回す。

これだけ探索を続けても件の危険種が現れないと言う事は、山の方は軍やイエーガーズによって狩り尽くされているのかもしれない。

もしかしたら、別行動をしているアカメ達の方が襲撃を受けている可能性もあるが、向こうも一騎当千のメンバー揃いである。心配はいらなかった。

「二応、変身して頂上の方も見て来るよ。もしかしたら、そつちに何かいるかもしれないし」

そう言うのとインクルシオを起動し、鎧をまとうタツミ。

「何かいても、すぐ戻ってこいよ。必ず全員で掛かるぞ」

「おう!!」

注意するラバツクに頷きを返すと、タツミは跳躍して山頂方向へと向かう。

インクルシオによって強化されたタツミの動きは、俊敏そのものである。物の数秒で、その白い鎧姿は闇に紛れて見えなくなっていた。

「大丈夫かな、タツミ君？」

「まあ、インクルシオの能力なら、仮に奇襲を受けても、持ち堪えて戻ってくるくらいできるだろ」

タツミを心配するシノンに、キリトはそう言って笑い掛ける。

タツミも実力を上げてきているし、状況判断力も身に着けている。決して無理に戦お



うとはしないだろう。

「よし、俺達はタツミが帰ってくるのを待って……」

言いかけたラバツクは、

不意に、何かに気付いたように、険しい表情を造った。

「どうした、ラバ？」

「麓から接近してくる奴がいる。やばいくらいのスピードだ」

ラバツクはクローステールの糸を使い、自分達が歩いてきた麓一帯に結界を張っている。何かが通れば、その糸が反応を示し、ラバツクが即座に察知できるようになっている。

その糸が今、急激な反応を示していた。

「数は1、だけど、スピードが尋常じゃない。このままだと、あと数分でここまで上がって来るぞ」

ラバツクの警告に、キリトとシノンは警戒を走らせる。

こんな夜更けに、化物が徘徊する山を尋常でないスピードで上がってくる人間。

それだけで、相手がまともではない事が判る。事によると、今回の一件の関係者である可能性すらあった。

「何かやばそうだ、散開してやり過ぎすぞ」

「おうッ」

「了解ッ」

ラバツクの言葉に、頷きを返すキリトとシノン。

相手の正体がわからない以上、交戦は控えるべきだった。

分かれて、物陰に隠れる一同。

そんな中、シノンはシエキナーを取り出して構える。

相手の正体を見極め、あわよくば狙撃に持ち込む。

それが、狙撃手としてシノンが下した決断だった。

ラバツクの話では、相手の移動速度は尋常ではない。狙撃の機会は1回有るか無いか、といったところだろう。

その一瞬の機会を、慎重に見定めるべく、シエキナーを握る手に力を込める。

あと少し。

間もなく、標的がシノンの視界の中を通る筈。

そう思って目を凝らした。

その時だった。

「ッ!?!」

突如、背後に気配が浮かび、息を飲むシノン。

その視界の中で、巨大な影がノソリと姿を現す。

「危険種、こいつがッ!？」

虚を突かれ、動揺を来すシノン。

だが、多くの戦いを経て、彼女もまた著しい成長を遂げている。

すぐに体勢を立て直すと同時にシエキナーを構え直し、矢を放つ。

照準など殆どあつたような物ではないが、距離にして数メートル。今のシノンなら、目をつぶっていても当てる事ができるだろう。

胴体の中央部分にシエキナーの矢を受け、吹き飛ばされる危険種。

だが、それで終わりではなかった。

危険種たちは次から次へと姿を現し、シノンを標的と定めて襲い掛かってくる。

「クッ 数が!？」

舌打ちするシノン。

その時だった。

今にもシノンに襲い掛かろうとしていた危険種たちの動きが、突如、闇の中でピタリと止まった。

まるで空間に縫い付けられたかのようなその光景に、目を剥くシノン。

その巨体は全て、張り巡らされた糸によって縫いとめられている。

次の瞬間、

「シノン、大丈夫か!？」

飛び込んできたキリトが、手にしたエリユシデータを一閃。複数の危険種を一撃の下に斬り捨てる。

更に、空中で銀色の光が鋭く走り、動きを止めた危険種の体が次々とバラバラになる。「俺に断りなく、カワイコちゃんに手出してんじゃないよ!!」

ラバックがクローステールの糸を操りながら、危険種たちを蜘蛛のように絡め取り、そして切り刻んで行く。

そこへ、更に掩護としてシノンも加わる。

帝具使いの殺し屋3人が連携すれば、新型危険種といえども物の数ではない。程無く、全ての危険種たちが地面に転がり、動きを止めた。

「こいつらが噂の奴等か。なんつーか、グロイな」

「同感だ。でも見た事が無いのも確かだしな」

ラバックの言葉に頷きを返しながら、キリトは危険種の遺体を覗き込む。

人間型の危険種、なんて代物は今まで見た事が無い。きわめて類似した存在、たとえば二足歩行する類人猿等なら無いでもないのだが、これは明らかに異質な存在だった。その造形からして、かなりグロテスクである。シノンなどは、露骨に目を背けている。

「ねえ……」

そんな中、シノンが何かを思い出したように口を開いた。

「そう言えばタツミ君、ちよつと遅くない？」

言われて、そう言えば、と思いつく。

山頂方面の偵察に行つたタツミが、未だに戻つてこないのが気になった。

「敵と戦つてるのかな？」

ラバツクの言葉は、ある意味で正鵠を射た意見である。何しろ、自分達もたつた今、敵に襲われたばかりである。山頂に行つたタツミの元にも、敵が現れたとしてもおかしくは無かつた。

「ちよつと、行つてみるか」

山頂方向を振り仰ぐキリト。

そこは未だに、不気味な闇の中に閉ざされ、どのようになっているのか窺い知る事ができなかった。

視界全てが光りに包まれる。

その様に、タツミは成す術が無かった。

それについては、傍らに立つエスデスも同様なようで、これから起こり得る事態に、対処する術がないようだ。

否、エスデスならば、どのような事態に陥ったとしても物ともしないであろうが、如何せん、今回は対応の時間が無かった。

キリト達と別れ、山頂の偵察にやって来たタツミ。

しかし、危険種が一向に現れない事に途方に暮れていると、

ある意味、というか間違いなく、もっと危険な御方が降臨なされた。

何と、危険種に乗って夜の散策に出て居たエスデスが、タツミの目の前に急降下して降り立ったのだ。

エスデスとしては当初、人影を見つけた時は危険種かと思つたらしいのだが、まさかのまさか、それがタツミだと知って大歓喜したのは言うまでも無い事である。

直後に現れた危険種の群れを、一瞬以下の時間で蹴散らすと、タツミを捕まえてご満悦となる。

だが、事態はそこで更に急変する。

そんなタツミとエスデスの前に現れた謎の男。

そいつが手にした帝具が発動した瞬間、この状況に放り込まれてしまったのだ。

やがて、タツミとエスデスの姿は、光に飲み込まれて消えていく。

その様子を見て、男はニヤリと笑う。

「やれやれ、まさかエスデスと出くわす事になるとはな。さすがに、直接やり合うのは勘弁だぜ」

そう言うのと男は、手にした物を掲げて見せる。

表面に何か、紋様のような物が描かれた手の平サイズの物体は、それ自体が帝具である。

《次元方陣シャンバラ》

きわめて希少性の高い、空間転移を可能とする帝具である。

男が如何にしてこれを手に入れたかは定かではない。だが、その高性能振りは、たつた今、証明されていた。

この時、タツミとエスデスは、一瞬にして帝都南方にある無人島に転移させられていた。

シャンバラは、使用者がマーキングした場所になら、どこにでも自在に転移する事ができるのである。

「あいつ等には、あそこの掃除でもやらせるとして、こっちはもう少し遊びたいところだね」

男が、そう呟いた。

その時だった。

男目がけて、漆黒の刃が突き込まれる。

一瞬にして身を翻し、回避する男。

そこへ、キリトはエリユシデータを手に斬り掛かった。

「何だ、テメエは？」

「それはこっちのセリフだ!!」

着地と同時に、更なる追撃を仕掛けるキリト。

キリトが山頂に到達したのは、タツミとエスデスが転移させられる直前の事だった。

正に、キリトの見ている目の前で、2人の姿は光の中に消えて行ったのだ。

「あの2人をどこへやった!？」

正直、エスデスと遭遇しなかったのは僥倖であると言えるが、それでもタツミの事が気がかりである。

いったい、何がどうなっているのかキリトにはさっぱり理解できなかったが、それでも現況が目の前の方にある事だけは判っていた。



「さあな。今ごろ、危険種に食われてないと良いけどな!!」  
そんなキリトをあざ笑うかのように言い放つ男。

声からして、まだ若い。恐らく、キリトよりも5〜6歳上くらいではないだろうか？  
しかし、こんな夜更けに危険種のうろつく山の中にいる事自体、既に尋常ではなかつた。

舌打ちするキリト。

同時に、右手に構えたエリユシデータを、弓を引くようにして構え、切っ先を男に向ける。

ヴオーパルストライクの構えだ。

対して、男はフードの下で、ニヤリと笑みを浮かべる。

「テメエとゆつくり遊んでやるのも面白いんだが、こつちも色々予定があるんでな。  
ここらで失礼させてもらうぜ」

「逃がすかよ!!」

能力を発動し、一気に駆け抜けるキリト。

漆黒の刃が、高速で突き出される。

だが、

刃が届く一瞬間の間に、男の体は光に包まれる。

「これはッ!？」

目を剥くキリト。

次の瞬間、男の姿は、先ほどのタツミ達と同様、光の中に消え去ってしまった。ヴオーパルストライクの刃は、空しく空を貫く。

「クソッ!？」

足裏の鋏で地面に急制動を掛けながら、キリトは舌打ちする。

とつさに周囲を見回しても、男の姿は見えない。まんまと逃がしてしまったのだ。

勿論、タツミやエスデスの姿も見えない。彼等がどこに行ってしまったのか、男が姿を消した以上、知る術はなかった。

そこへ、遅れてついてきた、ラバックとシノンが、山頂に姿を現した。

「キリト、大丈夫!？」

「タツミはどこだ!？」

駆け寄ってくる2人。

だが、それに対しキリトは、何と答えれば良い物か、途方に暮れるしかなかった。

一方その頃、

転移を終えた男は、シャンバラの光の中から姿を現すと、大きく息を吐いた。

この場合は、男が帝都近郊で活動する際に、拠点としてゐる屋敷だ。緊急時にはシャンバラでここに退避してこれるように設定しておいたのだ。

「ふう、やれやれ。ちよつと離れていた間に、帝都にや随分と面白い連中が増えたもんだ」

エスデスにイエーガーズ。それにさっきの黒ずくめの剣士。

スタイリツシユの忘れ形見である危険種はほぼ全滅してしまつたが、それでもまだまだ楽しめる要素はたくさんあつた。

あの場で、あの剣士と戦つても良かったし、負ける気もしなかつたのだが、ここは慎重を期して退いておいた。こちらは、これから大仕事控えている身である。無駄な危険は避けたかつた。

それに、楽しみは後々まで取っておくのも面白いと思つた。

そう考へて口元に笑みを浮かべた時だつた。

「シユラっちー いるかい？」

軽い感じの声と共に部屋扉が開いた。

入つて来たのは、奇妙な出で立ちの男である。

歳は20代中盤程だが、着ている物は羽織の着物に袴と言う、東の島国で愛用されている物だった。

「ゲンサイ、勝手に入るなっていつも言ってるだろうがよ」

「まあ、固い事言うなって。俺とシユラっちの仲だろ」

そう言うのと、ゲンサイと呼ばれた男は、図々しくも勝手に、椅子に座ってニヤリと笑う。

その様に、シユラと呼ばれたフード男は、やれやれとばかりにため息を吐いた。

ゲンサイは長い旅の中で知り合い、意気投合した為、仲間に引き入れたのだが、この軽めの性格だけは、付き合った頃から一切変化が無かった。

「そんな事より、イゾウ達から連絡があったぜ。近日中にはこっちに来れるってよ」  
ゲンサイの言葉に、シユラはニヤリと笑う。

長い旅路の中で集めた仲間達が、この帝都に集結しようとしている。

その報告を待っている間、シユラは新型危険種を使って「暇つぶし」をしていたのだが、その日々も間も無く終る。いよいよ、大手を振って行動を起こす事ができるのだ。

「さあ、楽しくなってきたぜ」

眩きながら、顔を覆っているフードを取り払うシユラ。

浅黒く日焼けした顔は精悍に引き締まり、どこか野性味じみた印象を見せている。しかし、

その顔の中央には大きな十字の傷が刻まれている。

そして、

瞳には隠しようの無い獰猛さが、にじみ出ているようだった。

## 第26話「元凶」

終わり

## 第27話「戦神のラツパは鳴り渡る」

1

「安寧道」とは、帝国内で広く信奉されている宗教団体である。

帝都の遙か東にある大都市キヨロクに本拠地を持ち、信徒は数万にも達する一大宗教組織で、善行の積み重ねが長寿へと繋がるという教義の元、多くの人々が安寧道に身を寄せている。

その背景には、帝国による圧政がある事は、もはや言うまでも無いだろう。

相次ぐ重税と苦難の日々に嫌気がさし、救いを求めて入信するものが大半なのである。

まさに、現在の帝国の縮図と言えるだろう。

安寧道の方もまた、救いを求めて訪れる人々を拒む事無く広く受け入れ、それが勢力的に膨張する要因となっていた。

そして今日もまた教主は、救いを求める多くの信徒達を前にして壇上に立ち、教義を行っていた。

割れんばかりの歓声の中、進み出た教主は、まだ若い青年である。恐らく、20代ほどであろう。危険種の骨で作ったと思われる禍々しい仮面を頭にかぶっている。

長い髪を下ろした、美しい顔立ちの青年である。

皆の前に立ち、スツと右手を掲げる教主。

それと同時に、歓声はピタツと収まった。

「……この世界は今、大いなる悲しみに満ちています」

静かな、

しかし、よく響く声で、教主は語る。

「皆も、飢餓や貧困で苦しんでいる事でしょう……しかし、こんな時だからこそ、心を乱してはいけません。善行を積みなさい。それは必ずや、自分に返ってきます」

誰もが教主の言葉を虚心に聞き入っている。

そんな中、

1人の男が、涙を流しながら教主の前へと進み出た。

「でも教主様!!」

男は、まるで何かに縋るかのように、教主を見上げる。

「いくら善行を積んでも……死んだら……死んだら……死んじまったら、何にも……」  
後は、言葉にならなず、その場に泣き崩れる。

周囲の他の信徒達が、寄り添うように男を支えている。

そんな男を見下ろしながら、教主はいたわるように口を開く。

「もし命を落としてしまっても、魂は死にません。それはただ、肉体の終わりに過ぎないのです。その者は必ずや神の国へと行き、幸せであるでしょう」

そして、教主は男を真つ直ぐに見返しながら続ける。

「昨日、獣に追われた弟を庇った兄が、神の国へと旅立ちました。彼の名はヨアヒム。私はその英雄の名前を一生忘れません。そして彼も神の国で『俺は弟を救った男だ』と、胸を張って言えるでしょう」

「教主様……兄貴の名を……」

ヨアヒム。

それは間違いなく昨日、命を落とした男の兄の名前だった。

こんな事、あり得るはずがない。何しろ、兄は教主と話した事すら無いのだから。



だが、教主の方は、それがまるで当然の事であるように、彼の兄の名を知っていたのだ。

教主には、普通ならあり得ない、何か特別な力がある。

その力によって教主は今まで、ささやかだが数多くの奇跡を起こし、多くの人々の心を救ってきたのだ。

「名や記憶は残ります。それはある意味、神の国だけでなく、現世でも生き続けると言えるでしょう。死んだら、それで終わる訳ではないのです」

優しく響く教主の言葉に、誰もが歓声を上げる。

皆が皆、教主を慕い、彼に救いを求めている。

ただ不思議な力がある、というだけではない。教主には、皆から慕われるだけの大きなカリスマ性と、圧倒的とも言える慈愛の心が備わっているのだ。

皆が皆、教主の存在に熱を上げる。

そんな中、

この状況を、冷ややかに見つめる視線がある事には、教主も、そして誰も気付いてはいなかった。

帝都の経済を預かる財政官ゲバゼは、上機嫌にグラスを傾けながら、眼下に見える光景に薄ら笑いを浮かべていた。

「家畜……家畜……家畜……家畜……どいつもこいつも良い顔をしおる。搾取されるだけのブタ共め」

そう言うゲバゼは、ブクブクと太った腹をゆすつて笑う。

彼の眼下には、その日の食べ物にも困って路頭に迷う市民達の姿がある。

そんな彼等を、この場所から眺め下ろすのがゲバゼの趣味だった。

「市民どもの税金で飲む酒はうまいのうう 来月からは、もつとちよろまかすか」

財政官と言う国家財源を預かる身分を利用して税金を勝手に水増しし、差額分を懐に収めて私腹を肥やすゲバゼ。

元々重い税金が、このゲバゼの「お小遣い」の為に、更に重くなっているのだ。市民が貧困化するのも当然の帰結である。

にも拘らず、ゲバゼはその事実を深く考えもせず、また自分の職責も考えずに私腹を肥やす事のみにまい進している。

市民が貧困にあえいでいる時に美酒美食で肥え太りながら、彼等が苦しむさまを見て楽しんでるのである。

彼の屋敷も、ちよつとした宮殿並みの豪華さを誇り、内装には節操なく集めた美術品で溢れかえっていた。

正しく、市民の血税で肥え太るブタである。

その時、背後の扉が開き、年若いメイドが入ってくるのが見えた。

「旦那様、マッサージのお時間です」

「おー!! もうそんな時間か」

日に一度、メイドからマッサージをしてもらうのも、ゲバゼの趣味の一つである。

マッサージ専用メイドは年若く、美しい女性に限られる。中には「お手付き」にあつた娘も少なくない。勿論、万が一の事が起こった場合には、ゲバゼは強引に説き伏せて措置を施し、後は僅かばかりの手切れ金と共に放逐される事になる。

訴え出ようにも、相手は権力者。握りつぶされるのがオチだった。

軽やかな足取りで近付いて来るメイド。

「今日は『爽やか全身、モミモミコース』じゃ」

その足音を聞きながら、至福の時を待つゲバゼ。

と、

ゲバゼの背後に立ったメイドは、口腔内から何か細長い物を取り出す。

次の瞬間、

一切の無駄ない動作で、取り出した細長い針を、ゲバゼの首横に突き刺した。

針は一瞬で脊椎を貫通。脳と末梢神経の連絡線を破壊して、対象の命を奪い取る。

ゲバゼには、何が起きたのか理解する事はできなかつただろう。悲鳴を上げる時間すら、彼には与えられなかつた。

ある意味、この男には贅沢すぎる死に片だつたかもしれない。

がつくりと首が前に倒れ、絶命するゲバゼ。

その様子を確認すると、メイドはニヤリと笑みを浮かべた。

同時に、その容姿は一瞬にして変化する。

「仕事完了。それにしても、どんなコースなんだか……」

呆れるように姿を現したのはチエルシーだった。

これが、彼女の「殺し」方である。

対象の近い存在に変身して近付き、一撃で致命傷を与える。戦闘員としては非力なチエルシーが、凄腕の暗殺者たる所以がここにあつた。

しかもガイアファンデーションの能力で容姿を変え、さらに、変身対象の仕草や声使いまで似せる事で、チエルシーはある意味、本人以上に本人になりきる事ができる。

彼女に狙われたが最後、逃れる事はほぼ不可能に近い。ある意味、ナイトレイドの中で最も危険な存在だった。

その時、一階の方から何やらけたたましい物音が聞こえてくるのが判った。

ハツとして振り返るチエルシー。同時に、ベテラン暗殺者としての勘が危険を告げている。

とつさにガイアファンデーションを振るうチエルシー。

程無く、足音も荒く入って来たのは、ウェイブとクロメだった。

「特殊警察イエーガーズだッ この家にナイトレイドが現れると言う情報が入った。緊急案件に付き、中に入らせてもらっている!!」

ウェイブはイエーガーズの手帳を掲げながら、ゲバゼの私室へと足を踏み入れる。

捜査を行う上でイエーガーズには特権が与えられている。緊急と判断された場合は、こうして独断で行動する事も許されるのだ。

これもエスデスの権力と剛腕があったればこそだが、それだけ、ナイトレイドをはじめとした殺し屋達の跳梁が著しい事を意味している。

呑気に証拠固めなんぞしていたら、後手後手に回るのは目に見えていた。

だが、

「ウェイブ、これ」

クロメに呼ばれて、振り返るウエイブ。

「……………遅かったか」

ウエイブは悔しそうに呟く。

そこには既に、この世の住人ではなくなった、屋敷の「元主」が、座り込んでいた。

「……………て言う訳で罨だったのよ。いやー危なかった」

アジトへ戻って一服したチエルシーは、やれやれと言った感じに仕事の報告をした。

依頼通り、財政官ゲバゼの暗殺に成功した彼女だったが、まさか直後にイエーガーズ

の襲撃を受けるとは思っても見なかった。

屋敷の出入り口は1階にしか無く、ゲバゼの私室に続く階段は1カ所のみ。逃げよう

とすれば鉢合わせするのは火を見るよりも明らかであった。

そして、直接的な戦闘力の低いチエルシーが、ウエイブとクロメと対峙して生き残れ

る道理も無い。

正に、絶体絶命の状況だった。

「その状況で無事とか、あんたしぶといわね」

「飼い猫が2〜3匹いたんでね。化けて交じって凌いだのよ」

呆れ気味のマインに、チエルシーはため息交じりに説明してやる。

あらゆる物に変身できるガイアファンデーションだからこそこのできる芸当である。ウエイブもクロメも歴戦の軍人だが、まさかゲバゼが猫に殺されたとは、つゆとも思っていないかった。

「あたしじゃ、切り抜けるの難しそうだわ。悔しいけど便利ね、その帝具」

そう言つて感心するマイン。

もつとも、そもそもからしてマインもパンプキンも潜入工作向けではない。彼女なら彼女なりのやり方で仕事をこなしただろうが。

「確かに、面の割れてるマインじゃ、今回の仕事はきつかったかもね。これからも、私に任せてくれていいのよ」

「チエルシー……」

優しく笑い掛けるチエルシーに、マインは柔らかい笑みを返す。

そう、チエルシーは頼もしい仲間だし、基本的に性格が明るくフレンドリーだから、付き合いやす面がある。

少し性格が合わなくて、今まで衝突する事も多かったが、それとてスキンシップの環境みたいな物。今にして思えば、チエルシーなりの気遣いだったのだろう。

これからは、もつと仲良くできるはず。

マインはそう思ってチエルシーを見やる。

そして、次の瞬間、

「だからアジトでしっかり留守番してなさい。補欠」

チエルシーの一言が、全てをぶち壊した。

勿論、意図して言った事は言うまでもない。

ブチッ

一瞬にしてキレルマイン。

「仲間に対して何て侮辱ッ 人として許せないわ!!」

追いかけるマインに対し、笑いながら逃げまくるチエルシー。

何と言うか、両者の力関係をはつきりと表す光景だった。

ギヤーギヤーと姦しく騒ぐ女子2人は放っておいて、残りの一同は深刻な顔を突き合わせて、今後についての話を進めていた。

「今回の件といい、イエーガーズはいよいよ、本格的に私達を標的にしてきた感じだな」



「新型危険種は全滅させたし、残りのめぼしい賊もナイトレイドだけだからね」  
「チエルシーさん、たいへんでしたね」

アカメの言葉に、レオーネとリーファが返す。

今この場には、ナジエンダとシノンを除く、全員が集まっていた。

ナジエンダは順番が来たので風呂に入っており、シノンもそれに付き合っている為、席を外している。

その中で特筆すべきはタツミだろう。

帝具シャンバラの能力によって、はるか南方の無人島に飛ばされたタツミだったが、その翌日、ひよっこりとアジトに戻ってきた。

何でも、待っていたら勝手にゲートが開いて戻ってこれたのだとか。どさくさに紛れて、エスデスも撒く事が出来たらしい。

南の島でエスデスとバカンス(?)を楽しんで帰ってくるのか、なかなか得難い体験をした物である。

「今の俺達じゃ、イエーガーズとまともにぶつかりあうのは、得策じゃないな」

「ああ、特にエスデス。あいつは危険すぎる」

エスデスを直接、間近で目撃した事があるレオーネが、キリトに同調する。

仮に、今のナイトレイド全員が束になって掛かったとしても、エスデスに勝てると言

う保証はない。そう言う意味では、戦いのイニシアティブはイエーガーズ側にあると考  
えるべきだろう。

もつとも、あのナジエンダが、無謀な策をたてるとも思えない。不利な状況を考慮し  
た上で、最善の策を考えてくれるはずだ。

「ここはもう、ひとつ、南の島でバカンスを楽しんできたタツミを差し出して、エスデス  
には手を引いてもらうしかないんじゃないか？」

「あ、それ良いな。試してみるか？」

冗談交じりに言うレオーネに、悪乗りいして同意するキリト。その傍らでは、リー  
ファが苦笑しているのが見える。

「だから、俺も無理やり巻き込まれたんだって!!」

躍りになって弁明するタツミ。

あの夜の事は何度も説明しているのに、いまだにこうしてからかわれる事が多かつ  
た。

「美女と二人つきりとか、別に羨ましくなんかないけどさ……………羨ま  
しくなんかないぜ……………いやマジで」

「涙拭けよ、ラバ」

「て言うか、女なら誰でも良いのか、ラバは」

コーヒーをぐりぐりとかき混ぜながら涙を流すラバックに、呆れ気味に突っ込みを入れるレオーネとキリト。

正直キリトなどから言わせれば、エスデスと二人つきりにされる状況など死んでもごめんなのだが、ラバックにとっては、その限りでもないらしかった。

その頃、

風呂場では、女二人、裸の付き合いに興じていた。

湯煙煙る温泉の中で、ナジエンダとシノンは、肩を並べて湯に浸かっている。

チラツと視線を向けるシノン。

ナジエンダの持つ、大人の魅力あふれる肢体が、湯の齎す温もりによって、ほんのり

赤く染まっている。

見るからにつややかな光景だ。

だが、

シノンの目は、どうしても「そこ」に行ってしまう。

義手を外したナジエンダの右腕。そこには今、タオルが掛けられて目立たないようにはしているが、否が応でも目が行ってしまいう事は避けられなかった。

「あの、ナジエンダさん」

「ん?」

意を決するように、シノンは声を掛けた。

「今日は、どうしたんですか? 一緒にお風呂に入ろうだなんて」

今回、風呂を共にするように言ってきたのはナジエンダの方である。

今まで、そんな事など無かったため、シノンとしてはどうしても訝つてしまふのだつた。

「なに、お前とはこれまで、あまりゆつくり話す機会が無かったからな。ちようどいいと思つたのさ」

「はあ……」

ナジエンダの物言いに、何か含みがあるような物を感じ、シノンは生返事を返す。

そんなシノンの様子を察したのか、ナジエンダはすぐに真顔になると、本題へと入つた。

「なあ、シノン」

湯を片手で掬い上げるような動作を見せるナジエンダ。

その動作をクツシヨンにするようにしながら、シノンに隻眼の視線を向けた。

「……」が、分岐点だ」

「え？」

言っている意味が分らず聞き返すシノンに、ナジエンダは更に続ける。

「今のお前は、紛れもない私達の仲間だ。それを疑うつもりはない。お前は本当によくやってくれているのは皆が認めている。もちろん私もな」

だが、とナジエンダは続ける。

「本来のお前はただの学生であり、表社会の人間だ。ナイトレイドに入ったきっかけも、我々の仕事にたまたま巻き込まれただけにすぎん」

何となくシノンは、ナジエンダが何を言わんとしているのか察する事が出来たような気がする。

そして、その予想は外れてはいなかった。

「除隊するなら、今が最後のチャンスだと思ってくれ」

ナジエンダは固い口調で語りかけた。

「これからの戦い、ますます激しくなるだろう。エスデスはいよいよ、私達を標的に定めた節がある。恐らく待っているのは、イエーガーズとの全面戦争だ」

言つてから、ナジエンダは苦い物を噛みしめるように、スツと目を細める。

「エスデスは執念深い女だ。間違いない、戦いはどちらかが全滅するまで終わらないだろう。そこに引き分け、ドロウは存在しない」

「ナジエンダさんは、エスデスの事を知っているんですか？」

尋ねるシノン。

それに対し、ナジエンダは自分の右肩に手をやる。

「かつての同僚だよ。だからこそ、手の内は互いによく判っているのさ」

今は風呂吕に入る為に義手を外している為、そこに本来ある筈の腕は存在しない。

この腕、そして右目は、反乱軍に入ると決意した際にエスデスにやられた物だ。

以来、エスデスの存在は、ナジエンダにとつてのトラウマと化していた。

「奴との戦いは熾烈な物になるだろう。最終的に何人が生き残れるか……あるいは、私を含めて、全員が命を落とす事も考えられる」

殺し屋ならば、いつかは自分が死ぬことも覚悟して然るべき。

ナイトレイドもまた、例外ではない。誰もが、いつかは報いを受ける者と考えていた。

湯をかき分けるように、ナジエンダが立ち上がる。

「幸いにして、お前は面が割れていない。今ならまだ、問題無く学生の身分に戻る事もできるだろう。だが、この先、そう言った機会はもう無いかもしれない」

引き締り、均整の取れたプロポーションが、シノンの目に映る。

右腕を失っているとは言え、ナジエンダの美しさは、聊かも損なわれる事は無い。正直、同じ女として羨ましくらいだった。

「自分が進むべき道を見誤るなよ。ここが、お前にとっての分岐点だ」  
そう告げると、ナジエンダは風呂を後にする。

後に残されたシノンは、湯に浸かったまま、呆然と見送るしかなかった。  
ナイトレイドを抜ける。

そんな事、今まで考えた事も無かった。

ここで得た仲間達は、みなシノンにとって大切な人たちだ。

アカメ、タツミ、マイン、ラバック、レオーネ、ナジエンダ、スサノオ、チエルシー、  
リーファ、勿論、死んでいったシエーレとブラートも。

皆、掛け替えない存在である。

そして、キリト。

いつからだろう、あの調子のいい年上の少年の存在が、シノンの中で大きなものになり始めたのは。

最初のころは、あまり良い印象を持っていなかったのを覚えている。嫌いという程ではないが、あの掴みどころのない性格のせいで、どこか付き合いくさを覚えていたのだ。

豪胆なようできて、ある場面では誰よりも繊細な面を見せ、仲間想いでありながら単独で動く事を好む。ふざけているかと思ったら、内面では誰よりも真面目だったりす





革命決行の日は近かった。

そして、革命軍の進撃支援の為に、ナイトレイドもまた、独自の作戦を展開しようとしていた。

「今回の案件は、『安寧道』と呼ばれる、広く民衆に信仰された宗教団体だ」

「あ、それ知ってる。俺の村でも広まってたぜ」

ナジエンダの言葉を聞いて、タツミは思い出したように言う。

善行の積み重ねが幸福や長寿に繋がると言う教えを広める安寧道の存在は、今の末期的な帝国の中にあつて、広く受け入れられているのだ。

タツミの村でも信仰されており、旅立ちの前に村長が御神体の像をお守りとして渡してくれた。

因みに、タツミが初めてナイトレイドと接触してアカメと対峙した時、村雨の刃を受けているのだが、その際、切っ先がこの御神体に当たった為に難を逃れている。偶然か奇跡かは知らないが、しっかりと御利益はあつた訳だ。

「安寧道は、ここ10年で信者を増やし、帝都の東側で大きな勢力となつている。その安寧道が近々、武装蜂起、つまり宗教反乱を起こす。私達はこれを利用するつもりだ」

「ちよつと待ってくれ!!」

遮つたのはタツミである。

今のナジエンダの説明に、どうしても納得のできない事があり、少年は声を上げたのだ。

「そんな反乱が起きたら、いったいどれだけの民が死ぬんだ!? むしろ俺達は、反乱を止める為に動くべきなんじゃないのか!？」

正論である。

誰だつて乱なんて起こしたくないし、そのせいで民に犠牲を強いるなど言語道断である。

だが、今回は事情が異なつた。

「手遅れなんだ、タツミ」

「キリト、手遅れつて何だよ?」

発言したキリトに向き直るタツミ。その表情には、やはり納得できないと言つた表情が浮かべられている。

「今ここで安寧道の反乱を押しえたとしても、火の手はまた別の所で上がる事になるだろう。事態は、もうそこまで末期的なんだ」

今の帝国は、民の不満によつて膨らむだけ膨らんだ風船のような物だ。あとはちよつとした拍子で破裂してしまう。

いわば、安寧道はきつかけに過ぎなかつた。

「どうあつても……犠牲は避けられないつてのかよ……」

悔しそうに、タツミが呟きを漏らす。

気持ちは痛い程に判る。

だが、同じ犠牲なら、最小限にできるようリスクを軽減してコントロールすべきだった。

「安寧道の武装蜂起と合わせて、革命軍と協力関係にある西の異民族に攻め込んでもらう。既に西方の領土割譲を条件に、協調体制は確立済みだ。元々、あの辺りは彼等の土地だったからな。それを取り戻せると判ったら、喜んで協力してくれたよ」

ナジエンダの説明を聞いていたマインが、僅かに表情を動かすのが見えた。

彼女は西の異民族とのハーフであり、その事を理由に、幼いころから差別や迫害を受けて育つたと言う過去がある。その西の異民族が参戦すると知り、気持ちは穏やかではいられないのだろう。

「安寧道の蜂起と西の異民族の侵攻。いわば、帝国の内と外から火の手を上げる訳だが、それでも帝国は持ち堪えるだろう。いくら大半が骨抜きにされているとは言え帝国軍は強大だ。加えてエスデスの存在もある。一息に潰すと言う訳にはいかないだろう」

「そこで、革命軍の出番つて訳ですな」

リーファが勢い込んで尋ねる。

安寧道と西の異民族。双方に兵力を出せば、いかに帝国軍といえども、その防衛線は薄くならざるを得ない。

そこで革命軍が、南方で挙兵する事になる。

「なるほど。兵力を分散させて飽和状態を引き起こす訳か。これで、中央を守る戦力は局限されるな」

キリトが納得したように頷く。

帝国は、あちこちで起こった火を消すためにきりきり舞いになった所を、本命を突くように革命軍が侵攻を開始する訳だ。

「帝国は革命軍を舐めている。革命軍の拠点は帝都のはるか南方だし、そこに至るまでにはいくつもの関所や砦を、領地を抜けなくてはならない。当然、一筋縄ではいかないし時間もかかる。仮に帝都に辿りついたとしても、その頃には革命軍も消耗し尽くしている。と、思うだろうな、普通なら」

ナジエンダは不敵な笑みを浮かべて続ける。

「だが既に、我々はいくつもの太守や領主に内応を取り付け、革命軍蜂起の際には協力してもらう手はずになっている。彼等の大半は、帝都でまじめに働いていたのに、不正の責任を押し付けられたりして左遷されられてきたケースが大半だったからな。話は通しやすかったよ」

こんな所にも帝都の腐敗ぶりが反映されている訳だが、今回はそれが良い方向に働いた形である。

もつとも、帝国側からすれば、自分達で首を絞めたような形だが。

「帝国の奴等は驚くだろうな。はるか南方にいた筈の革命軍が、恐ろしいスピードで迫ってくるのだから」

「けど、それだけじゃ、帝都は陥とせないだろ」

ナジエンダの言葉に水を差すように、キリトは言う。

ナジエンダの説明には一つ、最も重要な事が抜けていた。

対して、判っている。という風に頷くと、ナジエンダは再び口を開いた。

「仮にすべての防衛線を突破したとしても、帝都にはまだ、ブドー大將軍率いる近衛軍が存在している。革命軍の戦力では、近衛兵をどうにかできたとしても、ブドーと、その副将であるヒースクリフを倒す事は難しい

ブドー、ヒースクリフ。

この両名に関して言えば「一騎当千」という言葉すら生ぬるい。エスデスと同等か、それ以上に危険な存在であると感じるべきだった。

「だが、近衛軍が前線に出れば、確実に宮殿の守りは薄くなる。そこで、私達の出番と言  
う訳だ」

アカメが、村雨を掲げながら言った。

「私達が宮殿に突入し、大臣を葬る。帝都を中から切り崩すんだ」

勿論、大臣も馬鹿ではない。そうなたら、先頭切つて真つ先に逃げ出す事は想像に難くない。

だが、それを許す程、こちらの間抜けではなかった。

「帝国が崩壊し悪法が無くなれば、民の怒りも収まるだろう。迅速に帝都陥落まで事が運べば、流れる血も少なくて済むだろう。今回の作戦は、その第一段階であると思つてくれ」

説明を終えてから、ナジエンダは改めてタツミを見た。

「納得いったか、タツミ?」

「ああ、途中で突つかかつてごめん」

素直に謝るタツミ。

どうせ犠牲が避けられないのなら、せめて最小限で納めるべき、というナジエンダの考えには、タツミも同意せざるを得なかった。

「全ての力ぎを握るのは安寧道の武装蜂起なんだが、どうやら、これが一筋縄ではいかないらしい」

「何か問題でもあるんですか?」

尋ねるリーファに、ナジエンダは説明する。

安寧道は、絶大なカリスマを誇る教主を頂点に頂いているが、事実上のナンバー2に相当するボリックが巨大な権力を手中におさめ、教団内部を掌握しつつあるのだ。

そして、このボリックこそが、教団掌握の為にオネスト大臣が送り込んだスパイだった。

「そこから辺が、大臣の腹黒い所よね。表だって弾圧せず、内部から掌握しようつてんだから」

チエルシーは、舌打ち交じりに言った。

無理に弾圧を勧めれば、却って安寧道信者を結束させることになりかねない。それよりも、ボリックが実権を握る一方で教主を暗殺して本当の「神」に仕立て上げる事ができれば、教壇その物を、そっくり形骸化させる事ができると言う訳だ。そうなると、安寧道の存在は、もはや帝国にとって脅威ではなくなる。

「教団内部に情報を渡して、粛清させる事はできないのかよ？」

「ボリック派は、既に大きな力を持っている。それに帝国のバックアップがあるから、難しいだろう」

内部粛清をするには、相手の力が大きすぎると言う事だ。

下手に内部工作を仕掛ければ、却って藪蛇になって状況を悪化させかねなかった。

「そこで、今回の任務だ。我々は安寧道の本部まで行き、ボリックを討つ。奴は一部の信者の食事に薬を混ぜて中毒にして、自分に忠実な操り人形に仕立てているらしい。遠慮はいらんぞ」

「放つておいたら、信者はみんな薬漬けか……そりゃ、止めないとね」  
凄味を効かせて言ったのはレオーネである。

彼女は昔、知り合いを薬漬けにされて廃人にされた経験がある。その為、薬を乱用する輩に対し、抜き身とも言える殺意を抱いているのだ。

だが、

そんな中、別の意味で氣勢を上げる者達がいた。

「きつと、女をとつかえひつかえして遊んでいるんだらうなあ」

「食事に薬を盛るとは、食材に対する侮辱でしかない……」

ギリツと、歯を噛み鳴らす、ラバックとスサノオ。

「絶対に許せん!!」

「お前達、怒るポイントが少しずれていないか？」

ナジェンダのツツコミ無視して、互いに力強い視線を交わす、ラバックとスサノオ。

今ここに、男同士の友情が深まった。

それはさておき、



「最後にイエーガーズだが。あいつらは今、全力で私達を狩ろうとしている。このまま後手後手に回り続けたら、いつか捕まってしまっただろう」

「実際、この前はあたしも危なかったしね」

先の任務を想いだし、チエルシーはやれやれとばかりに頭を搔く。

イエーガーズが本気で攻めてきている以上、こちらも本気で対抗する必要があった。

「だから今回、あえて帝都の外まであいつらをおびき出し、そこで仕掛けようと思う」

つまり、罠を用いて引きずり出す訳だ。

帝都内部にいる限り、地の利はイエーガーズ側にある。その優位性を奪ってしまおうと言うのだ。

「イエーガーズはエステスが率いている以上、大臣の私兵と変わらん。見知った顔がいとも、戦えるな、タツミ？」

以前、成り行きからイエーガーズに潜入していた事もあるタツミに、ナジエンダが問いかける。

確かに、

敵とは言え、タツミはイエーガーズのメンバー達何人かには、憎しみを持ち切れないでいる部分があった。

優しいラン、面倒見のいいアスナ、頼りになるボルス、健気なシリカ、気さくなウエ

イブ。

皆、できる事なら戦いたくない人たちばかりである。

だが、自分達が戦うとなれば、彼等もまた全力で向かってくるだろう。ならば、迷う事は許されなかった。

「標的以外でも戦う事になったら全力で行く。迷いはない」

少年らしい、真つ直ぐな瞳で言い放つタツミ。

その瞳に燃える闘志が、少年の決意が本物である事を現している。

「まーた恰好付けてツ　チャックが開いているにちまいない!!」

「開いてねえよ!!」

「おーいアカメ、チェック頼むわ!!」

すかさずからかいに入る、ラバックとレオーネ。

この間の「タツミ、チャック全開事件」の余韻は、未だに引きずられていた。

その時、

会議室の扉が開き、少女が入ってくるのが見えた。

「シノン」

心配したように声を掛けるキリト。

この場に姿が無かった事で、何かあったのかと思案していたのだ。

そんなキリトに笑い掛けると、シノンは真っ直ぐにナジエンダへと向き合う。

「答えは、出たんだな？」

「はい」

問いかけるナジエンダに、静かに頷くシノン。

ナイトレイドを抜けるのか、それとも留まるのか。

分岐点に立つ少女は、決意と共に言い放った。

「私は………ナイトレイドのシノンです」

その声が、皆の心に響き渡る。

シノンは選んだのだ。

皆と共に戦い続ける道を。

その様子を見て、キリトは笑みを浮かべる。

「行こうぜ、シノン」

手を伸ばすキリト。

その手を、

シノンも、笑顔で握り返した。

人が次第に朽ち行くように、国もいずれは滅びゆく。

新国家誕生を目指す者達と

国を護る者達。

思想、理念、目的、全てを違えた彼等は、避けられぬ運命によって、衝突の日を迎える。

必殺の武具をその身に纏い、己の決意を胸に秘め、

決戦に挑む!!

第27話「戦神のラツパは鳴り渡る」

終わり

## 第28話「激戦の予感」

1

街道から外れ、うち捨てられた廃墟。

地元の人間ですら、全く近付く事の無いその場所だが、最近になって移り住んだ者がいると言う事は、全くと言って良い程知られていなかった。

それもそのはず。住み着いた「住人」の正体を考えれば、もし万が一、問題の屋敷にちよつとでも近付こうものなら、即座に命を奪われる事は目に見えていた。

まるで幽霊の如く、姿を隠しながら動き、人の命を狩り取る彼等は、正に死神と言うべきであろう。

定期的に拠点を変える彼等の動きは、腐敗して目を曇らせた帝国軍は全くと言って良

い程、掴む事が出来ていない。結果的に、その跳梁を許す形になっていた。

思い思いの恰好で居並ぶ面々に苦笑を送りながら、フードをかぶった男は一同の前に立つ。

殺人犯罪組織「ラフィン・コフィン」

彼等は、人々から恐怖と憎悪を込めて、記憶されるべき存在だった。

「第2ラウンドだ」

フードの奥の視線で仲間達を見回しながら、リーダーのPohは低い声で言った。

「帝都に張り付けてあった見張りから報告が入った。イエーガーズが帝都周辺の掃除を終え、いよいよナイトレイド討伐にシフトするらしい。エスデスを含めた全員が、出撃準備を整えつつあるようだ」

リーダーの言葉に、居並ぶメンバー達は感心したように声を出す。中には、軽く杭笛を拭いている者もいた。

「それでヘッド、俺等はどうするんですか？ まさか、指咥えて見物つてわけじゃないっすよね？」

ジョニー・ブラックの発言に、幾人かのメンバーが同調するように頷きを示すのが見えた。

その様は、まるで獲物を目の前にして猛る狼の群れのようにだ。

いよいよ始まるナイトレイドとイエーガーズの全面激突。

そんな「おいしい」イベントを前にしにして、生殺しのような見物を強いられるのは、居並ぶ誰もが御免蒙りたいところだった。

そんな一同の期待の視線を受けながら、Pohは口元に笑みを浮かべる。

「ナイトレイドもイエーガーズも、俺達の存在なんぞ眼中にないだろうよ。だが、そこが狙い目だ。連中に目を付けられていな俺達は、まさしく自由に動き回れるって訳だ。獲物はより取り見取りだぜ」

リーダーの言葉に、メンバー達は含み笑いを漏らす。

つまり、戦いのイニシアチブを握っているのは、ナイトレイドでもイエーガーズでも無く、自分達ラフィン・コフィンだと言う事だ。

しかも、敵が自分達の活動を警戒していないとすれば、先制攻撃の余地は充分に考えられた。

「こんな面白い状況なんだ。見逃す馬鹿は、俺達の中にはいないだろう？」

まるで挑発するようなPohの言葉。

しかし、その声は、確実にメンバー達の脳へと沁み込んで行く。

相手は帝国最強と最凶。

獲物の価値として、これ程の極上はめったにお目には掛かれないだろう。



だからこそ、やる。

人生はギャンブルであり、そこに大物を狙える余地があるならば、やらない手はない。勿論、人を殺める事も恐れない自分達「強者」が負けるなどとは、露とも思っている者はいなかった。

## 2

イエーガーズ動く。

その報告は革命軍斥候部隊の手によって、街道に潜伏中のナイトレイドにも届けられた。た。

帰巢本能のあるマーグファルコンを用いて届けられた伝書には、エスデスを含むメンバー全員が帝都を出て出撃。街道へ向かったと言う。

明らかに、ナイトレイドを標的にした行動だった。

「まずは、第1段階終了といったところか」

報告文を眺めながら、ナジエンダが呟いた。

キヨロクへ行く前に、まずは目障りなイエーガーズを叩き、戦力を削ぐ。その為の作戦が動き出したと言う事だ。

全ては、ここからだ。

ナジエンダは思い描いた作戦案を、もう一度、自身の頭の中で再生する。

イエーガーズは皆、一騎当千のつわもの達しかもトップのエスデスは帝国最強。1対1で勝てる者は存在しない。正面からまともに激突すれば、ナイトレイドの敗北は必至である。

だからこそ、罠に掛ける。

現役時代であっても、ナジエンダは武力においてエスデスには敵わない。それは、失われた右腕と右目が如実に証明している。

しかし、こと知略においては、ナジエンダは自分の方がエスデスに勝っていると思っている。

「さあ来い、エスデス………私はここにいるぞ」

ナジエンダは静かな闘志と共に、自身へと迫っているであろう宿敵に語りかけた。そんな彼女の耳に、楽しげな笑い声が届いていた。

良い眺めだった。

水着姿で戯れる女性と言うのは、それを眺めるだけで心が洗われるようだ。

それが、男達の偽らざる本音である。

「いや、こんな所で女性陣の水着が見られるなんて、嬉しいね」

「まったくだ」

ラバックのだらけきった発言に、傍らのキリトは同調するように頷きを返す。

その視線の先では、水着姿のシノン、リーファ、レオーネ、チエルシーの姿がある。

先述した通り、皆、華やかな水着姿を陽光の元に晒し、瑞々しい素肌で水と戯れていた。

レオーネはオレンジ色のストライプが入ったビキニ。たわわに実った胸と、鍛え上げられた四肢が、完成されたスタイルを作り出している。

それに追従するプロポーションを見せ付けているのは意外な事に、緑色のビキニを纏ったリーファである。この中では最年少となる妖精少女だが、発育に関しては群を抜いており、水の中で跳ねる度、緑色の水着に包まれた大きな胸は、視線を引き付けて止まなかった。

水色のパンツタイプビキニに身を包んでいるのはチエルシーである。こちらは、胸の大きさでは上記2人には敵わないものの、それでもモデルのようなスラリとした体形を

しており、無駄を省いた1個の美を、その身で体现している。

シノンは動きやすそうな黒のスポーツタイプピキニを着用しており、少女らしい細い肢体が、俊敏そうな印象を見せている。もともと釣り目勝ちの表情と相まって、ネコ科の肉食動物を連想させる。

皆、それぞれに魅力あふれる姿である。

と、

「デレデレするなよ、2人とも。これも作戦の内なんだからな」

そんなラバックとキリトに、タツミが真面目な口調で苦言を呈する。

今回の作戦は、可能な限り人目に付くように行動し、イエーガーズの目を引き付ける事にある。そうする事で、帝都から離れた場所で襲撃を行うのだ。

だが、

「は!? お前バカなの!? ホモなの!？」

「ち、チゲエよ!!」

「さすが、モテる男は言う事が違うな、タツミ」

「キリト、お前も違うって!!」

ラバックとキリトの発言に、躍起になって否定するタツミ。

とは言え、あの帝国最強のエスデスから、熱烈なラブコールを送られているタツミで

ある。何をどう言ったところで、それは弁明にならなかった。

そこへ、水から上がって来たレオーネとチエルシーが近付いて来る。

「ターツミ、アタシとチエルシー、どっちの水着が好みかな？」

「おー、それは聞いてみたいね、是非」

悪乗りするように、チエルシーもレオーネの言葉に便乗してくる。

迫る2人の美女に、タジタジなタツミ。

片や女性もうらやむほどのスタイルを持つレオーネと、片やモデル並みの美女であるチエルシー。

そんな2人が麗しい水着姿で迫ってきているのだ。その気が無くても、羨ましい光景である事は間違いない。

「お、俺は……その……」

それに対し、純情少年であるタツミは、顔を真っ赤にして押し黙ってしまった。

やがて、タツミは逃げるように首を巡らせる。

「いやー、さすがスーさん。引き締まった体してるぜ!!」

「ムッ」

露骨に逃げるタツミに対し、チエルシーとレオーネは、やれやれとばかりに苦笑する。

一方、突然話を振られ、目をキラーンと輝かせるスサノオ。確かに、筋肉質ながら決

して膨らみ過ぎず、適度な引き締まりを見せるスサノオの体は、ある種の肉体美とも言える様相を見せている。

そんな中、ラバックは悔しそうに涙を流している。

「なぜタツミに聞く!?! 俺に聞いてくれれば『どっちも好きに決まっているだろ』って叫びながら、その胸に飛び込んで国歌斉唱してやるのに!!」

「お前がそう言う男だからだろ」

「当然の事ね」

男の叫びを発するラバックに、肩を竦めるレオーネとチエルシー。

女好きであり、決して嫌われている訳ではないのだが、そのキャラクターのせいで、いつまでも「三枚目」「仲間」「お笑いキャラ」というポジションから脱却できないラバック。

がつつきすぎるのも、考え物と言う事である。

一方、

水から上がったシノンとリーファは、キリトの方へと近付いてきた。

「お兄ちゃんも、見てないで一緒に遊ぼうよ」

「お、おい、リーファ」

腕を引つ張る妹に、キリトは思わずたたたらを踏む。

その視線の先には、どうしても引き付けられてしまふ、大きな膨らみがある。すると今度は、反対側の手をシノンが取る。

「ほらほら、遠慮するような柄でもないでしょ」

そう言つて、笑顔でキリトの手を引つ張るシノン。

2人の水着美女に手を引かれて、喜ばない男は少数派だろう。まして、両方とも水準以上の美少女と来れば尚更である。

「よし、じゃあ、少し遊ぶか」

顔を赤らめながらも、まんざらではない様子のキリト。

ラバックが嫉妬塗れの視線を送つて来るが、そこは丁重に無視しておいた。

と、その時、

「あれ、泳いでるよ。これなら、あたしも水着くらい持つて来ればよかつたかな」

岸から掛けられた呆れ気味の声に、振り向く一同。

そこには、大きなザツクを背負つた少女が、こちらを向いて立っていた。

フワフワした印象のあるパールピンクの髪を短く切り、顔にあるそばかすが印象的な少女である。

「誰？」

首をかしげるタツミ。年の頃は、彼よりも少し上くらいだが、見覚えの無い少女であ

る。

対して、驚いて声を上げたのはリーファだった。

「リズさんッ どうしてここに!？」

「やつほー、リーファじゃん。なに、ナイトレイドに引き抜かれたって聞いたけど、元気そうだね」

リズと呼ばれた少女は、そう言っただけで、リーファに手を振ってくる。

「リーファ、知り合いなの？」

「革命軍の後方支援部隊に所属しているリズベットさんです。私も、あつちにいた頃、何度かお世話になってました」

尋ねるシノンに、リーファがそう答える。

一同が視線を向ける中、リズベットは少し崩れた感じで敬礼を向ける。

「ナジエンダさんの要請で革命軍から来ましたリズベットです。通常の武器から帝具まで、メンテナンスなら任せてください」

リズベットは澁刺とした声でそう告げると、一同に笑い掛けた。



ナイトレイド達が作戦を兼ねた休養に興じている頃、

帝都を発したイエーガーズは、ロマリ―街道入口の街に達し、そこで休憩を兼ねた作戦会議を行っていた。

ここに至るまで、ナイトレイド側の動向は、逐一報告を受けている。

それを踏まえた上で、エスデスが行動指針を決める事になる。

しかし、ここでエスデスは足踏みを余儀なくされていた。

それは、もたらされた2通の情報に起因する。

「リーダーのナジエンダは東へ、切り札であるアカメは南へ行くのが目撃されていますね」

「ここで二手に分かれた、と見るべきか……」

アスナの言葉に領きを返しながらも、エスデスは自身の言葉に確信を持たずにいた。

周囲にはイエーガーズの面々が集まり、露店で購入したクレープを頬張りながら、エスデスの判断を待っている。

姉に似て食いしん坊キャラのクロメは一人でいくつものクレープを頬張っている一方、セリユーは相棒のコロと取り合いをしている。

微笑ましいのはシリカ・ピナコンビで、2人で仲良くクレープを半分こして食べていた。

「東へ行けば、安寧道の本部があるキヨロク。南へずつと行けば、反乱軍の勢力圏。いずれにしてもきな臭いですね」

ボルスが、マスクの下で険しい表情を作りながら言う。

この分岐点の街で、進路をどう取るかに寄つて、今後の運命が変わつて来る事になる。「エスデス、遅い。さつさと決めて」

いちはやくクレープを食べ終えたトキハが、焦れたように催促してくる。

積極果断を地で行くエスデスが、珍しく判断に迷っている事に違和感を覚えている様子だ。

そんなトキハの様子に、エスデスは苦笑しつつ言葉を返す。

「焦るな、トキハ。無理に動けばナジエンダの術中にはまるぞ。あいつを甘く見るな」  
「隊長は、ナジエンダ元將軍の事をどこ存じなんですか？」

尋ねるアスナに対し、エスデスは頷きを返す。

「元同僚だよ。帝國軍が強大とは言え、あいつほど、知略に長けた人間は、そうはいない」  
「エスデスでも負ける？」

そう尋ねるトキハに、傍らのウェイブがギョツとするのが見える。

イエーガーズ隊員の中で、トキハほどエスデスに対して遠慮のない言動をする者はいない。それだけに、周りの人間は緊張に絶えない事暫しだった。

「そうだな。あいつは、頭がよく回るし、武力も私ほどではないが高い。戦えば最初の内は押されるだろうな」

そう言つてから、凄味のある笑いをエスデスは浮かべる。

「だが、武力においては圧倒的に私の方が上だ。結局のところ、最終的には私が勝つだろう」

その言葉に、一同は頼もしげな視線をエスデスに向ける。

これあるからこそ、我らが隊長だ。

「じゃあ、すぐに追いかけましょう。急げば追いつけるはずですよ」

「まあ、待て」

勢い込んで身を乗り出すウェイブを、エスデスは押し留めるように制すると、状況の整理に入る。

追撃するにしてもまず、方針を決めない事には。無策で突つ込むほど、エスデスも愚かではなかった。

「ナイトレイドは帝都の賊。それが、地方までは手配書が回っていないので、油断して顔を出したところを追跡され、あげく二手に分かれたところも目撃されている。都合がよ

すぎると思わないか？」

「同感です。高確率で罠だと思わすべきでしょう」

ランがエスデスの言葉に同調し、頷きを返す。

状況が、あまりにも見え透いている。誘いを掛けている、と考える方が自然だった。

「つまり、私達を帝都からおびき出して倒そうとしているんですか？」

「恐らくな。ナジエンダはそう言う奴だ。燃える心で、クールに戦う。相変わらず、厄介な女だ」

セリユーの言葉に頷きながら、エスデスはかつての宿敵を思い描く。

ナジエンダがエスデスを警戒しているのと同様、エスデスもまた、ナジエンダと戦う事へのやりにくさを隠せずにいるのだ。

互いの手の内が判っているからこそ、戦いは裏の取り合いとなる。

ただ今回は、既にナイトレイドが先手を取って動いている以上、イエーガーズは後手に回らざるを得ない。その事が、エスデスには腹立たしく感じられるのだった。

だが、今回一つの事実として、今まで闇に隠れ潜んでいたナイトレイドが、わざわざ白昼堂々と姿を現した事は大きい。この機に乗じない手は無かった。

「隊を二つに分ける」

エスデスは断を下すように言った。

「私とセリユ、ラン、アスナ、シリカは東へ向かい、ナジエンダを追う。ウェイブ、ボルス、トキハ、クロメは南へ、アカメを追え」

隊を二手に分ける。

作戦としてはあまり褒められた物ではないが、それでも現状は、万全の状態で戦う事を許してくれない。エスデスとしても、これが最善であると判断した。

少数精鋭部隊の弱点の1つである、多方面への戦力展開の困難さが露呈した形であるが、それも詮無い事と割り切るしかない。

「でも、良いんですか？」

シリカが、律儀に挙手をして発言した。

「何だか、私達の班の方が、戦力的に偏っているようにも見えますけど？」

イエーガーズは皆、一騎当千の実力者だが、中でもやはりエスデスの存在は別格である。

そのエスデスのいる班の方が数が多い事に、疑問を感じたのだろう。

「問題はないさ」

そう言うと、エスデスはシリカの頭を撫でてやる。

その視線は、クロメとトキハの2人に向けられていた。

2人の帝具の力を持つてすれば、多少の不利は跳ね返せるはず。加えて、実戦経験豊

富で白兵戦では部類の強さを誇るウェイブに、対多数戦闘に長けるボルスの存在もある。正に、隙のない布陣だった。

「ただし、常に周囲を警戒しておけ。そして、相手があまりに多数で待ち構えていたようなら、撤退して構わん。ガンガン攻めるが、特攻しろと言っている訳じゃないからな。帝都に仇なす最後の鼠だ。着実に追い詰めて仕留めて見せる!!」

『了解!!』

エスデスの言葉に、イエーガーズの士気は否が応でも高まった。

## 3

ナジェンダがロマリー街道を最初の戦場に選んだのは、いくつかの理由から成り立っている。

まず街道自体が長いため、複数の襲撃ポイントが用意できる。その為、逆に襲撃を受ける側（今回の場合、イエーガーズ）は、いつ、どこで襲撃を受けるのか、常に警戒をしなくてはならなくなる。当然、神経はすり減り、注意力も落ちる。

街道内部は地形が複雑で、見通しが殆ど効かない為、警戒網が薄くなることに加え、更に南北、東西に大きく分岐している事から、一方の街道から、もう一方の街道へ行くには、どうしても数日の時間がかかる。

つまり、急を知ったエスデスが救援に駆けつけようとしたとしても、すぐには不可能であり、追いついてきたころには、既に戦闘は終結している訳である。

ここで問題になるのは、イエーガーズが戦力を分散せず、全力を持って追撃を仕掛けてきた場合である。そうなったら、いかにナジエンダといえども手の出しようがない。

それに対応する為、ナジエンダは策を仕掛けた。

ナイトレイドの中で、特に危険視されているのはリーダーの自分と、エースのアカメである。

その二人が、それぞれ南と東の街道で目撃されたと言う情報を、革命軍のスパイを通じてエスデスに伝わるように仕向けた。

しかも、東に行けばキヨロク。南へ行けば革命軍の勢力圏。どちらも帝国にとって無視できない場所である。つまり、ナイトレイドが向かう場所としては、どちらも信憑性が高いと言う事になる。

加えて、ナジエンダが姿を見せたとなれば、エスデスは必ず、自ら追いかけて来ると確信している。自分とエスデスの因縁は、それ程までに深いのだ。

全ては、ナジエンダの手の内にある。

決戦の準備は、着々と整いつつあった。

「よし、できた」

一仕事を終えたリズベットは、笑顔と共に手を止める。

テーブルの上に並べられた帝具たち。

村雨、インクルシオ、エリユシデータ、ダークリパルサー、パンプキン、クロースター、ライオネル、シエキナー、フェアリーダンス、ガイアファンデーション。

全てが、リズベットの手によって新品同様の輝きを放っていた。

ナジエンダがリズベットを革命軍本部から呼び寄せたのは、決戦を前にしてメンバーの帝具を万全の状態に仕上げる為だったのだ。

そのリズベットの手には、彼女の手には少し大きい感じのする手袋が嵌められている。

忘れもしない、その手袋は、あのドクター・スタイリツシュが使用していた帝具《神ノ御手パーフェクター》である。

スタイリツシュ死後、革命軍本部に送られたパーフェクターだが、それをリズベットが受け継いだ形である。

後方支援部隊として武具の調整を担当するリズベットにとって、まさにパーフェク



ターはベストマッチと言うべきだった。

因みに、パーフェクターの扱いに関しては、革命軍内で聊か変則的な立ち位置にある。リズベットの他にも数人、パーフェクターに適合するものがいた為、現在は複数の人間が状況に合わせて使いまわしているのだ。

「スサノオも後で見てあげるね。それから、ナジエンダさんの義手も」

「ああ、頼む」

生物型帝具であるスサノオのメンテナンスには、聊か複雑な手順を擁する。その為、少し時間を掛ける必要があった。

アカメ、タツミ、キリト、メイン、ラバック、レオーネ、シノン、リーファ、チエルシーが、それぞれの帝具を手取る。

手に馴染む感触は、しかし生まれ変わったかのように新鮮な印象があった。

「良い仕事だ。助かるよ」

愛刀二振りを鞘に収めながら、キリトが笑い掛ける。

これで自分達は100パーセント、否、120パーセントの力を発揮して戦う事ができる。

イエーガーズとの決戦準備は、整ったと言って良かった。

一方、

ナイトレイドを追撃すべく、イエーガーズも動き出そうとしていた。

用意された馬は、つごう8頭。本来なら人数分の9頭用意すべきところだが、シリカが馬に乗れない為、彼女はアスナの後ろに乗せてもらう形となる。

「いい、トキハ君」

自分の馬に乗り込もうとしてるトキハを、アスナは声を掛けて呼び止めた。

「あんまり無茶しないでよね。君は本当に、誰かが見ていないとすぐに無茶ばかりするんだから」

「そんなつもりはない」

言い募るアスナに対し、素っ気ない口調で返すトキハ。

普段の彼なら、そのままさっさと馬に乗り去って行くところだろう。

だが、すぐに思い直したように振り返り、アスナを見やる。

「そつちこそ．．．．．気を付けて」

「トキハ君？」

普段は見せないような少年の言葉に、アスナはキョトンとした顔を見せる。

対して、トキハはアスナを真っ直ぐに見返す。

「今回は……何か嫌な予感がする。だから、気を付けて、アスナ」  
そう言うと、トキハは今度こそ馬上の人となる。

ナイトレイド

イエーガーズ

革命軍と帝国軍、双方の精鋭部隊が、運命に手繰り寄せられるように最初の激突の地、ロマリー街道へと向かっていく。

死闘が、始まろうとしていた。



## 第29話 「死戦の街道」

1

駆ける4騎の馬が、整列して街道を進んで行く。

ウェイブ、トキハ、クロメ、ボルスのイエーガーズ4人が、かなりのスピードで、ロ  
マリー街道を南へとひた走っていた。

姿を現したナイトレイド。その主要メンバーであるアカメの目撃情報を基に、これを  
追跡している。

周囲は切り立った崖に囲まれ、こちらに向かって迫って来るかのようだ。

「帝都最強のナイトレイドが相手か……私なんかで勝てるかな……」  
不安そうに発言したのはボルスだった。

とは言え、これが弱気から出た言葉ではないのは、誰もが判っている。

チーム一、慎重な性格のボルスは、常に最悪の事態を想定して動いている。

まして、相手はこれまで、いくつもの凶行を重ねてきたナイトレイド。警戒しすぎて損をする、という事は無い筈だった。

「大丈夫ですよ」

力強く請け負ったのはウエイブだった。

「前に一度、ナイトレイドの1人と戦った時には応戦されませんでしたけど、実力的には自分と互角くらいに感じました」

ウエイブは以前、そうとは知らずにインクルシオを纏ったタツミと戦っている。あの時は、タツミが情報を持ちかえる事を優先して交戦を避けた為、殆ど戦闘らしい戦闘には至らなかった。

だが、インクルシオ（タツミ）がウエイブの猛攻を切り抜けた事から、ウエイブ自身、一方的な戦闘だったにもかかわらず、相手が相当な実力者であると判断していた。

「けど、力を合わせればきつと勝てますつて。ボルスさんの帝具は多人数相手に向いていますし、むしろ心強いです」

「……そうかな」

ウエイブの励ましに、少し勇気付けられたように呟く。

そこで、会話を聞いていたクロメが、話に加わって来た。

「とか言つて、ウェイブが一番足引つ張りそう」

「何をオ!!」

無邪気にからかうクロメに、ウェイブは食つて掛かる。

その反応が面白かつたのか、クロメは更に煽る。

「何かね、ウェイブつて、ここぞつて時に弱そう」

「お、俺だつてなッ グランシヤリオを装備すれば、結構やるもんなんだよ!!」

ウェイブの強さは、既に完成された物である。それは、他ならぬエスデス自身が認めている事でもあった。

だが、同時にメンタル面では不安が残る、という評価がされていた。

要するに、何らかの要因があつて、実力を発揮しきれない。あるいは、油断から足元を掬われる可能性もある、という事だ。

だが、逆を言えば、それさえ克服してしまえば、ウェイブは他者を完全に圧倒し得る強さを得られると言う事だ。

「強い所見せてよね。期待してるから」

「おお!! 上等じゃねえか!!」

何やら勝手に盛り上がるウェイブとクロメ。戦闘前から士気の高い事である。

そんな中、1人黙って馬を走らせているトキハに、ボルスが寄ってきた。

「どうしたのトキハ君？」

「ボルス……」

呟くように言ってから、再び黙り込むトキハ。

何となく、自分の中にある感情を持って余している。そんな感じの仕草だ。

そんな少年の様子から、ある事を想い付き、ボルスは口を開く。

「もしかして、アスナちゃんの事が心配？」

「だッ 誰が、あんな奴ッ」

珍しく、声を荒げるトキハ。

いきなり凶星を突かれ、取り繕う暇が無かった、といった感じだろうか？ 心なしか、

頬が赤く染まっているようにも見える。

「大丈夫だよ。アスナちゃんは強い。それに、あっちにはエスデス隊長もいるからね」

「だから……」

不貞腐れたようにそつぽを向くトキハ。これ以上、何も話す気はない。とばかりに口

を閉ざしている。

そんな少年の、(ある意味年相応な)反応を見て、ボルスはマスクの奥でクスリと笑う。

トキハは、アスナの事が気になっているのだ。



イエーガーズ結成以来、ともに組んで戦う事が多かったトキハとアスナ。

顔を見合わせれば喧嘩する事が多く、口では素っ気ない事を言いあう両者だが、いざ戦闘になれば、イエーガーズの中で並ぶ者がいない程、高度な連撃を見せる。

つまり、何だかんだといいつつ、息は抜群に合っているのだ。

それに、

ボルスは、トキハの中で、以前とは少し違う変化があるような気がしていた。

結成当初のトキハは、本当に誰も寄せ付けようとしないう、一種の孤高性を持った少年だった。

しかし、最近では、他のメンバー達とも、よくしゃべる光景を目にする。

それをボルスは、アスナと触れ合う事が多くなったからでは、と思っている。

つまり、トキハの中で、アスナは特別な存在となりつつあるのだ。

当人たちが、毛の先程もその事に気付いていないのには、苦笑せざるを得ないが、もうちよつと素直になっても良いのに。

ボルスとしては、どうしてもそう思ってしまうのだった。

その時、

「ちよつと待ったッ」

先頭を走っていたウェイブが警告を發した為、一同は手綱を引いて急停止させる。

その前方には、何やら木と藁を編んで作った人形が置かれている。

「かかし?」

「だねー」

不審そうな眼差しで案山子を見るトキハとクロメ。

しかも何やら、かかしの逞しい胸板には「池面」などと書かれている。恐らく「イケメン」と読むのだと思われるが、いずれにしてもふざけた造りである。

「何か、明らかに罠って感じだよね」

「そうですね。慎重に近付きましょう」

ボルスの言葉に頷きを返すと、ウェイブは馬から降りて、徒歩で案山子へと近づいて行く。

とにかく、こんな所に道の真ん中で案山子が立っている理由を調べないと。

そう考えて歩み寄ろうとした。

次の瞬間だった。

突如、遠距離より、エネルギーの弾丸が飛来する。

標的になったのは、クロメ。

放ったのはマインである。

案山子が罠である、というウェイブたちの判断は正しかった。ナイトレイドはこの場

に陣を張り、イエーガーズを待ち伏せしていたのだ。

この場所にイエーガーズをおびき寄せ、足止めしたところを狙撃で仕留め先制攻撃を加える。

ナジエンダの立案した作戦である。

今回の作戦では特に、クロメとボルスが最優先目標にされている。

クロメもボルスも、軍時代に何人もの人間を殺害し、革命軍本部が最も危険視している者達である。特にボルスは、その能力を駆使して、革命軍に協力した村を丸ごと焼き払う、というような事を何度も行っている。

何としてもこの場で仕留める事が、革命軍本部からナイトレイドに依頼されていた。

放たれたエネルギー弾が、真っ直ぐにクロメへと迫る。

次の瞬間、

クロメは殆ど反射的に身を翻して飛び退くと、同時に自身に迫ったエネルギー弾を紙一重で回避した。

断ち切られた黒髪が数本、忘れ去られるように宙に舞うのが見える。

しかし、それだけだった。

クロメ本人は、傷一つ負ってはいない。

思わず、スコープの先でマインが唸り声を上げたのは言うまでも無い。

完璧に、回避が間に合うタイミングではなかった。

視界外からの超長距離狙撃。マインの技量を如何無く発揮した攻撃は、間違いなくクロメを貫いて絶命させるはずだった。

にも拘らず、クロメは回避して見せた。

恐るべき超反応である。とても、人間にできる技とは思えなかった。

だが、ナイトレイド側の準備にも抜かりは無い。狙撃に失敗する可能性を考慮し、既に次の手は打ってあった。

「クロメッ 大丈夫か!？」

ウェイブの注意が一瞬逸れた瞬間、

件の案山子が、内側から膨れ上がるようにして弾け飛ぶ。

中から姿を現したのは、スサノオである。彼は初めから案山子の中に潜み、襲撃を掛けるチャンスをうかがっていたのだ。

クロメへと真つ直ぐに迫るスサノオ。

その手にした棍が、少女へと襲い掛かる。

次の瞬間、

「危ねえ、クロメ!!」

とつきに庇いに入ったウェイブが、手にした剣でスサノオの棍を受け止める。

だが、衝撃までは殺しきる事ができなかった。

スサノオの臂力をまともに受けるウェイブ。

「ウオツ!？」

その衝撃のすさまじさに、鍛え上げた体は大きく浮き上がり、そのまま視界の彼方へと吹き飛ばされていった。

「ウェイブ君!!」

とつさに助けに行こうとするボルス。

だが、

そこへ足音を踏み慣らし、ボルスの前に立ちはだかる。

ナジエンダにアカメ、ライオネルで変身したレオーネに、インクルシオを纏ったタツ

ミの姿もある。

特筆すべきは、ナジエンダとアカメの存在だろう。

事前の情報では、2人は別れて別々の街道を言ったとあったはず。

しかし、そんな彼女らが揃ってこの場にいると言う事は……

「ナイトレイド……しかもほぼ全員。と言う事は、東は全くのフェイクだったんだね」

事ここに居たり、ナジエンダの立てた作戦の全貌が明らかになった。

彼女は初めからイエーガーズを分断し、その片割を全力で叩く腹積もりだったのだ。恐らくこの場には、姿を現していない他のメンバーも来ている筈。

それに対しイエーガーズは、先制攻撃でウェイブがやられて今や3人のみ。数的不利は否めない。

しかも、エスデスは不利な場合は逃げろと命じていたが、今やそれも不可能である。撤退しようとするれば、背後から追撃されるのは目に見えていた。

「クロメにボルス。イエーガーズの中でも、お前達は標的だ。覚悟してもらおうぞ」

言い放ったナジエンダの言葉に、ボルスは自らの運命が差し迫っている事を悟る。覚悟はしていた。

自分はこれまで、多くの人間を殺してきた。

罪の無い人間ですら、命令しごとだからという理由で焼き殺した事も、1度や2度ではない。

ボルスにとって、いつか自身が標的にされる事は、とつくの昔に覚悟ができていた。むしろ、この瞬間が来るのが遅すぎたくらいである。

「でも……」

ボルスの脳裏には、自分の帰りを待つ愛しい妻と、最愛の娘の姿がよぎる。

「私はまだ、死ぬわけにいかない!!」

彼女達を残しては死ねない。

それがいかに、手前勝手に独りよがりな言い分であるかは、他ならぬボルス自身もよく判っている。

だがそれでも、

愛する家族の為なら、エゴイストにでも何でもなろうと決めていた。

一方、

アカメとクロメもまた、共に視線を交わして対峙していた。

「お姉ちゃん」

「クロメ……」

笑顔のクロメに対し、アカメは暗い表情のまま妹を見る。

かつて共に同じ刻を歩きながら、運命によって引き裂かれた姉妹。

否、引き裂いたのは、他ならぬアカメ自身である。

かつて、同じ暗殺組織にいながら、姉は組織を抜け、妹は残る道を選んだ。

その時から、2人の道は別たれたのだ。

「会いたかったよ、お姉ちゃん。すごくうれしい」

無邪気に笑うクロメ。

その様は、アカメの記憶の中にある、妹の笑顔と寸分違わない物である。

だが、その内実は、狂気によって彩られていた。

「これでやつと、お姉ちゃんを殺して、私のコレクションに加えてあげられるね」  
言いながら、八房をすらりと抜き放つクロメ。

同時に、刃を高らかに掲げる。

次の瞬間、驚愕すべき事態が起こった。

突然、クロメの足元の地面が盛り上がり、次々と無数の腕が突き出してきたのだ。

まるで、冥界から死者が、この世に這い出て来るかのような光景である。

否、

「まるで」ではない。文字通り、死者が這いずり出てきているのだ。

帝具《死者行軍 八房》

その能力は、使用者がトドメを刺した生物を、最大で8体まで「死者人形」として使役できる事にある。

クロメを取り巻くように、彼女の「軍勢」が姿を現す。

更に、

突然、地鳴りのような振動が、一同を襲う。

「な、何だ!?! 地震か!?!」

驚くタツミ。他の皆も、何が起こっている岡判らず、戸惑いを隠せないでいる。

そんな中、



地中から、死体人形たちよりも、更に巨大な物が、這いずり出てくる。全長だけで、人間の50倍以上。威容なら100倍以上だろう。

それは、一言で言えば恐竜の骨だった。

恐らく危険種のも物だと思われるが、当然ながら生きているようには見えない。

「超級危険種デスタグルだと!?!」

ナジエンダが呻き声を漏らす。

エスデスが部隊を二分した訳を、ナジエンダは理解していた。

二分した戦力でも充分に勝てる。そう判断したからこそ、エスデスは二手に分かれたのだ。

「さあ、帝具戦の始まりだよ。何人死ぬかな?」

デスタグルの掌に腰掛けながら、クロメは可笑しそうに言い放った。

2

先制したのはアカメだった。

自身のトップスピードで駆け抜けながら村雨を抜刀、そのまま横なぎに刃を繰り出しクロメへと斬り掛かる。

一切の呵責の無い攻撃。

妹に対して、

否、妹だからこそ、愛する者だからこそ、他に委ねず、自ら決着をつけたいと考えていた。

対抗するように、クロメも八房を繰り出す。

ガキンツ

ぶつかり合い、火花を散らす両者の刃。

すれ違う、姉と妹。

と同時に、アカメは素早く次の行動を起こした。

進路を強引に反転させると、背中を向けているクロメを追う。

再度、繰り出される刃。

クロメの反応は遅い。

そのままアカメが斬り掛かる。

次の瞬間、

立ちはだかるように現れた人影が、アカメの刃を手にした槍で受け止めた。

その姿を見て、驚愕するアカメ。

「お前、ナタラか!？」

長身の若い青年は、かつて暗殺部隊で同僚だったナタラだった。

任務中に重傷を負い、もはや死を待たただけだったナタラを、クロメは八房でトドメを刺し、自らの死体人形にして今日まで使役して来たのだ。

ナタラが素早い連撃を仕掛け、アカメを押し返しにかかる。

八房の能力で死体人形になった生物は、生前の能力をそのまま継承している。その為、ナタラもまた、暗殺者時代の実力を十全に発揮できるのだ。

堪らず、後退してナタラの攻撃を回避するアカメ。

同時に、鋭い視線をクロメへと投げ掛ける。

「もう土に還してやれッ 共に育った仲間だろう!!」

「何言ってるの、お姉ちゃん?」

抗弁するアカメに対し、クロメは本当に意味が分からない、とばかりに首をかしげて見せる。

「大切な仲間だからこそ、ずっと一緒にいたいって思うのは当然でしょ」

言いながらクロメは、八房の切っ先をアカメへと向ける。

「お姉ちゃんも、私のコレクションに加えてあげる。そうしたら、いつまでも一緒にいら

れるよね」

話を通じない。

アカメとクロメでは、見ている物、生きて来た道、そこで至った答、全てが異なっている為、まるで会話が噛み合わない。

次の瞬間、クロメは姉目がけて斬り掛かって行く。

猛攻を仕掛けるクロメとナタラ。

いかにアカメといえども、自身と同等の実力を誇る暗殺者2人を相手では不利は否めない。

しかも、彼女を狙っているのは、2人だけではなかった。

ルビカンのテのノズルを構えたボルスが、アカメに対して慎重に照準を合わせているのが見える。

「岩漿錬成」  
マグマドライブ

次の瞬間、物質化するまでに凝縮された炎が、弾丸と化してアカメへと襲い掛かった。ルビカンのテ奥の手マグマドライブ。

炎を弾丸と化し、遠距離砲撃用武装として使用できる。

目を見開くアカメ。

空中にある彼女に、回避する手段は無い。

直撃を喰らい、炎に包まれるかと思われた次の瞬間、横合いから飛び出した白い影が、空中でアカメをキャッチ、そのまま射線から飛び退く。

「一人で突っ込むんじゃないぞ、アカメ!!」

「すまない………」

アカメを抱きかかえながら、タツミが声を上げる。

普段の冷静さを欠いたアカメの行動は、やはり最愛の妹を敵に回していると言う、精神的負荷が原因であると思われた。

着地するタツミ。

そこへ、追撃を仕掛けようと、ルビカンを構え直すボルス。

だが、

それを阻止せんと、漆黒の影が躍り出た。

「やらせるかよ!!」

キリトだ。

その素顔は、敵を前にして白昼に晒されている。

この戦いに赴く前、キリトはナジエンダに呼ばれ、こう言われた。

「お前には死んでもらわなくてはならない」と。

その理由は今回、キリトが敵相手に素顔を晒す必要があった事にある。

何しろ、フルフェイスマスクで顔を覆っているタツミや、遠距離攻撃専門のシノンと違い、キリトは最前線で顔を晒す事になる。

これは暗殺者としては致命的と言って良い。今後、暗殺任務にキリトを投入できない事態が発生する恐れもあった。

とは言え今回の作戦、相手がイエーガーズである以上、ナイトレイドが全力で挑まないと成功はおぼつかない。キリトほどの戦力を遊兵化するのは惜しい。

そこで熟慮の末、投入するべきという判断が下されたのだ。

「新手の敵!」

キリトの奇襲に驚くボルス。

すぐさま標的を変更。ルビカンのノズルをキリトへと向け、炎を吹きだす。  
だが

「ウオオオオオオオ!!」

キリトはエリユシデータを正面に掲げると、そのまま両掌で高速回転させる。

そんな物で何を!?

ボルスがそう思った次の瞬間、驚くべき事態が起こった。

キリトの剣に弾かれ、ルビカンの炎が散らされていくのだ。

「まさか、そんな手でッ!？」

絶句するボルス。

剣を高速回転させて盾の代わりとする。

これもまた、エリユシデータの元となった剣豪が使用していた、技の1つである。

いかに全てを焼き尽くすルビカンの炎といえど、帝具の能力まで焼き尽くす事はできなかつた訳だ。

「貰った!!」

間合いに入ると同時に、右手に持ち直したエリユシデータを振り翳すキリト。

しかし、

そのキリトの攻撃を、いち早く動きを察知した者が阻止しに掛かる。

「やらせない」

横合いからキリトに接近する影。

低い眩きと共に、トキハは玉梓を鞘奔らせる。

その鋭い斬撃が、横合いからキリトへと襲い掛かる。

「クッ!？」

とつさに、ボルスへの攻撃を諦め、回避行動を取るキリト。

体勢を立て直すと同時に、相手を見やる。

「お前ツ……………」

見覚えのある少年の姿に、思わず歯を噛み鳴らすキリト。

フェイクマウンテンでタツミを捜索していた時に、キリトとトキハは一度剣を交えている。その時の記憶は、まだ新しい物だった。

「ああ……………あの時の」

対して、トキハもまた、フェイクマウンテンでの対峙を思い出し、素っ気ない調子で声を上げる。

「やっぱり、ナイトレイドだったんだ」

「……………ああ」

事ここに至った以上、隠す事に意味は無い。

重々しく頷きを返すと、キリトは真っ向からトキハを見やる。

「ナイトレイドのキリトだ」

同時に、帝具の能力を解放する。

背中に加わる、新たな重み。

キリトは手を伸ばし、ダークリパルサーを抜き放つ。

「お前の実力は判っている。悪いが、初めから手加減無しで行かせてもらうぞ」

「……………それはこっちのセリフ」



茫洋とした声で言い放つと、トキハも玉梓の能力を解放する。

黒かった髪は白く染まり、同時に目は毒々しいまでの赤に変化する。

《邪神転生 玉梓》の能力は解き放たれ、少年の身体能力は飛躍的な向上を見せる。両者、視線が激しく激突する。

「イエーガーズ、トキハ、参る……」

言い放つと同時に、

2人の少年は、互いの剣を掲げて地を蹴った。

他のメンバー達も、それぞれの死体人形たちと交戦状態に入っている。

そんな様子を、少し離れた場所から、ナタラを伴ったクロメが眺めていた。

八房発動中の彼女は、各死体人形を制御する為、一時的に能力が低下している。その為、最も信頼きにしているナタラを護衛として残し、戦闘を俯瞰的に眺める事になっていた。

それにしても、

「お姉ちゃん……私達を裏切つて、あんな奴等と一緒にいるなんて……」  
面白くなかった。

お姉ちゃんは、私と一緒にいるべきだったのに。それが、裏切つた挙句、いつの間  
やら訳の判らない連中と仲良しこよししているなんて。

これはちよつと、懲らしめてやる必要がある。

「やれ、デスタグル!!」

クロメの命令を受け、巨大な影が動く。

のけぞるように胸郭を逸らしながら、吸い込んだ。

膨らんだ胸郭が限界に達した瞬間、一気に解放される。

放たれる極大の咆哮。

その圧倒的な威力は致死量を超越し、地形すら薙ぎ払う。

帝具の素材にもなったと言われる超級危険種の攻撃は、正に想像を絶していると言っ

て良かった。

だが、

スサノオがナジエンダを抱えて退避したのを皮切りに、ナイトレイド達も次々と退避行動に移る。

キリトとレオーネは、交戦を中断してとっさにその場から飛び退き、マインは物陰に退避、タツミはアカメを庇うようにしてマントを広げ、衝撃波に耐える。

勿論、デスタグルの放った衝撃が収まるまでは、イエーガーズ側も身動きが取れない。

強烈すぎる攻撃と言うのも、ある意味で考え物だった。

やがて、衝撃が収まる。

同時に、両勢力は再動する。  
だが、

分断に成功し、本来なら有利に作戦展開できるはずのナイトレイドが、思わぬ苦戦を強いられていた。

問題は、クロメの死体人形たちである。

これらは皆、厄介な物で、それぞれが一騎当千と称して良い実力者達である。

レオーネを変幻自在な鞭攻撃で抑え込んでいる大柄な男はロクゴウ。かつては帝国の將軍であり、ナジエンダの同僚だった人物である。帝国を裏切り、革命軍に身を投じようとしたところを察知され、クロメに暗殺された。

狙撃の為、潜んでいたマインを発見し、激しい銃撃戦を交わしている二丁拳銃の女は、かつてクロメを暗殺する為に北方異民族が送り込んで来た刺客のドーヤ。

タツミには2体の死体人形が襲い掛かっている。

そのうち一体、エイプマンは類人猿型の特級危険種である。所謂「脳筋タイプ」である為、あまり知能は高くないが、攻撃力、瞬発力、耐久性は死体人形たちの中でもぴか一存在であり、クロメに割と酷使される率が高い、ある意味「苦勞人」である。

もう一体のヘンターは南方異民族であるバン族の特殊部隊員で、エイプマンとは逆に技術と身体能力を駆使した暗殺技術を得意としている。

エイプマンが正面から掛かってタツミを足止めし、その間にヘンターが搦め手から攻撃を仕掛ける、という戦法でタツミを翻弄していた。

ボルスに斬り掛かろうとしたアカメの前に、禿頭にサングラスを掛けた男が、透明特殊樹脂性の盾を手に立ちはだかる。

ウォールと呼ばれる男は、かつて、クロメが暗殺した要人の警護をしていたガードマンである。盾を主武装にしている事からも分かる通り、防御技術に優れている。その盾も、刀剣の刃を防ぐ特殊材質に加え、微妙に表面が湾曲している関係で、アカメの必殺の斬撃はしばしば狂わされていた。

そして、

キリトとトキハもまた、己が刃を振り翳して激突していた。

同時に地を蹴ると、互いの距離が一気に迫る。

先制したのはトキハだ。

玉梓によって強化された身体能力を十全に駆使してキリトへと斬り掛かる。

だが、キリトの反応も素早い。

トキハの斬撃に対し、左右の剣を交差させて防御。勢いを殺すと同時に腕を払って押し返す。

後退するトキハ。

そこへ、キリトはすかさず追撃を掛ける。

「行けッ!!」

左手に握ったダーククリパルサーを、横なぎに繰り出して斬り掛かる。対して、

トキハはとつさに、防御よりも回避を選択する。

繰り出されたキリトの剣に対し、前方宙返りをするようにして回避しながら飛び越えようと、キリトの背後に着地。同時に、振り向き様に刃を繰り出すトキハ。

一拍遅れて、キリトも追隨する。

振り向き様に放った剣が、トキハの玉梓と激突。互いの刃がぶつかり合い、火花を盛大に散らす。

衝撃に押され、両者、後退を余儀なくされる。

地面に足を着き、制動を掛けるトキハ。

次の瞬間、

自身に向かつて飛来する、光の矢の存在に気付いた。

「ッ!？」

息を飲みながらも、とつさに身を翻すトキハ。

間一髪、光の矢は、トキハの鼻先を掠めて飛び去って行った。

その様子を見て、キリトは舌打ちする。

潜んでいるシノンには、隙を見付けて狙撃を行うように指示を出していたのだが、それが回避されてしまうとは。

「新手？」

「さあな」

嘯くように言いながら、黒白の二刀を構え直すキリト。

対抗するように、トキハもまた、玉梓の切っ先を向け直した。

その頃、狙撃位置にしていたシノンは、思わず呻き声を漏らしていた。

「まさか、今のをかわすなんて……」

自身の必殺の意志でもって放った狙撃。

まさか、それをトキハが回避するとは思っても見なかった。先程、マインの狙撃を回避したクロメといい、イエーガーズの実力は底が知れなかった。

「まあ良いか、次」

気持ちを切り替えて、新たな目標を探す。

マインも敵に発見された以上、シノンは唯一の狙撃手となってしまった。

できればクロメを狙いたいところだったが、先ほどの光景を見る限り、無理に狙撃を敢行したとしても、成功の望みは薄いだろう。

ここは味方を掩護しつつ、着実に敵の戦力を減らして行こうと思った。シエキナーの弦を引くシノン。

その瞳が照準の為のデータを映し出す。

次の瞬間、シエキナーから光の矢が奔った。

## 第29話「死戦の街道」

終わり

## 第30話「クロスクラッシュ」

1

ロマリー街道におけるナイトレイドとイエーガーズの史上初となる大規模な激突は、時を追うごとに激しさを増しつつあった。

当初、戦力分断に加え、奇襲攻撃によって包囲網を完成させたナイトレイド側は、早々にウエイブを脱落に追いやり、戦闘における有利を一気に確立できるものと考えられていた。

しかし、意に反してクロメが八房の能力を発動したことで、戦況は逆転しつつあった。アカメの鋭い斬り込みは、防御戦闘を得意とするウォールによって完全に防がれていく。



キリトはトキハと交戦中。実力はほぼ互角と言って良い2人だが、それゆえに長期戦の様相を見せ始めている。

レオーネはロクゴウの鞭裁きに翻弄され、身動きが取れなくなっている。

タツミはエイプマンとヘンターに挟撃され、剛柔合わせた攻撃に苦戦中。

援護射撃を行うはずのメインも、ドーヤに捕捉されてしまっている。

そして何より脅威となっているのは、デスタグールの存在だった。

超級危険種を死体人形にしたデスタグールの存在感は圧倒的である。

およそ「人」が対抗できる類の相手でないことは明白であろう。

だが、

対峙する存在もまた「人」の枠から外れているとすればどうであろう？

スサノオはマスターであるナジエンダを抱えたままデスタグールの攻撃を回避。同

時に大きく後退する。

「さすがの破壊力だな」

そのスサノオに抱えられたまま、ナジエンダはデスタグールが放つ破壊と言う名の存

在感に舌を巻く。

ナジエンダとしては、万全の体制をもつて臨んだはずの戦いにおいて、思わぬ苦戦を

強いられている事が齒がゆく感じられているのだ。

だが、隻眼の戦略家は同時に、戦況を冷静に見極めていた。現状、最大の脅威となっているのはデスタグルルと見て間違いない。

ならば、そのデスタグルルを排除する事ができれば、逆転の目もあり得ると言うものだ。

「スサノオツ 皆であいつを止めるぞ!!」  
命じるナジエンダ。

まずは全員一斉攻撃でデスタグルルを排除。その後は残敵掃討に移行する。

それが、ナジエンダがとつさに建てた作戦であった。

対して、

「その命令は間違いだ、ナジエンダ」

スサノオをは静かな声で、マスターの命令を否定する。

「確かに奴は強敵だ……だが!!」

言い放つと同時に、スサノオは手にした棍でデスタグルルの腕をはじいた。

デスタグルルの巨体が、大きくよろめくのが見える。

それは異様な光景だった。

恐竜の如き巨躯を持つデスタグルルを、人間とさほど変わらない大きさのスサノオが弾き飛ばしたのだから。

踏鞴を踏みつつ、それでも踏みとどまるデスタグル。

その様を、スサノオは鋭い眼差しで睨み据える。

「奴の相手は俺一人で十分だ。皆には他を当らせろ」

その様に、ナジエンダですら軽い戦慄を覚えざるを得ない。

しかし、同時に自らの帝具であり、相棒たる存在に対して、絶大なる信頼を再確認するのだった。

一方、トキハもまた、キリト相手に苦戦を強いられてきた。

複雑な軌跡を描いて繰り出される黒白の剣閃。

對抗するように、トキハも玉粹を振るって斬り掛かる。

互いの繰り出す軌跡が複雑に絡み合い、金属音が連続する。

キリトは真つ向から振り下ろされたトキハの斬撃をダークリパルサーで受け、同時に右手に構えたエリユシデータを繰り出す。

とつさに後退する事で、キリトの斬撃を回避するトキハ。

そのまま地面を蹴って体勢を入れ替えると、キリトに対して斬り掛かろうとする。

だが、

「ッ!？」

強化された聴力が、風を切って迫る存在を察知する。

とつさに突撃をキャンセルして、飛びのくトキハ。

一拍の間において、それまでトキハがいた場所で閃光が炸裂した。

舌打ちするトキハ。

彼を襲ったものの正体は、シノンの狙撃である。

いかに強敵とは言え、相手がキリト1人であるならトキハもここまでの苦戦はしないだろう。

だが、こうして一瞬のスキをついて仕掛けてくるシノンの狙撃が、しばしばトキハの気を逸らしてしまふのだ。

そこへ、畳みかけるようにキリトが斬り掛かる。

体を捻り、回転を加えた強烈な一撃。

その一撃を、トキハは玉梓を盾に辛うじて防ぎきる。

だが、

その軌跡を追うように、白剣がトキハに迫る。

二刀流による連撃。

その2撃目を、

トキハは体を大きく仰け反らせることによって回避した。

キリトの剣は、トキハの前髪数本を断ち切るに留まる。

今度は、キリトが舌打ちする番である。

必殺のタイミングを狙って放った一撃が、まさか、こんな形で回避されるとは思ってもみなかったのだ。

キリトが技後の硬直によって動きを止めている内に、トキハは距離を置いて体勢を立て直した。

「……………厄介」

「それはこっちのセリフだよ」

互いに吐き捨てるように、眩きを漏らすキリトとトキハ。

高度な連携を見せて攻めてくるキリトとシノンの前に、トキハは完全に攻め手を欠いている状態である。

一方のキリトとしても、初手から奥の手の開放に加え、シノンの援護射撃があつてなお攻め切れていない状況について、忸怩たる物を感じずにはいられなかった。

帝具によって動作をアシストしているキリトと、帝具によって身体能力を強化しているトキハ。

ある意味、似たような能力を持つ2人の戦闘は、互いの長所を潰しあう形になってい

た。

再び、剣を構える両者。

先の動いたのは、キリトだった。

両手のエリユシデータ、ダークリパルサーを掲げて切り込むキリト。

対抗するように、トキハもまた玉梓を構えなおしてキリトを迎え撃った。

2

激闘の様子は、離れた場所で待機しているラバックとリーファの元へも伝わってきていた。

大地を揺らす振動と、離れていても聞こえてくる鳴動が、戦いの激しさを物語っていた。

「始まりましたね」

「ああ。みんな、無事でいてくれよな」

2人は今回、後方で待機するように命じられている。

と言っても休んでいるわけではない。

ナジエンダは敢えて戦場から離れた場所に2人を配置することで、包囲網を万全なものとしているのだ。

ナイトレイドとイエーガーズが激突すれば、必ず双方に大きな被害が出る。

そうなるに敵、特に標的であるボルスやクロメを取り逃がす可能性がある。

加えて、万が一の可能性として、分断したエスデス達が、罫を察知して駆けつけてくる可能性もある。

そこで、機動力の高いリーファと、広範囲をカバーできるラバックを、敢えて後方に残したのである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言のまま、戦場の方向を見つめるリーファ。

自分たちの役割は理解している。その適正ゆえに選ばれたことも。だが、

あの場では今、彼女の兄をはじめ、仲間たちが戦っているのかと思うと、どうしても気は逸ってしまう。

『お兄ちゃん、みんな、どうか無事で・・・・・・・・・・・・・・・・』

リーファは心の中で、祈るように呟いた。

強烈な鞭裁きで攻め立ててくるロクゴウ。

対して、レオーネは静かな声で言い放つ。

「おっさん、帝国の將軍だったのか。どうりで強いわけだよ」

対して、物言わぬ死体人形のロクゴウは、無言のまま鞭を繰り出す。

しなりを加えて襲い来る鞭。

だが、

「流石にもう慣れた!! いつまでも同じ技が通用すると思うなよ!!」

ライオネルによって身体能力を強化したレオーネは、ロクゴウの鞭裁きを見切り、素手で掴み取った。

と、

「よく言った、レオーネ!!」

鋭い囁き。

次の瞬間、飛び込んできたナジエンダが、義手の手首を飛ばしてロクゴウに対して攻撃を仕掛けた。

ロクゴウの巨体が、大きく吹き飛ばされる。



そこへ、ナジエンダは馬乗りになって抑えつけた。

「ロクゴウ將軍……元同僚として、一刻も早くあなたを呪縛から解き放ちます」

帝国軍時代の旧友に、静かな声で語り掛けるナジエンダ。

その隻眼には、哀愁の色が混じって見えるのは、決して間違いではないだろう。

それにしても、

「……ボスが戦っているところ、久しぶりに見た」

レオーネは、ナジエンダの姿を呆然と眺めながらつぶやく。

ナジエンダは、かつてエスデスによって負傷を負わされたことが響き、昔のように戦うことはできなくなっている。そのため、ナイトレイドでは専ら、後方で指揮に専念することが多かった。

だが、

帝都最強の殺し屋集団を束ねるリーダーが、無力であるはずもない。

たとえ負傷していても、十分に戦える力は持っていた。

ともかく、ナジエンダまで参戦してきた以上、早々にけりをつける必要があるだろう。

「よし、私も……」

レオーネが言いかけた時だった。

彼女の背後から、

音もなく忍び寄る影。

次の瞬間、

背後から接近したクロメが八房を一閃。

レオーネの左腕は、鮮血とともに肩口から斬り飛ばされた。

「なッ!？」

驚愕とともに、肩を押えるレオーネ。

対して、クロメはゾツとする笑みを浮かべてレオーネを見やった。

「ふふ、ダメだよ。私から完全に目を逸らしたら。隙あらばガンガン仕掛けていくからね。あなた達が全滅するまで」

開放された帝具の能力にばかり目が行きがちだが、クロメも超一級の暗殺者である。決して油断できる相手ではない。

「やってくれたな、お前……」

殺気の籠った瞳で、クロメを睨みつけるレオーネ。

同時に、斬られた左腕に力を籠める。

すると、傷口の筋肉が隆起し、吹き出る血流が停止してしまった。

これもライオネルの超回復能力を応用したものである。

その様子に、クロメは無邪気に目を輝かせた。

「おおッ 自力で止血できるなんてすごいね。コレクションにほしくなったよ」

対して、レオーネのほうは怒りの籠った視線をクロメへ向ける。

「獅子を怒らせるとどうなるか、見せてやるよ!!」

たとえ片腕だろうと負けはしない。

殺気をむき出しにするレオーネ。

だが、

「突っ込むなレオーネ。クロメには護衛もいる!!」

そんな獅子を制したのは、彼女の上司だった。

戦略家たるナジエンダは、今この段階で大将<sup>クロメ</sup>首を狙うのは得策ではないと判断したの

だ。

「まずは着実に相手の戦力を削るぞ。クロメを狙うのはそれからだ」

「.....了解」

ナジエンダの指示に、不承不承と言った感じに頷くレオーネ。

だが、

その鋭い視線だけは、遥か崖の上で笑みを浮かべるクロメを真っ直ぐに睨み据えてい

た。

数度に渡って剣を交える、キリトとトキハ。

互いの剣閃が掠める度に、2人の少年は互いの存在を削りあう。

「ハアッ!!」

右手に持ったエリユシデータを、擦り上げるように繰り出すキリト。

対して、トキハは玉梓を繰り出してキリトの剣を防ぐ。

ぶつかり合う、互いの刃。

火花が盛大に吹き抜け、周囲にまき散らされる。

後退する両者。

体勢を立て直したのは、

キリトが早かった。

地を蹴ると同時に疾走。体を大きく回転させながら、ダークリパルサーを横薙ぎに繰

り出した。

「んッ!?!」

対して、いまだに体勢を立て直していないトキハは、対応が間に合わない。

とつさに、地面を転がりながら回避。そのまま膝を突くようにして刀を構えなおし

た。

強い。

玉梓の切っ先をキリトに向けながら、トキハは内心で呟いた。

以前、フエイクマウンテンで対峙したときは、キリトが逃げの一手を刻んだために、交戦は最低限で終わった。

だが今、キリトは明確な戦闘意欲をもってトキハと対峙している。

トキハ自身、エスデスに認められるほどの実力者ではあるが、キリトの戦闘能力は、そのトキハをも凌駕している。それでも拮抗していられるのは、帝具の能力があるからこそだった。

どうする………

内心で考えを巡らせるトキハ。

状況は互いに決定打を欠いたまま、消耗戦の様相を呈している。

このままだと明暗を分けるのは互いの「体力」と言う事になるだろう。どちらが帝具の能力開放に耐え続けられるかで勝敗が決まる。

しかも、キリトには狙撃手シッという援護があるのに対し、トキハは一人。不利は否めなかった。

「……………」

奥の手を使うか？

トキハにとつての最後の切り札。

だがそれには、賭けの要素が強すぎる。

玉梓の奥の手は体力的な消耗が激しい。今の状態では数分程度で解除せざるを得ないだろう。

どうする？

その時、

すぐ2人の横で、巨大な炎が湧き上がった。

致死の炎を吐き出すボルスと、鉄壁の防御力を誇るウォール。

その2人の連携を前に、さしものアカメも攻めあぐねていた。

何しろ、どれだけ斬り掛かってもウォールの盾が村雨の刃を防ぎ、動きを止めたところで、ボルスが容赦なくルビカントで攻撃を仕掛けてくる。

先程から、あわやというシーンが何度もあったほどである。

ナイトレイド最強の実力を誇るアカメでなければ、とうに焼き殺されていたことだろう。

しかし、

苦戦を強いられながらも、アカメの思考は冷静さを保っていた。

不利な状況ほど焦りは禁物。雌伏してチャンスを待つのだ。そうすれば勝機は、いずれ必ず巡ってくるはずだから。

アカメはボルスとウォールの周りを、高速で回り始める。

その動きの素早さたるや、残像が見えるほどである。

対して、ボルスのほうも、アカメが隙を窺っていることに気付いたのだろう。慎重にルビカンテを構え、アカメの反応に備えている。

ルビカンテから炎を放つボルス。

その瞬間、アカメは炎の軌跡を見切り回避。同時に体勢を入れ替えると、動きを止めたボルスへ斬り込む。

当然のように、ウォールが防御に入る。

だが、動きはアカメのほうが速い。

円を描くような動きでウォールの足元を低く抜けるアカメ。

そのままボルスの胸へ切っ先を突き立てるように、村雨を繰り出す。神速の勢いで繰り出される刃。

だが、

ガキッ

「なッ!?!」

目を見開くアカメ。

その手には、相手を斬った感触は伝わってこない。

見ると、ボルスが掌を掲げて、村雨の刃を受け止めているのが見える。

その掌には金属製の小さな盾が握り込まれている。それが、必殺の刃を受け止めていたのだ。

ほぼゼロの距離で炎を噴射するボルス。

完全なる必中距離。

しかし対して、アカメは仰け反るようにして回避する。

これにはボルスも驚きを隠せなかった。まさか、このような形で回避されるとは、思ってもみなかったのである。

そこでウォールが追い付いてきてアカメを攻撃。

アカメは状況不利と判断して、後退せざるを得なかった。

互いに、攻め切ることができないでいる。

1対2の状況を保たせているアカメは流石と言うべきだが、そのアカメ相手に曲がりなりに優勢に戦闘を進めているボルスも賞賛すべきだろう。



「……一つだけ、聞いて良いかな、アカメちゃん」

ボルスの方から声をかけたのは、その時だった。

「アカメちゃんは どうして反乱軍に入ったの？ 味方のままでいてくれた心強かったのに」

それはボルスの本心である。

アカメほどの実力者が帝国軍に残ってくれていたら、どれほど助かったことか。

否、それ以前に、クロメとの経緯を知っているボルスは、彼女が最愛の妹を振り切つてまで、なぜ敵に回ったのか知りたかったのだ。

対して、

アカメは自らの胸に手を当て、まっすぐにボルスを見据えていった。

「わたしの心が、そちらが正しいと決めたからだ。己の信じる道を歩んだままで」

戦乱の温床である、腐敗した帝国を打倒する。

たとえ仲間を裏切り、妹と袂を別つ事になつても、アカメの中で、この思いだけは捨て去ることができなかつたのだ。

そんなアカメの言葉に、ボルスも頷きを返す。

「分かりやすい回答だね。ありがとう」

言いながら、再びルビカンを構える。

「でも、その信念ごと燃やすのが、私のお仕事!!」

言い放つと同時に、ボルスは再び炎を放った。

次の瞬間、

「アカメツ!!」

横合いからの声。

同時にアカメは瞬時に、相手の意図を理解する。

身を翻すアカメ。

入れ替わるように、漆黒の影が炎の中へと飛び込んできた。

奔る黒の一閃。

ボルスの放った炎は、真つ二つに切り裂かれる。

霧散する炎の影から、

エリユシデータの切っ先を向けたキリトが姿を現した。

「悪いな、選手交代だ」

不敵に言い放つキリト。

対して、ボルスはルビカンテを持つ手に力を籠める。

「君は手配書が回っていない子、だよな……」

キリトの実力を測りかね、緊張を増すボルス。数度にわたってルビカンテの炎を防い

でいることから考えても、相手が相当な実力者であることは理解できた。  
ルビカンテの噴射口を向けるボルス。

同時にウォールもキリトを警戒して盾を構える。

対して、

「それじゃあ、第2ラウンドと行こうか」

キリトもまた、剣を構えなおして両者と対峙した。

一方、

キリトと交代したアカメは、改めてトキハと対峙していた。

飛び込んできた髪の毛の長い少女が振るう刀。

その切っ先を目にした瞬間、

「ッ!?!」

トキハの背筋に、ゾワリと怖気が奔る。

とつさに後退して回避するトキハ。

アカメが振るった村雨は、後退したトキハの胸元を掠める。

直撃はない。トキハの回避が僅かに早かったのだ。

距離を置いて対峙するトキハとアカメ。

アカメは村雨の切っ先を真っ直ぐ向けているのに対し、トキハは剣先を下げたまま、じつとアカメの顔を見ている。

「どうした、構えないのか？」

「……………」

尋ねるアカメに対し、トキハはしばらく考えた後、

「ああ」

何か納得したように、アカメを指さし、そして自信満々に言い放った。

「アケミ」

「アカメだ」

「ア」しか合っていないかった。

自信満々に何を言っているのか。

などと言う割とどうでもいいやり取りを交わしてから、両者の闘志がほとばしるのが分かった。

次の瞬間、

トキハとアカメは、同時に地を蹴って刃を繰り出した。

## 第30話 「クロスクラッシュ」

終わり